

青森県埋蔵文化財調査報告書 第432集

近 野 遺 跡 X

— 県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2007年3月

青森県教育委員会



人物線刻のある石冠



C区風倒木捨て場出土縄文土器



C区出土土師器

序

近野遺跡は、特別史跡三内丸山遺跡の南に隣接し、縄文時代中期～後期と平安時代の集落跡として周知されています。

青森県埋蔵文化財調査センターでは県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴い、平成12～15年度の4ヶ年にわたって近野遺跡の発掘調査を行いました。調査面積が合計7万㎡を超える大規模な調査となりました。本事業に係る発掘調査報告書は3次にわたって刊行してきましたが、本報告書が最後になります。

これらの調査成果のうち、今年度は遺跡南東側の調査区(C・D区)の報告を行います。この区域は、縄文時代後期の遺構・遺物が検出されており、これまで刊行してきた同時代の時期より新しい段階のものです。注目される遺物としては、捨て場から発見された人物線刻のある石冠が挙げられます。全国的にも稀少な例で、一つの遺物に複数の人体が描かれたものとしては初めてのものです。また、平安時代の遺構・遺物はB区と呼称した区域から連続するものです。広い遺跡全体からこの時期の遺構・遺物が見つかっており、建物など集落の施設や生活道具の時間的な移り変わりを考える上で貴重な資料といえます。

本報告書が広く文化財の保護と研究等に活用され、地域社会の歴史・文化への普及活動に資することを期待したいと存じます。最後になりましたが、発掘調査の実施と報告書作成にあたり、御指導・御協力を賜りました関係各位に対し、厚く感謝を申し上げます。

平成19年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 白 鳥 隆 昭

例 言

- 1 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴い平成13～15年度に実施した青森市近野遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 これまで、遺跡西側台地部分（A区とB区）・中央台地部分（E区の一部）および中央谷部分（F区）の調査報告を行った。本報告書は遺跡南東台地部分（C区）、東側台地部分（D区）、D区とE区との間の谷部分（D2区）の調査成果を収録している。
- 3 近野遺跡は青森県青森市安田字近野219外に所在し、平成10年3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に、遺跡番号01065として登録されている。
- 4 本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は青森県埋蔵文化財調査センター職員が担当し、筆者の名を各文末に記し、依頼原稿については、執筆者名を文頭に記した。

- 5 資料の分析、鑑定については、下記の方々に依頼した（敬称略）。

石器の石質鑑定	国立大学法人弘前大学工学部教授	柴 正敏
古環境解析	パリノ・サーヴェイ株式会社	
火山灰分析	国立大学法人弘前大学工学部教授	柴 正敏
放射性炭素年代測定	株式会社地球科学研究所	
	株式会社加速器分析研究所	
木材樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社	
炭化種子同定	札幌国際大学博物館客員研究員	椿坂 恭代
土器胎土分析	東海大学文学部助教授	松本 建速

- 6 本報告書に掲載した遺跡位置図は、国土地理院発行の25000分の1地形図「青森西部」を複写・加工したものである。
- 7 遺構・遺物の表現は原則として次の基準・様式に拠った。
 - (1) 公共座標は旧日本測地系に基づき、図中の方位は座標北を表す。
 - (2) 堆積土の色及び土器の色については『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄 1993）を用いた。堆積土中の混入物の大きさについては便宜的に次のとおり表記し、それ以外のものは適宜形状と大きさを記した。混入物の状態については、次のものを記載している。
 - ・粒状 「粒」 = 粒径2mm以下、「中粒」 = 2～5mm程度、「大粒」 = 5～10mm程度
 - ・塊状 「小塊」 = 10mm以下、「中塊」 = 10～20mm程度、「大塊」 = 20～50mm程度
- 8 出土遺物には出土地点・層位がわかるよう、遺物観察表を設けた。観察表内の計測値で（ ）は現存値を表す。
- 9 遺物写真の縮尺は不同である。遺物写真番号は挿図番号と一致し、写真のみ掲載遺物は丸囲い数字（ 〇、 … ）で表記した。
- 10 遺物の実測、写真撮影、図面作成については、下記のとおり委託した（敬称略）。

石器実測	株式会社アルカ
遺物写真撮影、遺構写真撮影	シルバーフォト

遺跡空中写真撮影

地形図作成

スタジオエイト

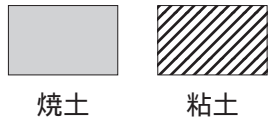
株式会社シン技術コンサル

株式会社コンテック

- 11 引用・参考文献は巻末に示した。
- 12 発掘調査及び報告書作成における出土遺物、実測図、写真等は、現在青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 13 発掘調査の実施及び報告書作成にあたり、下記の方々から御協力・御指導を頂いた（敬称略）。
荒井格、市川金丸、児玉大成、小林圭一、小林達雄、斉藤岳、佐々木由香、谷口康浩、名久井文明、西本豊弘、秦光次郎、山田晃弘、山田貴久、山田康弘、春成秀爾、国立歴史民俗博物館、栗島義明

凡 例

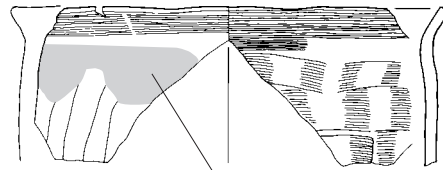
(遺構)



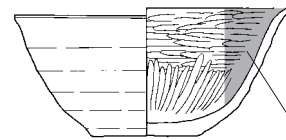
焼土

粘土

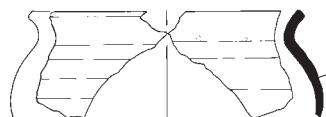
(遺物)



スス状炭化物



内面黒色処理



須恵器

目次

序	
例言	
目次	
図版目次	
写真目次	
第1章 調査概要	1 概要
第1節 調査要項..... 1	2 堆積土
第2節 調査経過..... 6	3 平安時代の包含層について
第3節 調査方法..... 7	4 縄文時代の包含層について
第4節 整理方法..... 8	5 出土遺物
第5節 基本層序..... 9	第5節 遺構外出土遺物..... 142
第6節 遺物の分類..... 10	1 土器
第2章 C区の検出遺構と遺物	2 石器
第1節 縄文時代の検出遺構と遺物..... 17	第4章 自然科学分析
1 竪穴住居跡	第1節 放射性炭素年代測定(1)..... 145
2 土坑	放射性炭素年代測定(2)..... 152
3 土器埋設遺構	第2節 近野遺跡D区谷の古環境解析... 154
第2節 平安時代の検出遺構と遺物..... 25	第3節 近野遺跡出土の炭化植物種子... 170
1 竪穴住居跡	第4節 近野遺跡から出土した木材の
2 掘立柱建物跡	樹種..... 176
3 土坑	第5節 D区谷出土の種実類分析..... 181
4 溝跡	第6節 近野遺跡D2区谷の火山灰につ
第3節 時期不明の検出遺構と遺物..... 54	いて..... 185
1 土坑	第7節 近野遺跡出土土器の胎土分析... 187
2 溝跡	第5章 まとめ..... 193
3 性格不明遺構	土坑計測表..... 201
4 ピット	遺物観察表..... 203
第4節 風倒木捨て場..... 73	引用・参考文献..... 216
第5節 遺構外出土遺物..... 84	第6章 06年度の試掘調査
1 縄文土器	第1節 調査概要..... 217
2 縄文時代の土製品	第1項 調査に至るまでの経過
3 剥片石器	第2項 調査要項
4 礫石器	第3項 調査方法
5 縄文時代の石製品	第4項 調査経過
6 土師器・須恵器・製塩土器	第2節 遺跡の環境..... 220
第3章 D区の検出遺構と遺物	第1項 位置と周辺の遺跡
第1節 縄文時代の検出遺構と遺物..... 94	第2項 基本土層
1 竪穴住居跡	第3節 検出遺構と出土遺物..... 222
2 土坑	第1項 検出遺構
3 溝状土坑	第2項 出土遺物
4 土器埋設遺構	1 縄文土器
5 焼土遺構	2 石器
6 性格不明遺構	3 土製品
第2節 平安時代の検出遺構と遺物..... 111	第4節 まとめ..... 224
1 竪穴住居跡	写真図版..... 225
2 土坑	抄録
第3節 時期不明の検出遺構と遺物..... 114	奥付
1 掘立柱建物跡	付図(遺構配置全体図)
2 土坑	
3 溝跡	
4 ピット	
第4節 谷の調査..... 119	

図版目次

図1	遺跡の位置と周辺の遺跡	4	図52	C区遺構外出土土器(縄文)	86
図2	全体図	5	図53	C区遺構外出土石器	87
図3	基本層序	9	図54	C区遺構外出土石器	88
図4	C区遺構配置	15・16	図55	C区遺構外出土石器	89
図5	第C6号竪穴住居跡	17	図56	C区遺構外出土土・石製品	90
図6	第C6号竪穴住居跡出土遺物	18	図57	C区遺構外出土土器(平安)	91
図7	C区土坑(縄文時代)	20	図58	D区遺構配置	92
図8	C区縄文時代土坑出土遺物	21	図59	D区遺構配置	93
図9	C区縄文時代土坑出土遺物	22	図60	第D2号竪穴住居跡	95
図10	第C1号土器埋設遺構	23	図61	第D2号竪穴住居跡出土遺物	96
図11	第C1号土器埋設遺構出土土器	24	図62	第D3号竪穴住居跡・出土遺物	97
図12	第C1号竪穴住居跡	25	図63	D区土坑(縄文時代)	99
図13	第C2号竪穴住居跡	27	図64	D区土坑(縄文時代)	100
図14	第C2号竪穴住居跡・出土遺物	28	図65	D区縄文時代土坑出土遺物	101
図15	第C2号竪穴住居跡出土遺物	29	図66	D区溝状土坑	101
図16	第C3号竪穴住居跡	31	図67	第D1号土器埋設遺構・出土遺物	102
図17	第C3号竪穴住居跡出土遺物	32	図68	第D1号焼土遺構	103
図18	第C3号竪穴住居跡出土遺物	33	図69	第D1号焼土遺構出土遺物	104
図19	第C5号竪穴住居跡	34	図70	第D1号性格不明遺構	106
図20	第C5号竪穴住居跡出土遺物	35	図71	第D2号性格不明遺構	107・108
図21	第C5号竪穴住居跡出土遺物	36	図72	D区性格不明遺構出土遺物	109
図22	第C7号竪穴住居跡	37	図73	D区性格不明遺構出土遺物	110
図23	第C7号竪穴住居跡・出土遺物	38	図74	第D1号竪穴住居跡・出土遺物	112
図24	第C8号竪穴住居跡	40	図75	D区土坑(平安時代)	113
図25	第C8号竪穴住居跡・出土遺物	41	図76	D区土坑(時期不明)	116
図26	第C10号竪穴住居跡・出土遺物	43	図77	第D2号溝跡、ピット・出土遺物	118
図27	第C11号竪穴住居跡・出土遺物	44	図78	D区谷全体図	125
図28	第C1号掘立柱建物跡	45	図79	D区谷層序	126
図29	第C2号掘立柱建物跡・出土遺物	46	図80	D区谷層序	127
図30	C区土坑(平安時代)	48	図81	D区谷トチ破片分布状況	128
図31	C区平安時代土坑出土遺物	49	図82	D区谷縄文時代の木質遺物の出土 状況	129
図32	C区平安時代土坑出土遺物	50	図83	D区谷古代の木質遺物出土状況	130
図33	C区溝跡(平安時代)	52	図84	谷(D2区)出土土器	131
図34	C区平安時代溝跡出土遺物	53	図85	谷(D2区)出土土器	132
図35	C区土坑(時期不明)	58	図86	谷(D2区)出土土器	133
図36	C区土坑(時期不明)	59	図87	谷(D2区)出土土器	134
図37	C区土坑(時期不明)	60	図88	谷(D2区)出土土器	135
図38	C区土坑(時期不明)・出土遺物	61	図89	谷(D2区)出土土器	136
図39	C区溝跡(時期不明)・出土遺物	64	図90	谷(D2区)出土土器	137
図40	第C1号性格不明遺構	68	図91	谷(D2区)出土土器	138
図41	第C3~11号性格不明遺構	70	図92	谷(D2区)出土土・石製品	139
図42	C区ピット	71	図93	谷(D2区)出土木製品(縄文)	140
図43	C区性格不明遺構・ピット出土遺物	72	図94	谷(D2区)出土木製品(平安)	141
図44	C区風倒木捨て場	76	図95	D区遺構外出土土器	143
図45	C区風倒木捨て場出土土器	77	図96	D区遺構外出土石器	144
図46	C区風倒木捨て場出土土器	78	図97	近野遺跡及び隣接地試掘調査ト レ ンチ配置図	219
図47	C区風倒木捨て場出土土器	79	図98	近野遺跡及び隣接地土層図	221
図48	C区風倒木捨て場出土土器	80	図99	近野遺跡及び隣接地出土遺物	223
図49	C区風倒木捨て場出土土器	81			
図50	C区風倒木捨て場出土土器・石冠	82			
図51	C区風倒木捨て場土製品	83			

写真目次

空中写真 遺跡全景

写真1 C区検出遺構 縄文時代、平安時代(1)

写真2 C区検出遺構 平安時代(2)

写真3 C区検出遺構 平安時代(3)

写真4 C区検出遺構 平安時代(4)、時期不明(1)

写真5 C区検出遺構 時期不明(2)

写真6 C区検出遺構 時期不明(3)

写真7 C区検出遺構 風倒木捨て場、ピット

写真8 C区検出遺構 ピット、作業風景。

D区検出遺構 縄文時代(1)

写真9 D区検出遺構 縄文時代(2)

写真10 D区検出遺構 縄文時代(3)、平安時代、時期不明(1)

写真11 D区検出遺構 時期不明(2)、作業風景、試掘状況

写真12 D区谷(1)

写真13 D区谷(2)

写真14 C区出土遺物(1) 縄文時代 - 竪穴住居跡・土坑・土器埋設遺構

写真15 C区出土遺物(2) 平安時代 - 竪穴住居跡

写真16 C区出土遺物(3) 平安時代 - 竪穴住居跡

写真17 C区出土遺物(4) 平安時代 - 土坑・溝跡、時期不明 - 土坑・溝跡

写真18 C区出土遺物(5) 時期不明 - 性格不明遺構・ピット、風倒木捨て場 (縄文土器1)

写真19 C区出土遺物(6) 風倒木捨て場 (縄文土器2・剥片石器・土製品・石製品)

写真20 C区出土遺物(7) 遺構外 - 縄文時代 (土器・剥片石器・礫石器1)

写真21 C区出土遺物(8) 遺構外 - 縄文時代 (礫石器2・土製品・石製品)、平安時代

写真22 D区出土遺物(1) 縄文時代 - 竪穴住居跡・土坑・埋設土器遺構・焼土遺構

写真23 D区出土遺物(2) 縄文時代 - 性格不明遺構、平安時代 - 竪穴住居跡、時期不明 - 溝跡、谷 - 土器1 (平安・弥生・縄文)

写真24 D区出土遺物(3) 谷 - 土器2 (縄文)

写真25 D区出土遺物(4) 谷 - 石器・土製品・石製品

写真26 D区出土遺物(5) 谷 - 木製品 (縄文・平安)

写真27 D区出土遺物(6) 遺構外 - 土器・石器

写真28 近野遺跡及び隣接地 試掘調査状況(1)

写真29 近野遺跡及び隣接地 試掘調査状況(2)と出土遺物

第1章 調査概要

第1節 調査要項

1 調査目的

県立美術館及び県道里見丸山線建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する近野遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して地域社会の文化財の活用に資する。

2 調査期間

平成13年4月18日から同年11月22日

平成14年4月15日から同年12月20日

平成15年4月17日から同年10月22日

3 遺跡名及び所在地

近野遺跡（青森県遺跡番号01065）

青森市大字安田字近野219、外 青森県総合運動公園地内

4 調査面積

総面積 72,600平方メートル

16,000平方メートル（平成13年度）

26,600平方メートル（平成14年度）

30,000平方メートル（平成15年度）

（本書掲載分）C区 15,320平方メートル（平成13～15年度調査）

D区 8,580平方メートル（平成15年度調査）

5 調査委託者

青森県環境生活部美術館整備・芸術パーク構想推進室

青森県県土整備部都市計画課

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

（平成13年度）

調査指導員 村越 潔

青森大学社会学部教授

（現 国立大学法人弘前大学名誉教授）

（考古学）

調査員 山口 義伸

青森県環境生活部文化・スポーツ振興課総括主幹

（現 青森県立浪岡高等学校教諭）

（地質学）

山田 昌久

東京都立大学人文学部助教授

（考古学）

（現 公立大学法人首都大学東京都市教養学部助教授）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 中島 邦夫 (平成16年3月退職)
 次 長 成田 誠治 (平成14年3月退職)
 総務課長 西口 良一 (現 青森県出納局出納課総括主幹)
 調査第二課長 福田 友之 (現 青森県立郷土館副館長)
 文化財保護主幹 畠山 昇 (現 総括主幹)
 文化財保護総括主査 川口 潤 (現 文化財保護課文化財保護主幹)
 文化財保護主事 小笠原 雅行 (現 文化財保護主査)
 杉野森 淳子 (現 文化財保護主査)
 坂本 真弓 (現 文化財保護主査)
 調査補助員 浅利 康子、大石 悠治、片岡 典子、後藤 千春、
 森川 真佐子、藤原 咲子、高橋 明子、安達 智美、
 山内 教子、森内 麻美

(平成14年度)

調査指導員 村越 潔 青森大学社会学部教授
 (現 国立大学法人弘前大学名誉教授) (考古学)
 調 査 員 柴 正敏 弘前大学理工学部教授
 (現 国立大学法人弘前大学理工学部教授) (地質学)
 葛西 勳 青森短期大学助教授 (平成18年3月退職) (考古学)
 山田 昌久 東京都立大学人文学部助教授 (考古学)
 (現 公立大学法人首都大学東京都市教養学部助教授)
 渡辺 誠 元名古屋大学文学部教授
 (現 山梨県立考古博物館長) (考古学)
 岡村 道雄 奈良文化財研究所協力調整官 (考古学)
 (現 独立行政法人奈良文化財研究所企画調整部長)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 佐藤 良治 (現 青森県立図書館長)
 次 長 福田 友之 (現 青森県立郷土館副館長)
 総務課長 工藤 和夫 (現 青森県商工労働部工業振興課副参事)
 調査第二課長 成田 滋彦 (現 総括主幹)
 文化財保護総括主査 川口 潤 (現 文化財保護課文化財保護主幹)
 上野 茂樹 (現 青森県企画政策部人づくり戦略チーム主幹)
 文化財保護主査 木村 高 (現 文化財保護課文化財保護主査)
 文化財保護主事 伊藤 由美子 (現 文化財保護主査)
 杉野森 淳子 (現 文化財保護主査)
 坂本 真弓 (現 文化財保護主査)
 調査補助員 田中 稔大、嶋中 加那子、片岡 典子、立花 聡美、

森内 麻美、柴田 洋子、木村 友香、小林 いづみ、
佐々木 順子、成田 議謙、佐藤 勝之、田中 綾、
嶋守 亜季子、工藤 豪

(平成15年度)

調査指導員	藤沼 邦彦	弘前大学人文学部教授 (現 国立大学法人弘前大学人文学部教授)	(考古学)
調査員	柴 正敏	弘前大学理工学部教授 (現 国立大学法人弘前大学理工学部教授)	(地質学)
	葛西 勳	青森短期大学教授 (平成18年3月退職)	(考古学)
	山田 昌久	東京都立大学人文学部助教授 (現 公立大学法人首都大学東京都市教養学部助教授)	(考古学)
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所 長	佐藤 良治 (現 青森県立図書館長)	
	次 長	福田 友之 (現 青森県立郷土館副館長)	
	総務課長	工藤 和夫 (現 青森県商工労働部資源工業振興課副参事)	
	調査第三課長	工藤 大 (現 調査第二グループリーダー)	
	文化財保護主査	小笠原 雅行	
	文化財保護主事	伊藤 由美子 (現 文化財保護主査)	
		杉野森 淳子 (現 文化財保護主査)	
		坂本 真弓 (現 文化財保護主査)	
		斉藤 慶吏	
	調査補助員	伏見 友里、片岡 典子、木村 友香、佐々木順子、 工藤 豪、成田 議謙、田中 綾、嶋守亜季子、沖崎 雅美、 荒谷 伸朗、久米田さやか、市川裕子	

平成13～18年度の整理作業と刊行報告書

平成13年度 - 第315集『近野遺跡』刊行。平成12年度調査分収録。

平成14年度 - 平成13年度調査分の整理作業。報告書刊行なし。

(平成15年度以降は平成13～15年調査分を調査区毎に整理作業と報告書刊行を行う。)

平成15年度 - 第370集『近野遺跡』刊行。調査西側台地 (A区・B区) 分収録。

平成16年度 - 第394集『近野遺跡』刊行。調査中央台地 (E区) 分収録。

平成17年度 - 第418集『近野遺跡』刊行。谷部 (F区) 分収録。

平成18年度 - 第432集『近野遺跡』刊行。南側台地 (C区)、東側台地と谷部 (D区) 分収録。

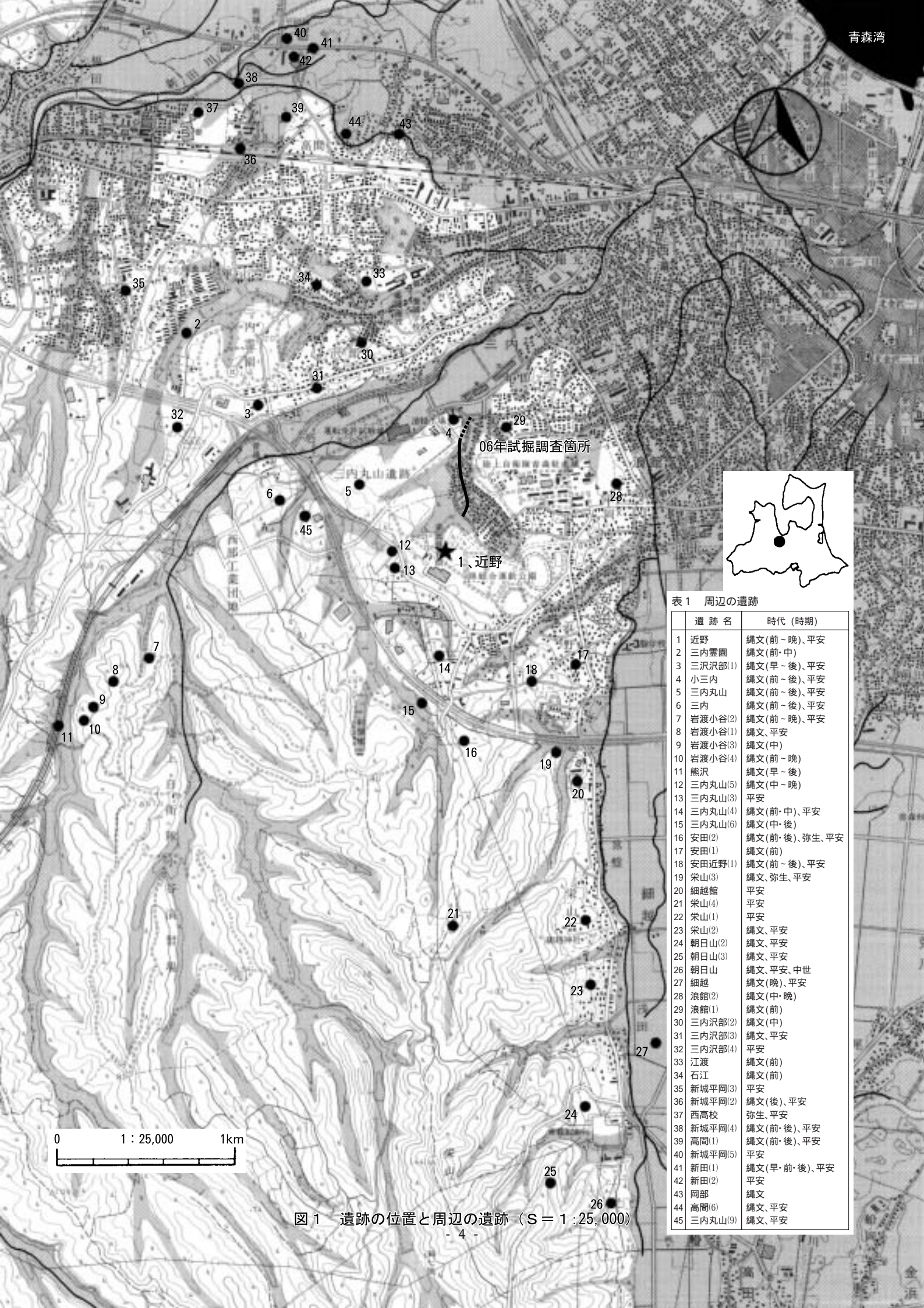


表1 周辺の遺跡

遺跡名	時代(時期)
1 近野	縄文(前-晩)、平安
2 三内雪圍	縄文(前-中)
3 三沢沢部(1)	縄文(早-後)、平安
4 小三内	縄文(前-後)、平安
5 三内丸山	縄文(前-後)、平安
6 三内	縄文(前-後)、平安
7 岩渡小谷(2)	縄文(前-晩)、平安
8 岩渡小谷(1)	縄文、平安
9 岩渡小谷(3)	縄文(中)
10 岩渡小谷(4)	縄文(前-晩)
11 熊沢	縄文(早-後)
12 三内丸山(5)	縄文(中-晩)
13 三内丸山(3)	平安
14 三内丸山(4)	縄文(前-中)、平安
15 三内丸山(6)	縄文(中-後)
16 安田(2)	縄文(前-後)、弥生、平安
17 安田(1)	縄文(前)
18 安田近野(1)	縄文(前-後)、平安
19 栄山(3)	縄文、弥生、平安
20 細越館	平安
21 栄山(4)	平安
22 栄山(1)	平安
23 栄山(2)	縄文、平安
24 朝日山(2)	縄文、平安
25 朝日山(3)	縄文、平安
26 朝日山	縄文、平安、中世
27 細越	縄文(晩)、平安
28 浪館(2)	縄文(中-晩)
29 浪館(1)	縄文(前)
30 三内沢部(2)	縄文(中)
31 三内沢部(3)	縄文、平安
32 三内沢部(4)	平安
33 江渡	縄文(前)
34 石江	縄文(前)
35 新城平岡(3)	平安
36 新城平岡(2)	縄文(後)、平安
37 西高校	弥生、平安
38 新城平岡(4)	縄文(前-後)、平安
39 高間(1)	縄文(前-後)、平安
40 新城平岡(5)	平安
41 新田(1)	縄文(早-前-後)、平安
42 新田(2)	平安
43 岡部	縄文
44 高間(6)	縄文、平安
45 三内丸山(9)	縄文、平安

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1 : 25,000)

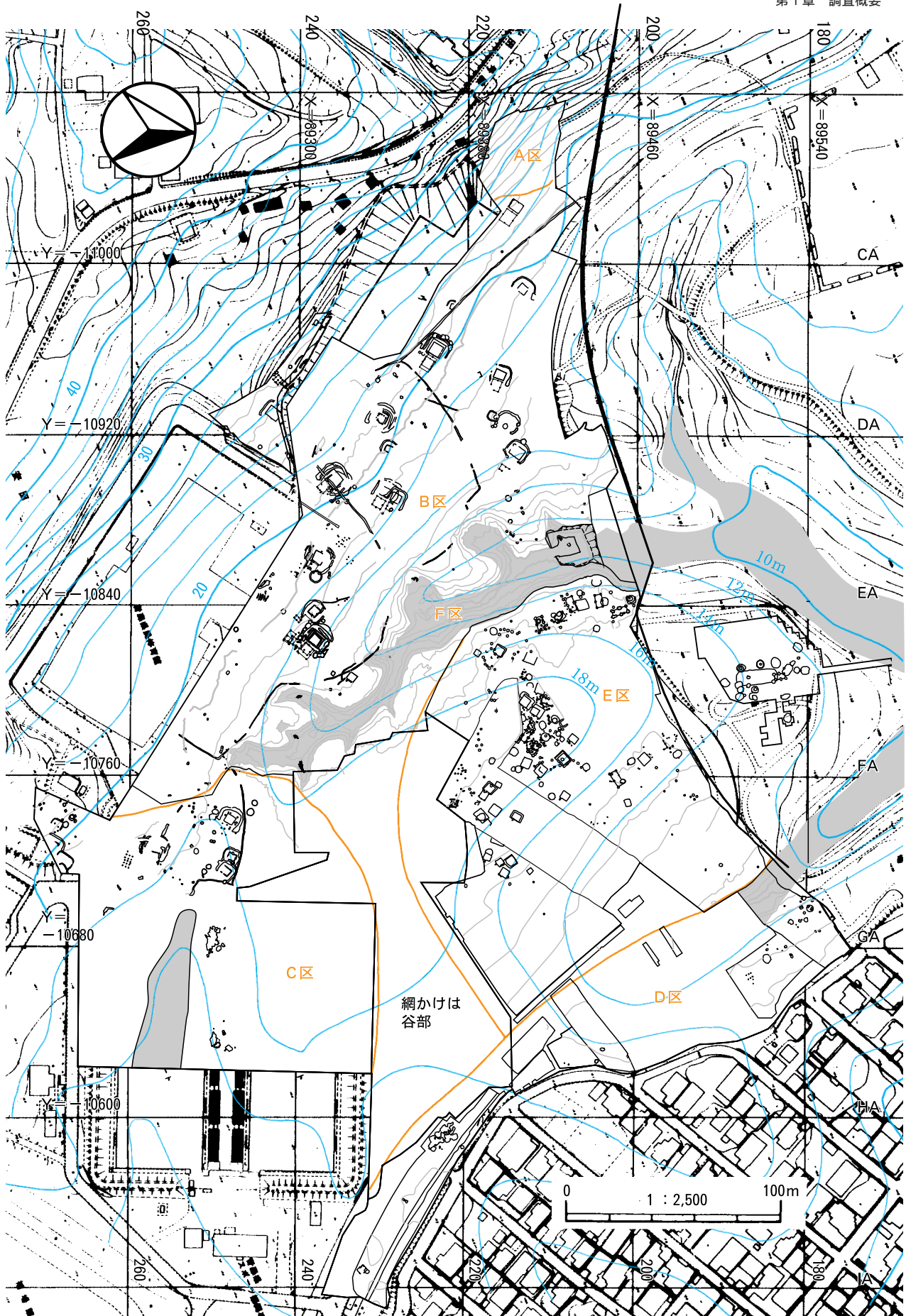


図2 全体図 (青色等高線は運動公園造成前の1972年時点のもの)

第2節 調査経過

調査C区

(平成13年)

13年度は、調査区内の樹木や遊具等が残存していたことと、他の調査区の調査を主体としたため、C区は試掘調査を行った。試掘では次年度からの全面調査に備え、遺物包含層の有無および運動公園造成時の盛土の厚さ等の確認を行った。

(平成14年)

4月の調査開始段階では、樹木や遊具等の撤去が行われていないため、調査は調査E区が主体となる。6月には上物撤去と盛土の除去が行われ、7月始めにグリッドを設定し、人力による粗掘りを開始した。堆積土の大半は運動公園造成時に削平され、遺物包含層は部分的に残るのみであった。全体に広がる盛土と僅かに残存する包含層を掘り下げ、8月に入ると遺構が検出された。遺構も公園造成時に上部を削平されているため、遺構のプランの確認に困難を要した。8月下旬から遺構精査を開始した。

遺構の精査は順調に進み、10月末で終了した。その後、調査区の測量・遺構配置図作成を行い、11月19日で完了した。

(平成15年)

15年度は前年度の南側約10,000㎡が調査対象である。この中で特に、旧テニスコート部分はテニスコート建設時に深く掘削されていることから、調査範囲が不確定なため、試掘を行って残存部分を確認することになった。試掘は6月から開始した。その結果、C区の西側には谷（通称：近野南の谷）が、C区中央では遺構が存在することが確認された。谷の堆積土は運動公園建設時に削平されており、包含層が残存しない可能性が高いため、谷の精査を行わないことになった。遺構がある旧テニスコート中央部と、昨年の調査区の隣接部分を全面発掘することになった。7月からは粗掘りと同時に、遺構が確認され次第、遺構の精査に順次取りかかった。前年同様、遺構は公園造成時に削平されたものが多いため、粗掘り・遺構確認と遺構の精査を繰り返しながら作業は順調に進んだ。10月21日にはC区の全調査を完了した。

調査D区

(平成15年)

D区は、5月後半から上物撤去が開始されたことにより、6月から一部粗掘りを開始した。調査区が広いことや工事も並行して行われているため上物撤去や盛土の除去・表土剥ぎに時間を要し、8月後半から本格的に調査を行った。台地部分はC区同様、公園造成時に削平され残存部分が少ないながらも、遺構確認には困難を期した。残存部分が少ないこともあり、遺構の精査は順調に進んだ。10月20日には調査を完了した。

谷部分は6月に上物が撤去され、7月に重機で盛土の除去を行った。7月後半から人力による堆積土の掘り下げに一部着手し、平安時代の遺物包含層に達した8月からは、作業員を増員し、包含層の掘り下げを進めた。遺跡中央の谷（調査F区）から木組遺構や木製品等が検出されていることから、掘り下げを慎重に行った。一部地盤が弱いため、掘り下げに時間を要した箇所もあったが、当初の予想より谷の範囲が狭く、包含層も薄かったため、調査は順調に進んだ。

10月には地形測量、分析試料の採取等を行い、10月22日に谷部の調査は完了した。

D区の調査の完了と共に、平成12年度から開始した近野遺跡の調査は全て終了した。

第3節 調査方法

調査区名とグリッド設定は、平成12年に設定した新近野グリッド系を使用した（『近野遺跡』参照）。平面直角座標（旧日本測地系）第X系の $X = 90260$ 、 $Y = -11160$ を原点AA-000とし、原点から東方向のYラインに二文字のアルファベットを、南方向のXラインには3桁の算用数字を付した。アルファベットはAからTまでの20文字を使用し、基点のAAから4m毎にAB…ATとし、80m毎に左側文字が繰り上がる。Xラインは基点の000から4m毎に001・002とした。

グリッドの呼称は北東角の交点の値をアルファベット優先で読むこととした（例：BA-210）。C区はFD～GN-244～270ラインに、D区はFH～IC-175～233ラインに跨る。

標高は運動公園内にある測量基準点から、調査区内に適時移設した。

遺構確認は随時行い、調査区単位で検出順に遺構名を付した。遺構名称は最初に調査区、次に遺構種別と番号を付した（例：CSI10=C区第10号竪穴住居跡）。

遺構の実測は、遣り方測量を主とし、三次元座標測量も併用した。実測図は1/20を基本とし、必要に応じて1/10・1/40で作成した。遺物集中箇所等は出土状況図を1/10で作成した。

遺構内出土以外の遺物の取り上げは層位毎、グリッド毎を原則とした。谷部（D2区）の遺物の取り上げは、光波トランシットを用いて出土位置と層位を記録した。

調査に当たっては、堆積土層の状況を観察するため、適宜必要に応じてベルトを設定した。堆積土層の名称は、基本層序にはローマ数字を付した。遺構内と谷部の堆積土は、台地上の基本層序と区別するため算用数字を用いた。

写真撮影

写真撮影は35mm一眼レフカメラでカラーリバーサル、モノクロームフィルムを使用することとデジタルカメラの使用を基本とした。必要に応じてネガカラーフィルムも使用した。調査の進捗状況に合わせて、遺物出土状況、土層断面、完掘状況と作業状況を適宜撮影した。さらに、遺跡全体を上空からラジコンヘリによる空中撮影を行った。遺構完掘時の撮影は一部業者に委託し、中型カメラで撮影した。

(杉野森)

第4節 整理方法

室内整理作業は平成14年11月から平成19年2月までの期間に、青森県埋蔵文化財調査センターで行った。以下に遺構と遺物の整理作業手順の概略を記す。

遺構

光波トランシットによって得られた三次元座標測量データについては、遺構実測支援システム（アイシン精機株式会社製）を用いて作図し、報告書掲載用の図化を行った。遣り方測量によって記録した図面については、グリッド・セクションポイントの確認をした後、二次原図を作成し、デジタルトレースを行った。土層注記は簡略化して掲載した。

各遺構のスケールは、竪穴住居跡は平面図は1/60を原則とするが、特に平安時代の外周溝を伴うものは1/80とした。断面図は1/60である。土坑などその他の遺構は1/60を基本とするが、溝跡など平面規模が大きく、形状が複雑ではないものについては、任意の縮尺とした。各図にはスケールを付した。

土器・石器等

遺物は水洗い・注記・復元作業などを行い、報告書掲載遺物の選別をした後、実測・採拓を行った。

土器は型式のわかるものについてはできるだけ実測・採拓し、掲載した。また、特にロク口を使用して造られたものに関しては直径を割り出し図上復元したのもも多い。石器・土製品・石製品は、主なものを図化し掲載した。剥片石器の一部は実測を外部へ委託した。掲載した遺物のスケールは土器は1/3、剥片石器、土・石製品は1/2、礫石器は1/4その他である。各図にはスケールを付した。遺物の分類は第6節で述べる。

木質遺物

谷から出土した木製品及び自然木は番号（W - ）を付して取上作業を行った。取り上げたものは順次手作業で水洗し、加工痕の有無を確認した。

遺物は、現場での取上番号（W番号）に保管上の箱番号を併用して台帳を作成した。また、水洗段階で、木製品をAランク、加工痕のある木材・板材をBランク、自然木をCランクと3つに分類した。このうちAランクの木製容器1点は外部に保存処理を委託した。残りのAランクとBランクのものは報告書刊行後に当センターで保存処理を行う予定である。

植物遺体

谷からは地質的な特徴から、有機質遺物や植物遺体が良好な状態で出土している。周辺環境の復元を目的として、土壌を水洗選別し、種実類を取り上げることにした。 (小笠原)

第6節 遺物の分類

各遺物の分類基準については、一遺跡内での基準の統一を図る目的で、『近野遺跡』、『近野遺跡』に概ね準拠している。前基準で網羅できなかった部分もあることから、分類基準に追加項目や修正が一部ある。分類基準設定の詳細な内容は『近野遺跡』に収録されているため、ここでは簡略化して記述する。

縄文土器

土器の分類は土器型式ごとで行っている。今回、出土した土器の型式名は以下の通りである。

縄文時代前期	円筒下層 b 式
	円筒下層 d 式
	円筒下層式（細別型式不明）
縄文時代中期	円筒上層 a 式
	円筒上層 b 式
	円筒上層 d 式
	円筒上層 e 式
	円筒上層 d・e 式
	（d 式か e 式か区別できないもの）
	円筒上層式（細別型式不明）
縄文時代後期	榎林式
	最花式
	大木10式併行期
	大木系土器（細別型式不明）
	牛ヶ沢(3)式
	弥栄平(2)式
縄文時代晩期	十腰内 式
	十腰内 式
	十腰内 式
	大洞 B 式
縄文時代晩期	大洞 C 1 式
	大洞 C 2 式
	大洞 A 式

小型土器

縄文土器の中で底径 5 cm 以下の小型の深鉢形の一括した。また、深鉢形以外にも高坏形や舟形などの小型土器も出土しているが、これらは大きさから容器というより模造品として製作されたものと思われるため、小型土器ではなく土製品に含めた。（小笠原）

剥片石器

この類型は『近野遺跡』に一部加筆したものである。

石鏃 類 無茎 (a類 凹基 b類 凸基 c類 平基)

類 有茎 (a類 平基 b類 凸基)

石槍 類 長さ55mm程度の小型のもの。両端が鋭利になるものと一端のみ尖るものがある。

類 茎部を有するもの。扁平で体部中央が幅広となる。

類 長さ100mmを超える大型のもの。

類 長さ55mm前後で断面形状が三角形を呈し、厚みがあるもの。

石匙 類 縦型

類 横型

石錐 類 棒状

類 石鏃転用品

石篋 類 調整加工が素材剥片の腹面、背面に等しく及ぶもの。

類 調整加工が腹面側に及ばないもの。

類 急角度の調整加工が側縁部に施されるもの。

大石平型石篋 急角度の刃部を有し、長さ5cm以下のもの。摘み部を有する。

異形石器 特異な形状で、用途が特定できないもの。

削器 不定形石器の中で、器面の片面または両面に連続した調整があり、刃部が鋭利なもの。

搔器 不定形石器の中で、側縁部に急角度の連続した調整があり、外湾した刃部となるもの。

二次調整のある剥片 (不定形石器) 調整加工が施されているが、定形的な石器に該当しないもの。定形石器の未製品・破損品・失敗品を含む。

微小剥離痕のある剥片 剥離幅1mm以下の微小剥離が連続的に認められる剥片。

両極加撃痕跡のある剥片 打面近くに階段状剥離が顕著にみられ、打点が対に複数存在する剥片

剥片・碎片・石核 調整加工・微小剥離痕のないもので、最大長・幅1cm以上を「剥片」、1cm未満を「碎片」とした。

礫石器

形状と使用痕跡から磨製石斧、敲磨器類、北海道式石冠、石皿・台石類、半円状扁平打製石器、石錘、加工のある礫、使用痕跡のある礫片に分類される。

敲磨器類 A類 磨り痕跡が主体 i) 磨り痕跡のみ

ii) 敲打痕があるもの

iii) 凹み痕があるもの

iv) 敲打痕と凹み痕があるもの

B類 敲打痕跡が主体 i) 敲打痕跡のみ

ii) 凹み痕があるもの

C類 凹み痕跡が主体 i) 自然礫素材のもの

ii) 石皿破片素材のもの

北海道式石冠 器面中央に帯状の敲打痕があり、一側面が幅広い磨り面となるものである。破片資料の中で帯状の敲打痕のみのものは石錘の可能性もあるため、敲磨器B類に含めた。

加工のある礫 縁辺に剥離加工を有するもの。剥離加工があり、破片資料のため形状が特定できないものも含む。

使用痕跡のある礫片 磨り痕や敲打痕はあるが、破片のため、器種が特定できないもの。

掲載方法 縄文時代・平安時代と2つの時代の包含層・遺構があり、両方から礫石器が出土している。縄文時代の包含層・遺構から出土しているものは特に問題はないが、平安時代から出土している礫石器の種類・形状は縄文時代のものとは違いは見られない。また、平安時代の包含層・遺構堆積土には礫石器と共に縄文土器も混入していることから、これらの中で平安時代のものとは特定されるもの以外は、概ね縄文時代の遺物として掲載した。

観察表 表中の計測値は遺物を正面に置いた状態での最大長・最大幅値を、厚さは位置に関わらず遺物の最大値を厚さとした。欠損した資料は()付きで残存値を提示している。(杉野森)

土師器・須恵器

観察表：「口径」・「高さ」・「底径」については、該当部位の実測値をcm単位で記載している。なお、欠損等で完全個体でないが、値の復元可能なものは、「()」描きの記載としている。「外面調整・内面調整」については、実測図で表記している内外面調整の名称を記載しており、調整技法が複数ありかつ新旧があるものは、新旧関係を矢印で示している。例えば、「ロクロナデ タタキ」は「ロクロナデ」が旧、「タタキ」が新である。「底面」では、底面調整の名称を記載している。「回転系切痕」は「回系痕」と表記しており、回転方向は、糸が底面に残した痕跡から判断し、糸を土器本体に入れた、抜いた方向を記載した。すなわち、土器制作回転台の回転方向とは逆となることを留意されたい。「焼成」は、土器の焼成状況や方法について記載している。土師器は酸化焼成、須恵器は還元焼成を基本として記載している。

土師器

「坏」：碗型を呈し、器高が口径の1/3よりも大きく、2/3未満のもので口径20cm以下のものとした。

「皿」：皿形を呈し、器高が口径の1/3以下のものとした。

「壺」：頸部が明確で胴が張る器型のもの。

「甕」：器高が口径の2/3以上のもの。

「埴」：器高が口径の1/3より大きく、2/3未満のもので口径20cm以上のもの。

「小型土器」：底径が5cm未満のもの。

須恵器

「坏」：碗型を呈し、器高が口径の1/3よりも大きく、2/3未満のもので口径20cm以下のものとした。

「皿」：皿形を呈し、器高が口径の1/3以下のものとした。

「壺」：頸部が明確で胴が張る器型のもの。このうち直立する頸部を持ち、頸基部にリング状突帯が巡るものを「長頸壺」、頸部が短く立ち上がるものを「短頸壺」とした。底面に放射状痕跡(菊花状痕跡)が認められるものもある。

「甕」：肩部から体部にかけて、叩き板で叩き締めて成形する大型貯蔵具である。口径の大きさによ

り細分されるが、今回報告の個体は口径または全体規模を復元可能なものが少ないことから、「甕」と総称した。

調整技法

「ヨコナデ」：布・皮・指などで横位に施すもので、平らな調整面を持たない。調整面は平滑である。土師器甕の口縁部から頸部にかけて認められる。実測図では、間隔の狭い筋の連続で表現した。

「ロクロナデ」：ロクロ（回転台）を用いて成形されたもので、成型時に器面表面に生じた直線の稜や細かな横位の線を指標とした。実測図では稜を破線で表現している。

「ナデ」：ヘラ状工具、布・皮・指などで施すもので、平らな調整面を持たないものを総称した。実測図では短い二本線で表現している。

「ヘラナデ」：ヘラ状工具で施すもの。実測図では横線を表記した角張った調整痕で表現している。

「ケズリ」：器面をヘラ状工具で平滑に調整したもので、調整箇所が平らな面を形成する。砂粒の移動方向が判断可能であるもの。砂粒の移動方向は矢印で図示した。

「ミガキ」：土師器内面黒色処理の坯内面に施される調整方法で、細い棒状工具などで施すもの。調整面は光沢を持つ。見込みから口縁部に向かって直線的に施されるものが多い。実測図では連続する細かな調整痕で表現される。

「タタキ」：須恵器甕にみられる叩き成形の痕跡。木目と直行する方向に刻み目を入れた叩き板で叩きしめた「平行叩き a 類」と、平行する方向に刻み目を入れた「平行叩き b 類」の2種に細分される。

製塩土器・支脚

観察表：「口径」・「高さ」・「底径」については、該当部位の実測値をcm単位で記載している。なお、欠損等で完全個体でないが、値の復元可能なものは、「()」描きの記載としている。「外面調整・内面調整」については、実測図で表記している内外面調整の名称を記載している。「底面」では、底面調整の名称を記載している。製塩土器底面における「柁目底」は、横位の沈線状の凹みの連続であり、柁目板上に粘土素材を置き、成形した痕跡である。「焼成」は、焼成状況や方法について記載している。調整技法は、土師器・須恵器の例に準じ表記・表現した。 (小笠原)

木質遺物

谷(D2区)からは、およそ300点の木質遺物が出土したが、加工痕跡が不明瞭なものが大半である。ほとんどは用途不明の木材で、製品および機能を類推できるものは非常に少ない。

これらを分類するにあたって、縄文時代については、『岩渡小谷(4)遺跡』、『青田遺跡』を参考に、平安時代については『木器集成図録 近畿古代篇』、『石川条里遺跡』を参考に分類した。

木取りについては、『岩渡小谷(4)遺跡』、『石川条里遺跡』を参考にした。 (杉野森)



図4 C区遺構配置

270
(X=89180)

第2章 C区の検出遺構と遺物

第1節 縄文時代の検出遺構と遺物

1 竪穴住居跡

第C6号竪穴住居跡 (図5)

[位置・確認] FF-248・249に位置する。標高約19mの丘陵平坦面に立地する。第1層上面で確認した。公園造成時の盛土の土圧により、やや変形している。

[規模・形状] 長軸3.08m、短軸2.24mの楕円形を呈する。床面積は3.70㎡である。

[堆積土] 6層に分層した。第1～3層は第1層相当の黒色土主体で、第4層に由来する粘土や焼土を含む。第4～6層は第2層相当の黄褐色土が主体である。いずれも自然堆積土と思われる。

[壁・床面] 壁高は6cm～20cmである。床面は第1層まで掘り込まれ、平坦である。

[炉] 検出されなかった。

[柱穴] ピットは2個検出したが、柱穴か不明である。

[出土遺物] 第1・2層から十腰内式期の復元可能な壺形土器などが出土した。剥片石器が2点出土した。

[時期] 堆積土中の出土遺物から、十腰内式期に近い時期と考えられる。

(伊藤)

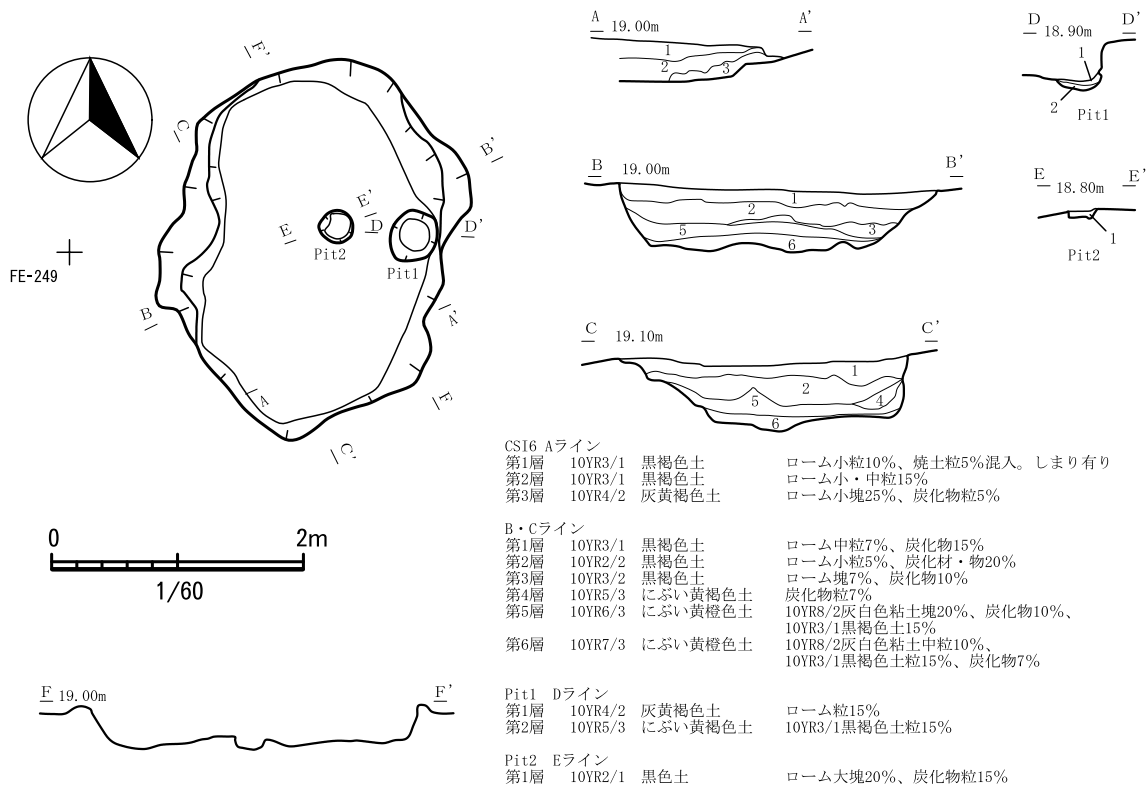


図5 第C6号竪穴住居跡

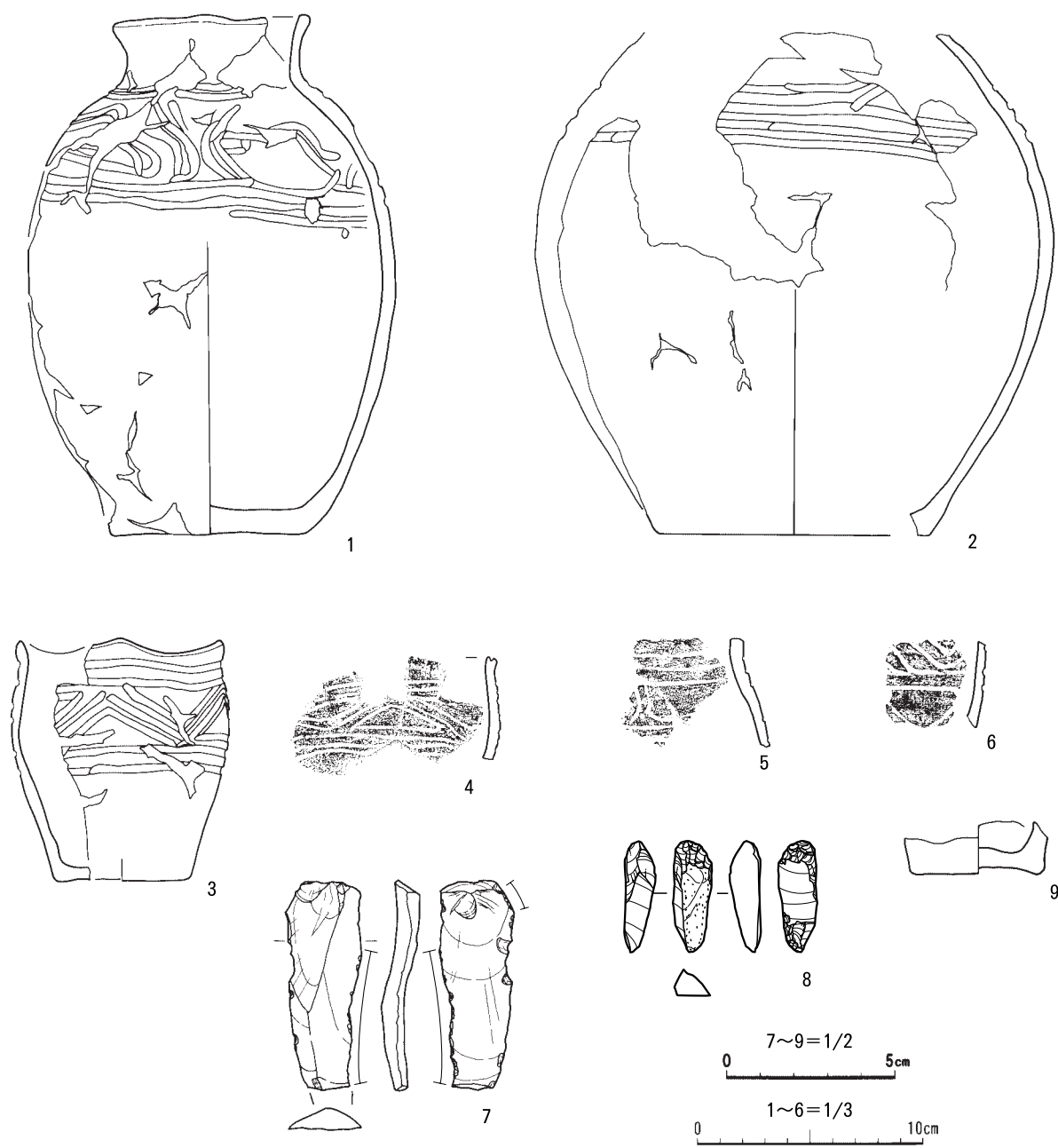


图6 第C 6号竖穴住居跡出土遺物

2 土坑

縄文時代の土坑としたものは6基である。出土遺物から判断したもので、遺物が出土しない土坑は第3節で触れる。形状・規模等は巻末に一覧表でまとめた。

第C5号土坑 (図7)

ほぼ円形の土坑で、堆積土は3層に分層した。第1・2層は第層を、第3層は第層をそれぞれ由来とする自然堆積土と思われる。壁は開口部に向かって緩やかに広がる。底面は平坦である。遺物は縄文土器の細片と剥片石器1点が出土した。

第C6号土坑 (図7)

円形を呈する。堆積土は、第層相当の黒褐色土主体で自然堆積土と思われる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で中央に径約40cm、深さ5cmのピットがある。遺物は第1層から円筒上層c式の土器小片が出土した。

第C12号土坑 (図7)

第C5号竪穴住居跡の外周溝1よりも古い、断面形が袋状となる楕円形の土坑である。堆積土はいずれも第層相当の黒褐色土主体である。壁は底面から6cmほど外傾した後、内傾する。底面は平坦である。遺物は十腰内式期の土器が出土した。

第C16号土坑 (図7)

開口部が不整形の土坑で、断面形は袋状に掘り込まれる。堆積土は、第層相当の黒褐色土主体で、自然堆積土の可能性が高い。壁は底面からやや外傾した後、内傾する。底面は平坦である。堆積土中から十腰内式期の土器が出土した。(伊藤)

第C31号土坑 (図7)

楕円形に近い円形の土坑で、堆積土は黒褐色土を主体とし、自然堆積の可能性が高い。壁は全体にほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。第1層から円筒下層式土器の胴部片が少量出土した。

(小笠原)

第C33号土坑 (図7)

縄文時代後期の遺物が大量に出土したGM-248・249に位置する。遺構の規模は長軸2.8m×短軸2.3m、平面形は不整形である。竪穴住居跡の可能性を想定して精査を行ったが、底面が軟弱であり、柱穴や炉跡等の関連施設がみられないことから土坑として扱った。第1層から大量の遺物が出土しており、南側と西側の一部が風倒木による攪乱を受けている。堆積土中より出土した遺物から、本遺構の帰属時期は縄文時代後期以前と考えられる。(斉藤)

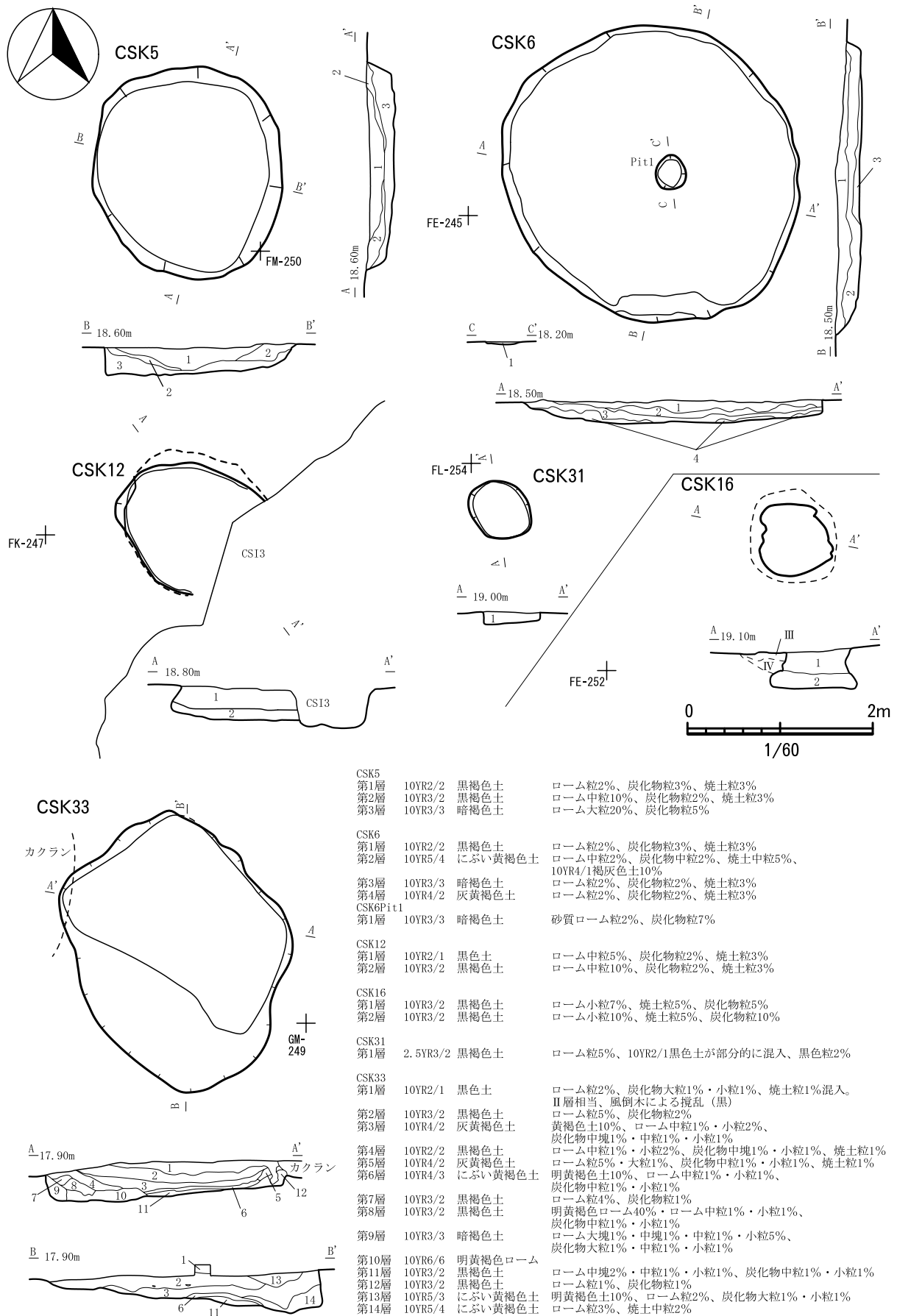


図7 C区土坑(縄文時代)

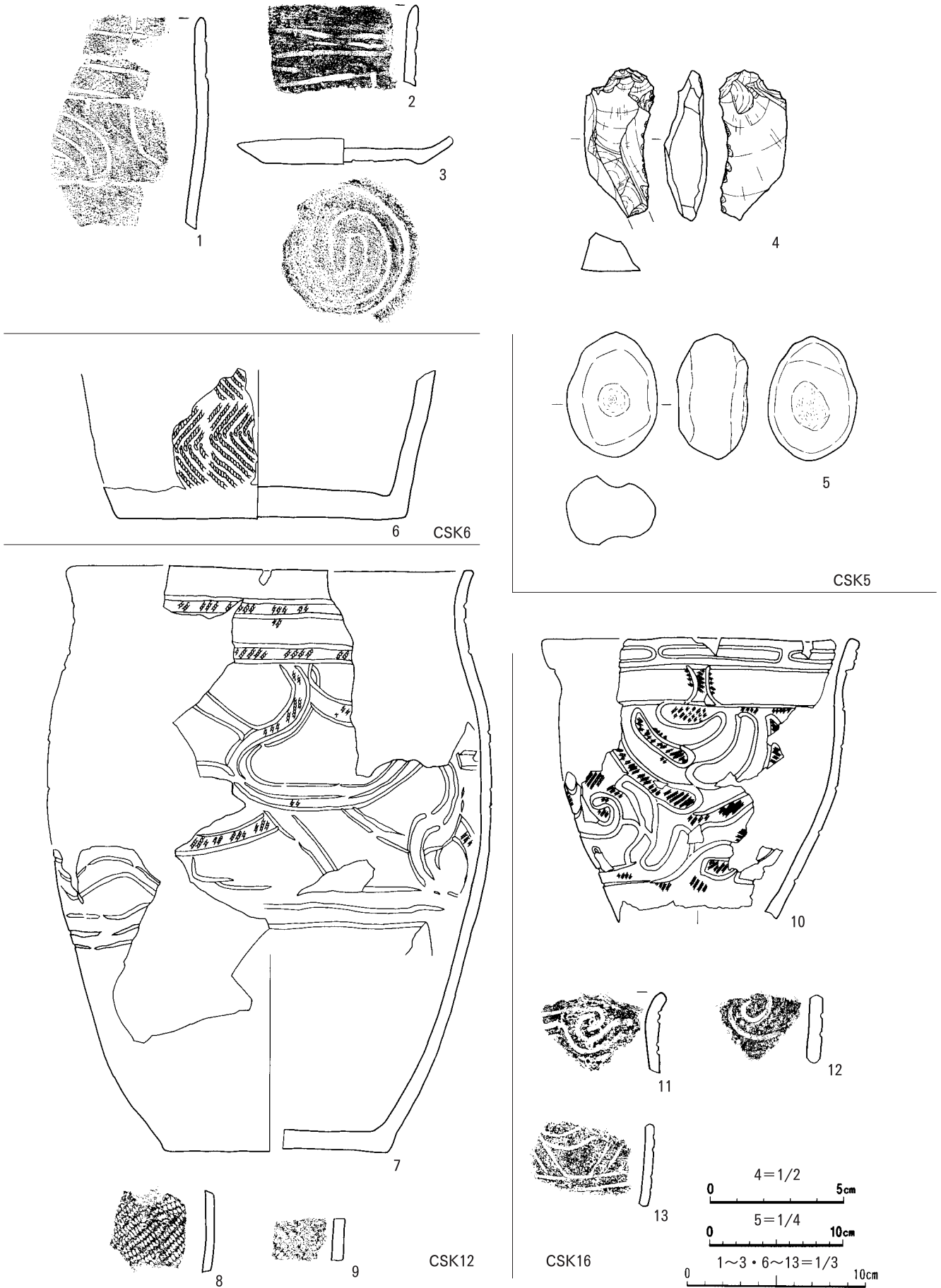


図8 C区縄文時代土坑出土遺物

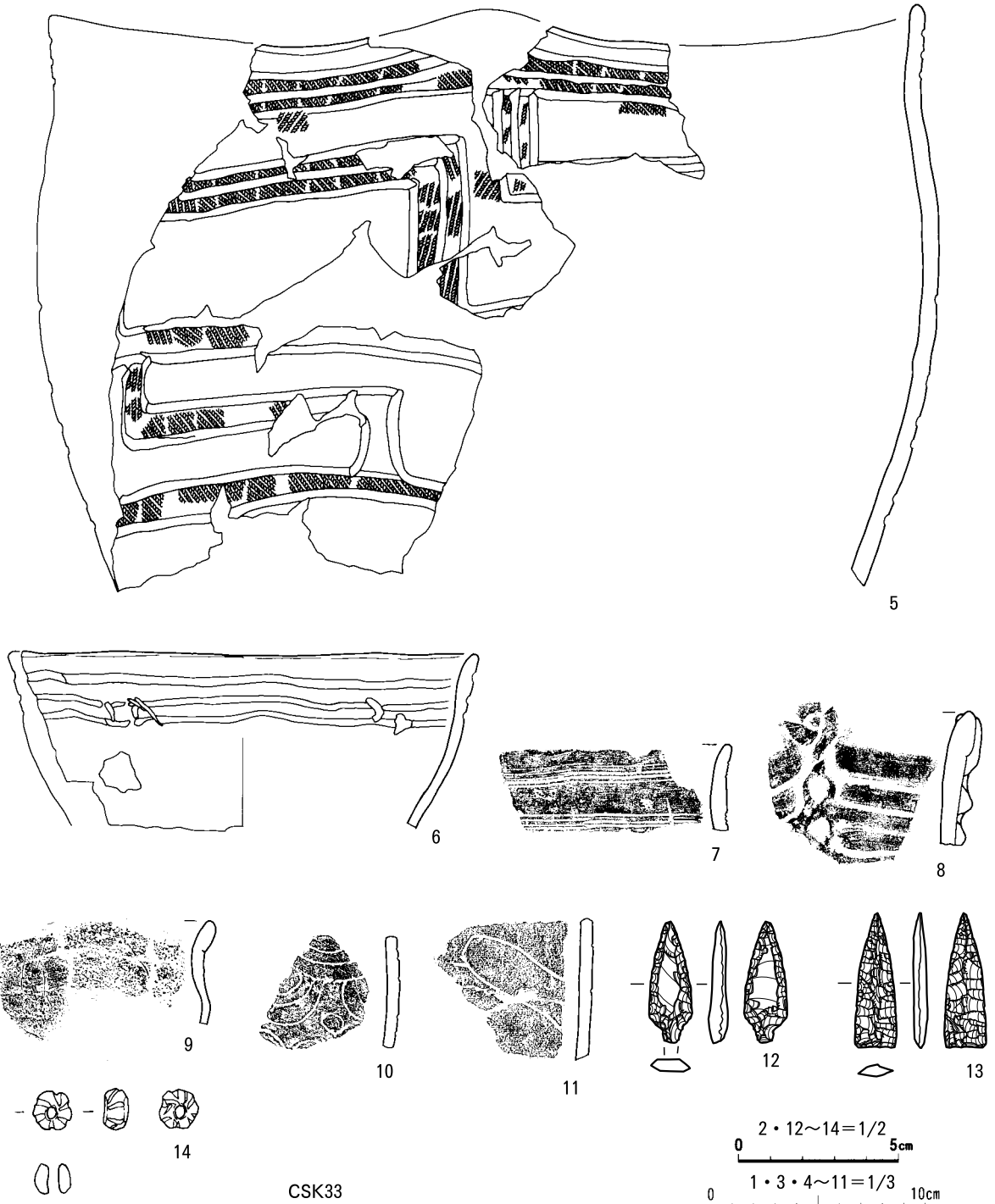
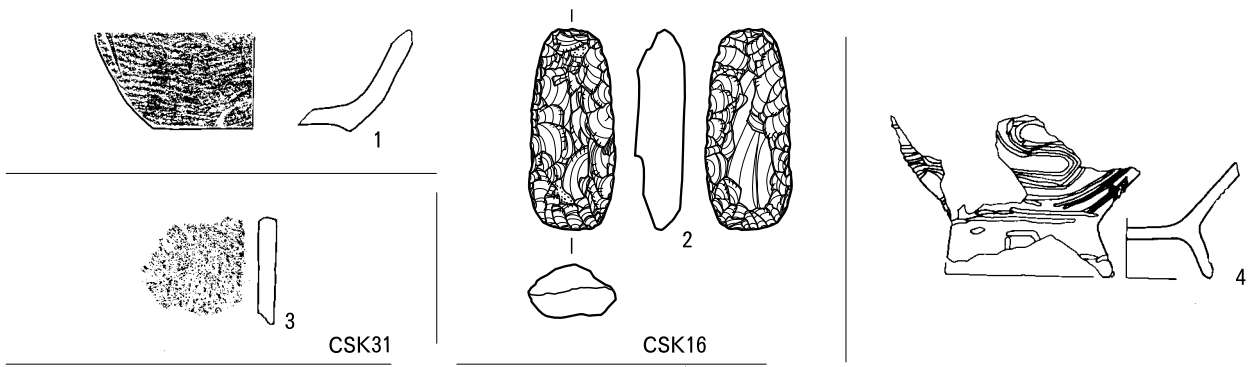


図9 C区縄文時代土坑出土遺物

3 土器埋設遺構

第C1号土器埋設遺構

[位置・確認] FE-249に位置する。標高約19mの平坦地上に立地する。第層中で輪状の土器を検出し、確認した。

[構築方法] 長軸83cm、短軸64cmの楕円形に掘り方を掘り込んだ後、底面に接して土器を埋設させている。

[堆積土] 土器内の堆積土は第層に相当する暗褐色土である。掘り方の堆積土は土器内の堆積土と区別がつかなかった。

[埋設方法] 深鉢形土器の口縁部から底部が正位状態で埋設されている。土器内から遺物は出土しなかった。

[時期] 本遺構の時期は、土器の特徴から十腰内式期である。 (伊藤)

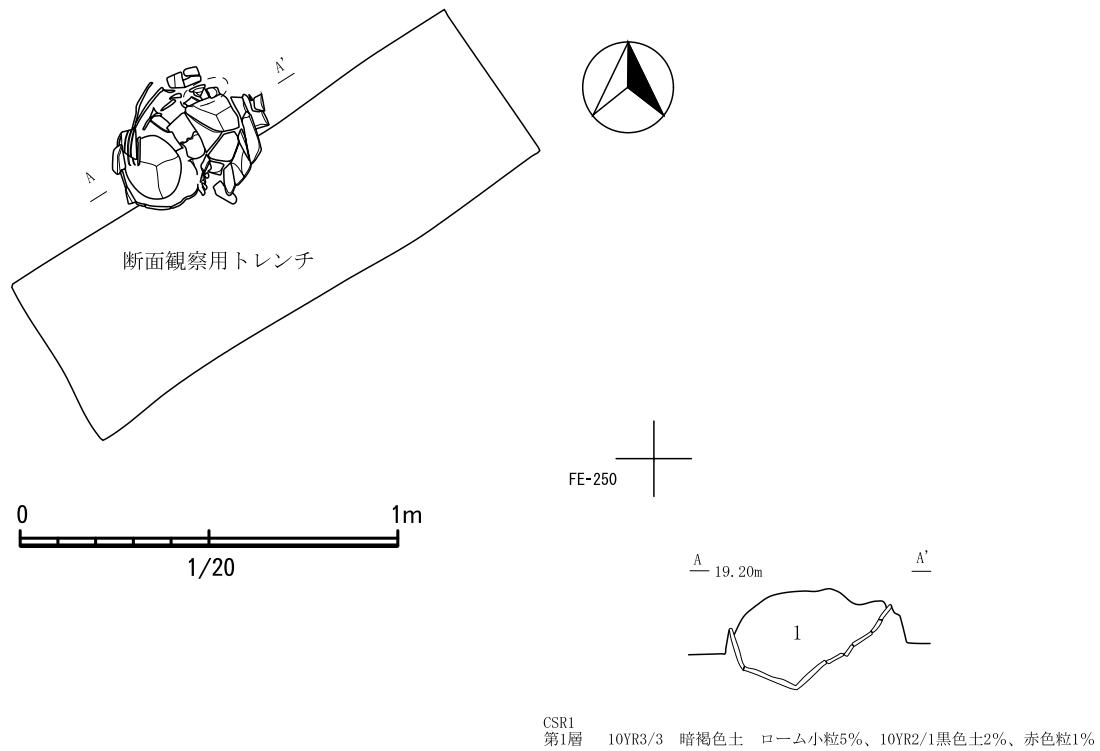


図10 第C1号土器埋設遺構



图11 第C 1号土器埋設遺構出土土器

第2節 平安時代の検出遺構と遺物

1 竪穴住居跡

第C1号竪穴住居跡 (図12)

[位置・確認] FF・G - 248・249に位置し、標高約19mの微高地上に立地する。第1層中位で確認した。

[平面形・規模] 運動公園造成時に上面が削平され、床面の一部とPitと周溝の一部を確認した。残存部からの推定される規模は、1辺3m以上である。残存部の床面積は4.8m²である。

[壁・床面] 壁は削平され確認できなかった。

[壁溝] 途切れながらであるが、住居跡北側で壁溝の一部と思われる幅20~30cm、深さ約10cmの溝状の落ち込みを検出した。

[柱穴] 不明である。

[カマド] 確認されなかった。

[堆積土] 黒色土がごくわずかに堆積する。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[時期] 平安時代と思われる。

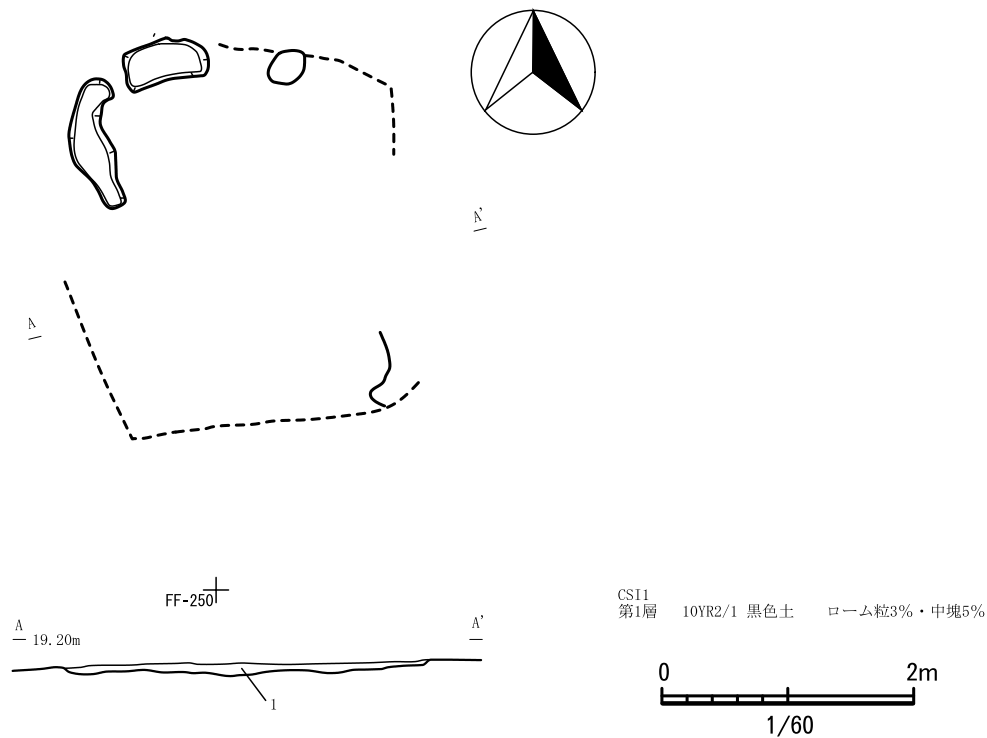


図12 第C1号竪穴住居跡

第C 2号竪穴住居跡 (図13～16)

[位置・確認] FE～I - 245～248に位置する。標高18m～19mの北緩傾斜地の第 層上面で確認した。運動公園造成時に、上面を大きく削平されている。

竪穴部

[平面形・規模] 北東壁4.0m、北西壁4.6mで、やや北東 - 南西軸側が長い方形である。床面積は15.0 m²である。主軸方位はN - 48° - Wである。

[壁・床面] 床は第 層まで掘り込む。壁高は5～17cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

[壁溝] 北側～東側～南側に検出されている。幅5～28cm、深さ6～24cmである。北東壁・南西壁ではピット状の浅い落ち込みが連続する部分も見られた。

[柱穴] 竪穴内部からは柱穴は確認されなかった。

[カマド] 根による攪乱もあり、火床面の一部のみが検出された。規模は80cm×50cmである。

[施設] 南東隅の壁際に沿ってL字状に、幅50～60cm、深さ8～11cmの落ち込みが検出された。堆積土は第 層に相当する黒色土主体の自然堆積土である。

[堆積土] 5層に分層した。第1～3層は第 層に相当する黒色土主体で自然堆積土と考えられる。第4層は第 層に由来する崩落土である。第5層は壁溝の堆積土である。

掘立柱部

[位置] 竪穴部の南東に位置する。竪穴部からの距離は0.80mである。

[平面形・規模] 柱穴が7個検出された。本来2間×2間の建物跡と思われる。東西列は西から2.1m+2.1m、南北列は2.1m+1.9mである。ピットの規模は、径20～40cm、深さ20～45cmである。断面形は箱形、U字形とばらつく。

[堆積土] 第 層に相当する黒色土主体で、ローム粒や焼土粒が混じる。

外周溝

[位置] 住居跡の南・西・北に位置する。竪穴部からの距離は1.6mである。

[平面形・規模] コの字形を呈する。幅は0.80m～1.8mで、北東端と南東端で幅が広がり、最大幅2.2mである。底面の幅は100～140cmである。底面は西側が最も高く南側と北側に傾斜する。深さは南西側が浅く約20cmで、北東側が最も深く約60cmである。北東隅の楕円形の落ち込みは深さ65cmである。

[堆積土] 第 層に相当する暗褐色土が主体である。北東側の堆積土上面に焼土の広がりを、堆積土下位で鉄滓の広がりを確認した。いずれも廃棄されたものと考えられる。

[出土遺物] 竪穴部からは土師器坏などがわずかに出土した。外周溝第1～3層からは土師器坏・甕、須恵器壺・甕などが出土したが、いずれも破片で、ある程度復元し得たのは土師器甕1点のみである。またカマド部分から羽口片、外周溝から支脚片や鉄滓も出土した。

[時期] 平安時代である。

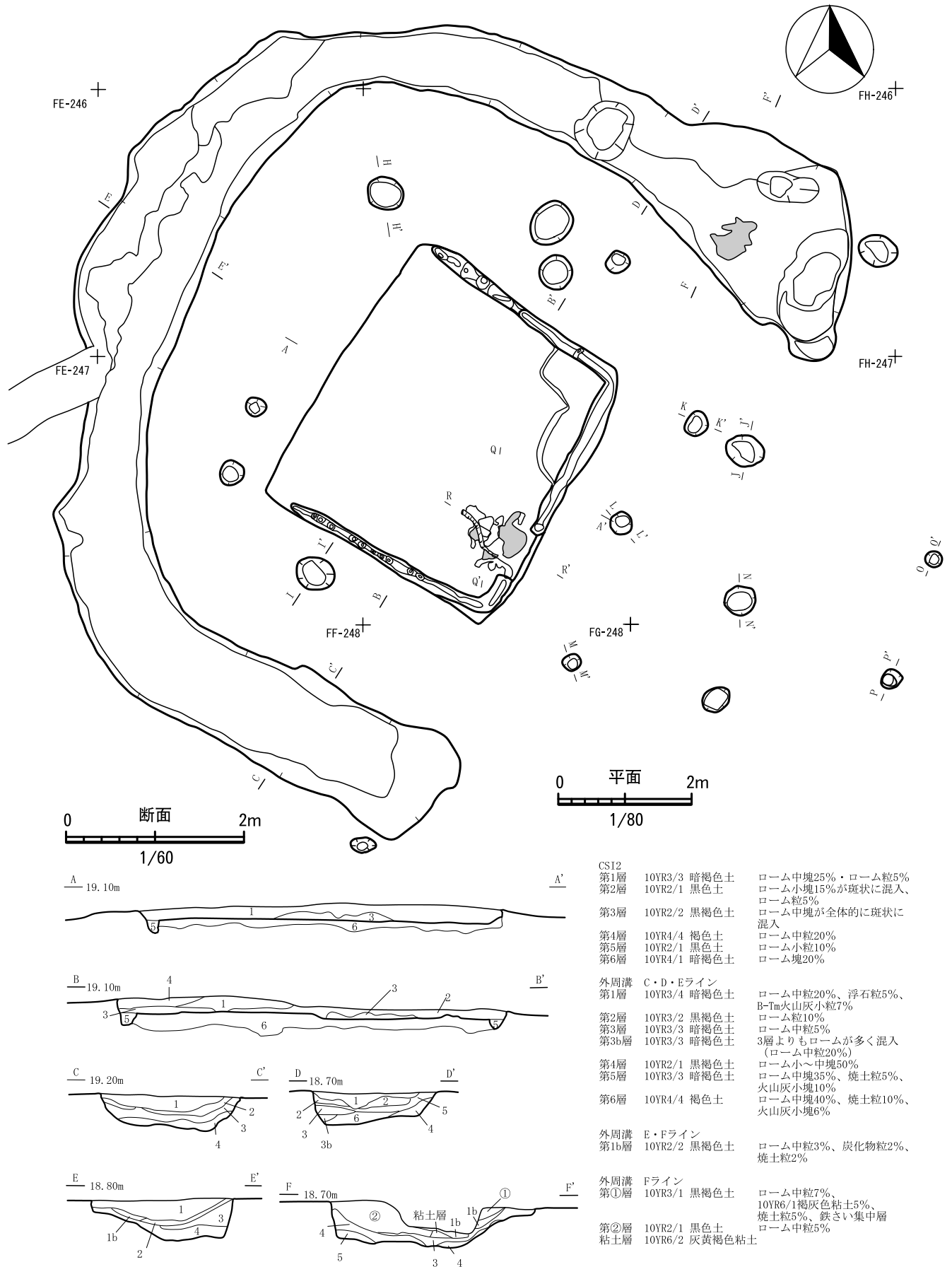


図13 第C 2号竪穴住居跡

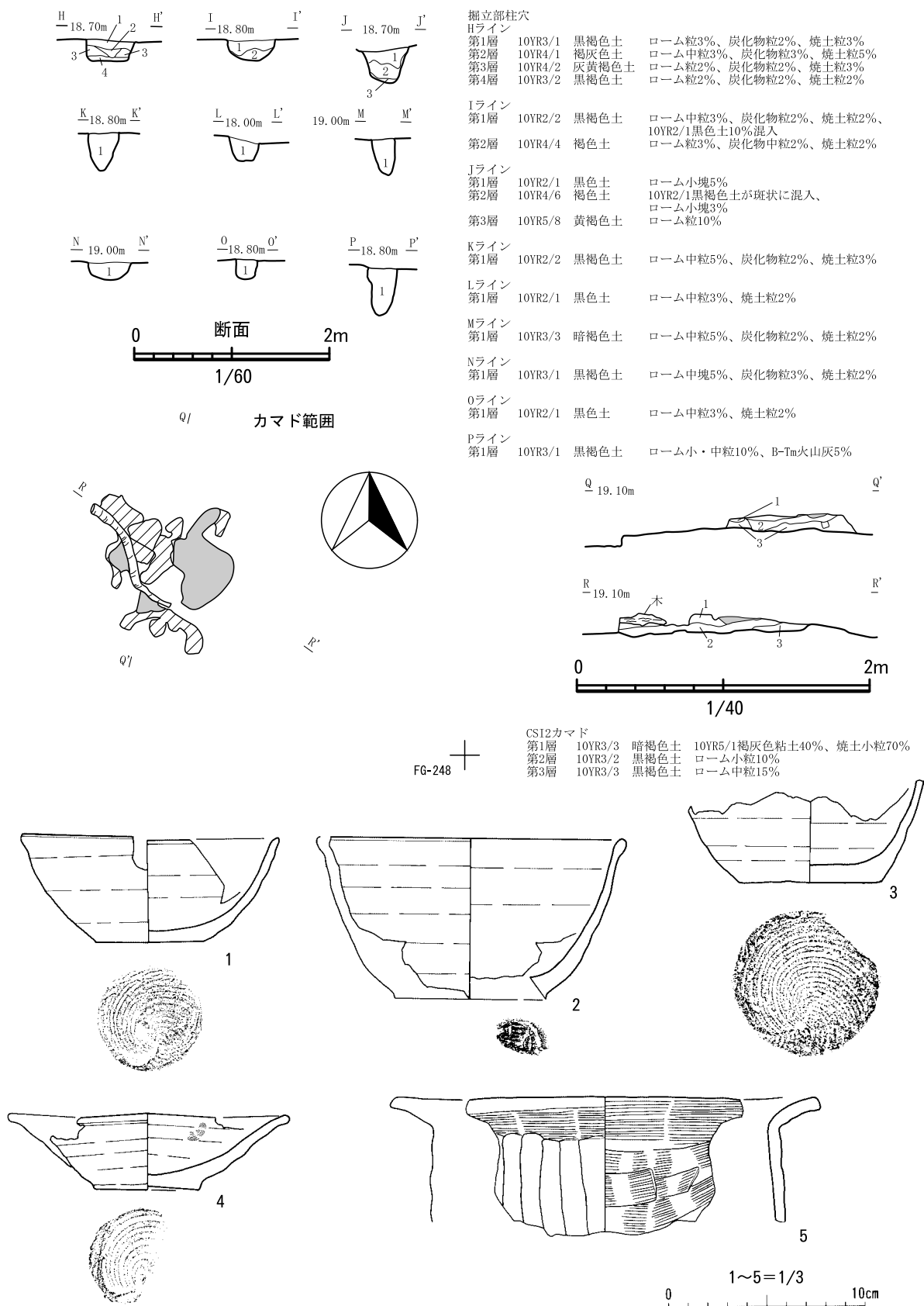


図14 第C 2号竪穴住居跡 ・ 出土遺物

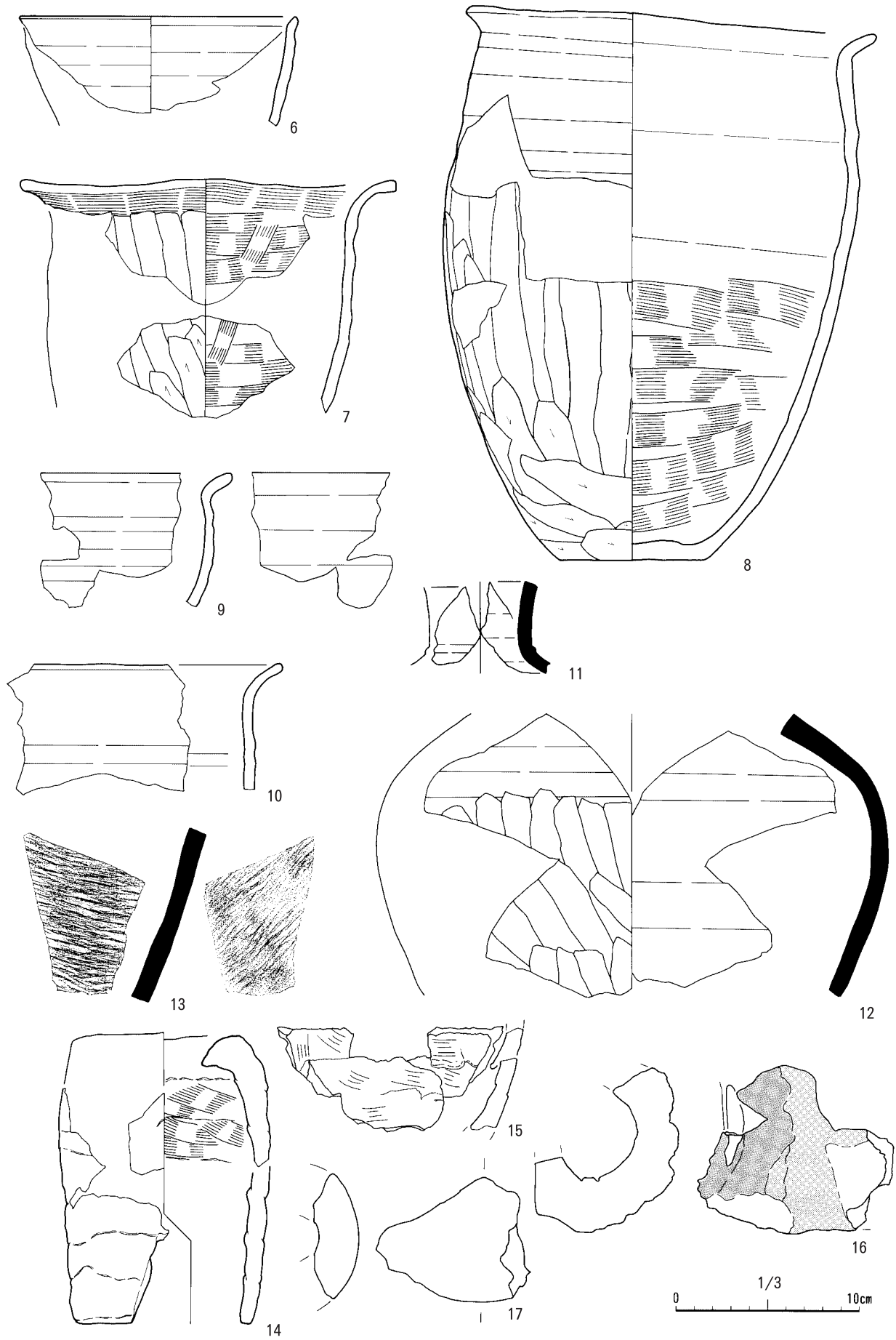


图15 第C 2号竖穴住居跡出土遺物

第C3号竪穴住居跡 (図16～18)

[位置・確認] FL～N-246～248に位置する。標高18～19mの北緩傾斜面に立地する。公園造成時に上面を削平されている。第 層中位で確認した。

[重複] 外周溝が第C5号竪穴住居跡外周溝、第12号土坑、第26号土坑と重複し、本住居跡が最も新しい。

竪穴部

[平面形・規模] 公園造成時に削平され、ピットと壁溝のみが検出された。残存する壁溝から北東 - 南西に長い方形であったと推定される。規模は、長辺側は壁溝から判断して4.0m、短辺側は3.4mほどである。推定される床面積は12.6㎡である。主軸方位はN - 49° - Wである。

[壁・床面] 第 層中位まで掘り込んでいたと考えられる。壁は確認できなかった。

[壁溝] 西～北～東を廻る。幅16～20cm、深さ8～10cmである。堆積土は 層に相当する黒色土である。

[柱穴] ピット6個を検出した。配置からみても主柱穴の可能性は低い。また、壁溝内で幅が若干広がる部分が見られた。壁溝底面よりもわずかに深い程度であるが、位置から判断して、主柱穴が配されていた可能性が高い。

[カマド] 検出されなかった。

[堆積土] ほとんど残存していないが、第 層に相当する黒色土が極薄く堆積している。

[出土遺物] 竪穴部からは須恵器大甕片、土製支脚片、羽口片などがわずかに出土したに過ぎない。

外周溝

[位置] 住居跡の南・西・北に位置する。竪穴部からの距離は2mである。

[平面形・規模] コの字形を呈する。幅は76cm～1m、深さ25cm～35cmで、幅はほぼ一定であるが、南側がやや広がる。底面幅は70～60cmである。西側屈曲部が幅24cmと狭まる。溝の傾斜は西側に傾斜する。断面形はU字形である。

[堆積土] ロームや炭化物、焼土混じりの第 層に相当する黒色土あるいは黒褐色土が堆積する。

[出土遺物] 外周溝からは、土師器坏・甕などが出土したが、破片が多く、復元し得たものは小型の甕だけである。この他砥石も出土した。

[時期] 平安時代。

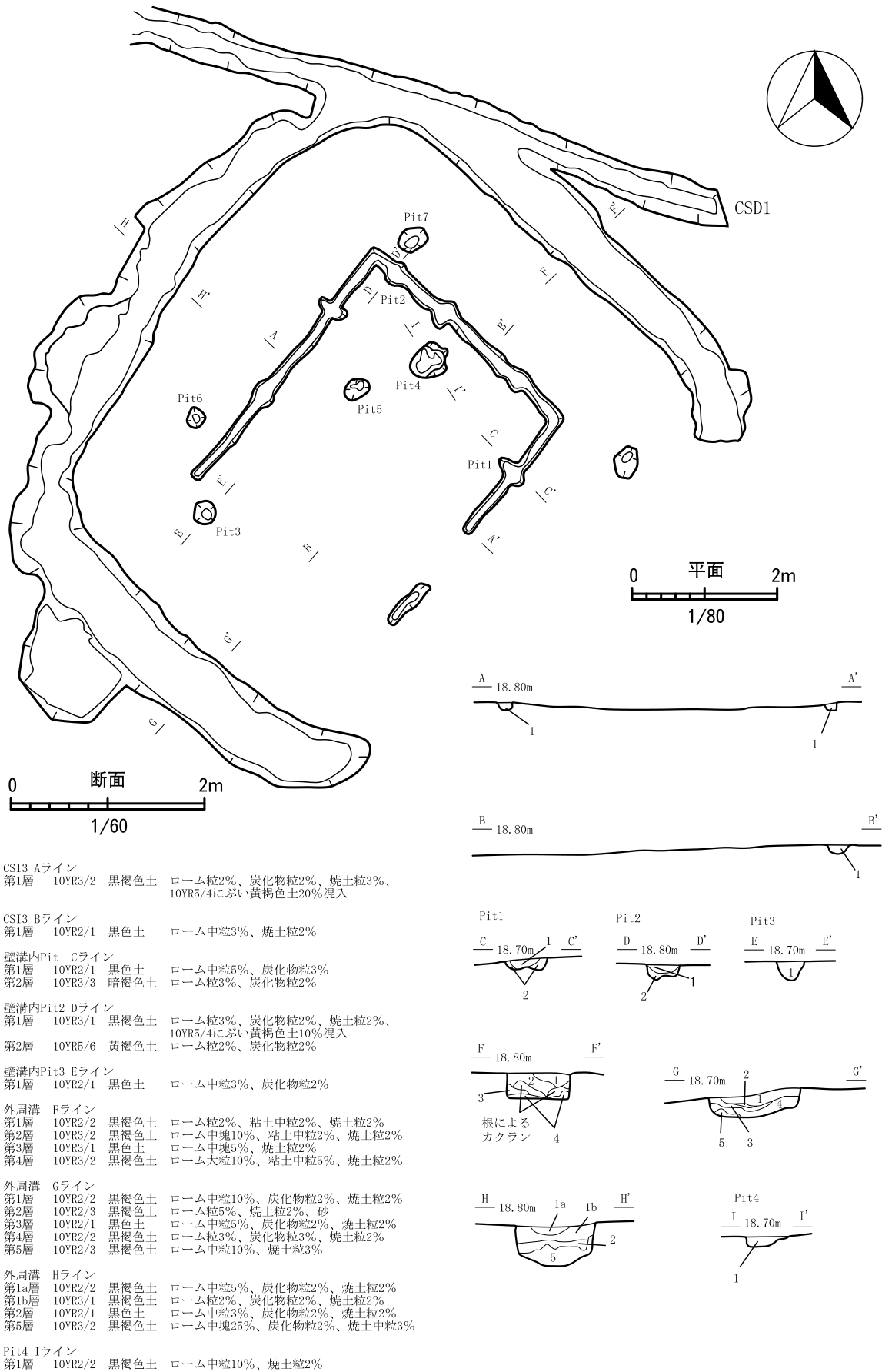


図16 第C3号竪穴住居跡

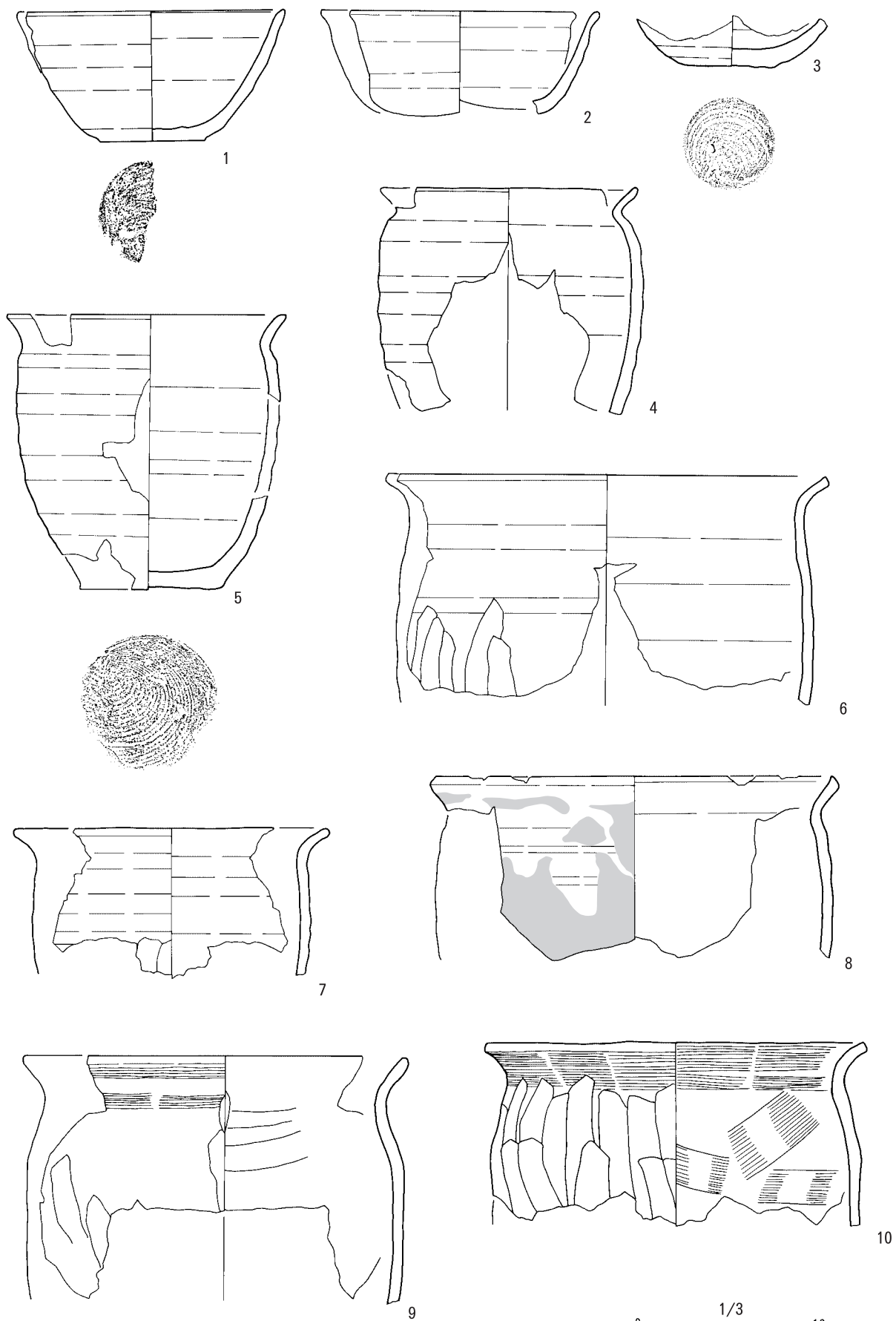


图17 第C3号竖穴住居跡出土遺物

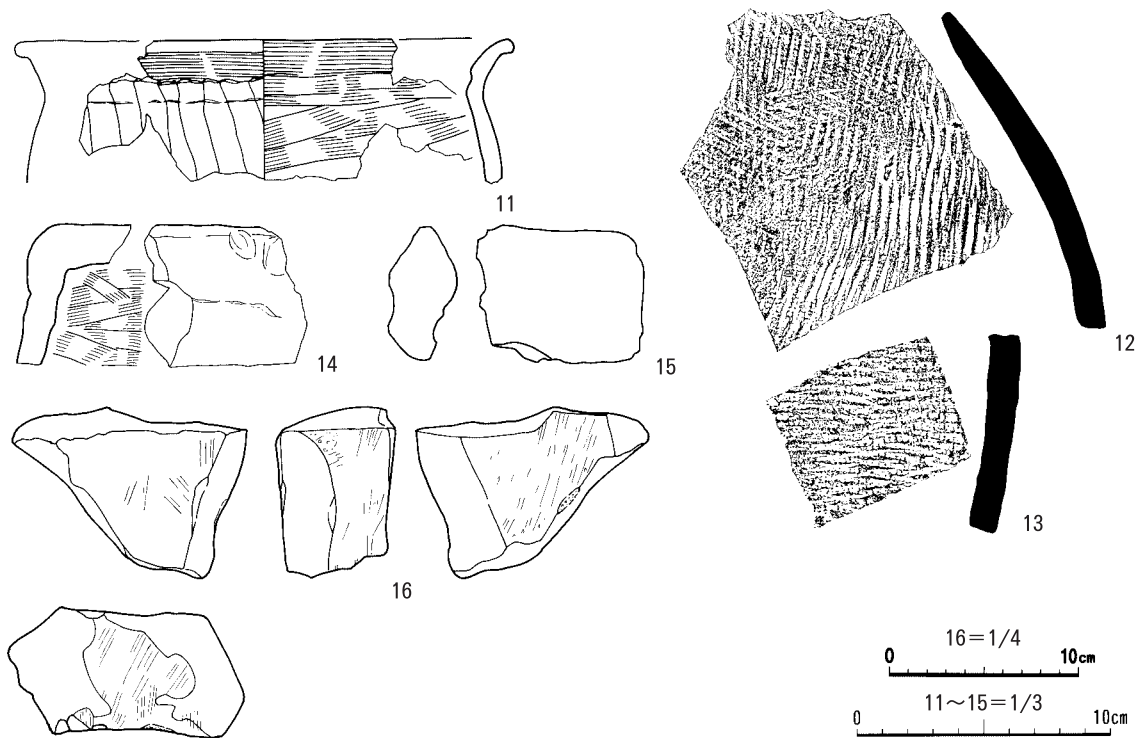


図18 第C3号竪穴住居跡出土遺物

第C5号竪穴住居跡 (図19~21)

[位置・確認] F J ~ L - 246 ~ 248に位置する。標高19m ~ 18mの北緩傾斜地に立地する。公園造成時に上部を削平されており、第 層中で確認した。

[重複] 第C3号竪穴住居跡外周溝、第C12号土坑、第C1号溝跡と重複し、本住居跡はC3号住居跡、第C1号溝跡より古く、第C12号土坑より新しい。

竪穴部

[平面形・規模] 壁溝とピットのみを検出した。残存する壁溝より南北3.96m、東西3.28mの長方形と考えられる。推定される床面積は10.1㎡である。主軸方位はN - 48° - Wである。

[壁・床面] 削平により失われている。

[壁溝] 南壁の大部分、東壁の南半を除いて、壁溝が検出された。幅20 ~ 40cm、深さ10 ~ 15cmである。

「柱穴」ピットは2個確認したが、柱穴かどうかは不明である。

[カマド] 削平により失われている。

[堆積土] わずかにローム粒混じりの黒色土が堆積する。

外周溝

[位置] 住居の南・西・北に位置する。竪穴部からの距離は1.6mである。

[平面形・規模] 北側を第C1号溝跡に切られているが、コの字形を呈すると考えられる。幅は40 ~ 80cm、深さ36 ~ 90cmで、南側で狭まる。底面幅は、28 ~ 68cmで断面形は箱形である。底面は西側から南と北へ傾斜する。

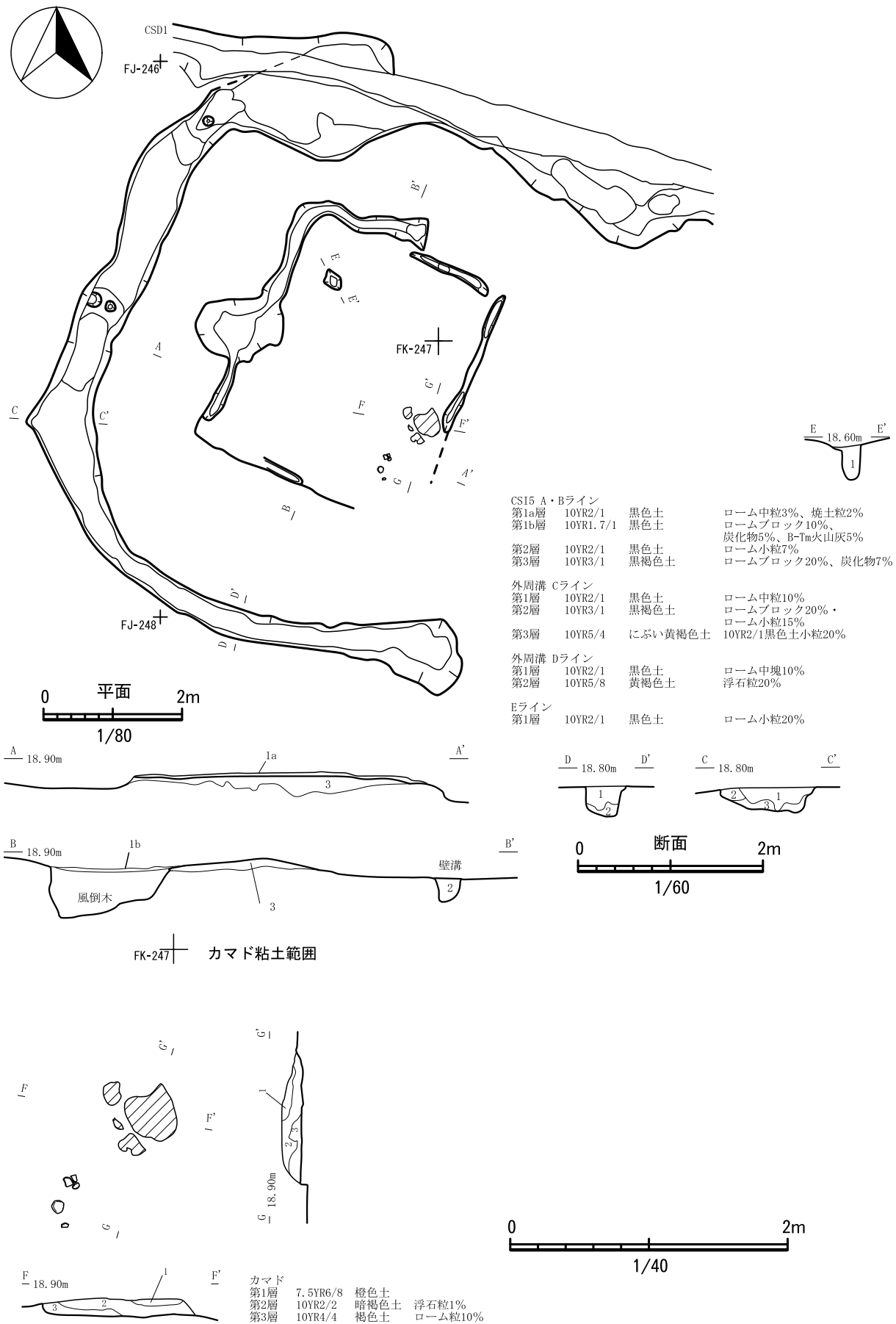


図19 第C5号竪穴住居跡

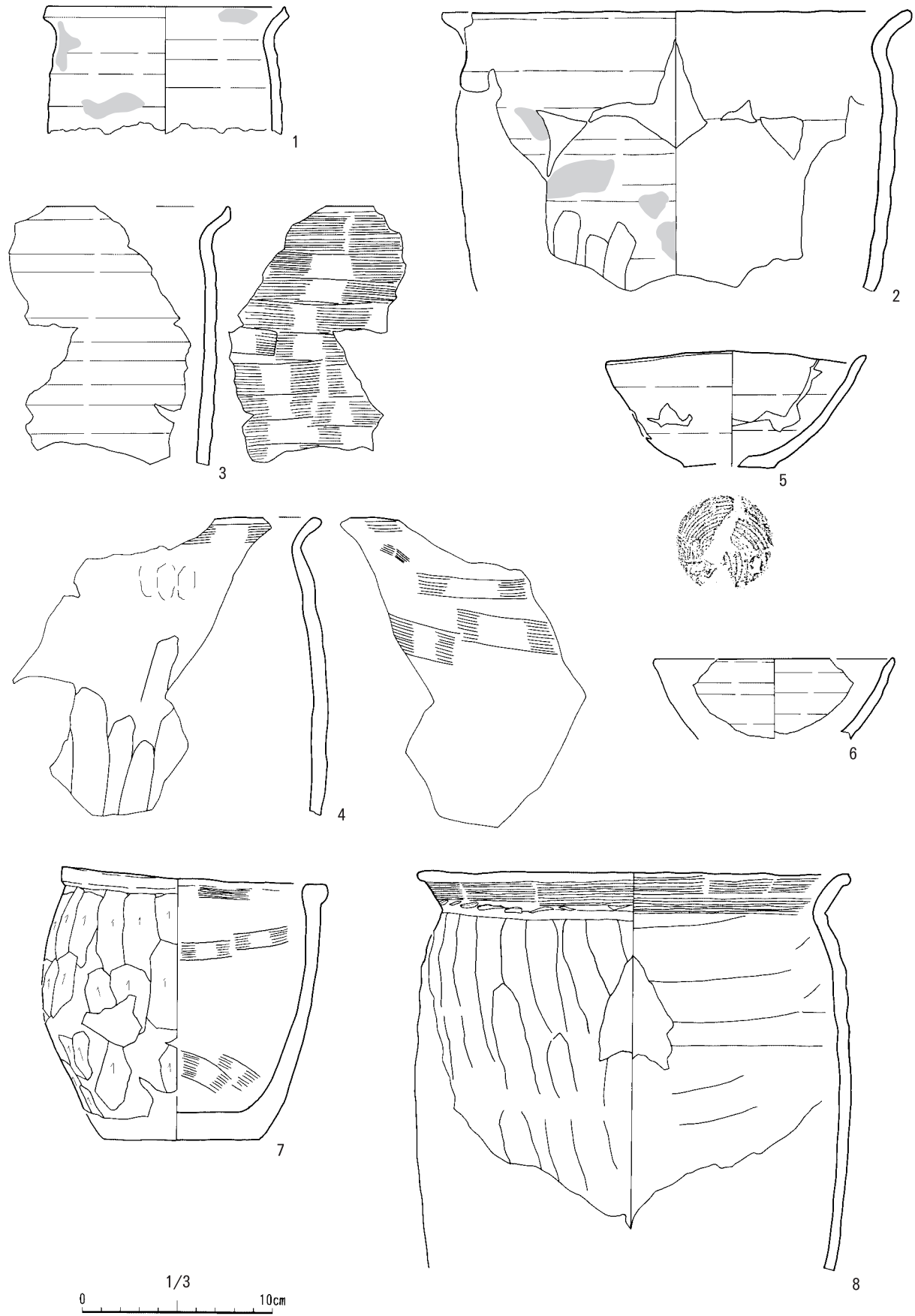


图20 第C 5号竖穴住居跡出土遺物

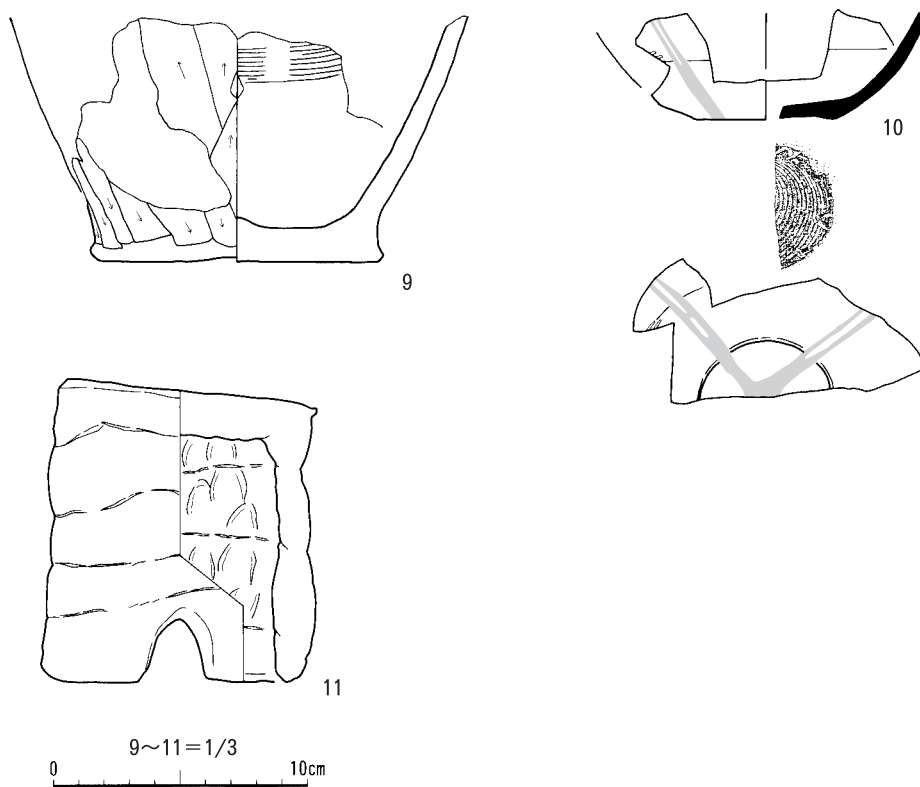


図21 第C5号竪穴住居跡出土遺物

[堆積土] 堆積土上面は第 層に相当する黒色土でローム粒や炭化物が混じる。堆積土下部は第 層に相当する黄褐色土主体で白色粘土粒が混じる。

[出土遺物] 竪穴部からは土師器甕片、焼成粘土塊などが出土したが、量は少ない。外周溝では西側の堆積土中位を主体に、土師器坏・甕や須恵器坏、羽口、土製支脚などが出土した。

[時期] 平安時代。

(伊藤)

第C7号竪穴住居跡 (図22、23)

[位置・確認] 標高約18mのGN・M-247に位置する。検出層位は第1層～第25層である。

[平面形・規模] やや東西に長い長方形で、東壁半分が楕円状に張り出す。東西壁2.6m、南北壁2m、床面積3.7㎡で、主軸方向は、N-45°-Wである。

[壁・床面] 壁高は15～25cmで、床面に対してほぼ垂直に立ち上がる。東西隅を除いた範囲で硬化面が確認されており、床面中央部分からカマド前面にかけて粘土ブロックを含む貼り床が施されている。特に東壁前面にある出入口施設底面の硬化が顕著である。

[壁溝] 東壁前面の一部とカマド部分を除く壁際全周にわたり、幅6cm、深さ2cmの壁溝が巡る。

[柱穴] 南壁前面に直径24cm、深さ26cmの柱穴1個が確認されている。この他、屋外に住居跡に関連する可能性のあるピット1個 (CPT78: 直径16cm、深さ16cm) が検出されている。

[カマド] 南壁西寄りに位置する。袖は白色粘土によって構築されており、遺存状態は比較的良好である。煙道部は千曳浮石層の下部をトンネル状に切り貫いて作出されており、煙道出口から甕の破片が出土している。

[その他] 東壁の張り出しとカマドを結ぶ直線上に顕著な硬化面の発達が見られ、地山を削り出して作出されたスロープは住居跡内外への出入口施設に相当するものと考えられる。

[堆積土] 堆積土は白色粘土および千曳浮石を多量に含み、人為堆積の様相を呈する。堆積土中位の西壁付近には3層に相当する部分で焼土層が面的に確認されており、連続的な廃棄行為による埋積に焼土層の投棄が介在したものと考えられる。焼土層を水洗浮遊選別したところアワ、キビ、イネなどの栽培植物が検出された (第4章第3節)。

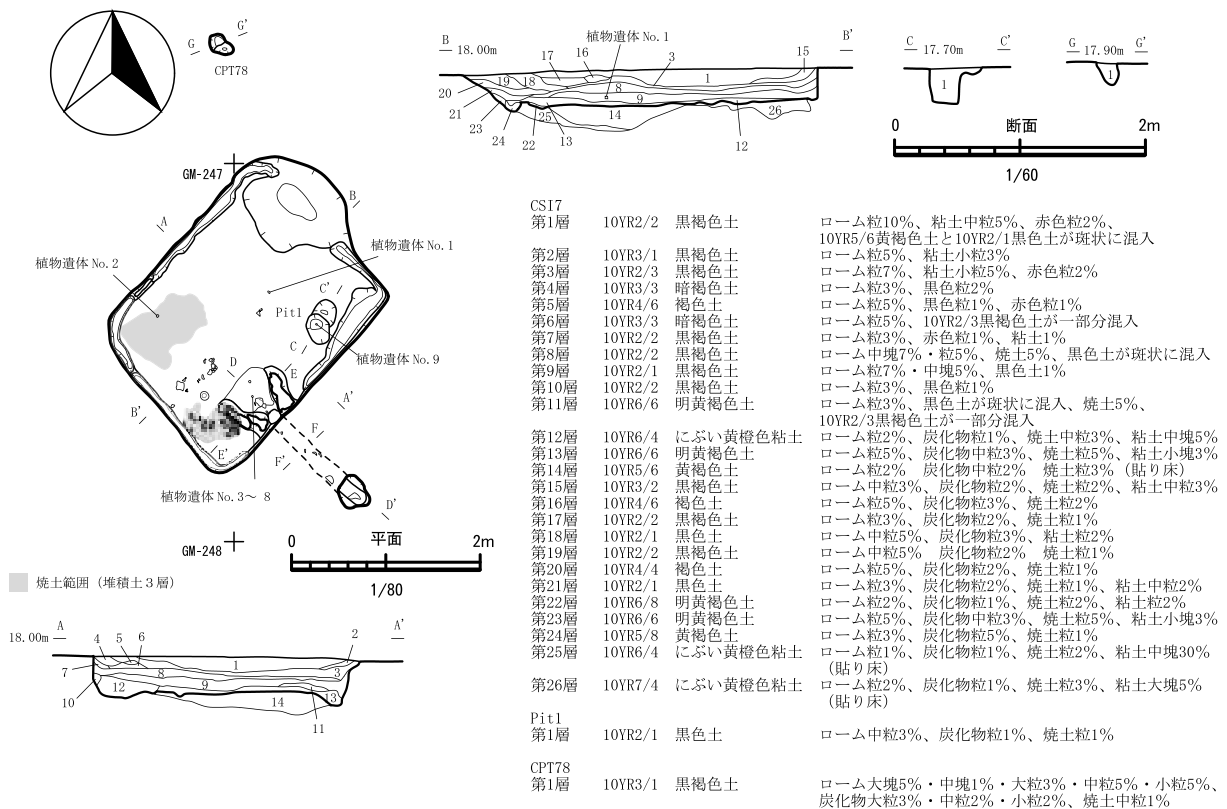
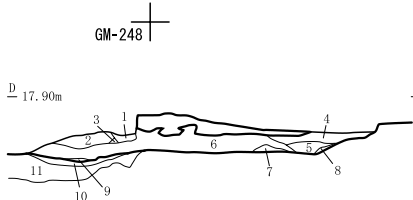
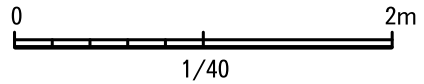
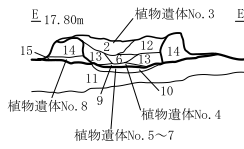
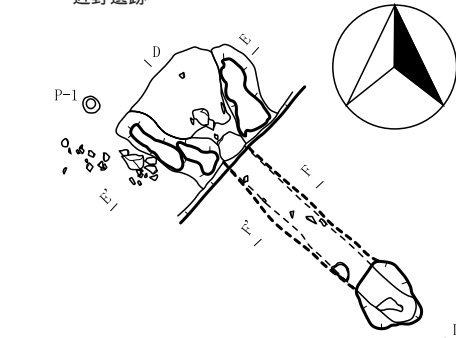


図22 第C7号竪穴住居跡

近野遺跡



CS17カマド

第1層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒2%、炭化物粒1%、焼土粒5%、粘土中粒3%
第2層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	黒色土10%、粘土10%、ローム大粒2%・中粒2%・小粒2%、炭化物大粒2%・中粒1%・小粒1%、焼土大粒2%・中粒4%、火山灰5%
第3層	10YR4/4	褐色土	ローム粒1%、炭化物粒1%、焼土粒3%
第4層	10YR2/1	黒色土	ローム粒2%、炭化物粒1%、焼土粒3%、火山灰3%
第5層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒3%、炭化物粒2%、焼土中粒2%、粘土小塊10%
第6層	10YR2/2	黒褐色土	ローム大粒2%、炭化物中粒3%、焼土大粒2%・中粒3%、粘土大粒2%・中粒3%
第7層	10YR5/6	黄褐色土	ローム粒2%、炭化物粒1%、焼土粒2%
第8層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒2%、炭化物粒1%、焼土粒2%
第9層	7.5YR4/2	灰褐色土	焼土大粒5%・中粒10%・小粒10%、炭化物中粒5%・小粒5%
第10層	7.5YR5/6	明褐色焼土	炭化物中粒1%・小粒1%
第11層	10YR6/6	明黄褐色ローム	粘土30%、黒褐色土10%、焼土中粒3% (貼り床)
第12層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	火山灰10%、粘土10%、ローム中粒1%・小粒1%、炭化物大粒1%・中粒1%、焼土中粒2%・小粒1%
第13層	7.5YR6/6	橙色焼土	粘土5%、ローム粒1%、炭化物大粒1%
第14層	10YR6/4	にぶい黄橙色土	7.5YR5/4にぶい褐色焼土20%、粘土10%、炭化物大塊1%・中粒1%・小粒2%、(袖)
第15層	10YR5/3	にぶい黄褐色土	ローム粒2%、炭化物粒3%、焼土粒3%、粘土粒3% (袖)

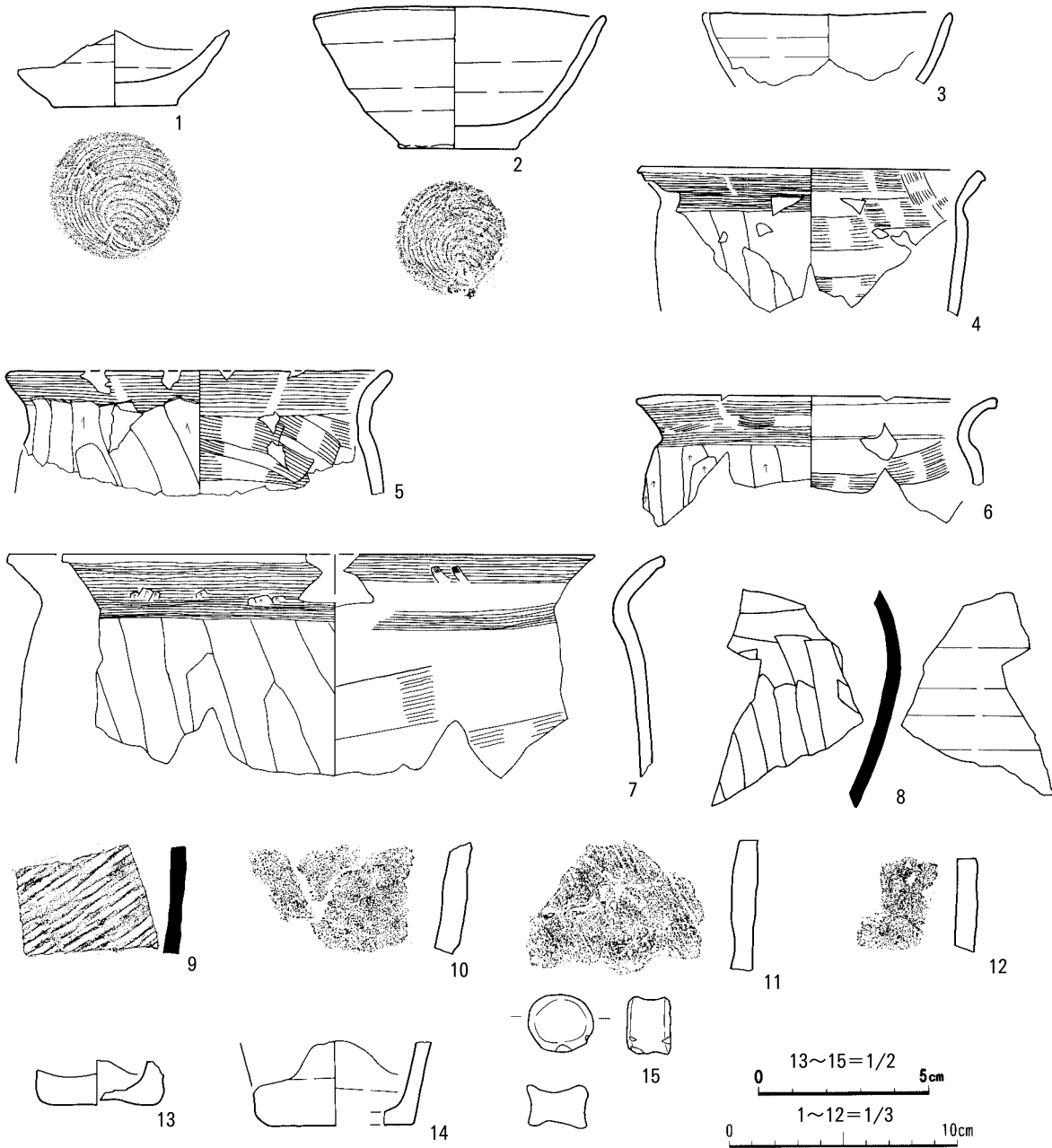


図23 第C 7号竪穴住居跡 ・出土遺物

[出土遺物] カマドから土師器坏、堆積土中から土師器甕片、須恵器片、製塩土器片、ミニチュア土器などが出土した。また、焼土層から出土した土師器の甕(23-7)はCPT78の覆土から出土した破片と接合している。

[時期] 出土遺物から平安時代に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第C8号竪穴住居跡(図24、25)

[位置・確認] FI~L-254~257に位置する。標高約20~19mの北緩傾斜地に立地する。暗渠管の埋設により竪穴住居跡のほとんどは削平を受けている。第 層中で確認した。

竪穴部

[規模・形状] 公園造成時の削平で、壁溝の一部のみが検出された。規模・形状・主軸方位は不明である。

[壁・床面] 残存しない。

[壁溝] 西側で長さ3m、幅20~24cm、深さ8~17cmの壁溝と思われる溝状の落ち込みを確認した。

[柱穴] 竪穴部内外でピットが3個、壁溝内で2個検出された。柱穴か否か不明である。

[カマド] 残存しない。

[堆積土] 残存しない。

外周溝

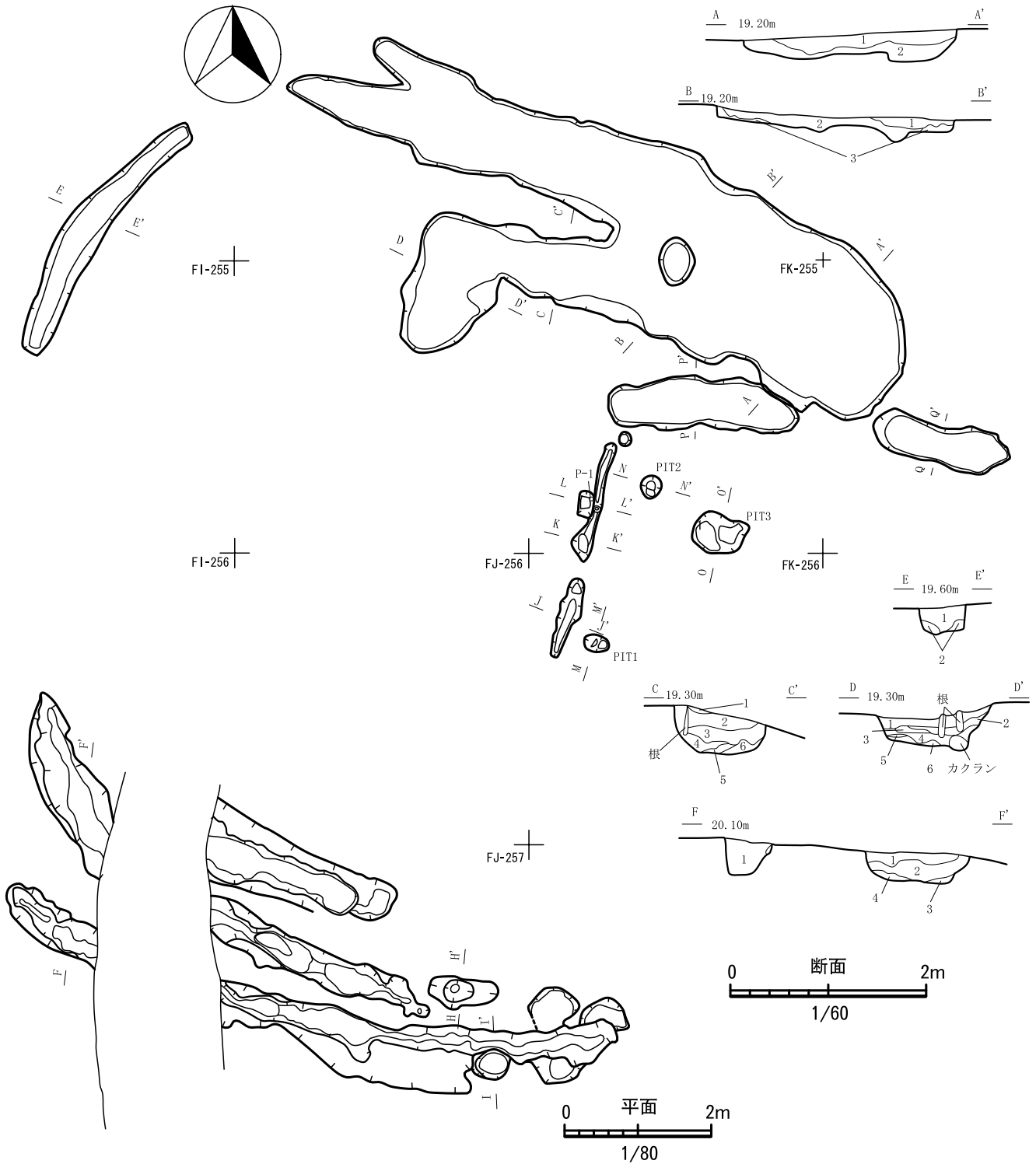
[位置] 竪穴部の南・西・北に位置する。西側は暗渠管の埋設により破壊されている。

[平面形・規模] おそらくコの字形を呈するものと考えられる。南側で3条、北側で2条検出された。南側の3条は各々が幅60~80cm、北側の2条は幅80~100cmで、特に東寄りでは溝が接した状態で、幅240cmほどになる。ただし、南側と北側との対応は不明である。断面形はいずれもU字形である。

[堆積土] 堆積土上面は第 層に相当する黒色土主体、下面は第 層を母材とする暗褐色土を主体とする。

[出土遺物] 外周溝堆積土を主体として、土師器坏・甕や須恵器甕・壺、製塩土器などが出土した。土師器坏を除き、いずれも破片である。

[時期] 平安時代。(伊藤)



CS18		
外周溝	Aライン	
第1層	10YR3/1	黒褐色土
第2層	10YR3/1	黒褐色土
外周溝	Bライン	
第1層	10YR3/1	黒褐色土
第2層	10YR2/2	黒褐色土
第3層	10YR7/8	黄褐色土
外周溝	Cライン	
第1層	10YR2/1	黒色土
第2層	10YR3/1	黒褐色土
第3層	10YR5/4	にぶい黄褐色土
第4層	10YR3/2	黒褐色土
第5層	10YR2/1	黒色土
第6層	10YR6/6	明黄褐色土

ローム粒10%、赤色土2%
ローム粒5%、10YR6/6明黄褐色土10%
ローム粒5%、10YR1.7/1黒色土3%、火山灰3%
ローム粒7%・中塊10%、粘土2%
ローム粒7%、10YR2/2黒褐色土3%
ローム粒5%
ローム小塊5%・粒3%、赤色粒1%、10YR2/1黒色土2%
ローム粒7%、赤色粒1%、黒色粒1%
ローム中塊3%・粒2%、赤色粒1%
ローム粒3%
ローム粒5%、粘土粒3%、黒色粒2%

外周溝 Dライン		
第1層	10YR2/1	黒色土
第2層	10YR4/3	にぶい黄褐色土
第3層	10YR3/1	黒褐色土
第4層	10YR6/8	明黄褐色土
第5層	10YR3/3	暗褐色土
第6層	10YR7/6	明黄褐色土
外周溝	Eライン	
第1層	10YR1.7/1	黒色土
第2層	10YR5/6	黄褐色土
外周溝	Fライン	
第1層	10YR2/1	黒色土
第2層	10YR2/2	黒褐色土
第3層	10YR3/4	暗褐色土
第4層	10YR1.7/1	黒色土
第5層	10YR6/8	明黄褐色土
ローム粒5%		
ローム大塊3%・粒2%、粘土粒1%、黒色粒1%		
ローム大塊3%・粒7%、粘土粒3%		
ローム粒7%、黒色粒2%		
ローム粒5%、粘土粒2%		
ローム粒5%、粘土粒2%、10YR3/2黒褐色土3%		
ローム中粒1%・小粒2%、焼土中粒1%		
ローム粒2%、黒褐色土30%斑状に混入		
ローム粒3%・小塊5%		
ローム粒2%・中塊10%		
ローム粒2%、黒色粒1%		
ローム粒1%		
ローム粒5%、鉄粒3%、黒色粒1%		

図24 第C 8号竪穴住居跡

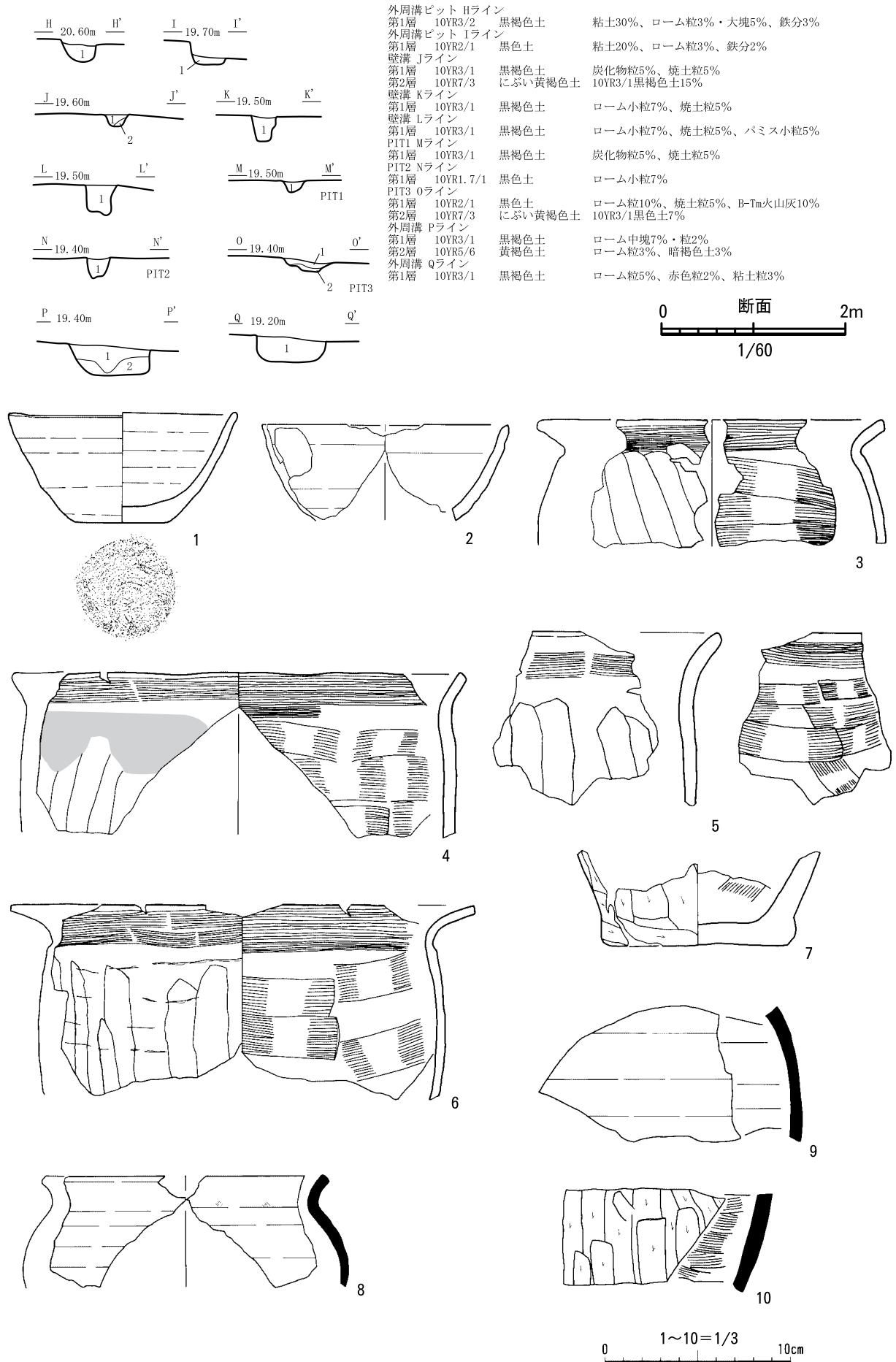


図25 第C 8号竪穴住居跡 ・出土遺物

第C10号竪穴住居跡 (図26)

[位置・確認] F I・J - 266～268に位置する。標高約22mの北傾斜地に立地する。堆積土上面が削平され、第 層中で壁溝の一部と外周溝を確認した。

[重複] 第C9号溝跡と重複し、本住居跡が古い。

竪穴部

[平面形・規模] 壁溝の一部しか残存しないので、平面形・規模・主軸方位は不明である。

[壁・床面]・[カマド]・[柱穴] 残存しない。

[壁溝] 北西隅のみ検出された。幅20～36cm、深さ10～21cmである。

[堆積土] 残存しない。

外周溝

[位置] 竪穴部の西・北に位置する。南側は削平されている。

[平面形・規模] コの字形を呈すると推定される。幅は60～82cm、深さ27～70cmで、底面は南側より北側が低い。断面形はU字形である。

[堆積土] ローム粒や焼土が混じる黒色土を主体とする。

[出土遺物] 図示しないが、土師器甕の細片がごくわずかに出土した。

[時期] 平安時代と思われる。

第C11号竪穴住居跡 (図27)

[位置・確認] F G・H - 266～268に位置する。第 層中で確認された。標高約22mの傾斜地に位置する。調査時に第C8号溝跡と、第C3号溝状土坑としたが、調査後に形状や規模から竪穴住居跡に伴う外周溝と判断し、第C11号竪穴住居跡とした。公園造成により上面が削平され、竪穴部はピットのみ確認した。

[重複] 外周溝の北側で第C37号土坑跡と重複し、本遺構が古い。

竪穴部

[平面形・規模] 削平されているため、平面形・規模・主軸方位ともに不明である。

[壁・床面]・[壁溝]・[カマド] 残存しない。

[柱穴] CPIT49・50として調査したものが、住居に伴うピットである可能性がある。

[堆積土] 確認できなかった。

外周溝

[位置] 竪穴部の南・西・北に位置する。

[平面形・規模] 形状はコの字形である。幅は24～64cm、深さ16～30cmで断面形はU字型である。

[堆積土] 第 層に相当する暗褐色土主体で鉄分を若干含む。

[出土遺物] 堆積土中から土師器坏・甕が出土した。

[時期] 平安時代。

(伊藤)

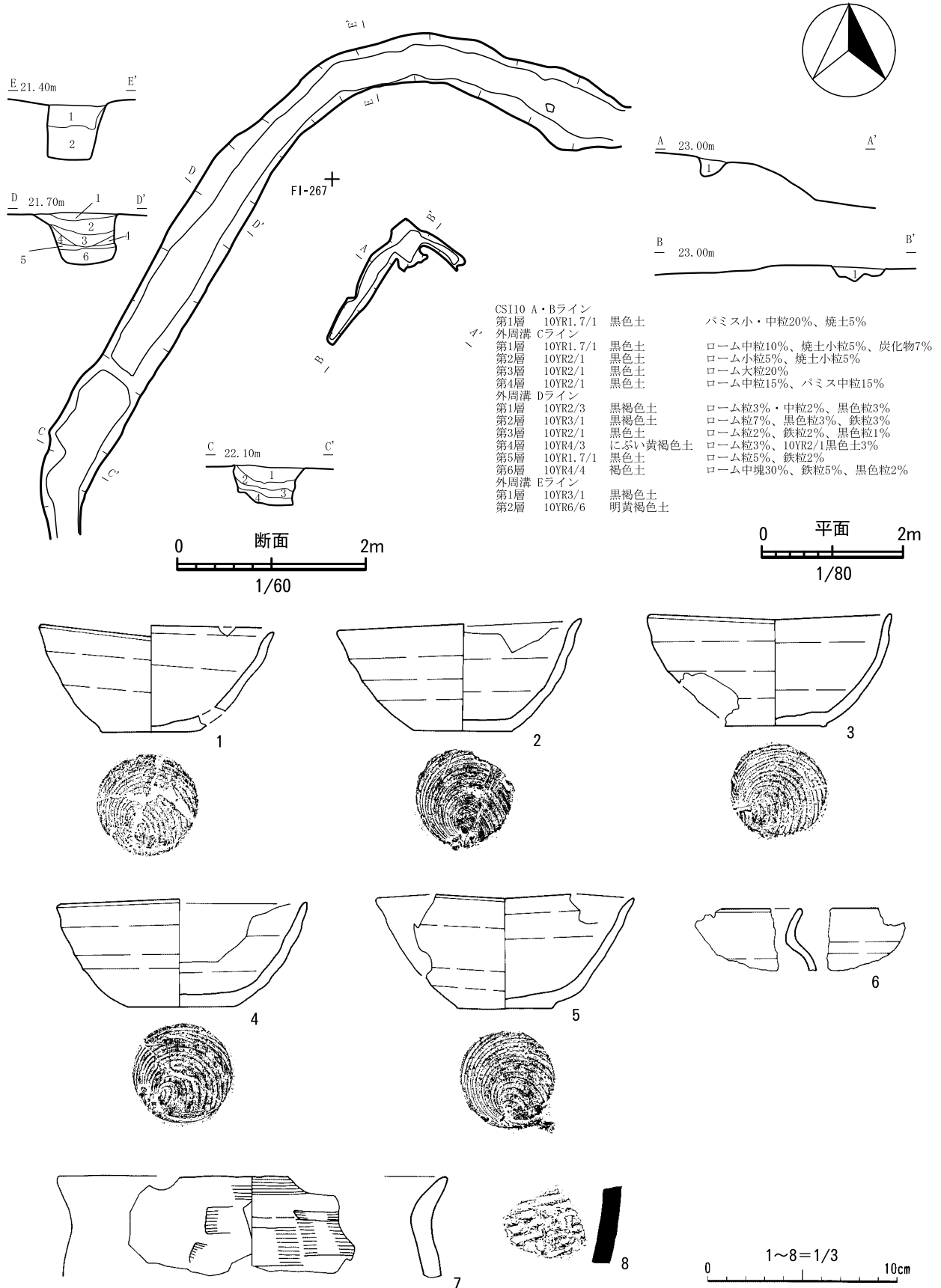


図26 第C10号竪穴住居跡・出土遺物

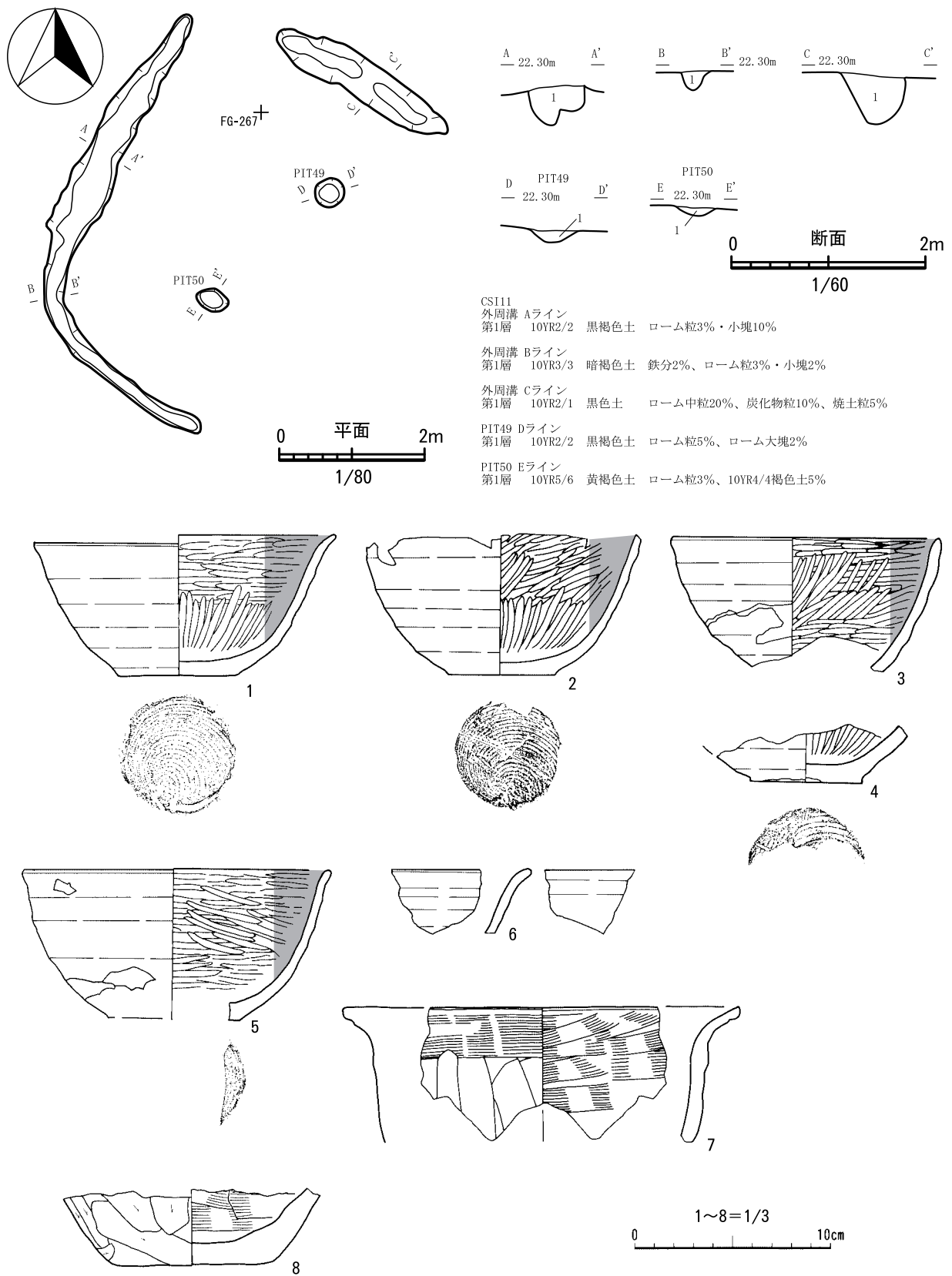


図27 第C11号竪穴住居跡・出土遺物

2 掘立柱建物跡

第C 1号掘立柱建物跡 (図28)

[位置・確認] F L・F M - 258・259に位置する。第 層中で確認した。標高約20mの平坦地に立地する。当初、CPIT57・64・65・67・70~72として調査したものである。

[規模・形状] 東西2間、南北2間のほぼ正方形の建物跡である。北東部は削平されている。東西は1.5m + 1.5m、南北は1.5m + 1.5mである。ピットは直径22cm~60cmで、深さ17~44cm、断面形は箱型またはU字形を呈する。

[堆積土] 第 層まで掘り込み、層に相当する黒褐色土を主体とする。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[時期] 遺物はないが、第C 2号掘立柱建物跡との位置関係、配置などから、平安時代と考えられる。

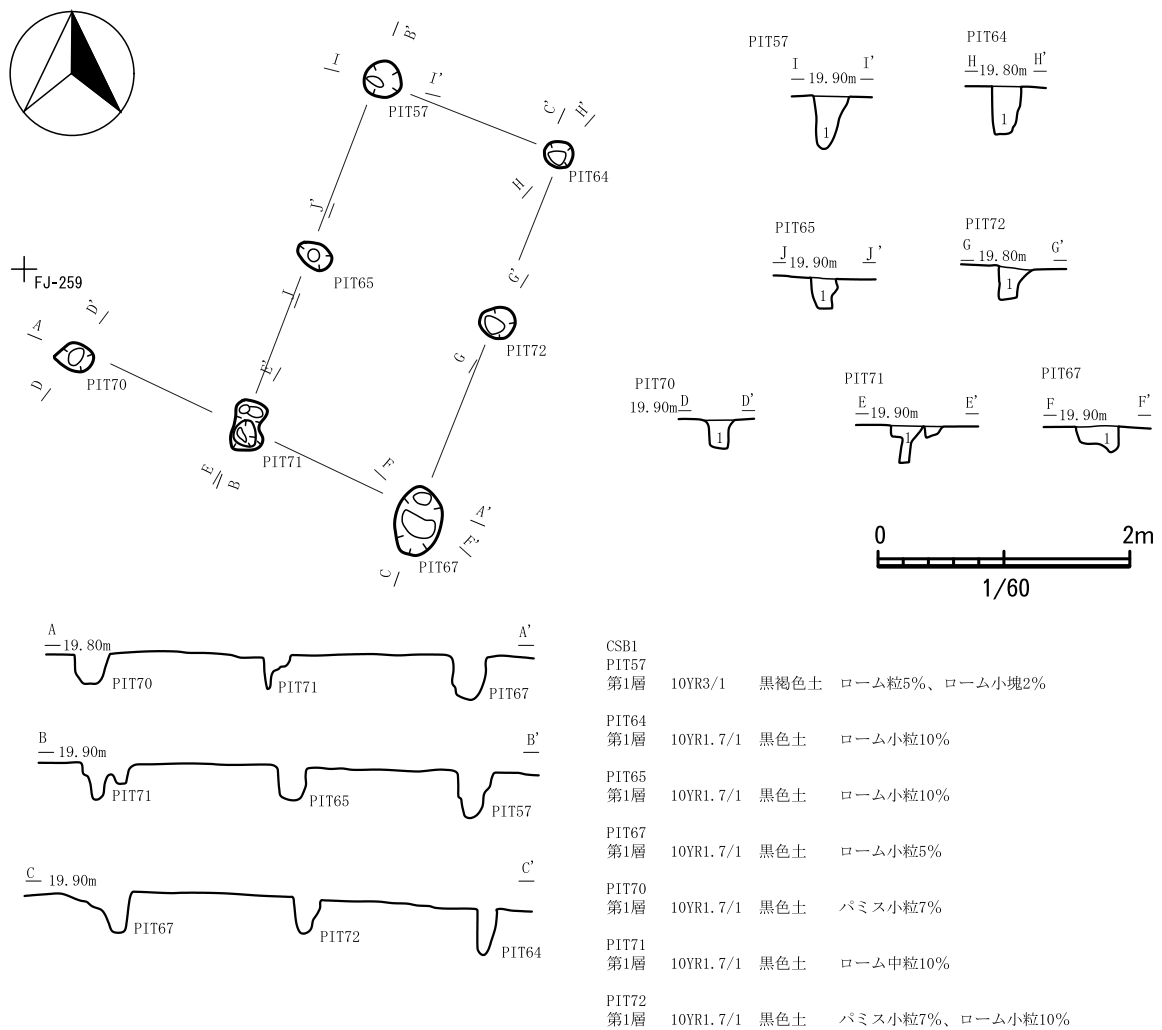


図28 第C 1号掘立柱建物跡

第C 2号掘立柱建物跡 (図29)

[位置・確認] FL・FM - 258・259に位置する。第 層中で確認した。標高約20mの平坦地に立地する。CPIT55・60～63・66・73として調査したものである。

[規模・形状] 東西2間、南北2間のほぼ正方形の建物跡である。東西は1.5m + 1.5m、南北は1.5m + 1.5mである。ピットは直径20cm～44cmで、深さ27～44cm、断面形は箱型またはU字形を呈する。

西側のPIT63・56・69と東側のPIT55・60・61は建て替えられた可能性がある。

[堆積土] 第 層まで掘り込み、層に相当する黒褐色土を主体とする。

[出土遺物] 図示しないが、PIT60から土師器甕や坏の小破片が出土した。

[時期] 出土遺物から、平安時代と考えられる。

(伊藤)

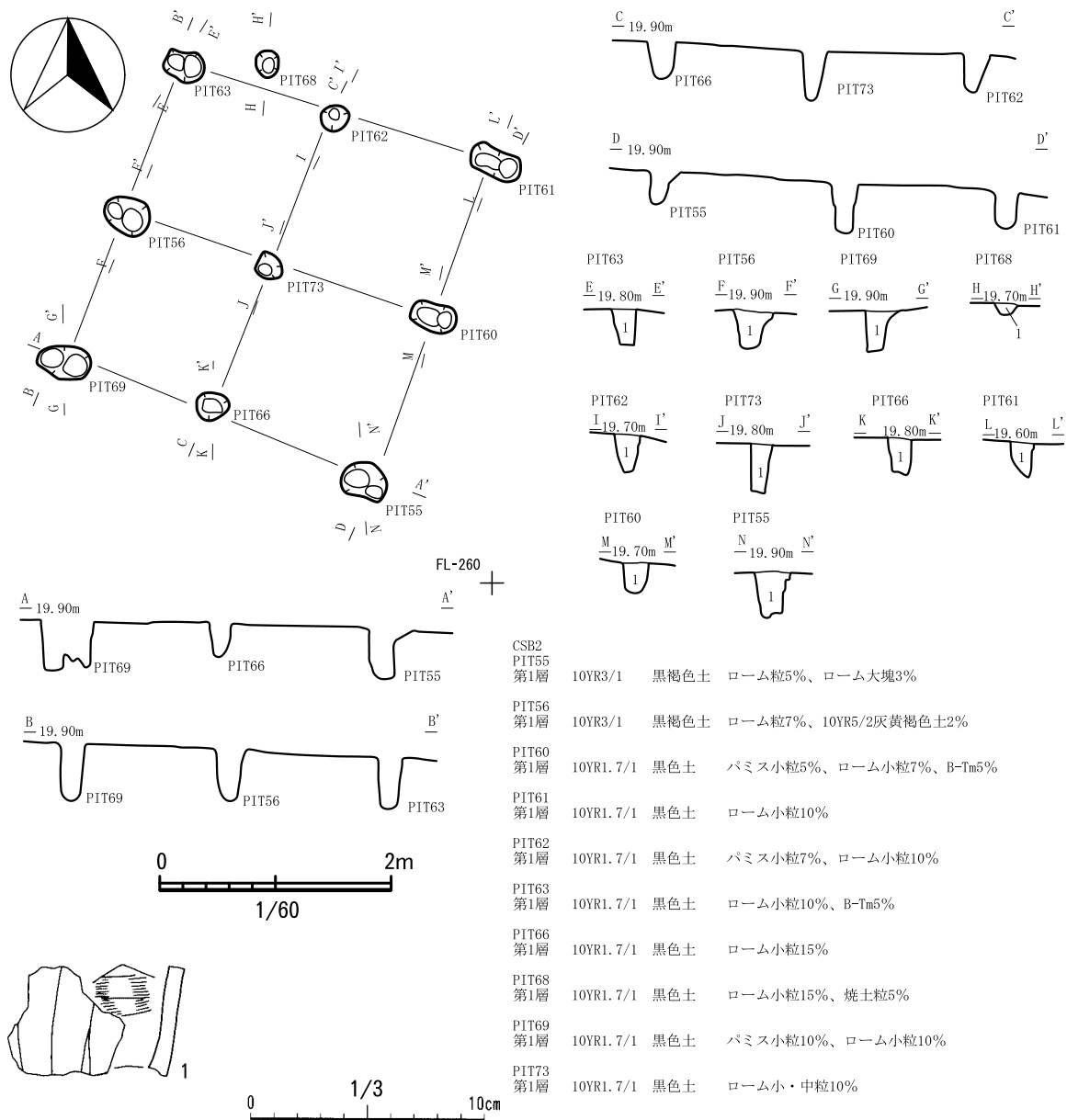


図29 第C 2号掘立柱建物跡・出土遺物

3 土坑

平安時代の土坑としたものは3基である。出土遺物から判断したもので、遺物が出土しない土坑は第3節で触れる。そのため、第3節で記載する土坑の中にも、平安時代のものが含まれている可能性もある。形状・規模等については、巻末に一覧表としてまとめた。

第C26号土坑 (図30・31)

第C1号溝跡より古い、円形の土坑である。堆積土は3層に分層した。第1・2層は第1層に相当する黒褐色土主体の自然堆積土である。3層は壁からの崩落土である。壁は底面から開口部に向かって緩やかに広がる。底面はほぼ平坦である。出土遺物は、第1・2層から土師器・須恵器片が出土した。

(伊藤)

第C37号土坑 (図30・31)

南壁隅がやや張り出した不整円形の土坑である。堆積土は4層に分層した。第2層以下は黄褐色～褐灰色土で、全体にロームや炭化物が含まれる。人為堆積と考えられる。壁の立ち上がりは全体にほぼ垂直である。底面はほぼ平坦で、南壁隅と中央から本遺構に付属する落ち込みを確認した。壁際の落ち込み(CSK37SK1と呼称)は不整円形で深さは30cm、中央の落ち込み(CSK37Pit1と呼称)は不整楕円形で、深さは20cmである。ともに底面は鍋底状で、混入物から人為堆積の可能性が高い。第1層から復元可能なものを含む土師器がややまとまって出土した。

第C38号土坑 (図30～32)

F E・F F - 265に位置する。平面形は径175～190cmのほぼ円形である。東壁はやや直線的である。深さは25～30cmである。堆積土は4層に分層した。第1層は焼土主体層で、遺物も多量に含まれる。人為堆積と思われる。第2層以下は黒色土が主体で、自然堆積の可能性が高い。壁の立ち上がりは西壁では外傾するが、他はほぼ垂直である。底面は東側に向かって下がる。第1層から遺物が多量に出土した。土師器は坏が圧倒的に多い。また小さな焼成粘土塊も多数出土した。本遺構の性格を考える上で示唆するものであろうか？

(小笠原)

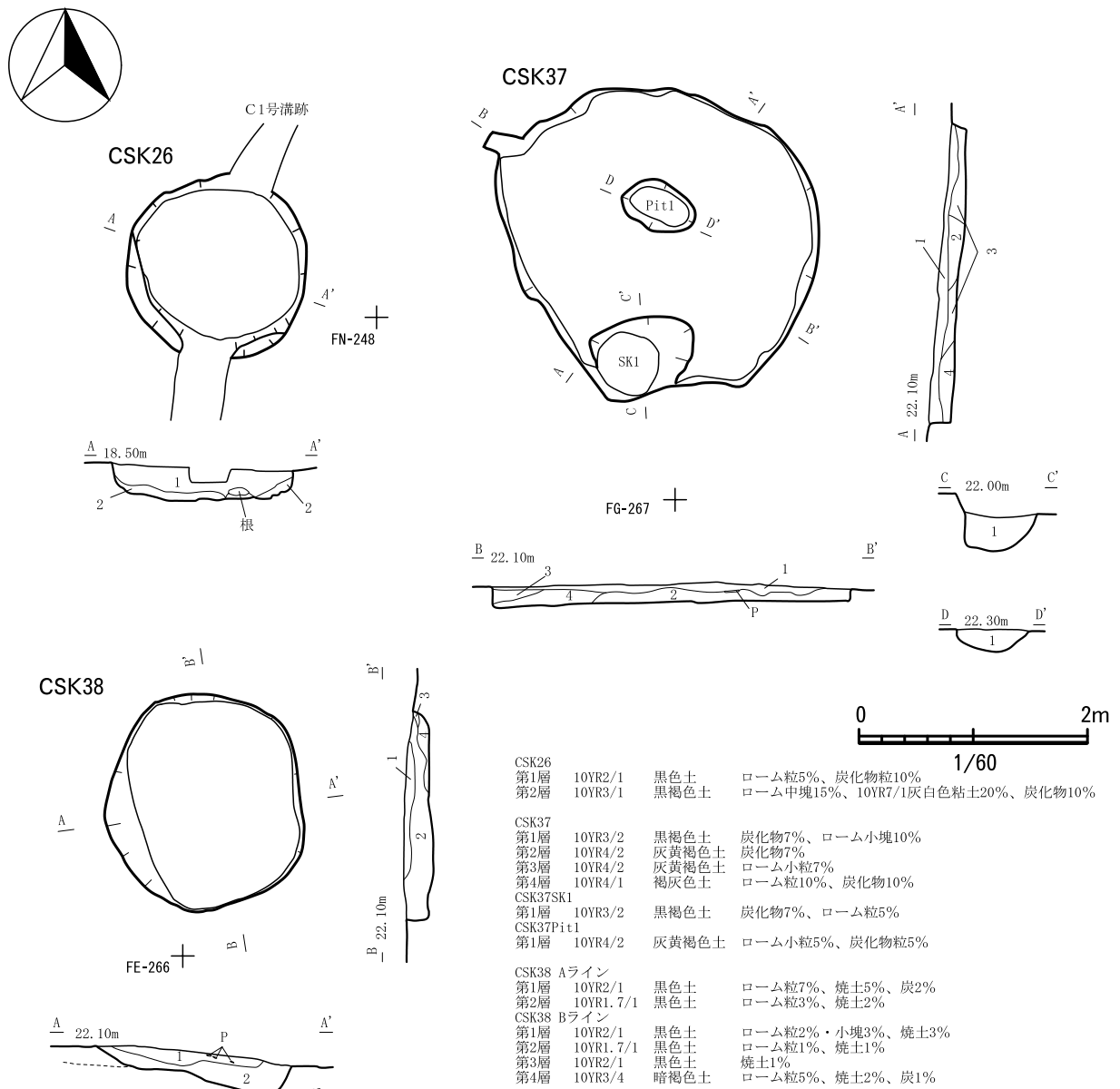


図30 C区土坑(平安時代)

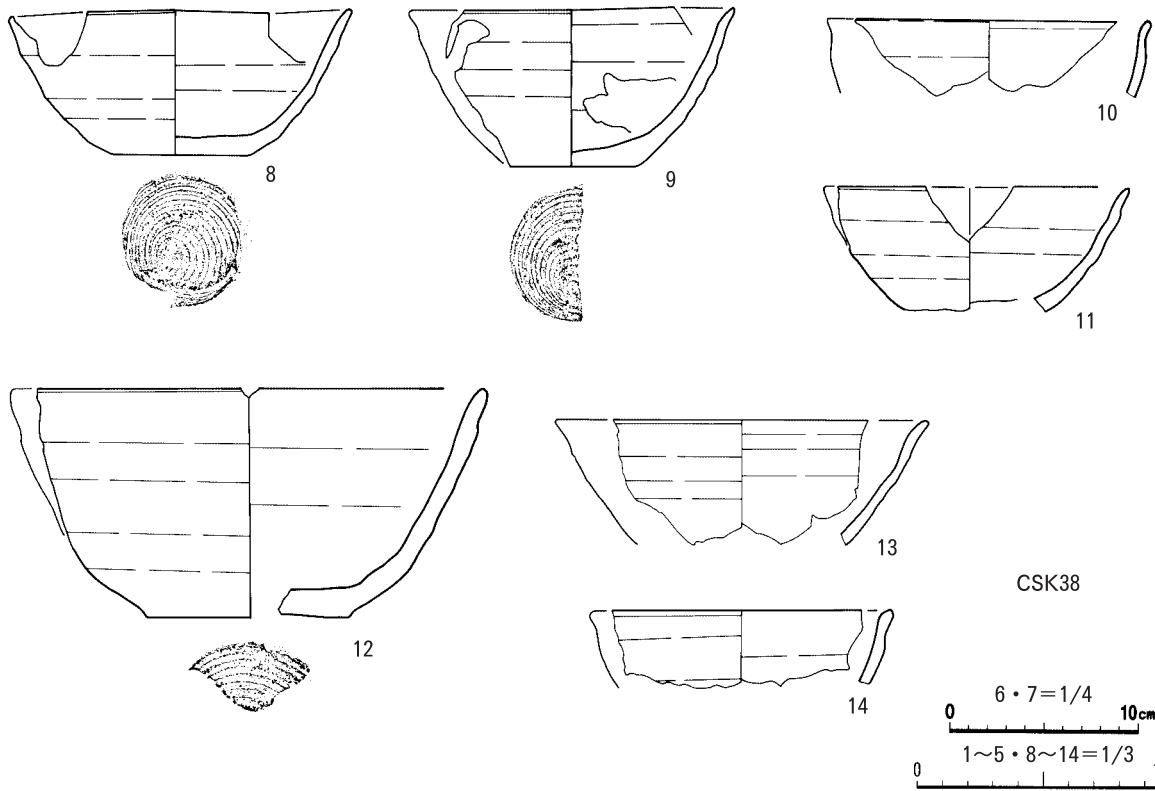
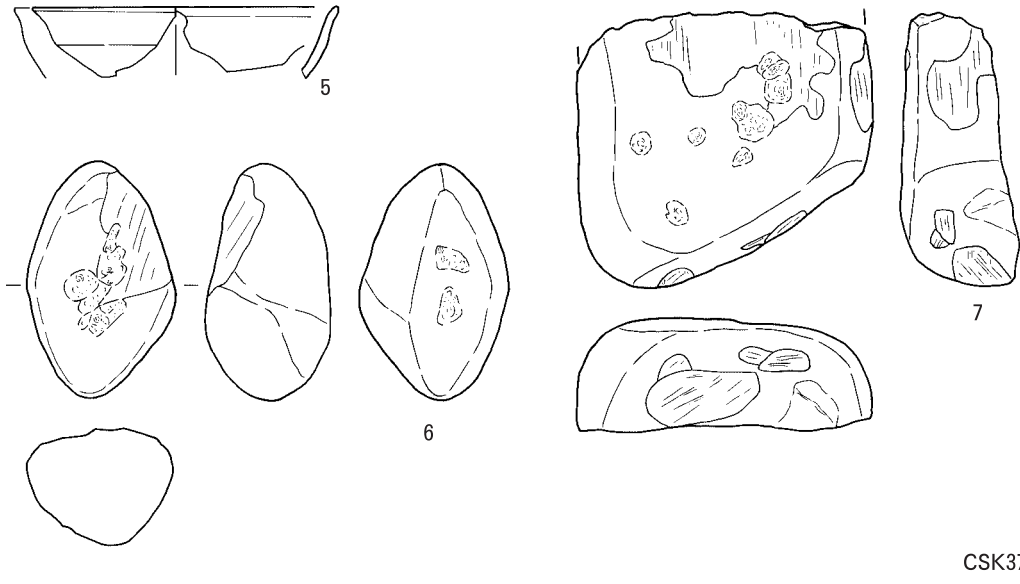
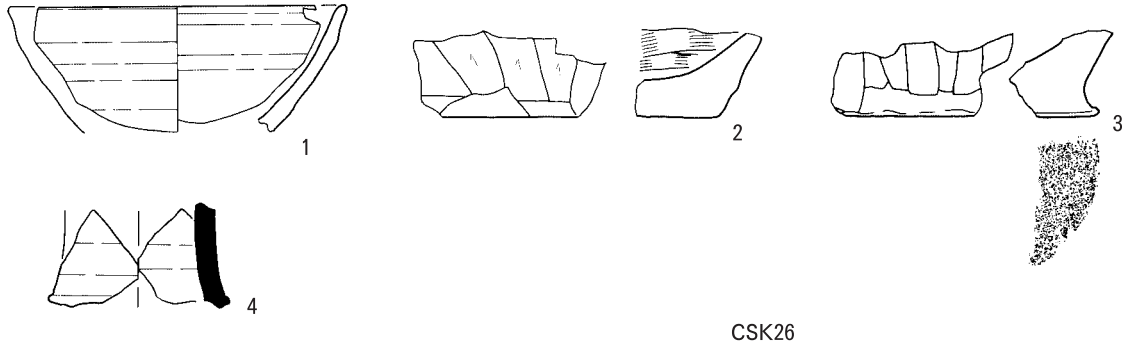


図31 C区平安時代土坑出土遺物

CSK38

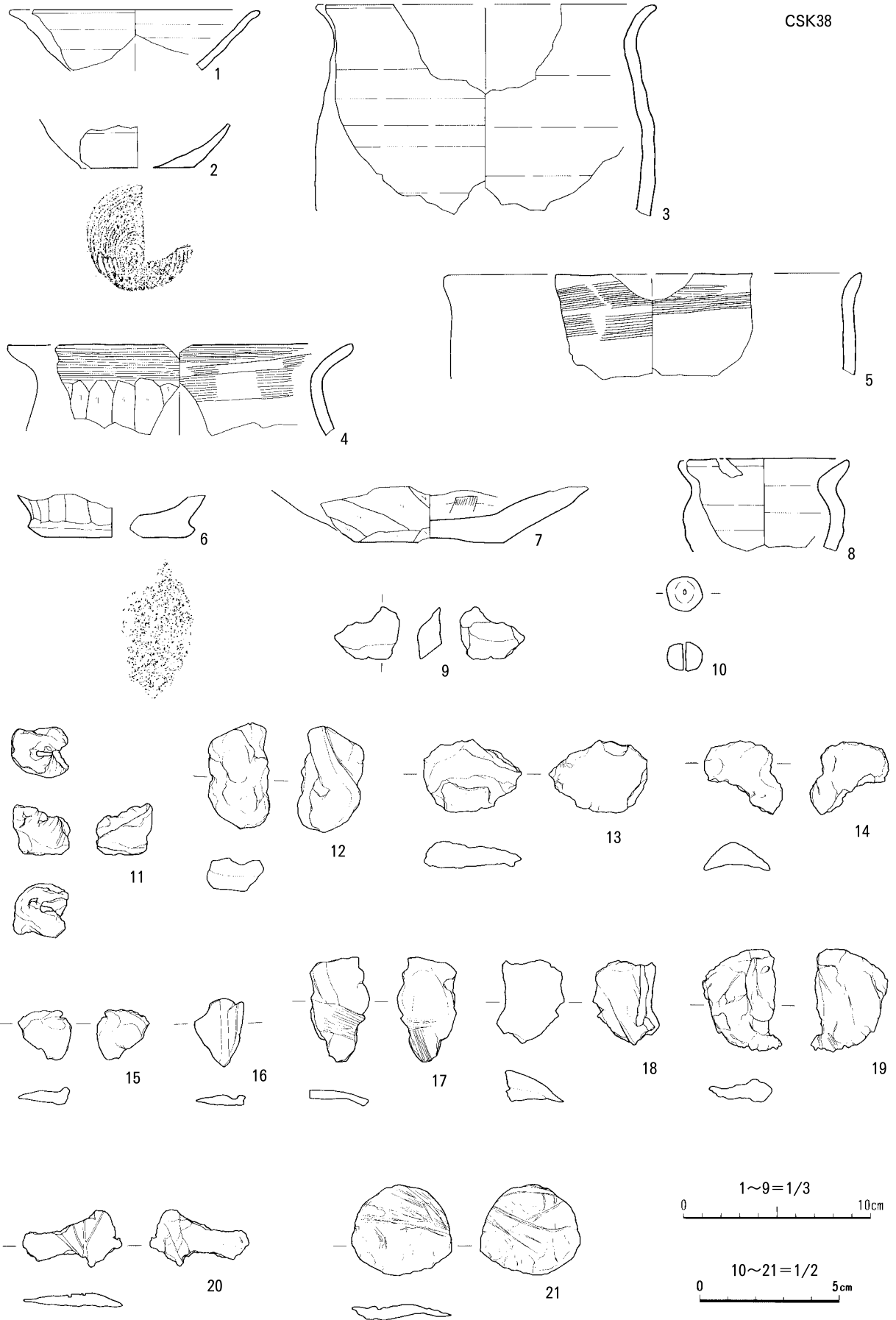


图32 C区平安時代土坑出土遺物

4 溝跡

第C1号溝跡 (図33・34)

[位置・確認] F C ~ P - 245 ~ 251に跨る。F C - 245 ~ F N - 246まで東西に走り、ほぼ直角に曲がって、F N - 250まで南北へ走る。F P - 251まで南東へ走り、谷へ注ぐ。標高約18mで谷に向かって南東にゆるやかに傾斜する斜面上に位置する。第 層で確認した。

[重複] 第C5号竪穴住居外周溝、第C3号竪穴住居外周溝、第C26号土坑と重複し、本溝跡が最も新しい。

[規模・形状] 検出長は61.3m、幅は0.5 ~ 1 mで深さ25 ~ 50cmである。

[堆積土] 第 層に相当する黒色土ないし黒褐色土を主体とする。火山灰を含むところもある。

[壁・底面] 壁は底面から開口部に向かって緩やかに広がる。

[出土遺物] 堆積土中から土師器甕・坏片や須恵器壺片が出土している。

[時期] 出土遺物より古代以降と考えられる。

[その他] 古代以降の区画溝である可能性が高い。

第C9号溝跡 (図33・34)

[位置・確認] F K ~ M - 265 ~ 267、標高約21mの微高地上に位置する。第 層で確認した。

[重複] 第C10号竪穴住居跡外周溝と重複し、本溝跡が最も新しい。

[規模・形状] 検出長は10.7m、幅は0.24 ~ 0.5mで、深さ20 ~ 60cmである。南東に向かってコの字に広がる。

[堆積土] 堆積土は第 層に相当する黒色又は黒褐色土である。

[壁・底面] 底面から開口部に向かって緩やかに広がる。

[出土遺物] 土師器坏などが出土した。

[その他] 溝の平面形状およびCSI10と重複することから、古代の竪穴住居跡に伴う外周溝の可能性が高い。

[時期] 外周溝の可能性があり、時期的には古代の可能性がある。

第C10号溝跡 (図33)

[位置・確認] 標高約21mの微高地上のF L・M - 266・267に位置する。第 層で確認した。

[重複] 第C9号溝跡と重複し、本溝跡が古い。

[規模・形状] 検出長は6.7m、幅は0.20 ~ 0.7mで、深さ18cmである。

[堆積土] 堆積土は第 層に相当する黒褐色土の自然堆積土である。

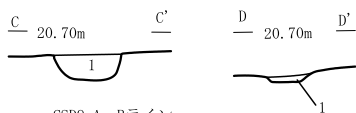
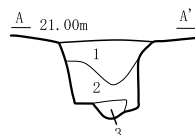
[壁・底面] 壁は東側が底面から開口部に向かって緩やかに広がる。

[出土遺物] なし。

[時期] 遺物は出土しなかったが、遺構の重複関係から古代以前のものと判断される。 (伊藤)

近野遺跡

CSD9



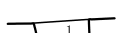
CSD9 A・Bライン
 第1層 10YR3/2 黒褐色土
 第2層 10YR7/6 明黄褐色土
 第3層 10YR2/1 黒色土
 ローム粒5%

Cライン
 第1層 10YR3/1 黒褐色土

Dライン
 第1層 10YR2/1 黒色土

CSD10

E 20.50m E'

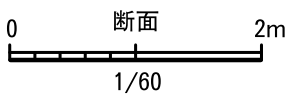


CSD10 Eライン
 第1層 10YR1.7/1 ローム小粒10%

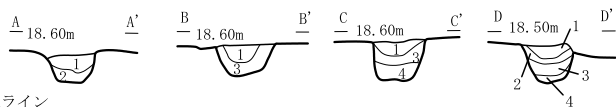
F 20.50m F'



CSD10 Fライン
 第1層 埋土



CSD10



CSD1 Aライン
 第1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒3%、焼土中粒2%
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 ローム中塊20%、焼土粒3%

Bライン
 第1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒2%、焼土粒3%
 第3層 10YR3/1 黒褐色土 ローム中塊5%、焼土中粒3%

Cライン
 第1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒2%、焼土粒3%
 第3層 10YR3/1 黒褐色土 ローム中塊3%、焼土粒2%
 第4層 10YR2/1 黒色土 ローム中塊5%、焼土粒2%

Dライン
 第1層 10YR1.7/1 黒色土 ローム粒2%、焼土粒3%
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 ローム中粒3%、焼土粒2%
 第3層 10YR2/1 黒色土 ローム中塊5%、焼土粒2%
 第4層 10YR3/1 黒褐色土 ローム中粒5%、焼土粒2%



Eライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム大塊5%・小粒3%、炭化物小粒1% (水分を含んだやわらかい土)

Fライン
 第1層 10YR2/1 黒色土 ローム中塊1%・小粒5%、炭化物小粒2% (水分を含んだやわらかい土)

Gライン
 第1層 10YR1.7/1 黒色土 To-a火山灰5%、ローム小粒7%、パミス小粒7%

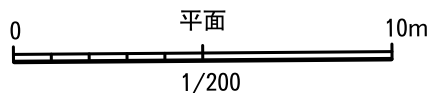


図33 C区溝跡 (平安時代)

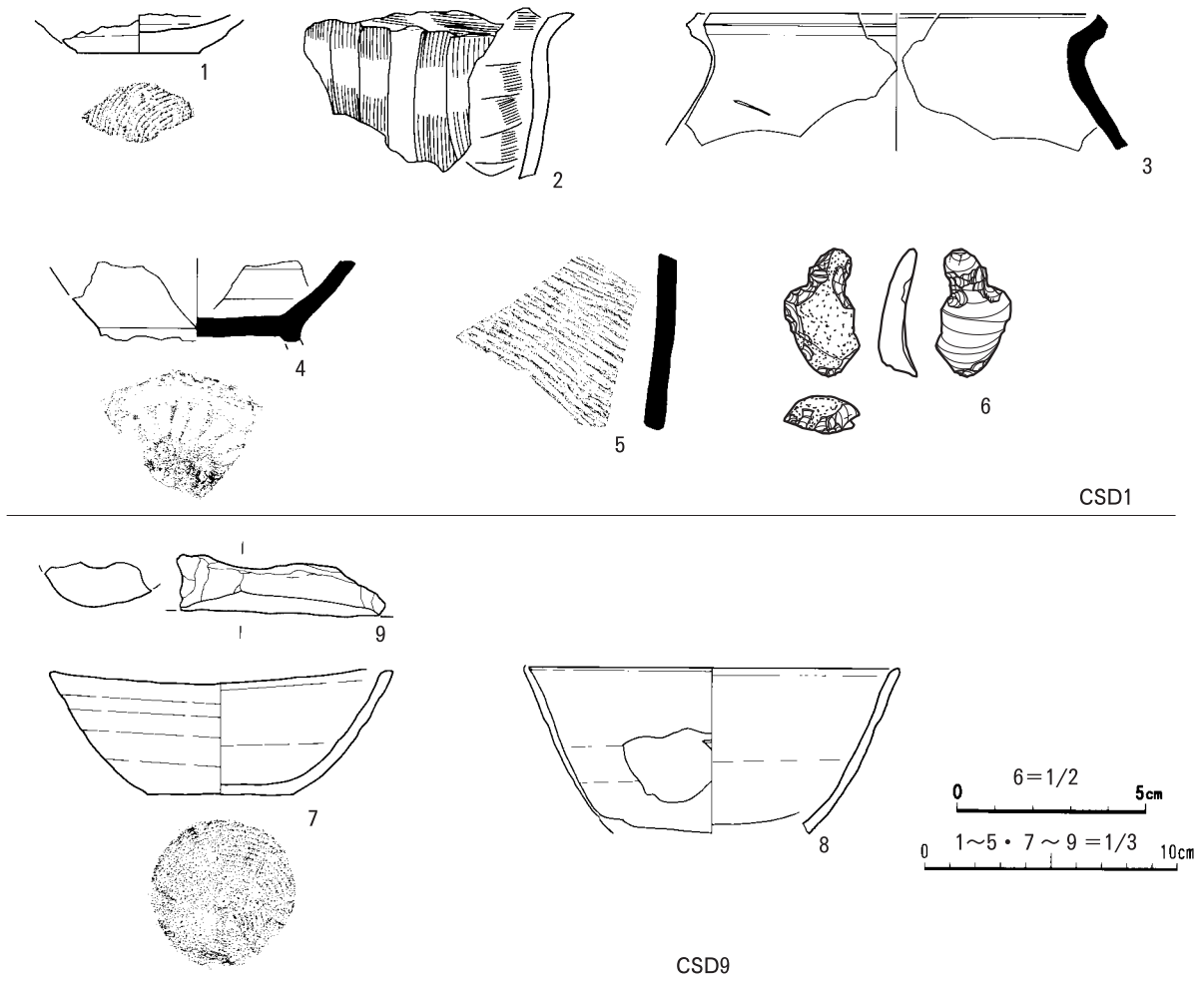


図34 C区平安時代溝跡出土遺物

第3節 時期不明の検出遺構と遺物

第1・2節の土坑の項の冒頭で触れたとおり、土坑の時期認定に当たっては、出土土器、遺構の重複関係などを判断基準とした。そのため、遺構が重複せず、遺物も出土しない土坑は、時期の判断ができないため、本項に含まれている。本来、縄文時代・平安時代の項に含まれるべき土坑もここで扱っている可能性もあることをお断りしておきたい。なお、土坑の計測値は巻末に一覧表を掲載している。

1 土坑

第C1号土坑 (図35)

楕円形の土坑で、堆積土は2層に分層した。第1層は第 層に相当する黒褐色土主体、第2層は第 層に相当する。自然堆積土と思われる。壁は底面から開口部に向かって緩やかに広がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

第C2号土坑 (図35)

堆積土は第 層に相当する黒褐色土主体である。壁は底面から開口部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

第C3号土坑 (図35)

長方形の土坑である。堆積土は2層に分層した。いずれも第 層に相当する黒褐色土主体の自然堆積土である。2層中から底面にかけて多量の炭と炭化材を検出した。炭化材は棒状のものが多く、底面の壁際は被熱したところもある。壁は底面から開口部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

第C4号土坑 (図35)

堆積土は9層に分層した。第1～7層は第 層に相当する黒褐色土を主体とする。第8層は 層の崩落土である。第9層は 層に相当する。壁は底面から開口部に向かって緩やかに広がり、擂鉢状を呈する。底面は丸く窪む。遺物は出土しなかった。

第C8号土坑 (図35)

ほぼ円形の土坑である。堆積土は2層に分層した。第1層は第 層に相当する黒褐色土主体、第2層は 層相当の黄褐色土主体である。壁は底面から開口部に向かって緩やかに広がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

第C9号土坑 (図36)

楕円形の土坑で、堆積土は3層に分層した。いずれも第 層に相当する黒褐色土主体で自然堆積土であると思われる。壁は底面から開口部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

第C10号土坑 (図36)

楕円形の土坑で、堆積土は5層に分層した。第1～3層は第層相当の黒褐色土主体である。第4・5層は第層の崩落土である。壁は底面から開口部に向かって緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

第C13号土坑 (図36)

堆積土は第層に由来した黒褐色土主体である。壁は底面から開口部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

第C17号土坑 (図36)

ほぼ円形の土坑で、堆積土は第層に相当する黒褐色土主体の自然堆積土である。壁は開口部に向かって緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は地文のみの縄文土器片がわずかに出土した。

しかし、細片であり、時期決定の根拠にはならない。 (伊藤)

第C18号土坑 (図36)

楕円形の土坑で、堆積土は2層に分層した。第層に相当する黒褐色土主体である。壁は開口部に向かって緩やかに広がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

第C19号土坑 (図36)

ほぼ円形の土坑で、堆積土は2層に分層した。いずれも第層由来の暗褐色土を主体とする。壁は底面から開口部に向かって緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

第C21号土坑 (図36)

堆積土は4層に分層した。第1～3層は第層に相当する黒褐色土主体である。第4層は第層の壁の崩落土である。壁は底面から開口部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

第C22号土坑 (図36)

円形の土坑で、堆積土は3層に分層した。第1層は第層に相当する黒褐色土主体、第2・3層は第層に相当する黄褐色土主体である。壁は底面から開口部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

第C23号土坑 (図36)

堆積土は第層に相当する黒褐色土主体の自然堆積土である。壁は底面から開口部に向かって緩やかに広がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

第C24号土坑 (図36)

楕円形の土坑で、堆積土は2層に分層した。いずれも第 層相当の黒褐色土を主体とする自然堆積土である。壁は底面から開口部に向かって緩やかに広がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。(伊藤)

第C25号土坑 (図37・38)

削平が著しく、底面付近がわずかに検出されたものである。出土遺物は確認面付近で多く、底面からはやや上位の堆積土中に含まれている。掘り方は底面付近でやや内傾している。覆土から縄文時代後期の土器が出土しているが、堆積土の特徴から古代以降に帰属するものと考えられる。

第C27号土坑 (図37・38)

第C25号土坑と同様、総合運動公園造成時の削平が著しく、わずかに残った底面付近が検出されたものである。堆積土の特徴から古代以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第C29号土坑 (図37)

堆積土は第 層に相当する黒褐色土を主体とする。壁は底面から開口部に向かって緩やかに広がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

第C30号土坑 (図37)

楕円形の土坑で、堆積土は第 層相当の黒褐色土主体である。壁は底面から開口部に向かって緩やかに広がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。(伊藤)

第C34号土坑 (図37)

楕円形の土坑で、堆積土は2層に分層した。第2層はローム主体である。自然堆積の可能性が高いものと思われる。壁はやや外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

第C35号土坑 (図37)

隅丸長方形の浅い土坑である。堆積土は黒褐色土を主体とし、ローム粒や炭化物が含まれる。また、十和田a火山灰も混入する。壁は東半ではほぼ垂直に、西半はやや外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ垂直である。遺物は出土しなかった。

第C36号土坑 (図37)

堆積土は黒褐色土を主体とし、ローム粒や炭化物が含まれる。壁は長軸壁ではほぼ垂直に、短軸壁はそれよりやや緩く立ち上がる。底面はほぼ垂直である。遺物は出土しなかった。

第C39号土坑 (図37)

不整な隅丸方形の土坑で、堆積土は4層に分層した。第2層は炭化材が主体をなし、焼土も含まれ

る。上半は人為堆積的であるが、下半は判断できない。壁は全体にほぼ垂直に立ち上がる。底面は緩い凹凸がある。遺物は出土しなかった。

第C40号土坑 (図37)

堆積土は黒褐色土を主体とし、炭化物、焼土粒などが混入する。自然堆積か人為堆積か判断できない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凹凸が見られる。遺物は出土しなかった。

第C41号土坑 (図38)

不整楕円形の土坑で、堆積土は4層に分層した。第2層はロームブロックが多量に混入し、以下の層にもロームが混入することから、第2層以下は人為堆積と考えられる。壁は緩く外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

第C42号土坑 (図38)

CSK38よりも新しい、ほぼ円形の土坑である堆積土は10層に分層した。全体に炭化物が多く、第4・7層は炭化物が卓越する。第6～10層は褐灰色土が主体となり、ローム・炭化物が混入する。全体的に人為堆積の可能性が高い。壁は緩く外傾して立ち上がる。底面南側は深さ10cmほどで段差がつく。また、底面中央から東寄りし、炭化したクルミなど、炭化物がまとまって出土した。

第C43号土坑 (図38)

南西側約半分が攪乱により破壊されている。堆積土は分層できなかった。壁は緩く外傾して立ち、底面は平坦である。堆積土中から土師器坏の小破片が出土したが、時期決定の資料にはできない。

第C44号土坑 (図38)

屈曲した楕円形で、堆積土は4層に分層した。全体に黒～暗褐色土を主体とし、ローム粒や焼土粒が混入する。第2層は灰白色粘土が主体である。人為堆積の可能性が高い。壁は外傾して立ち上がる。底面にはやや凹凸が見られる。堆積土中から土師器坏の小破片と縄文時代中期の土器小片が出土したが、時期決定の資料にはできない。
(小笠原)

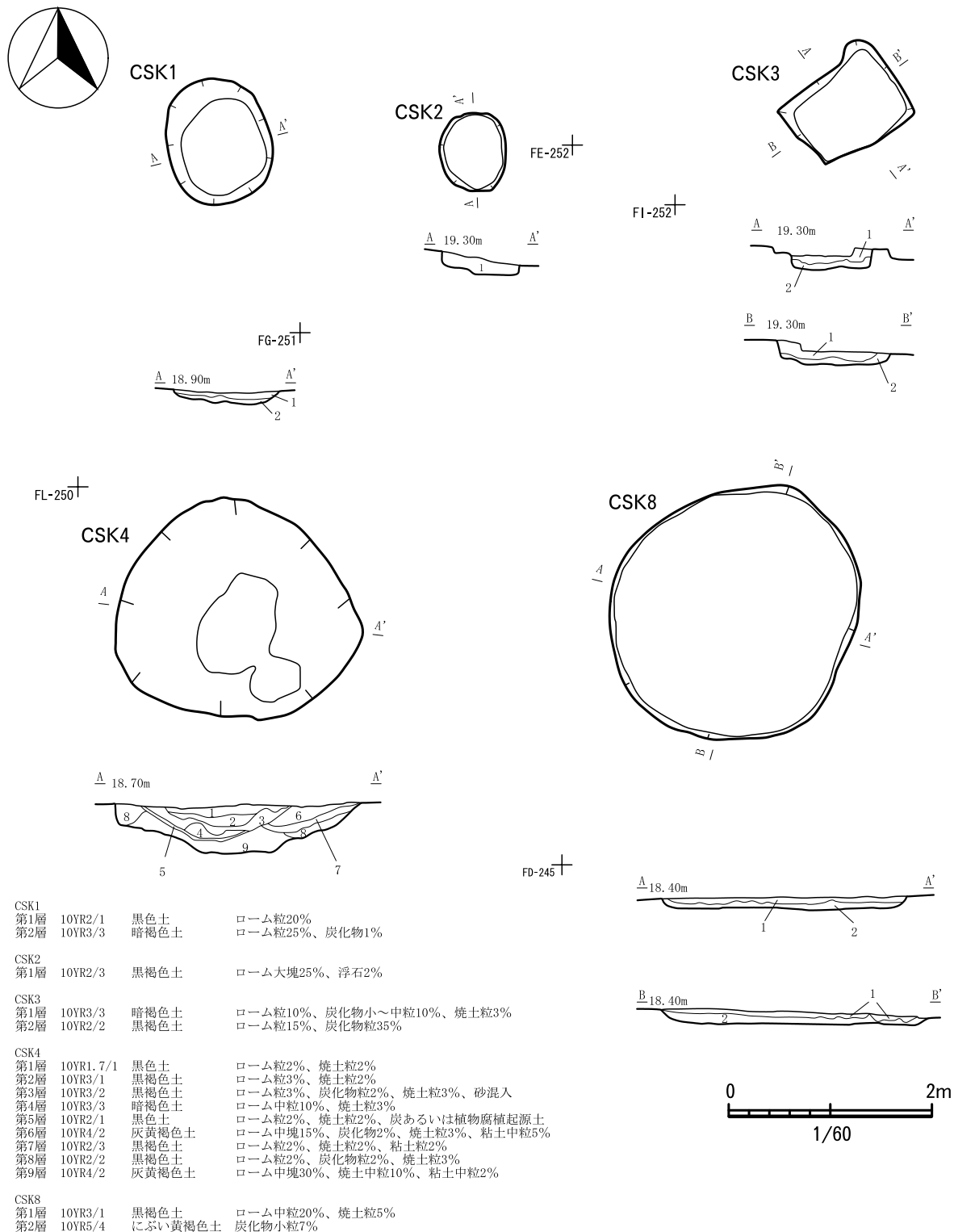


図35 C区土坑（時期不明）

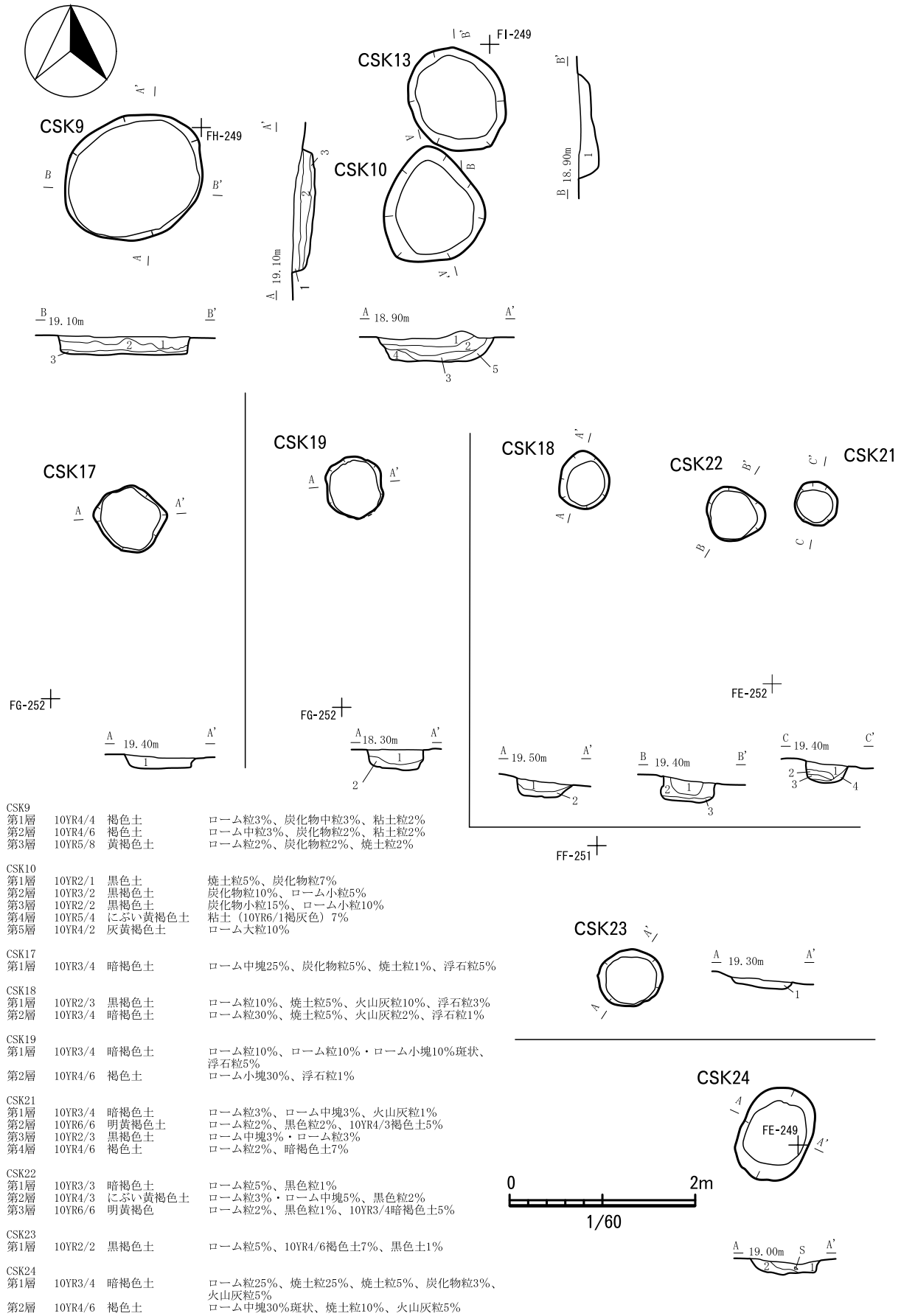


図36 C区土坑（時期不明）

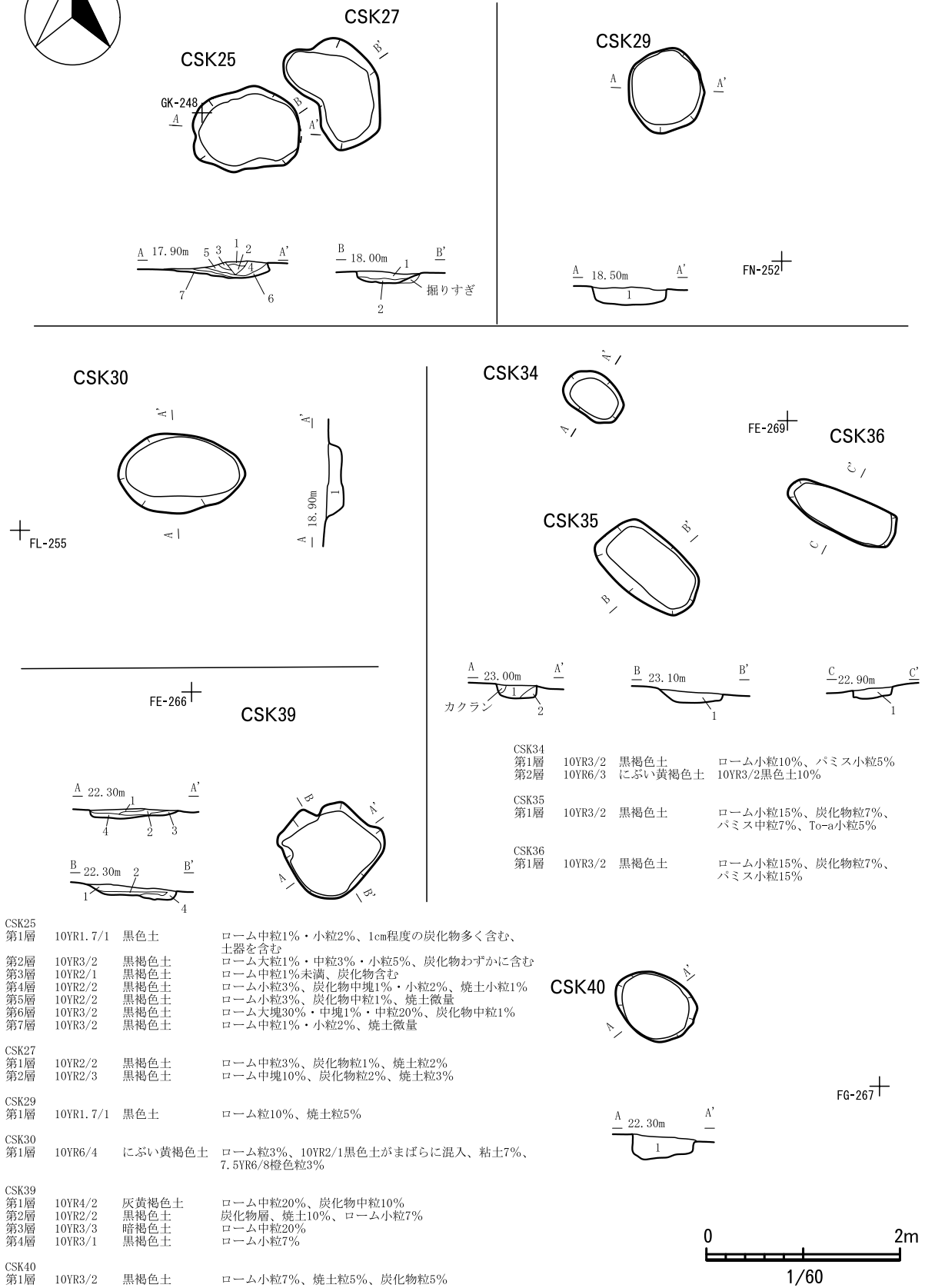
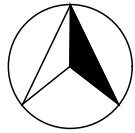


図37 C区土坑（時期不明）

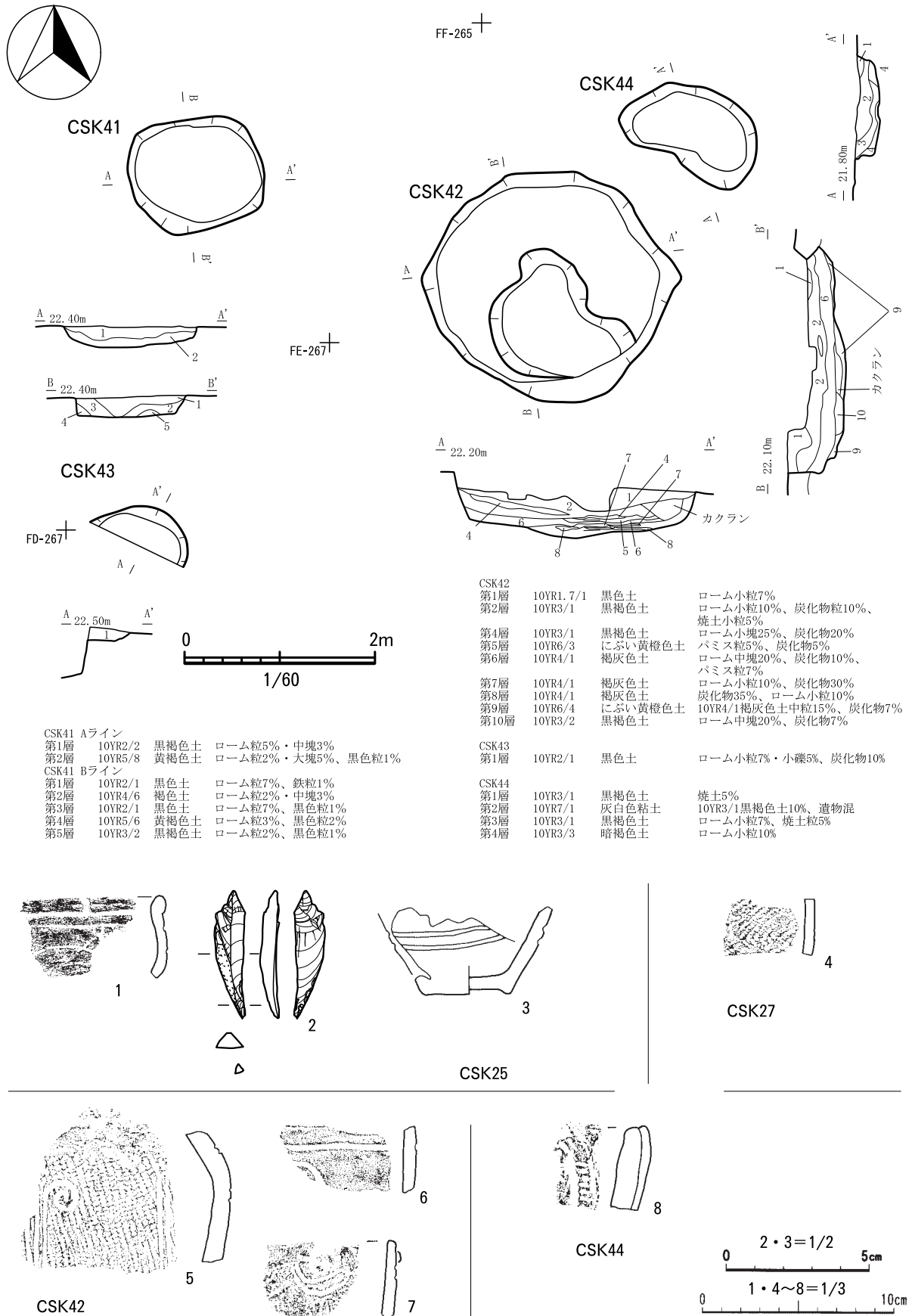


図38 C区土坑(時期不明)・出土遺物

2 溝跡

第C2号溝跡 (図39)

[位置・確認] F D ~ F - 252・253に位置し、標高約19mの平坦面上に立地する。第 層で北東から南西に伸びる落ち込みを確認した。北東側は削平されている。

[規模・形状] 残存する検出長は3.70m、幅は0.5mで深さ20cmである。

[堆積土] 2層に分層した。第1・2層は第 層に相当する黒褐色土主体である。

[壁・底面] 底面から開口部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土しなかったため、時期は不明である。

第C3号溝跡 (図39)

[位置・確認] F G ~ I - 254・255に位置し、標高約18mの斜面上に立地する。第 層で北東から南西に伸びる落ち込みを確認した。

[規模・形状] 検出長は5.9m、残存する幅は約0.9mで、深さ80～90cmである。

[堆積土] 3層に分層した。第1・2層は第 層相当の黒褐色土主体とする。第3層は壁の崩落土である。

[壁・底面] 壁は東側が底面から開口部に向かって緩やかに広がる。西側の壁は垂直に立ち上がる崩落によるものと考えられる。

[施設] 北西側に径34cmのピットを検出した。

[出土遺物・時期] 遺物は出土しなかったため、時期は不明である。 (伊藤)

第C11号溝跡 (図39)

[位置・確認] F P ・ Q - 260～262に位置する。第 層上面で確認した。

[平面形・規模] 平面形は弧状で、南北方向から東西方向へ屈曲する。溝跡の幅は部分によって大きく異なり、最大幅は130cmであるが、65cm幅ぐらいの部分が多い。

[壁・底面] 壁は底面から緩やかに立ち上がる部分が多く、底面はやや凹凸が見られる。

[堆積土] いずれも黒褐色土を主体とし、ロームが粒状・塊状で混入する。

[出土遺物・時期] 土師器・須恵器片が少量出土したが、時期決定の根拠とはならない。

第C12号溝跡 (図39)

[位置・確認] F N - 260に位置する。第 層上面で確認した。

[平面形・規模] 平面形は直線状で、北東方向から南西方向へ延びる。溝跡の幅は60cmほどで、南西端では40cmと狭くなる。

[壁・底面] 壁は底面から緩やかに立ち上がる部分が多く、底面はやや凹凸が見られる。

[堆積土] いずれも黒褐色土を主体とし、ロームが粒状・塊状で混入する。

[時期] 緩やかに立ち上がる部分が多く、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 黒褐色土を主体とする。自然堆積と考えられる。

[出土遺物・時期] 図示しないが、堆積土中から明治期のすり絵技法による染付碗が出土した。遺構の時期は、近世以降と考えられるが、明確な時期は不明である。

第C14号溝跡 (図39)

[位置・確認] FN - 256に位置する。第 層上面で確認した。

[重複] ただし、北側が攪乱により壊されている。

[平面形・規模] 平面形は直線状で、南北方向に延びる。溝跡の幅は80～137cmと差があり、南端で楕円形状に膨らむ。

[壁・底面] 壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる部分が多い。底面はやや凹凸が見られる。

[堆積土] いずれも黒褐色土を主体とし、ロームが粒状・塊状で混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物・時期] 図示しないが、土師器の小片が極少量出土した。しかし、時期決定の根拠とはならない。(小笠原)

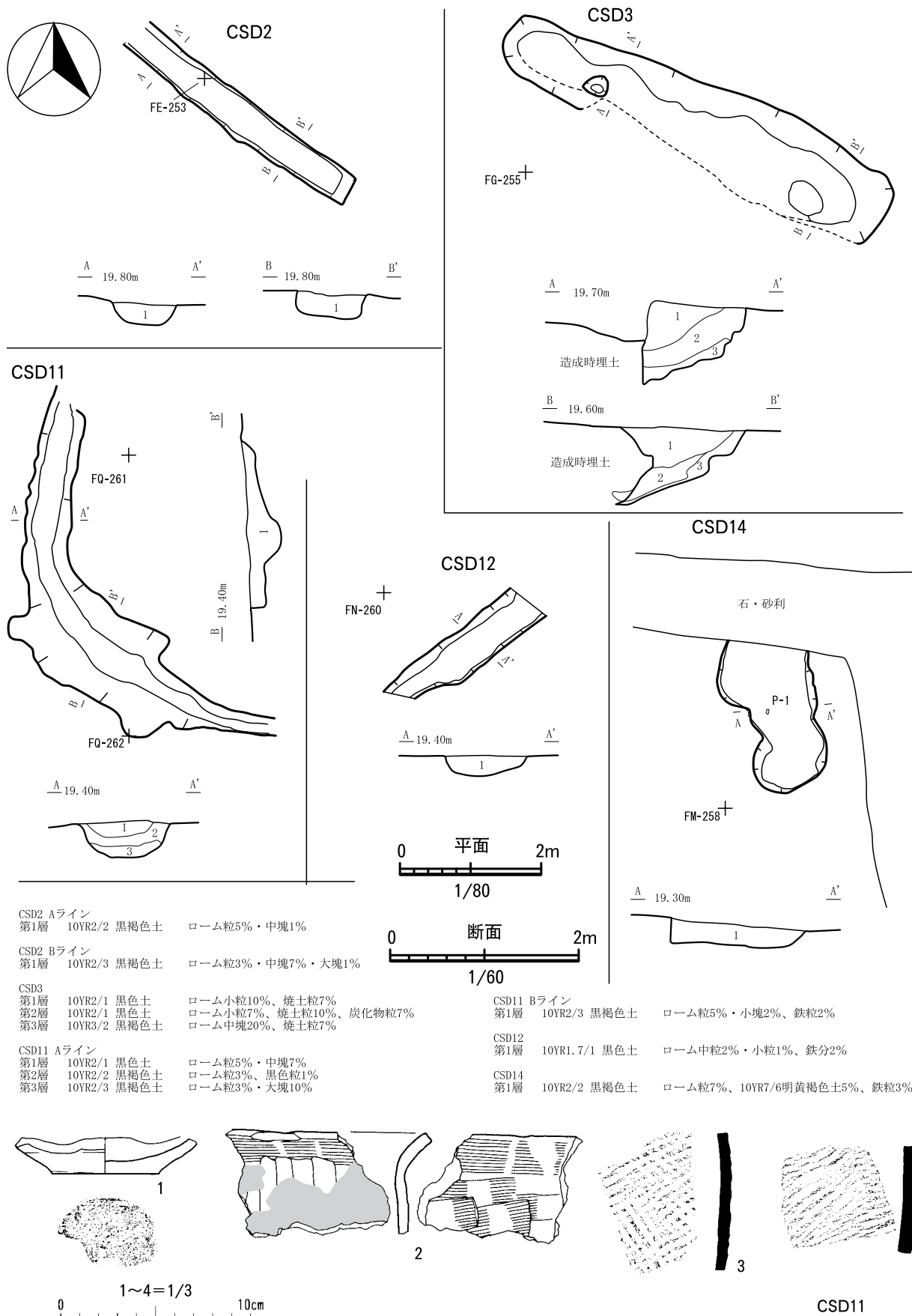


図39 C区溝跡（時期不明）・出土遺物

3 性格不明遺構

第C1号性格不明遺構(図40・43)

[位置・確認] 標高約18mのFR～GB-248・249に位置し、第～層で検出した。

[重複] 検出時には円形および方形のプラン3箇所以外に明確なプランを確認することができなかったが、土層観察ベルト、掘方の形状から複雑な切り合い関係を有する土坑状の単位が複数確認されている。

[平面形・規模] 東西方向11.5m、南北方向7mの範囲に広がる。南側は総合運動公園造成時の掘削により消失しており、北側についても遺構の上部が大規模に削平された状態である。

[壁・底面] 旧地表面から白色粘土層までは直下に掘りこみ、白色粘土層の下位にある砂質粘土層あるいは泥炭質粘土層に達すると横方向に掘方が広がる。壁面は底面近くで横方向の広がりをみせ、場所によっては掘方の間隔が非常に狭く、移植で堆積土を掘り出すこともままならない状態であった。底面の大半は基本層序の白色粘土層前後にあるが、千曳浮石層、ないしは白色粘土層の下位にある砂質粘土層に達する箇所もみられた。

[その他] 横方向の掘方は白色粘土層の上位にあるピンク色のローム層で開始し、白色粘土層下位にある砂質粘土層、泥炭層の直上で最大になる。断層および崩落の痕跡が確認されている部分では、白色粘土層の欠落する傾向がみられる(写真6)。堆積土の特徴、掘方の形状から白色粘土層を意図的に選択し、掘削・採取した結果、断層や崩落が引き起こされたものと考えられ、砂質粘土層、泥炭層は用途に適さないものとして採取対象から除外されたことが推測される。

[堆積土] 自然堆積層と人為堆積層が互層をなし、粘土層および千曳浮石層の崩落土が多量に含まれる。小土坑が複雑に切り合う様相を呈しており、時間差を置いて掘削された土坑の集合体と考えられる。人の手が入らないほど鋭角に堆積土が入り込んでいる箇所については粘土の採取によって生じた空隙が自重によって崩落している可能性が考えられる。

[出土遺物] 堆積土中から土師器甕や須恵器坏片が出土した。

[時期] 遺物の主体は土師器・須恵器であるが、縄文時代後期の土器も一部に含まれる。覆土の堆積状態が複雑であるため、遺構を構成する土坑全ての帰属年代は様にならない可能性があるが、大部分は古代以降に帰属するものと判断される。

第C3号性格不明遺構(図41)

[位置・確認] 標高約17.8mのGB-248に位置し、第～層で検出した。

[重複] 第C1号性格不明遺構に隣接し、堆積土の特徴にも共通点が多くみられ、同一遺構の可能性も考えられる。

[平面形・規模] 東西に2.6m、南北に2.3mほどの規模で、平面形は不整形である。

[壁・底面] 底面の凹凸が顕著で第C1号性格不明遺構同様、小土坑が重複しているものと判断される。

[堆積土] ローム粒と粘土粒が多量に含まれており、人為堆積層と考えられる。

[出土遺物] 図示しないが、底面直上から縄文時代後期の土器の小片が出土した。

[時期] 底面付近より縄文時代後期の小片が出土しているが、堆積土の特徴は第C1号性格不明遺構

に似る。帰属年代については古代以降の可能性が高い。

第C 4号性格不明遺構 (図41・43)

[位置・確認] 標高約17.8mのG B - 249に位置し、第 〃 層で検出した。

[重複] 第C 1号性格不明遺構に隣接し、堆積土、掘方の形状から、同一遺構の可能性も考えられる。

[平面形・規模] 東西に1.6m、南北に1.8mほどの大きさで平面形は不整形である。

[壁・底面] 底面は白色粘土層まで達しており、壁面の一部が袋状に広がる。

[堆積土] 土坑状の断面が確認できることから、本遺構は小土坑の重複によって形成されたものと判断される。ローム粒、粘土粒がブロック状に含まれており、人為堆積層と考えられる。

[出土遺物] なし。

[時期] 堆積土の特徴が第C 1号性格不明遺構に近似することから古代以降に帰属する可能性が考えられる。

第C 5号性格不明遺構 (図41)

[位置・確認] 標高約17.8mのG A・G B - 248・247に位置し、第 〃 層で検出した。

[重複] 第C 1号性格不明遺構に隣接し、掘方の形状等に共通点がみられる。周辺の性格不明遺構同様、第C 1号性格不明遺構と同一遺構の可能性もある。

[平面形・規模] 東西に1.6m、南北に1.7mほどの大きさで平面形は不整形である。

[壁・底面] 底面は白色粘土層に達しており、底面の凹凸は顕著である。

[堆積土] ローム、粘土粒を含み、人為堆積層と考えられる。

[出土遺物] なし。

[時期] 堆積土の特徴から古代以降に帰属する可能性が考えられる。

第C 7号性格不明遺構 (図41)

[位置・確認] 標高約17.8mのG C - 249に位置し、第 〃 層で検出した。

[平面形・規模] 東西1.2m、南北1mで、南側は削平を受けており、全体の形状については不明である。

[壁・底面] 底面は平坦で、白色粘土の下位にある砂質粘土層の層理面より下位には掘り下げられていない。粘土層では袋状に掘方が広がる。

[堆積土] 白色粘土ブロック、黒色土、千曳浮石層ブロックが斑状に含まれており、人為堆積層と考えられる。

[出土遺物] なし。

[時期] 堆積土の特徴から古代以降に帰属する可能性が考えられる。

第C 11号性格不明遺構 (図41)

[位置・確認] 標高約17.8mのF T - 247に位置し、第 〃 層で検出した。

[平面形・規模] 長軸90m、短軸40mの不整楕円形を呈する。

[壁・床面] わずかに凹凸がみられる。

[堆積土] 粘土および黒色土が斑状に混ざり、人為堆積層と考えられる。

[出土遺物] なし。

[時期] 堆積土の特徴から古代以降に帰属する可能性が考えられる。

(斉藤)

4 ピット (図42・43)

C区でピットとしたものは26個である。おおまかにみると、FE～I-270～272、FK～FM-258～261、FL-255、GL-253付近で検出されている。PIT1とPIT8は単独で検出された。それぞれのまとまりの中では散在しており、掘立柱建物跡や杭列など何らかの組み合わせを構成するものはない。掘方の形状は円ないし楕円形がほとんどで、上端径は20～80cmと幅があるが、40cm前後のものが多い。遺構確認面からの深さは12～48cmである。

約1/3のピットから遺物が出土している。土師器の小片が出土しているものが多く、それらの遺物が積極的に各ピットの時期を反映しているものとは言い難いが、一つの参考にはなるだろう。PIT1・8からは図化可能な土師器甕や坏片が、PIT59からは台石が出土している。

なお、各ピットの計測値を以下にまとめた。

C区PIT計測表

番号	グリッド	規模		深さ	出土遺物	図版	
		平面形	検出面				
1	FH-250	楕円	40×20	26	土師器坏、甕の口縁部片	42	
8	GJ-247	不整円	44×40	36	土師器坏、甕の胴部小片		
12	GJ-249	不整円	20×16	-	縄文中期後半の土器片、土師器甕の小片		
25	FM-250	円	44×44	16	なし		
26	FM-250	円	56×52	18	なし		
27	FN-250	楕円	52×44	20	なし		
30	FN-252	楕円	68×44	48	なし		
31	FN-253	楕円	46×40	36	なし		
32	FN-253	円	40×40	22	なし		
33	FL-255	円	40×32	12	なし		
34	FL-255	円	36×32	16	なし		
36	GN-249	不整円	28×24	28	土師器甕の胴部小片、須恵器坏の小片		
39	GM-248	円	28×26	38	なし		
42	FD-268	楕円	32×28	14	なし		
45	FI-256	楕円	80×60	36	なし		
46	FJ-265・266	不整円	40×36	16	土師器甕の胴部小片		
48	FH-267	円	36×36	12	なし		
51	FH-267	不整楕円	56×36	14	土師器坏の底部小片		
52	FE-266	円	32×28	30	土師器甕の胴部小片		
53	FE-266	不整楕円	30×28	24	なし		
58	FF-265	円	44×40	-	なし		
59	FF-265	不整円	80×64	-	なし		
75	FF・FG-265	楕円	84×50	-	なし		
76	FF-265	不整円	56×46	-	なし		
77	FF-265	不整楕円	64×42	32	縄文時代の沈線文土器小片		
78	GM-246	不整楕円	20×16	16	なし		22

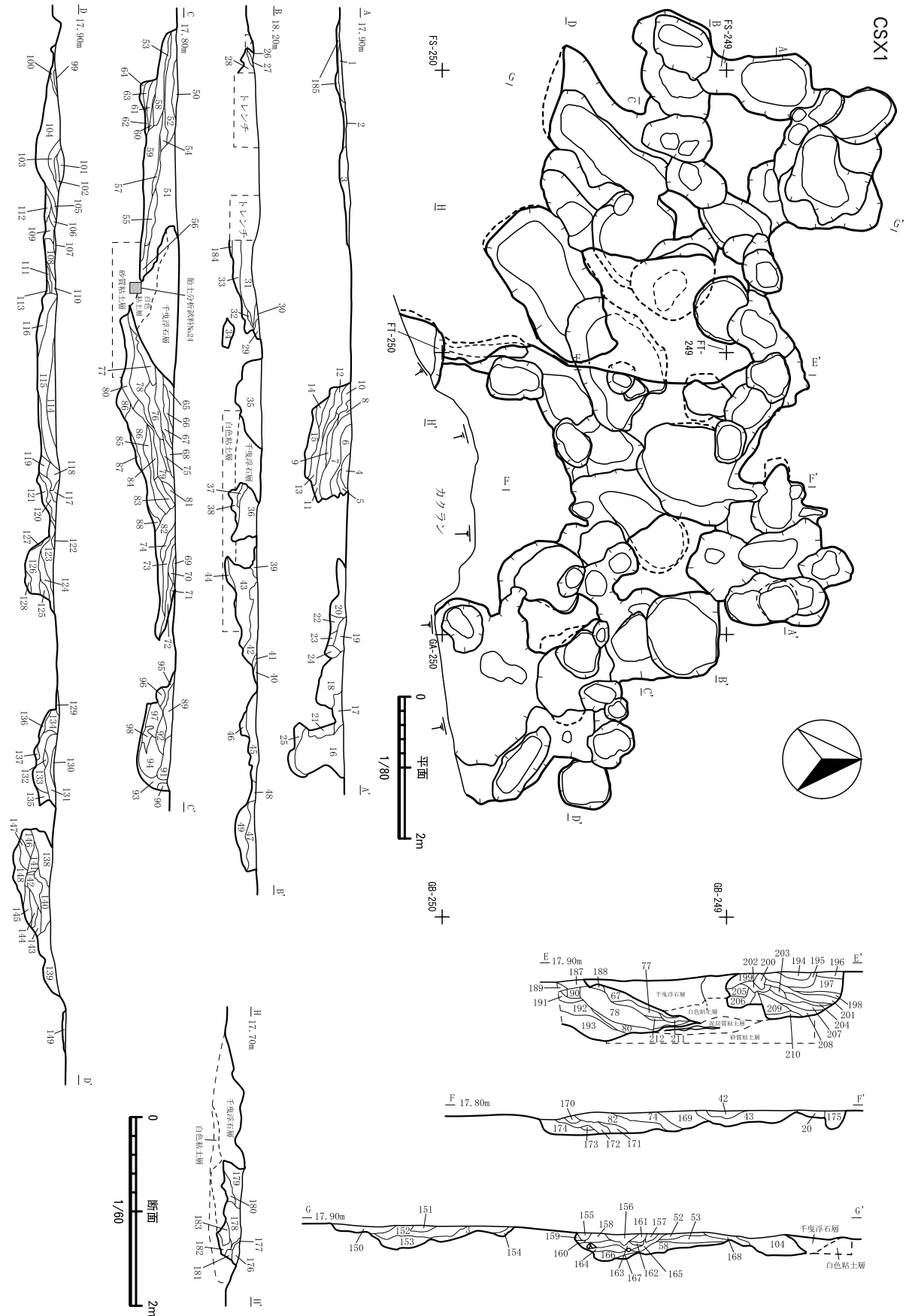


図40 第C 1号性格不明遺構

近野遺跡

第158層	10YR2/3 黒褐色土	10YR2/1黒色土20%、ローム中粒5%、褐鉄鉱5% 10YR5/6黄褐色土15%、10YR6/2灰黄褐色粘土10%、ローム小粒2%、褐鉄鉱3%	第184層	10YR4/6 褐色土	ローム中粒3%、炭化物粒3%、褐鉄鉱2%、粘土中粒5% 白色粘土中塊40%・中粒2%、ローム中塊10%・中粒5%・小粒7%、褐鉄鉱微量、黒色土5%斑状
第159層	10YR2/3 黒褐色土	10YR5/6黄褐色土15%、10YR6/2灰黄褐色粘土10%、ローム小粒2%	第185層	10YR5/4 にぶい黄褐色土	ローム中粒2%、褐鉄鉱2%、10YR5/6黄褐色土5%
第160層	10YR6/8 明黄褐色ブロック 10YR1.7/1 黒色土	10YR4/6褐色土15%、10YR5/6黄褐色粘土5%、ローム中粒3%、褐鉄鉱2%	第186層	2.5YR7/2 灰黄色粘土	ローム中粒2%、褐鉄鉱2%
第162層	10YR6/2 灰黄褐色粘土	10YR4/6褐色土粘土10%、10YR2/1黒色土5%、ローム中粒2%、褐鉄鉱3%	第187層	2.5YR7/2 灰黄色粘土	ローム中粒5%、炭化物粒2%、褐鉄鉱中粒2%、粘土中粒2%
第163層	10YR2/3 黒褐色土	10YR5/6黄褐色土5%、10YR6/2灰黄褐色粘土5%、ローム中粒10%、褐鉄鉱5%	第188層	10YR4/6 褐色土主体	ローム中粒2%、炭化物粒2%、褐鉄鉱粒1%
第164層	10YR1.7/1 黒色土	10YR2/3黒褐色土10%、10YR6/2灰黄褐色粘土5%、ローム中粒5%、褐鉄鉱2%	第189層	10YR2/1 褐色土主体	ローム中粒2%、炭化物粒2%、褐鉄鉱粒1%、粘土中粒3%
第165層	10YR1.7/1 黒色土	10YR4/6褐色土粘土5%、10YR6/2灰黄褐色粘土5%、ローム中塊2%・中粒2%、褐鉄鉱1%	第190層	10YR4/6 褐色土主体	ローム中粒10%、炭化物中粒3%、褐鉄鉱粒2%、粘土中塊10%
第166層	10YR6/2 灰黄褐色粘土	10YR5/6黄褐色土30%、7.5YR5/8明褐色粘土15%、10YR1.7/1黒色土10%、ローム中粒3%、褐鉄鉱2%	第191層	10YR6/8 明黄褐色土	ローム中粒15%、炭化物中粒3%、褐鉄鉱中粒5%、粘土大塊40%
第167層	10YR6/2 灰黄褐色粘土	10YR5/6黄褐色土40%、10YR1.7/1黒色土5%、ローム中粒3%、褐鉄鉱2%	第192層	10YR7/2 にぶい黄橙粘土	ローム1%、炭化物粒1%、粘土小塊10%
第168層	10YR8/1 灰白色粘土	10YR1.7/1黒色土30%、10YR1.7/1黒色土10%、ローム中粒5%、褐鉄鉱2%	第193層	10YR5/4 にぶい黄褐色土	10YR5/6黄褐色土20%斑状、ローム粒5%、炭化物中粒5%、褐鉄鉱粒2%、粘土中粒2%
第169層	10YR6/6 明黄褐色土	ローム中粒3%、炭化物中粒2%、褐鉄鉱粒1%、粘土粒1%	第194層	10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒10%、炭化物粒2%、褐鉄鉱粒2%、粘土中粒2%
第170層	10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒5%、炭化物中粒2%、褐鉄鉱粒2%、粘土中塊10%	第195層	10YR6/6 明黄褐色土	ローム中粒5%、炭化物粒3%、褐鉄鉱粒1%、粘土中粒3%
第171層	10YR2/3 黒褐色土	ローム中粒5%、炭化物中粒2%、褐鉄鉱中粒3%、粘土小塊20%	第196層	10YR6/8 明黄褐色土	ローム中粒3%、炭化物粒2%、褐鉄鉱中粒5%、粘土大粒5%
第172層	10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒10%、炭化物中粒2%、褐鉄鉱中粒3%、粘土小塊15%	第197層	10YR5/6 黄褐色土	ローム中粒5%、炭化物粒3%、褐鉄鉱粒1%、粘土中粒3%
第173層	10YR2/3 黒褐色土	10YR6/4にぶい黄褐色粘土15%、ローム粒5%、炭化物粒1%、褐鉄鉱粒2%	第198層	10YR6/8 明黄褐色土	10YR7/1灰白色粘土30%、10YR2/1黒色土大粒5%、ローム中粒5%
第174層	10YR5/8 黄褐色土	ローム中粒20%、炭化物粒2%、褐鉄鉱粒3%、粘土大粒15%斑状	第199層	10YR6/6 明黄褐色土	ローム粒2%、炭化物中粒3%、褐鉄鉱粒3%、粘土中粒2%
第175層	10YR7/6 明黄褐色土	10YR7/1灰白色粘土20%、黒色土中粒2%・小粒3%、褐鉄鉱5%	第200層	10YR7/6 明黄褐色土	ローム中粒2%、炭化物粒3%、褐鉄鉱粒3%、粘土中塊10%、10YR6/6明黄褐色土15%
第176層	10YR6/3 暗褐色土	ローム中粒5%、炭化物粒1%、褐鉄鉱粒3%、粘土粒2%	第201層	10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒10%、炭化物中粒5%、褐鉄鉱粒3%、粘土中粒2%
第177層	10YR3/4 暗褐色土	ローム中粒5%、炭化物粒2%、褐鉄鉱粒1%	第202層	10YR1.7/1 黒色土	ローム中粒5%、炭化物粒3%、褐鉄鉱粒2%、粘土中塊5%
第178層	10YR3/2 黒褐色土	ローム中粒3%、炭化物粒3%、褐鉄鉱中粒3%、10YR5/6黄褐色土10%	第203層	10YR3/2 黒褐色土	ローム中粒2%、炭化物粒2%、褐鉄鉱粒5%、粘土大粒20%斑状
第179層	10YR5/6 黄褐色土	ローム中粒3%、炭化物粒1%、褐鉄鉱粒1%、粘土粒2%	第204層	10YR2/1 黒色土	10YR7/1灰白色粘土30%、10YR6/6明黄褐色土20%、ローム中粒5%・小粒5%
第180層	10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒5%、炭化物中粒2%、褐鉄鉱粒1%、10YR5/6黄褐色土15%	第205層	10YR2/1 黒色土	ローム中粒3%、炭化物粒2%、褐鉄鉱粒1%、粘土中粒2%、10YR5/6黄褐色土5%
第181層	2.5YR6/3 にぶい黄色粘土	ローム中粒3%、炭化物粒1%、褐鉄鉱中粒3%、粘土粒2%	第206層	10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒2%、炭化物粒2%、褐鉄鉱粒3%、粘土中塊30%
第182層	2.5YR6/2 灰黄色粘土	ローム中粒1%、褐鉄鉱粒2%	第207層	10YR6/3 にぶい黄橙粘土	ローム中粒5%、炭化物粒3%、褐鉄鉱粒3%、粘土中粒3%
第183層	10YR6/6 明黄褐色土	ローム中粒3%、炭化物粒2%、褐鉄鉱中粒5%、粘土小塊10%	第208層	10YR4/4 褐色土	ローム中粒3%、炭化物粒2%、褐鉄鉱中粒2%、粘土中塊5%、10YR2/1黒色土5%
			第209層	10YR6/6 明黄褐色土	ローム中粒5%、炭化物粒2%、褐鉄鉱粒3%、粘土中塊30%、10YR2/2黒褐色土10%
			第210層	10YR4/2 灰黄褐色土	ローム中粒2%、炭化物粒2%、褐鉄鉱粒3%、粘土中塊30%、10YR2/2黒褐色土10%
			第211層	10YR4/4 褐色土	ローム中粒2%、炭化物粒2%、褐鉄鉱粒1%
			第212層	10YR5/4 にぶい黄褐色土	ローム中粒1%、炭化物粒1%、粘土小塊10%

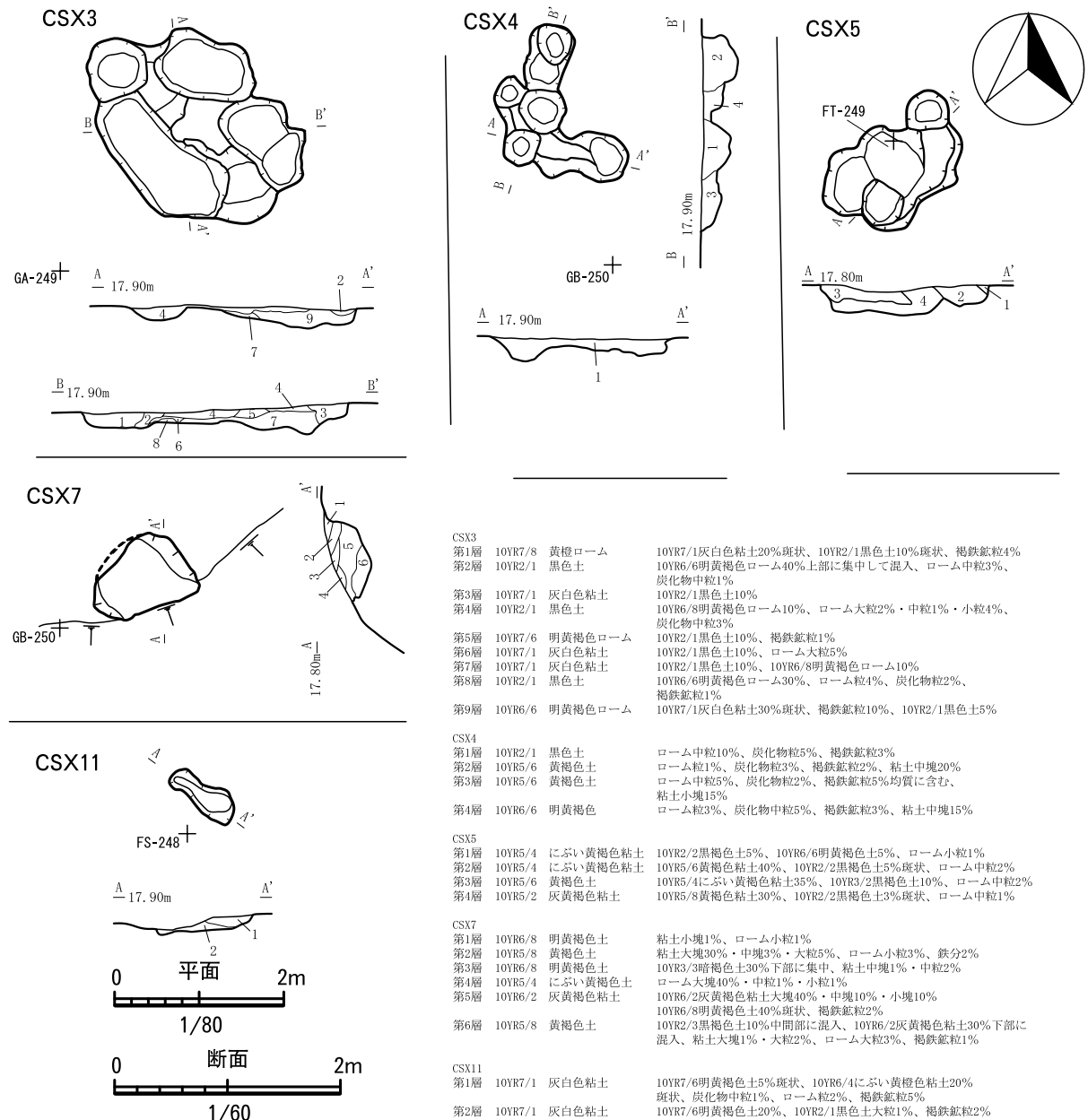
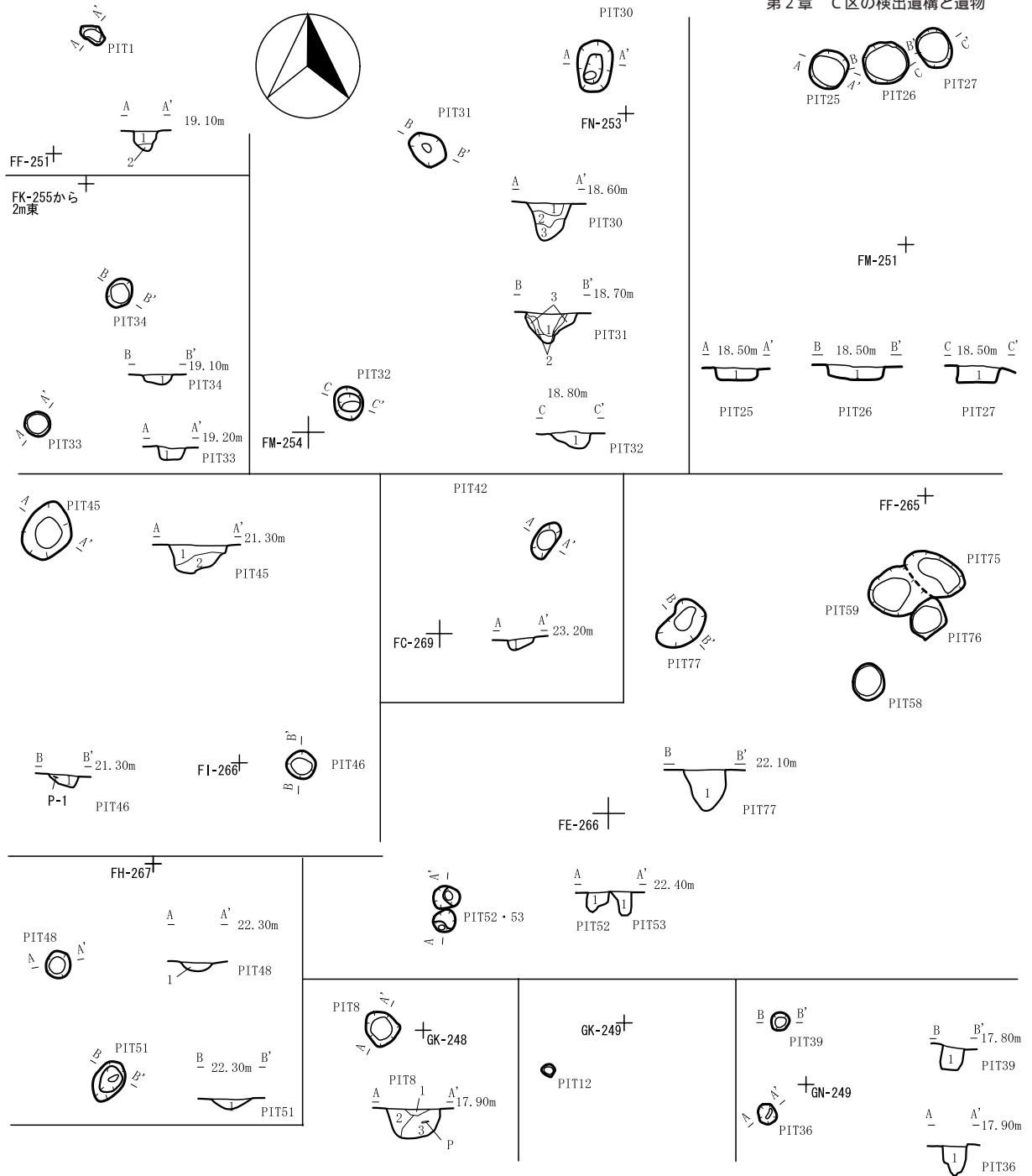
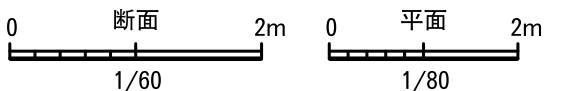


図41 第C3～11号性格不明遺構

第2章 C区の検出遺構と遺物



CPIT1	第1層 10YR2/3	黒褐色土	ローム粒20%、浮石粒1%
	第2層 10YR5/6	黄褐色土	焼土粒5%、ローム粒30%
CPIT8	第1層 10YR6/6	明黄褐色土	10YR2/2黒褐色土10%混入、ローム小粒3%、焼土小粒5%、炭化物小粒3%、粘土小塊1%
	第2層 7.5YR5/6	明褐色土	ローム小粒10%、粘土大粒2%、焼土中塊7%、焼土小粒5%
	第3層 7.5YR5/6	明褐色土	炭化物小塊1%、炭化物中粒3%、粘土小塊1%、焼土大塊10%・中粒10%、炭化物小塊5%・小粒1%、粘土中粒1%
CPIT25・26・27	第1層 10YR3/3	暗褐色土	ローム中粒3%・小粒1%、炭化物粒1%
CPIT30	第1層 10YR1.7/1	黒色土	ローム粒1%
	第2層 10YR3/1	黒褐色土	ローム中粒2%・小粒1%、炭化物粒1%
	第3層 10YR4/4	褐色土	ローム中粒1%・小粒1%
CPIT31	第1層 10YR3/1	黒褐色土	ローム粒3%、炭化物中塊1%・中粒1%・小粒1%、焼土粒1%
	第2層 10YR7/3	にぶい黄褐色土	ローム粒2%、炭化物中粒2%・小粒1%、焼土粒1%
	第3層 10YR6/6	明黄褐色土	ローム粒1%、炭化物大粒2%
CPIT32	第1層 10YR2/1	黒色土	ローム中粒1%・小粒3%、炭化物粒1%、焼土粒1%
CPIT33	第1層 10YR4/2	灰黄褐色土	ローム粒2%、10YR5/1褐灰色粘土5%
CPIT34	第1層 10YR2/1	黒色土	ローム粒3%、10YR5/2灰黄褐色粘土10%、赤色粒1%
CPIT36	第1層 10YR2/1	黒色土	ローム中粒3%・小粒2%、粘土中塊5%、焼土粒2%
CPIT39	第1層 10YR2/1	黒色土	ローム中粒1%・小粒2%、炭化物中粒2%、焼土粒1%



CPIT42	第1層 10YR2/1	黒色土	ローム小粒7%
CPIT45	第1層 10YR2/1	黒色土	ローム小粒10%、パミス小粒7%
	第2層 10YR3/2	黒褐色土	ローム小塊20%
CPIT46	第1層 10YR2/1	黒色土	ローム中粒15%、パミス小粒5%
CPIT47	第1層 10YR2/1	黒色土	ローム小塊10%、ローム小粒7%
CPIT48	第1層 10YR3/2	暗褐色土	ローム粒7%、ローム小塊1%、鉄粒1%
CPIT51	第1層 10YR2/3	黒褐色土	ローム粒3%、10YR2/1黒色粒2%
CPIT52	第1層 10YR2/1	黒色土	ローム小粒10%、炭化物7%
CPIT53	第1層 10YR2/1	黒色土	ローム小粒15%
CPIT77	第1層 10YR2/1	黒色土	ローム小粒10%、ローム小塊5%

図42 C区ピット

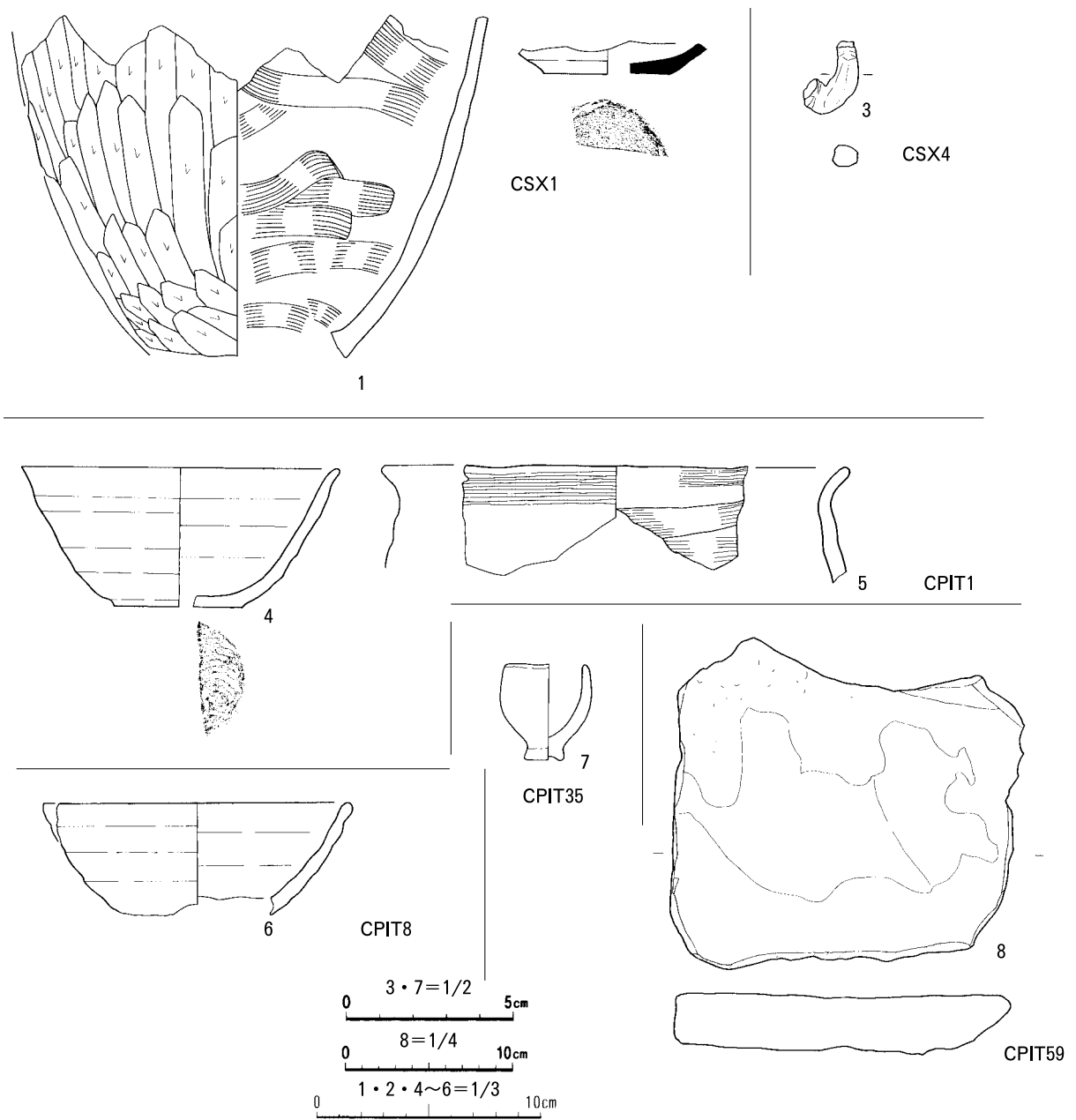


図43 C区性格不明遺構・ピット出土遺物

第4節 風倒木捨て場

[位置・確認] GL～N-248・249に位置する。総合運動公園造成時の盛土直下で大量の遺物が集中して出土した。

[平面形・規模] 遺物の集中する範囲は東西7.5m、南北5mにおよぶ。南側部分の黒色土層は黄褐色ロームブロックの周囲を環状にめぐり、倒木に伴う地山の隆起と、空隙への黒色土の流入が連鎖して生じた「風倒木痕」と考えられた。

[堆積土] 炭化物粒が多く含まれており、焼土あるいは酸化鉄に由来する赤色粒子も比較的多く含まれている。

[その他] 南東部には幅25cm、長さ1mの範囲で10世紀代に降下した灰白色火山灰が帯状にみられ、その下位に位置するロームブロックには直径約15cmのピット1個が検出されている。遺物が最も多く集中するのはGL・GM-249、GM-248であり、ロームブロックと地山の隙間に入る黒色土層から大量の遺物が出土した。遺物の分布範囲は第C33号土坑上部にまで及び、北側部分については、二次堆積の様相は捉えられない。

南側に位置する風倒木痕の周辺は、第～層が削平されている。大量に出土した土器の多くが個体復元可能な状態であることを重視すれば、風倒木痕の上位には縄文時代後期に形成された捨て場が存在していた可能性が高い。(斉藤)

[出土遺物]

土器…捨て場から出土した土器(図45～49)は、十腰内式土器で占められる。

器形は深鉢(2～7など)を主体とし、壺(1・9・11・12・22など)がある。他の器形は確認されていないが、他に浅鉢、皿などの器形によって構成されているものと思われる。深鉢は頸部が屈曲して括れ、口唇部が外反するものや、括れが弱く頸部がほぼ垂直に立ち上がるものがあるが、口径と胴上部の径はほぼ等しい。口唇部は平縁が多いが、緩い波状縁となるものもある。口唇部外面には指頭あるいは円形状の工具による押圧が加えられるもの(37・48・55)もある。

施文文様は、文様帯の上下に横位の沈線が巡り、その間に埋められる文様にいくつかのヴァリエーションがある。それらには、山形状文(2・8・9・11・51・56)、入組連結文(3・6・7・10・21・32・45)、渦巻文(1・30・37・43・48)、楕円文(4・31・40)などがある。これらは画一的・規則的なものではなく、上下の区画沈線間に横位沈線を加えることで多段化した山形文(51)、入組文(25)が施文されるものや、山形文と入組文が組み合わせられるもの(18)など、さらに多くの文様構成がある。山形文を曲線的にすれば入組文となり(例:10・35)、入組文の幅を狭めれば渦巻文となる(例37)など、漸移的な要素であることも伺うことができる。

また、無文の土器(13～16)は、図示したのは図化できた(復元できた)ものだけで、破片資料は掲載していない。正確な比率は出していないが、3～4割程度になろうかというほどで、全体に占める割合は多い。

図示したのは文様帯のある口縁部が中心であるが、胴部文様(地文)はほとんど施文されない。全面に縄文が施文されたもの(26・34)はあるものの、それ以外では地文はないものと判断してよいも

のと思われる。

施文方法は原則として沈線であるが、沈線間を櫛歯状工具による条線で埋めるもの(3・25・53・55)や、縄文を充填するもの(1・8・10・30・43・50)などがある。一般に沈線の幅は広く、先端が丸みを帯びた工具が使われている。しかし、中には極端に幅の狭いものが用いられているもの(6・22など)もある。

編年的位置づけとしては、葛西勵氏の言う十腰内 式第3段階、十腰内 式(新)(葛西1979、2002)、成田滋彦氏の言う十腰内 B式(成田1989)に相当するものであろう。児玉氏の編年観に当てはめれば、本資料は3本沈線手法も見られるものの、櫛歯状工具や縄文による文様帯間の充填手法から、5期(児玉2003)に当たるものと思われる。この型式の土器は各氏とも大きな違いはなく、概ね共通したとらえ方である。以上から、本資料も十腰内 式の新しい段階に相当し、昭和年代に行われた本遺跡の資料とも同時期のものと判断される。(小笠原)

剥片石器...103点出土した。定形石器は図化した5点(図50-1~5)のみで、剥片・碎片が98点と9割を占める。大石平型石筥が2点(1・2)あり、2は1に比べ、基部形状が不明瞭で、やや雑な作りである。3は背面片縁の一部に調整が施され、もう一方の側縁には連続した微小剥離痕が背面と腹面に認められる。4は石槍の未製品である。5は自然面のある剥片を素材とし、やや厚手の側縁側に調整を施して、やや角度のある刃部を作出している。

剥片類を重量で区分すると、1.0~4.9gが44点と最も多く、5.0~9.9gが24点、1.0g未満が15点、10~26.3gが15点と続く。石材は、玉髄質珪質頁岩4点を除き、全て珪質頁岩である。石材の様相から、珪質頁岩を3つに大別したが、接合したものはなかった。捨て場周辺のグリッドからも多量の剥片・碎片が出土しているが、石核が出土していないことから、石器製作後に使用しない剥片類を廃棄した場所とも考えられる。

礫石器...3点出土した。6の凹み石は凝灰岩の石皿の破片を転用したものである。断面形は掘り鉢状となり、表面の凹み痕は非常に明瞭である。他は、角閃岩の磨製石斧の破片、両面に磨り面のある凝灰岩の破片である。(杉野森)

人物線刻石冠について

石冠は、上記の捨て場から出土した。捨て場は確認段階から多数の石器や土器片等が出土し、その中に石冠も含まれていたことは認識したが、これまで遺物の水洗は行っておらず、線刻は確認していなかった。遺物の洗浄作業を行っていたところ、石冠に人物が線刻されていることが判明した。

石冠の平面形は横にやや長い長方形で、頂辺が斧の刃部状を呈し、断面形は三角形状である。幅7.4cm、高さ6.1cm、底部の厚さ4.1cmである。頂部の両面と底面に明瞭な磨痕がある。線刻は正面のみで、裏面及び側面には敲打痕が観察される。石質は砂岩である。

施される線刻は幅1mm~1.5mmほどである。人物は3体で、いずれも同様の手法で描かれている。頭部は小さな円形の窪みで表現され、その下には肩を表した横の直線、更にその両端を直角に曲げ、腕を表現している。先端には手を表した短い線が刻まれる。頭部下には直線で体部、その下に広げた脚部が刻まれている。脚部先端にも指を表した短線がある。3体のうち2体は上下に横たわった状態

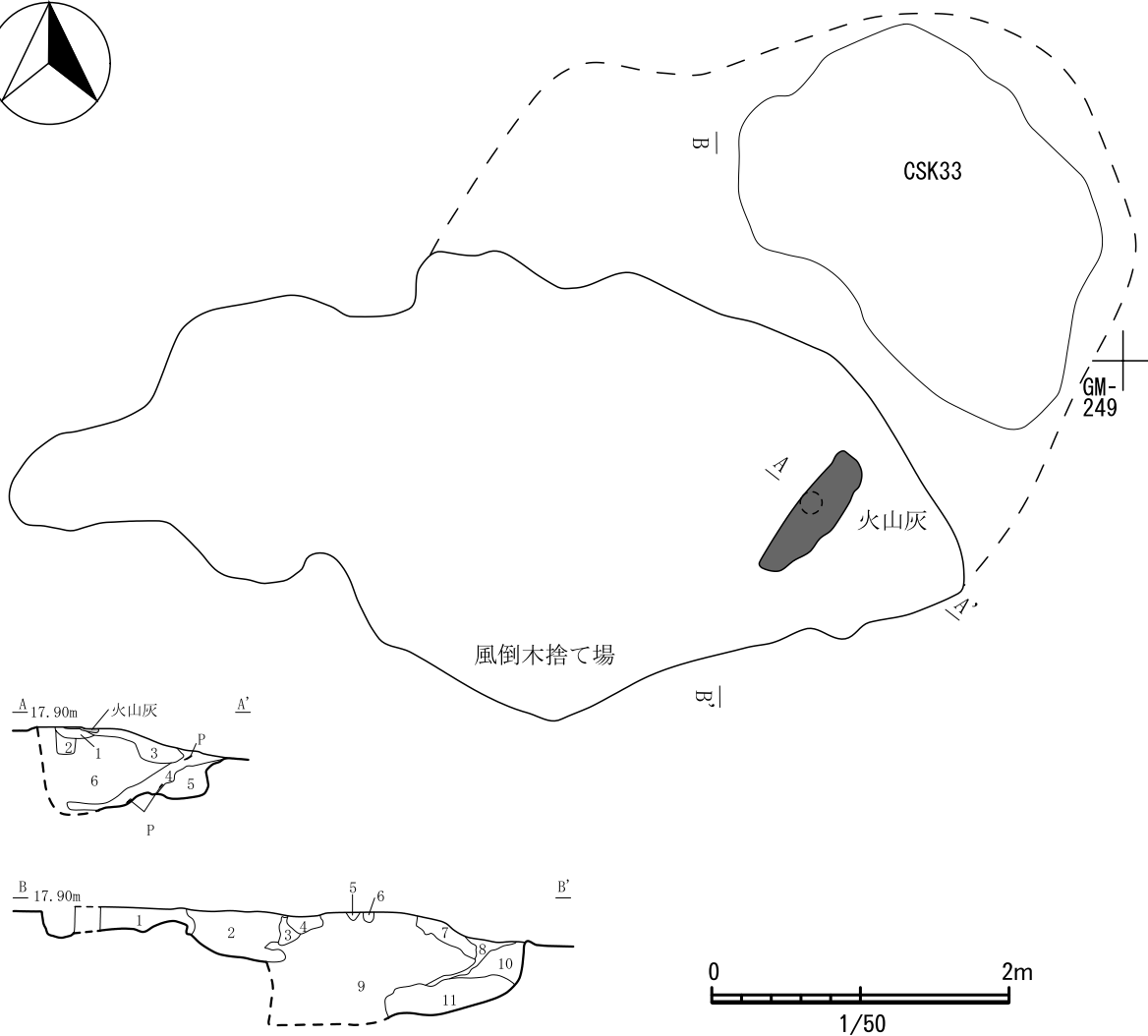
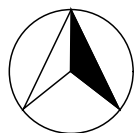
に並んで、もう1体は2体の頭部の位置に倒立状態で描かれている。

各人物の大きさは、横向きの2体のうち下が38mm、上が33mm、逆向きの1体が28mmである。横向きの2体は、下の1体の足指表現が極端に誇張されるため、差異が大きくなっている。胴部は下が17mm、上が14mm、逆向きが12mmである。広げた両足の幅は横向きの2体が10mm、逆向きが8mmである。肩幅なども加味して判断すると横向きの2体はほぼ同じ大きさで、逆向きの1体は小さく描かれていることがわかる。

細部では、表現方法に違いが見られる。横向きの2体のうち、下の1体は手の指が5本、上の1体の手の指は3本で表現される。肩の表現でも下の人物は水平に、上の人物は怒り肩状に上がる。足の指も手と同様の表現であるが、下のものは足指の先端が吸盤状に丸く作り出される。

これら3体は、精霊や神などの信仰的な対象を表現した可能性も否定できないが、根本的なモチーフの遡源は人物にあったことは間違いないであろう。横向きの2体の表現方法の違いは意識的なものであり、異なる2種類の人物を表したものと考えられる。機能や役割を異にする2種の人物、例えば男女の違いであるとか、実生活での一場面や信仰上の儀礼的職能分担の表現など様々に考えられる。石冠の用途については不明な点が多いが(中島1995、能登1983)、男女の性表現を表したものとすれば(春成1996)、性差を表した遺物であるように思える。また、明らかに小さく描かれている1体の存在から、男女(大人)と子供の家族である可能性を、ひとまず考えておきたい。家族を直接的に表している可能性もあるが、むしろ、授産や安産などを儀礼的・観念的にイメージ化したと考えておきたい。類する遺物である三角形土製品に人物と見られる文様の存在(草間・金子ほか1971、小島1995)や、手が描かれた石冠の存在(小林編 1988、春成前掲)など、何らかの関連が伺える資料がある。石冠の用途を示す手がかりとなるものかもしれない。

いずれにしても、本資料は絵画資料の少ない縄文時代にあって、帰属時期や人物という主題が明確で、しかも3体が1個の遺物に描かれているという、非常に希有で貴重な資料である。(小笠原)



C区風倒木捨て場 Aライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒1%、表面部分に火山灰含む。
第2層	10YR3/1	黒褐色土	ローム大塊20%・中粒1%・小粒1%、焼土粒1%
第3層	10YR3/1	黒褐色土	ローム中塊1%・大粒1%・中粒2%・小粒2%、炭化物中粒1%・小粒1%、焼土中粒1%、火山灰中塊10%
第4層	10YR1.7/1	黒色土	ローム大塊1%・小粒2%、炭化物大粒1%、焼土中粒1%
第5層	10YR3/1	黒褐色土	ローム粒2%、炭化物粒1%
第6層	10YR6/4	にぶい黄褐色粘土	黒色土10%、炭化物中粒1%・小粒1%

C区風倒木捨て場 Bライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒5%、炭化物粒1%、焼土粒3%
第2層	10YR1.7/1	黒色土	ローム中粒5%、炭化物粒2%、焼土粒3%
第3層	10YR3/3	暗褐色土	ローム中粒10%、炭化物粒1%、焼土粒3%
第4層	10YR2/1	黒色土	ローム中塊10%、炭化物粒2%、焼土粒3%
第5層	10YR1.7/1	黒色土	ローム粒2%、焼土粒1%
第6層	10YR2/1	黒色土	ローム粒3%、炭化物粒1%、焼土粒1%
第7層	10YR3/2	黒褐色土	ローム中粒15%、炭化物粒1%、焼土粒3%
第8層	10YR3/2	黒褐色土	ローム中粒10%、炭化物粒2%、焼土粒10%
第9層	10YR5/6	黄褐色土	ローム中粒5%、炭化物粒1%、焼土粒2%
第10層	10YR6/6	明黄褐色土	ローム粒5%、炭化物粒1%、焼土粒2%
第11層	10YR6/4	にぶい黄褐色粘土	ローム粒3%、焼土中粒5%、粘土層

図44 C区風倒木捨て場

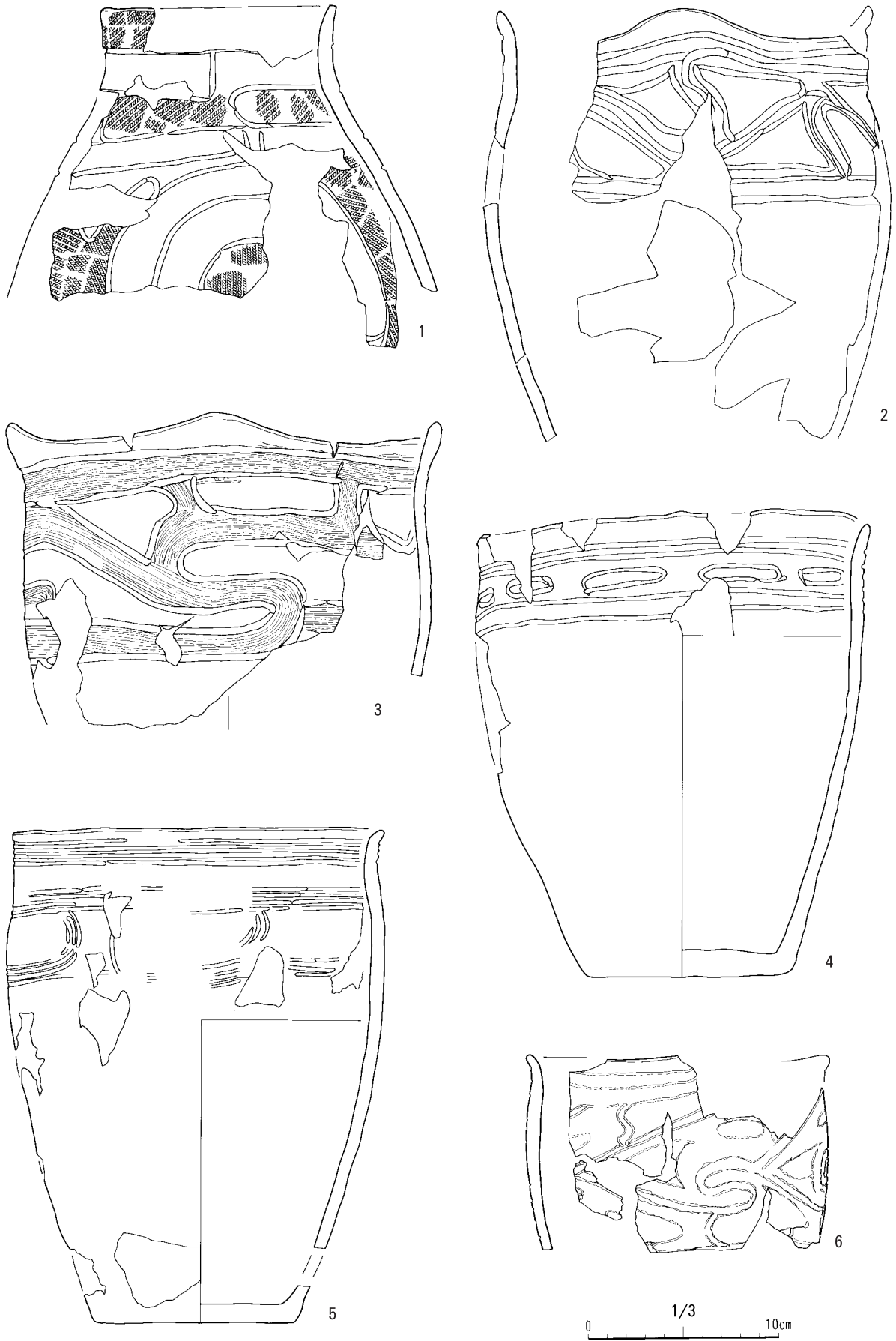


図45 C区風倒木捨て場出土土器

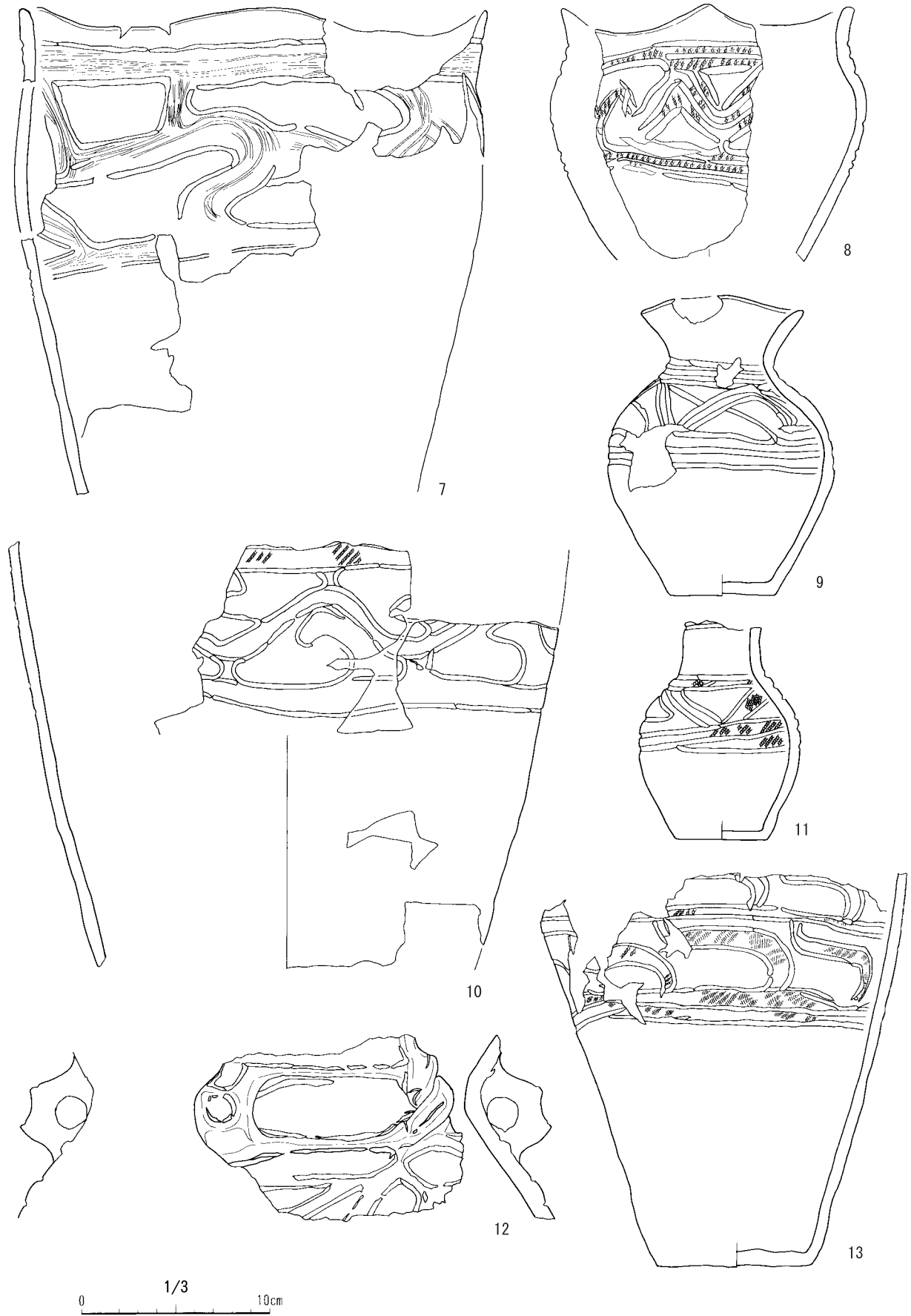


図46 C区風倒木捨て場出土土器

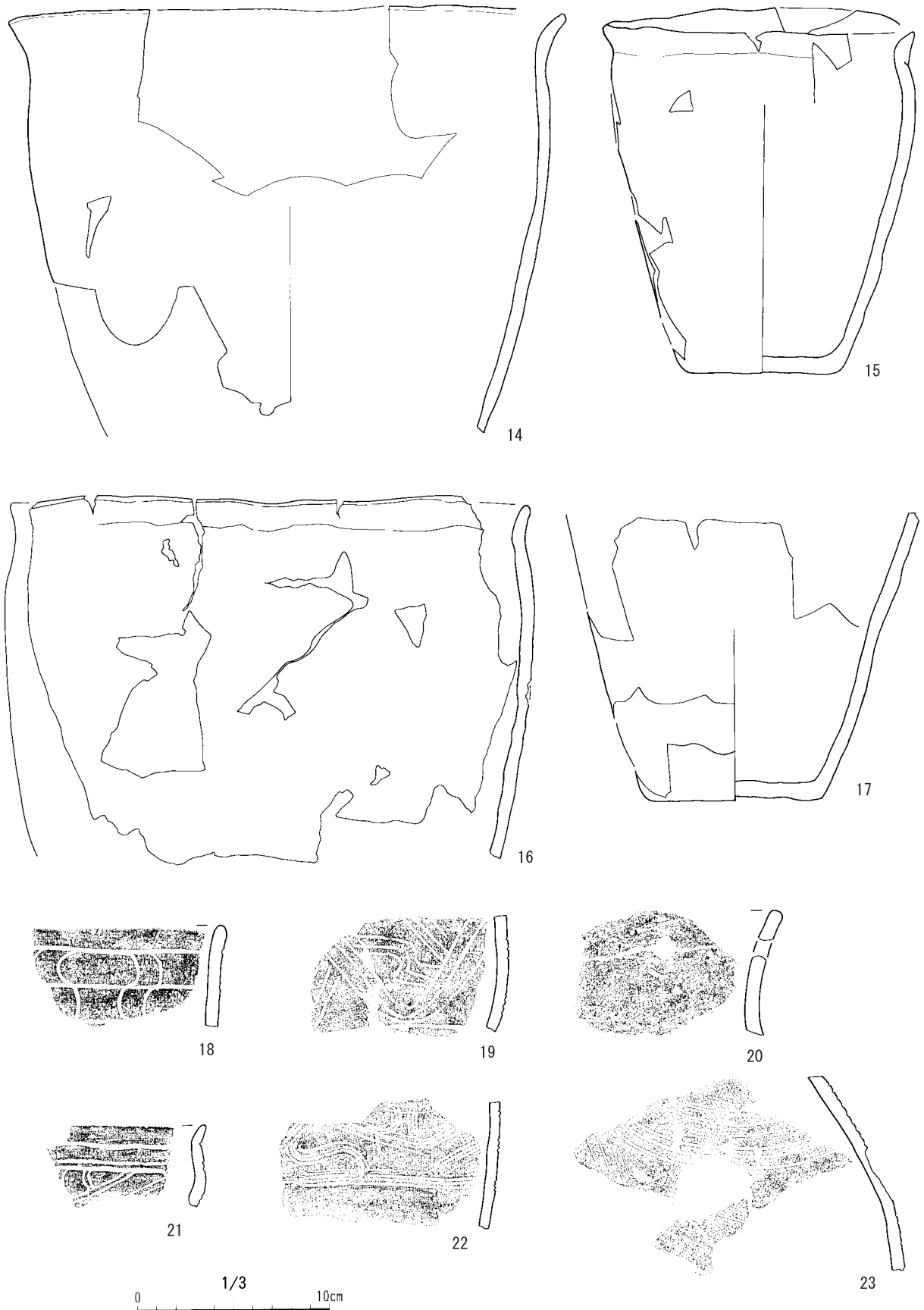


図47 C区風倒木捨て場出土土器

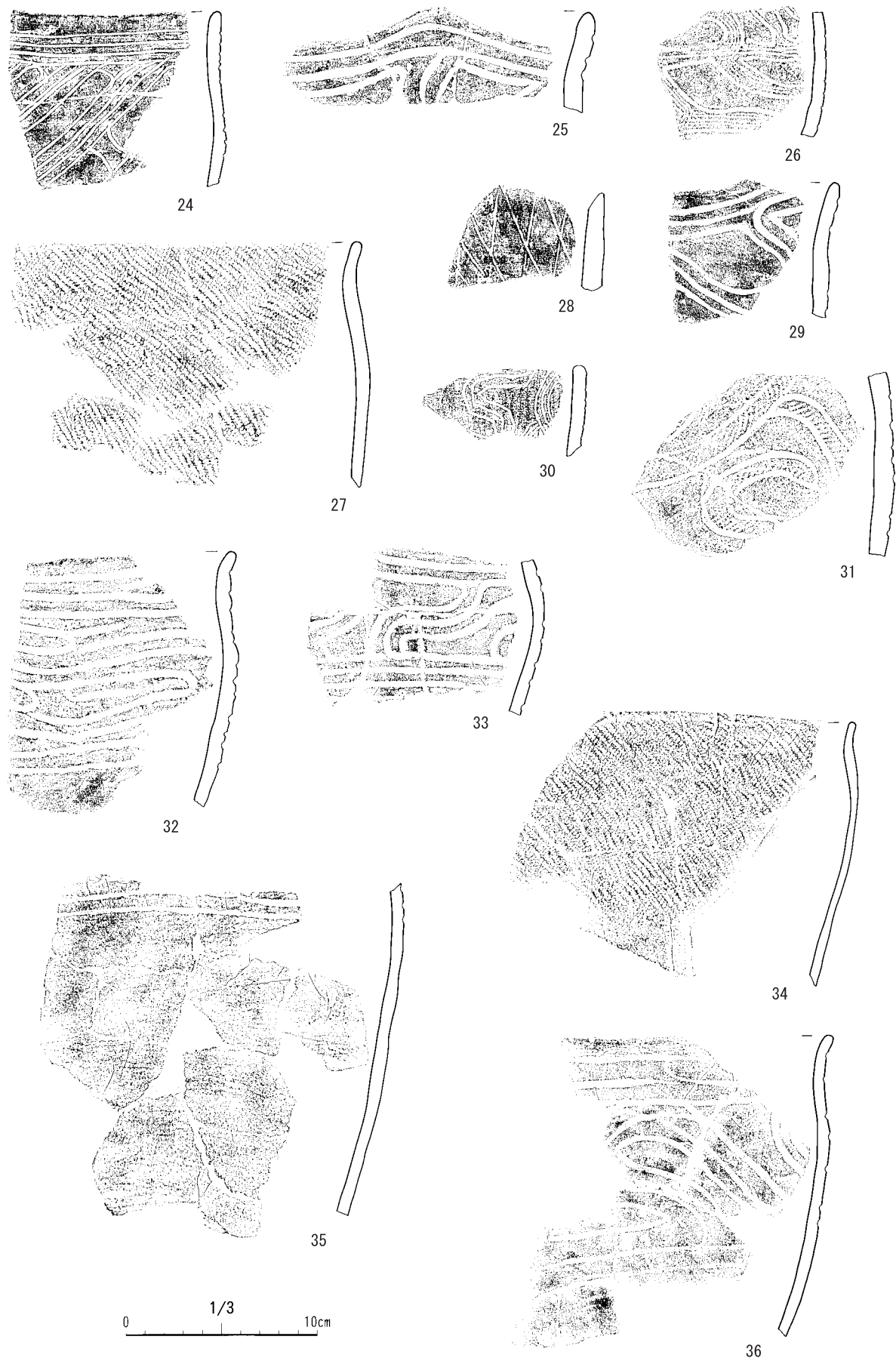


图48 C区風倒木捨て場出土土器

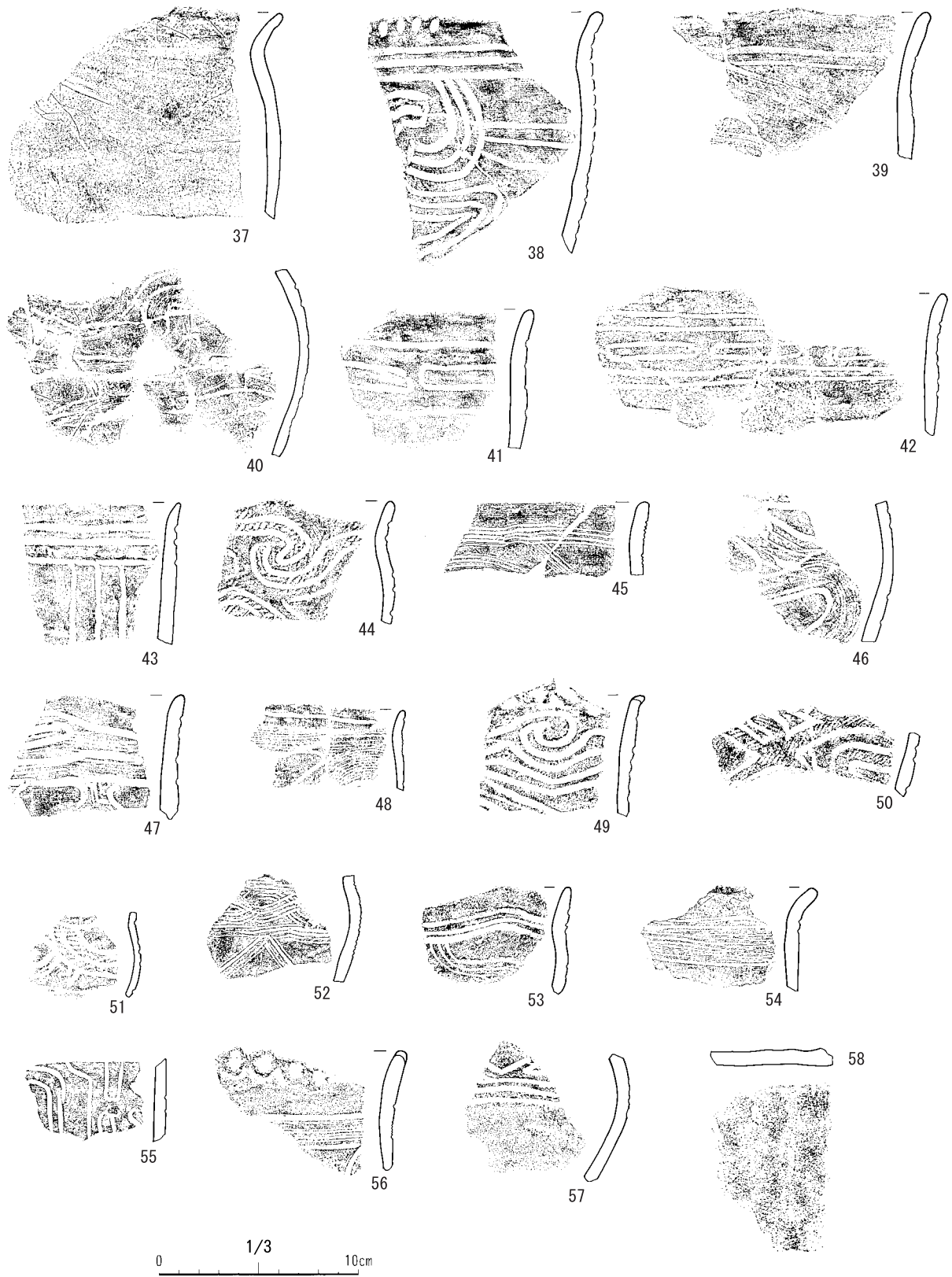


図49 C区風倒木捨て場出土土器

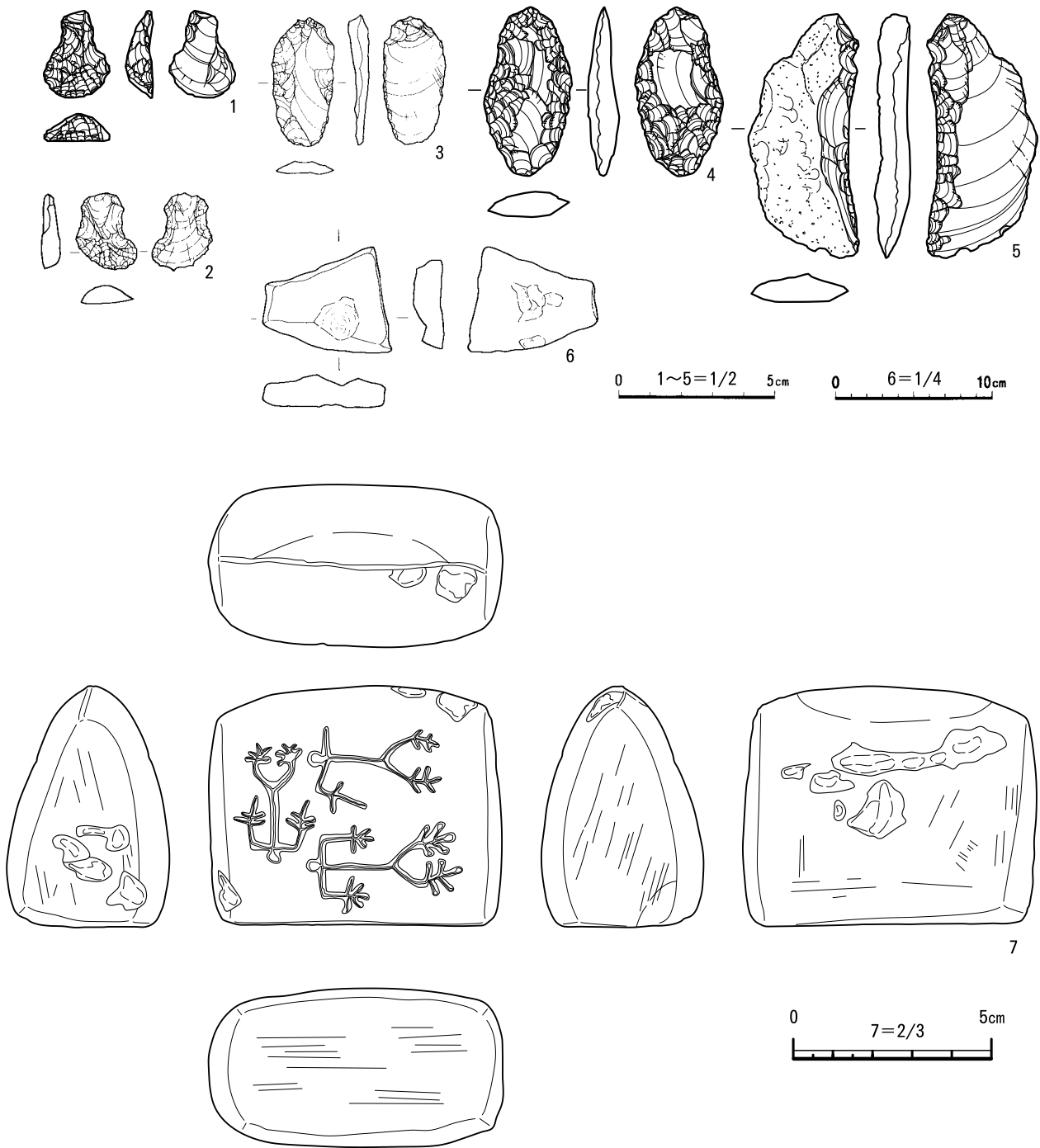


図50 C区風倒木捨て場出土石器・石冠

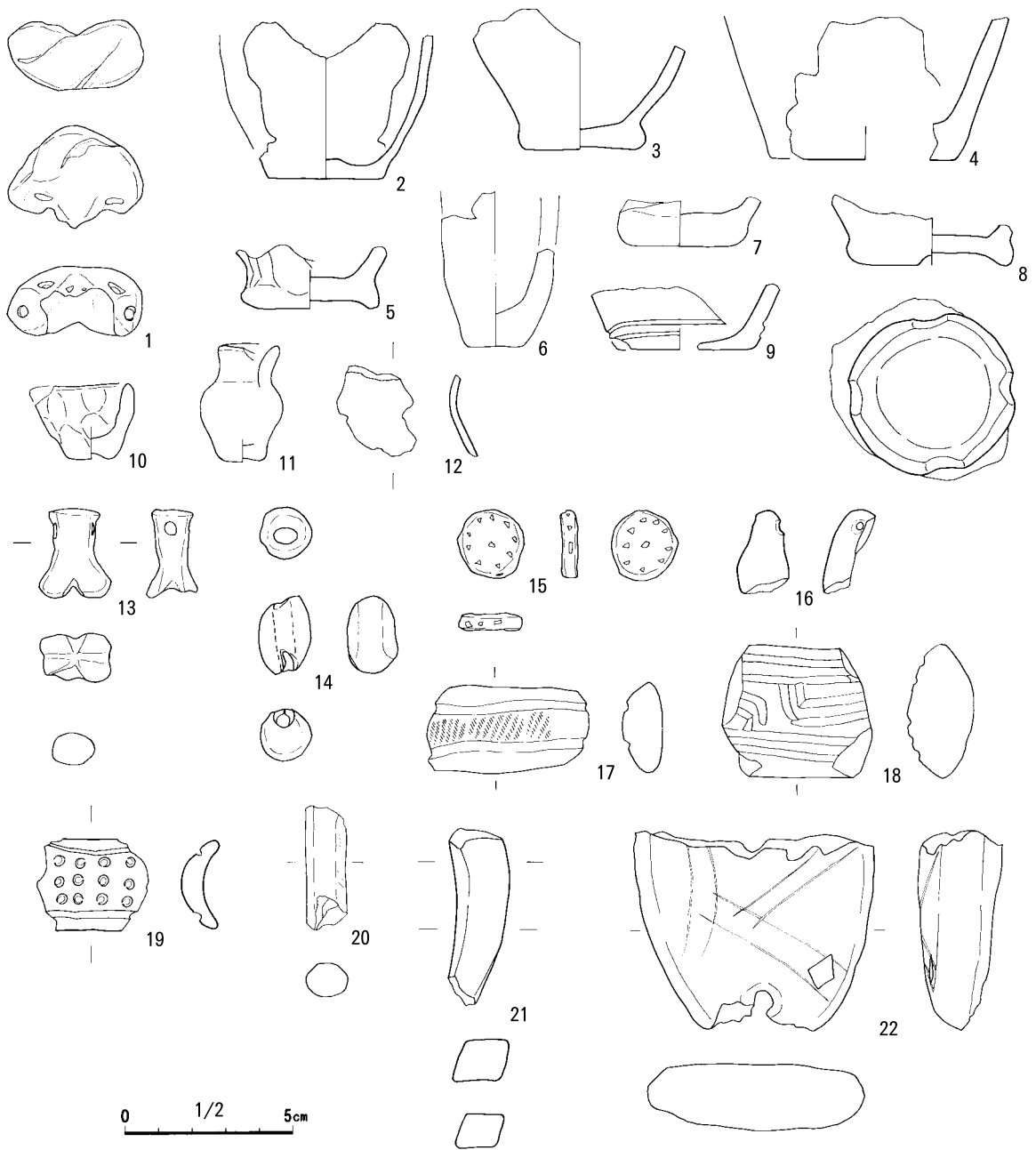


図51 C区風倒木捨て場土製品

第5節 遺構外出土遺物

1 縄文土器 (図52)

縄文時代前期... 1は円筒下層b式の口縁部である。

縄文時代中期... 2～5は円筒上層式である。

縄文時代後期... 6～16は後期の土器で、7は粘土紐の貼り付けで方形基調の文様構成である。後期前葉のものと思われる。

2 縄文時代の土製品 (図56)

1・2は土偶、3は土器片を利用し三角形に成形した土製品、4～6はミニチュア土器、7・8は棒状土製品、9は粘土塊である。 (小笠原)

3 剥片石器 (図53～54)

309点出土した。大半は調査区東側の風倒木捨て場周辺から出土している。内訳は、石鏃8点、石槍2点、石錐2点、石匙1点、大石平型石筥3点、削器4点、搔器1点、二次調整のある剥片3点、両極石器2点、石核2点、剥片類272点である。

石鏃 (1～8) 8点出土し、完形品6点と未製品2点である。調整は器面全面に施される。かえしが直線的な有茎石鏃が多い。1には玉髄質珪質頁岩、3には鉄石英が用いられている。

石槍 (9・10) 9は破損品で、下端の破損部が潰れている。10は未製品である。

石匙 (11) 刃部に肉眼で観察可能な光沢痕がある。

石錐 (12・13) 12の左辺は折れ、右辺に調整を施して錐部を作出されている。13の形状は石鏃と類似するが、石鏃と比較すると剥離が急角度なため、ここでは石錐とした。

大石平型石筥 (14～16) 大きさは長さ3cm幅2cm厚さ1cmである。摘み部と刃先が丸く、急角度の刃部を有する。刃部片面に急角度の調整が施される。16の摘み部は大きく、刃先は直線的であり、刃部角は急角度をなしている。

削器・搔器 (18～24) 18は右辺を押圧剥離で、左辺と上辺をハードハンマーの直接打撃で調整される。19の刃部は急角度で調整されている。両辺の摩耗が顕著である。20は右辺片面に押圧剥離で連続した調整が施され、直線的な刃部を作出している。刃部には微細な剥離痕が認められる。21は表面の縁辺に、急角度で奥行き5～8cmの連続した調整がある。22は21に比べ、剥離の角度は小さく、両面に調整があることから、ここでは削器とした。24は左辺に細かい調整が施され、鋭利な刃部を有する。

二次調整のある剥片 (17・25・28) 17は整形途中の二次調整剥片である。端部の加工状況から、大石平型石筥の未製品と考えられる。25は剥片の先端に調整が見られ、形状は石錐に類似するが、刃部としては厚さがあり、先端部に摩耗痕は認められなかった。28は黒曜石製で、上辺から押圧剥離で調整されている。大きさから、楔形石器の未製品とも考えられる。

両極打撃痕のある剥片 (26・27) 2点とも珪質頁岩で、表面に上下両方向からの剥離がみられる。

石核 (29・30) 2点とも、ほぼ全面をハードハンマーの直接打撃で素材剥片が剥離されている。

石器正面の作業面が砕け鈍角になっており、最終的に廃棄されたものと考えられる。29の右面にはハンマーが接触したクラックがみられる。

剥片類のうち、154点が風倒木捨て場周辺のG L・M - 248・249グリッドに集中する。珪質頁岩136点の重量傾向は、1.0～4.9gのものが59点と最も多い。

石材は珪質頁岩が8割と圧倒的であり、これに玉髄質珪質頁岩が続く。稀に、メノウ・玉髄の剥片もみられる。原石では5～10cm大の鉄石英が3点出土した。

4 礫石器 (図54・55)

磨製石斧 (31～33) 破片資料が5点である。片岩、ヒン岩、角閃岩、凝灰岩が使用されている。成形方法は擦り切りと研磨によるのと、敲打と研磨によるものがある。

磨り石 (35～37) 4点あり、3点図化した。35・36は厚手の円礫を素材とし、器面に滑らかな磨痕、側面にはザラつくスリ面を有する。

敲き石 (38・39) 4点出土した。端部を使用したものが3点あり、1点は器面にざらつく痕跡が認められる。

凹み石 (40～42) 3点出土した。3点とも器面中央に明瞭な凹み痕を有する。

石錘 (43～49) 7点出土した。大きさは長さ8～12cm、幅10cm前後、厚さ3cm以下の扁平礫を素材とする。石材はデイサイト・流紋岩・凝灰岩が使用されている。長軸方向上下端部の両面を3～6回ほどの打撃で、抉りを作成している。多くは器面中央に浅い敲打痕がある。

石皿 (34・50) 34は溶結凝灰岩製の縁なしの石皿である。表面は平坦をなし、裏面には溝状痕が3本みられる。50は凝灰岩で、石皿の縁部分である。このほかに縁部の破片1点、縁なしの石皿片1点、器面の破片1点が出土し、これらも凝灰岩である。

このほか、すり面や敲打痕のある礫片が5点出土した。

5 縄文時代の石製品 (図56)

2点出土した。1は石棒の頭部片である。丁寧に研磨され、くびれ部は明瞭である。成形時の敲打痕が一部残る。石材はデイサイトである。2は軽石で、表面が平坦に加工され、中央には擂り鉢状の凹みを有する。
(杉野森)

6 土師器・須恵器・製塩土器 (図57)

1～9は土師器で、1～6は坏、7～9は甕で、いずれも破片である。坏はロクロ成形され、1は口縁部がやや外反し、2・3は内湾気味に立ち上がる。7は小型の甕で口縁部が強く屈曲するのに対し、8は外反度が弱い。10～16は須恵器で、10は坏、11・12は長頸壺、13～16は甕の胴部片である。17は製塩土器、18～20はミニチュア土器である。
(小笠原)

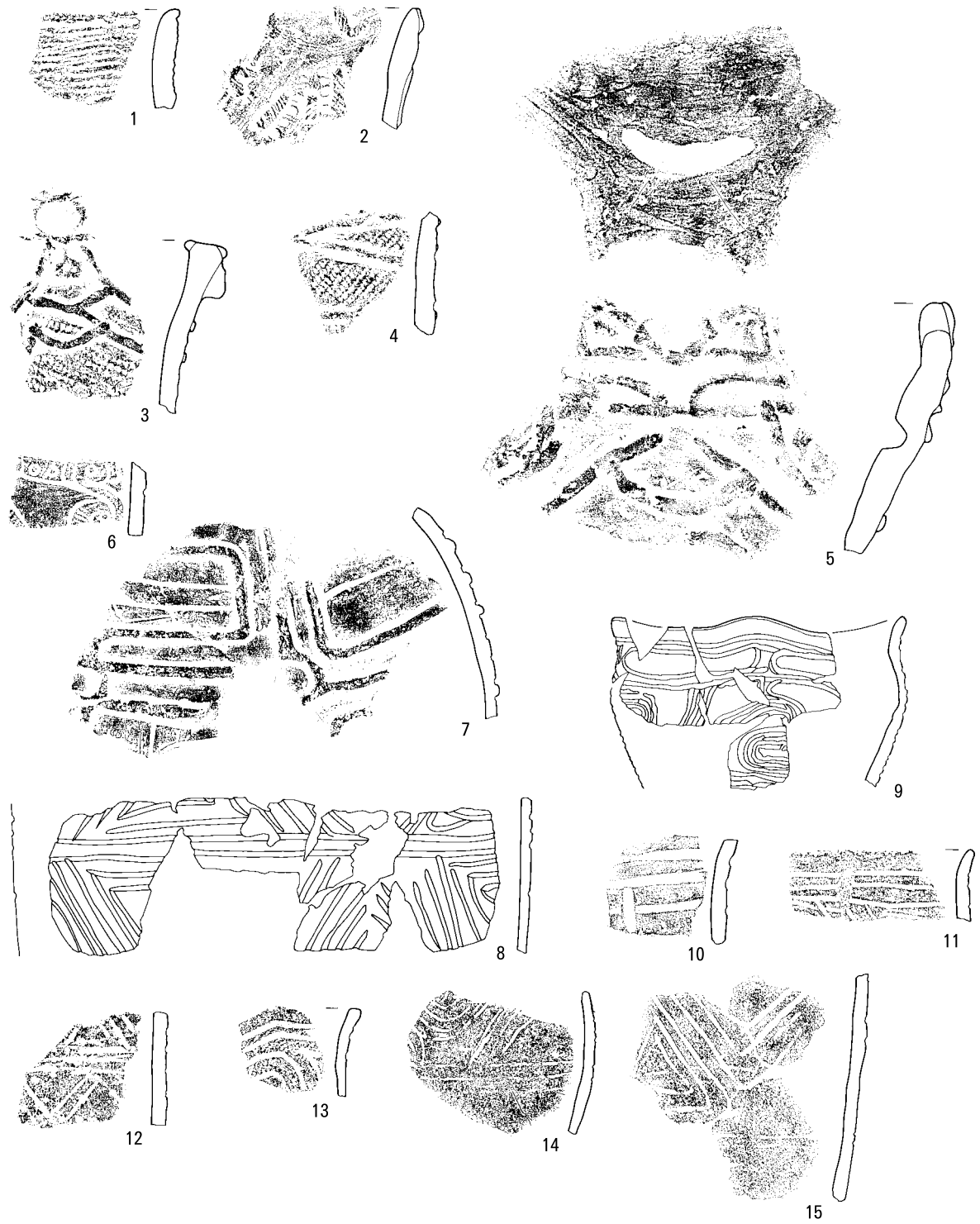


图52 C区遺構外出土土器(縄文)

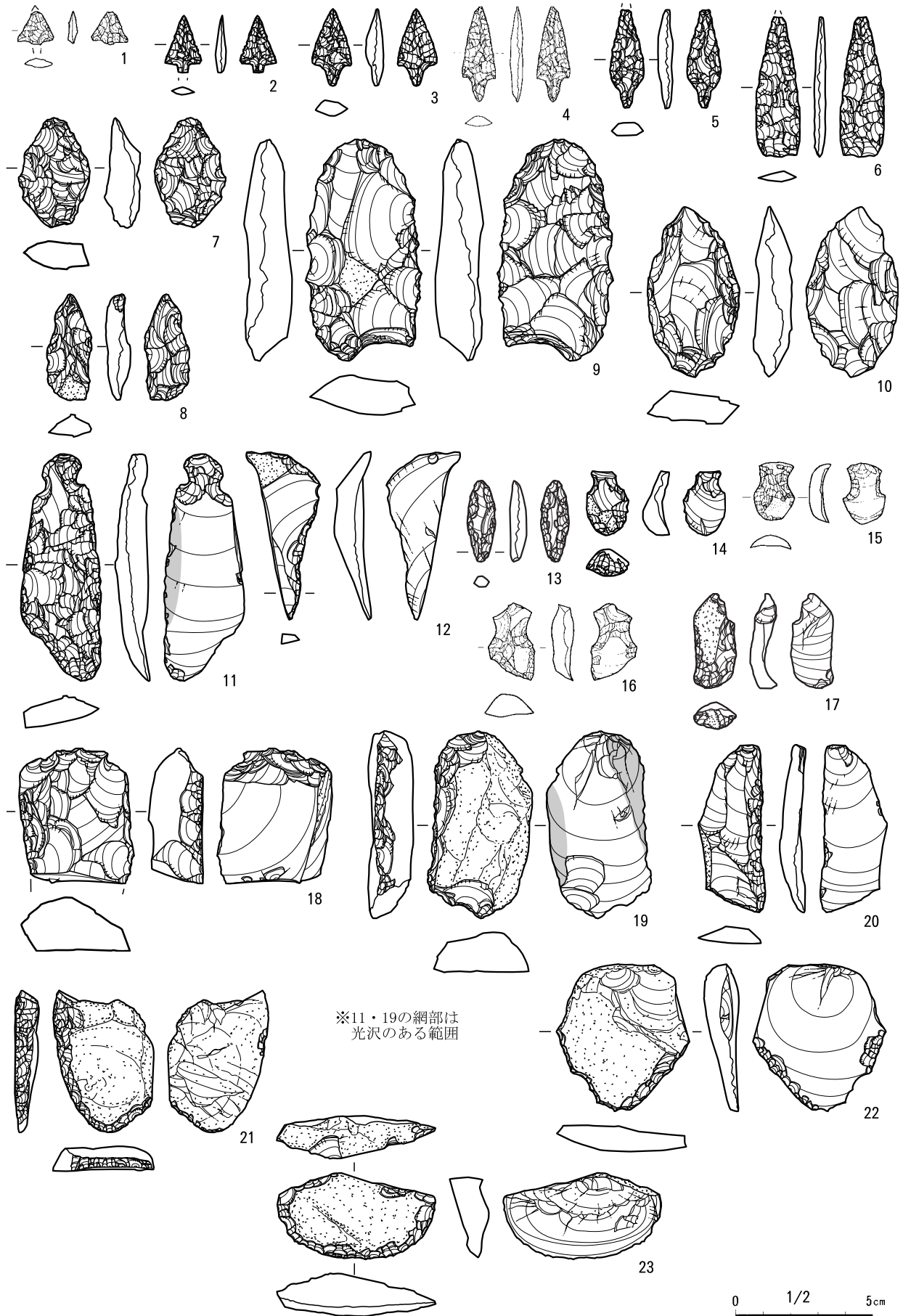


図53 C区遺構外出土石器



图54 C区遺構外出土石器

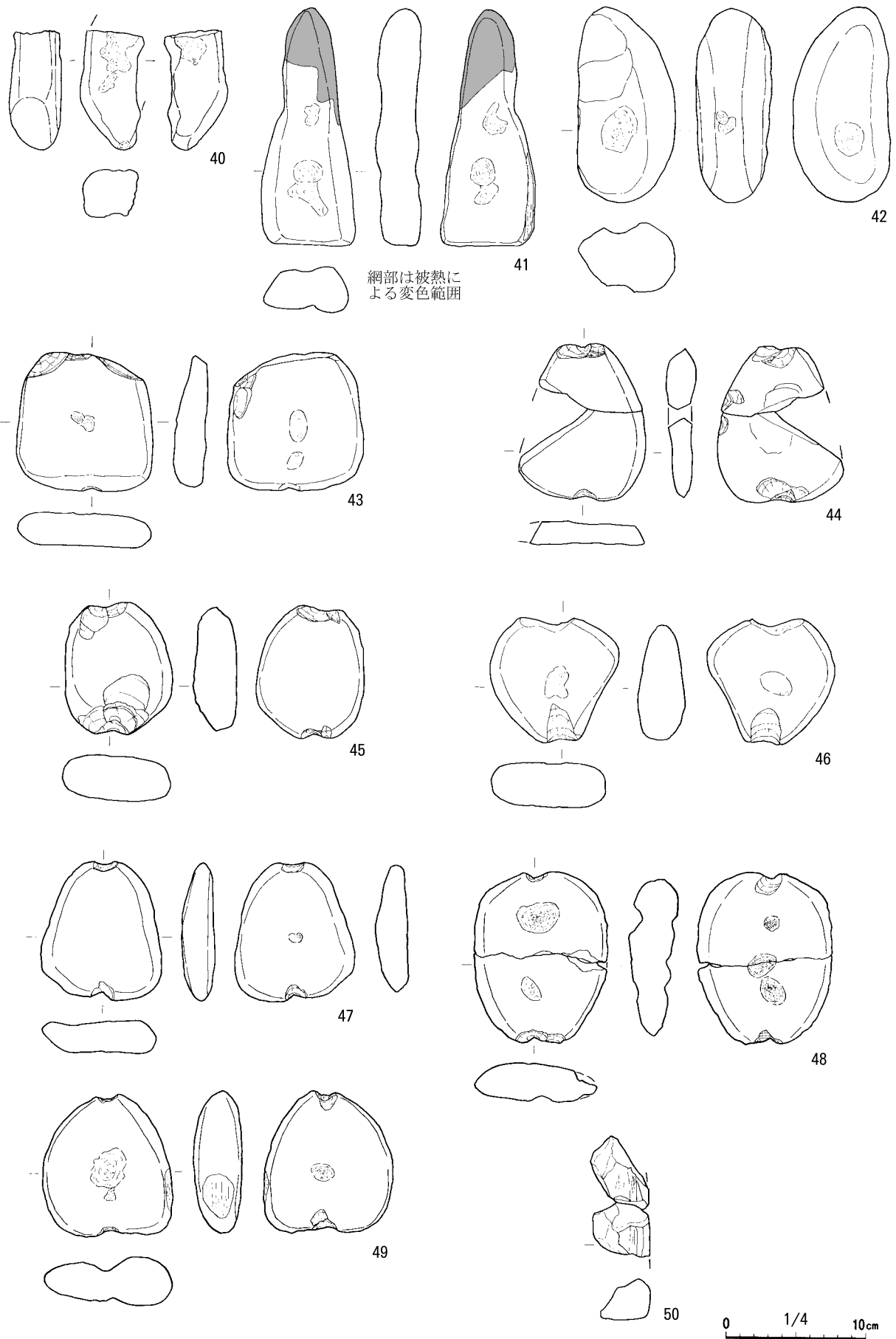


図55 C区遺構外出土石器

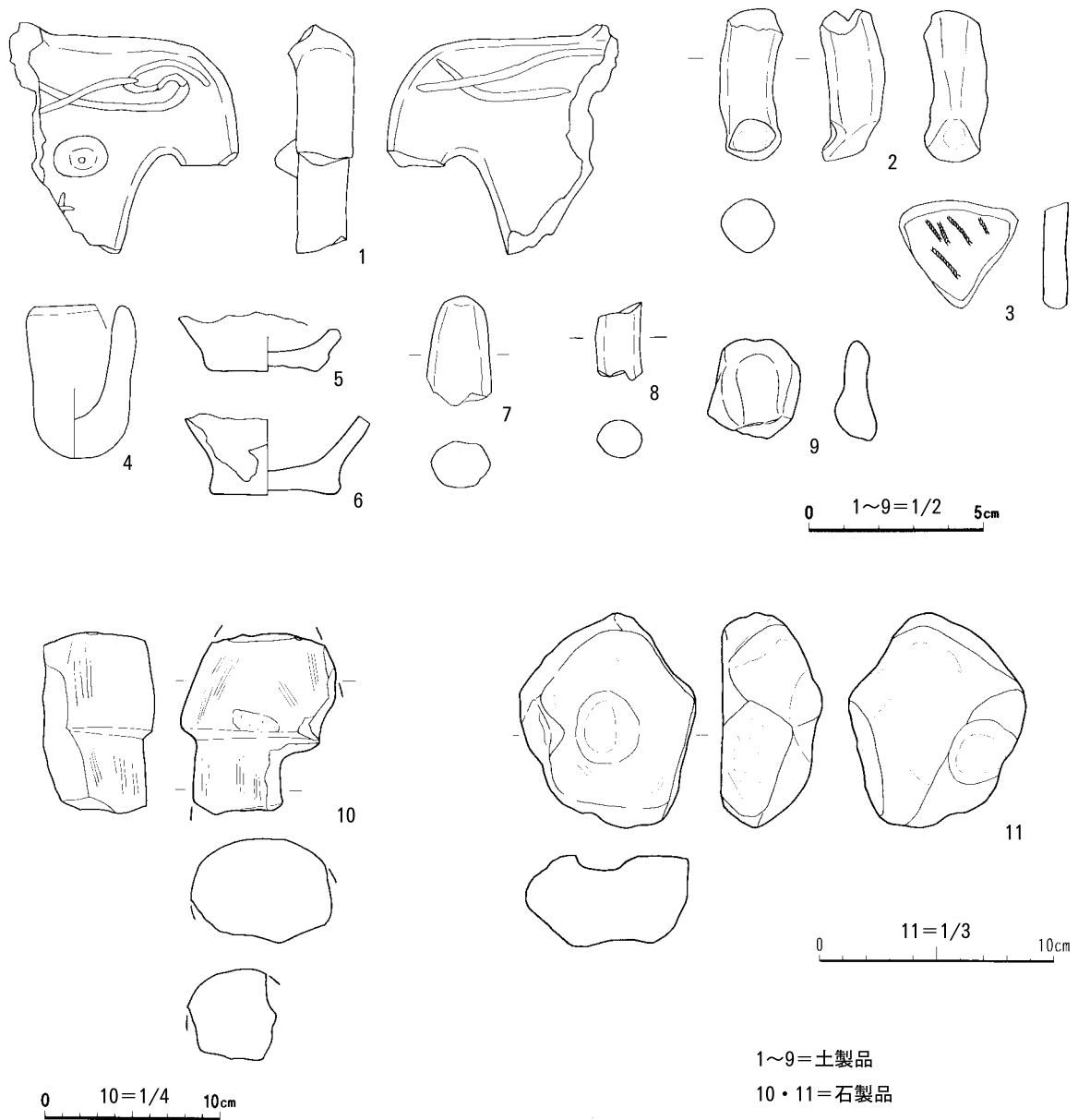


図56 C区遺構外出土土・石製品

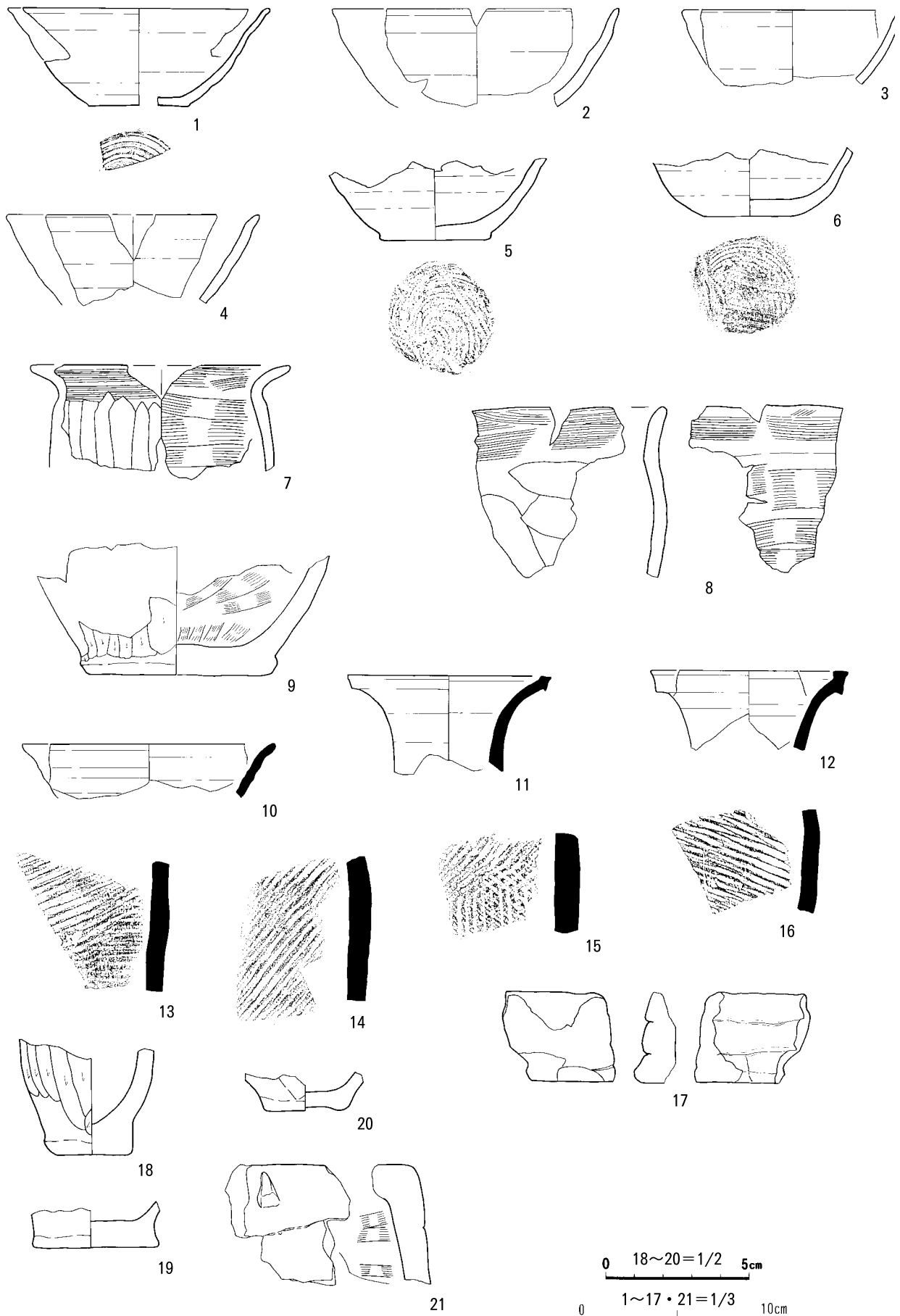
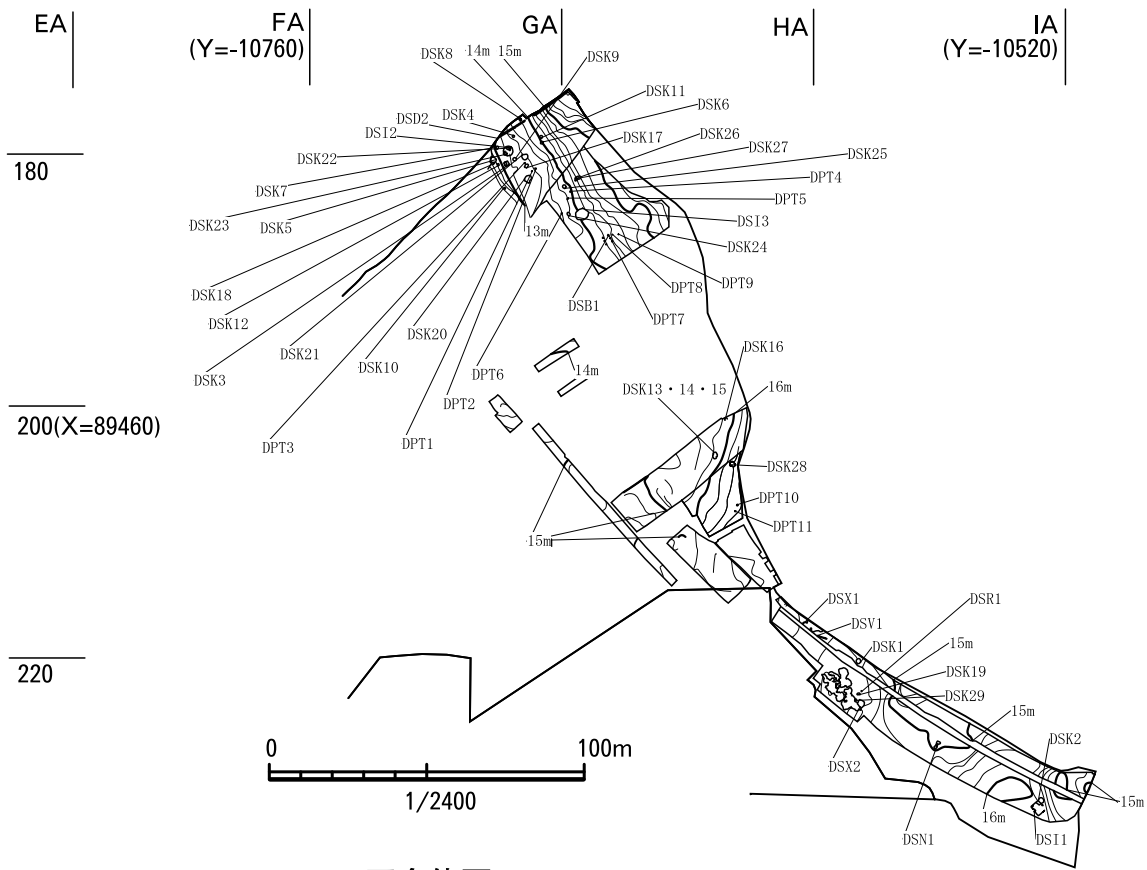


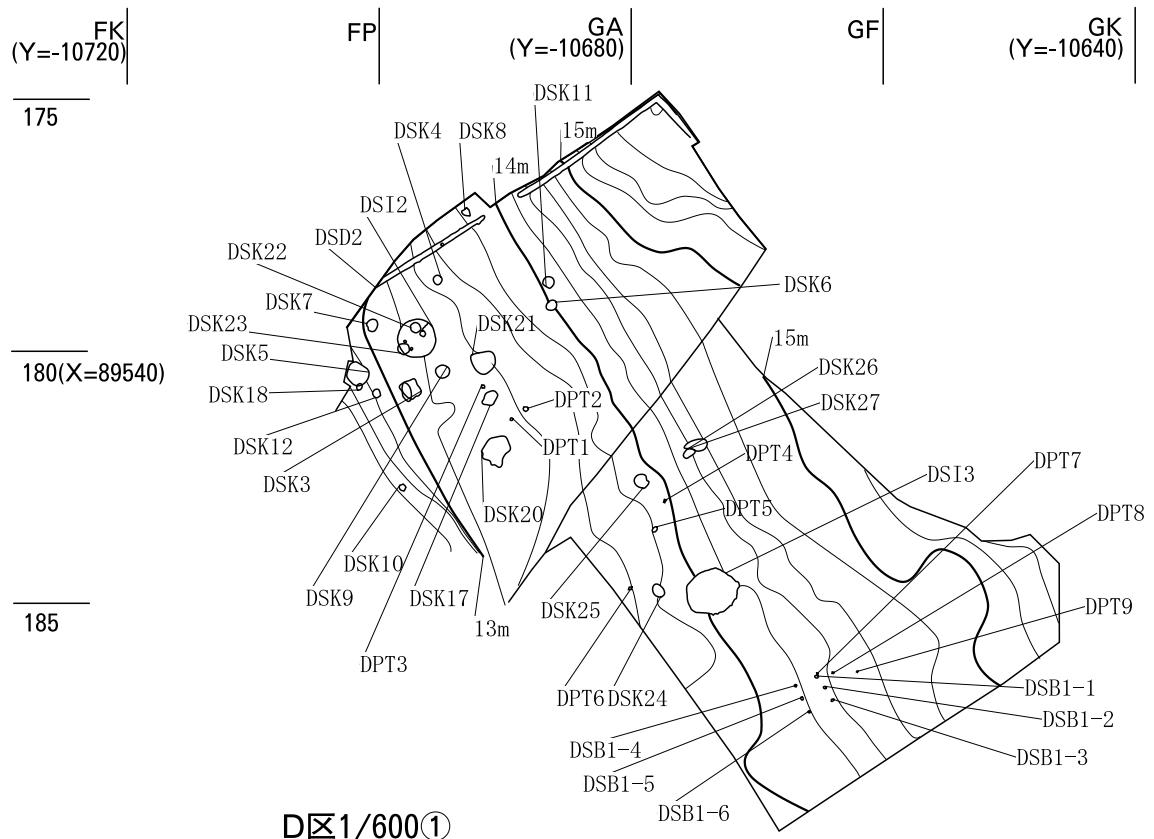
図57 C区遺構外出土土器(平安)

0 18~20=1/2 5cm
0 1~17・21=1/3 10cm



D区全体図

240(X=89300)



D区1/600①

図58 D区遺構配置

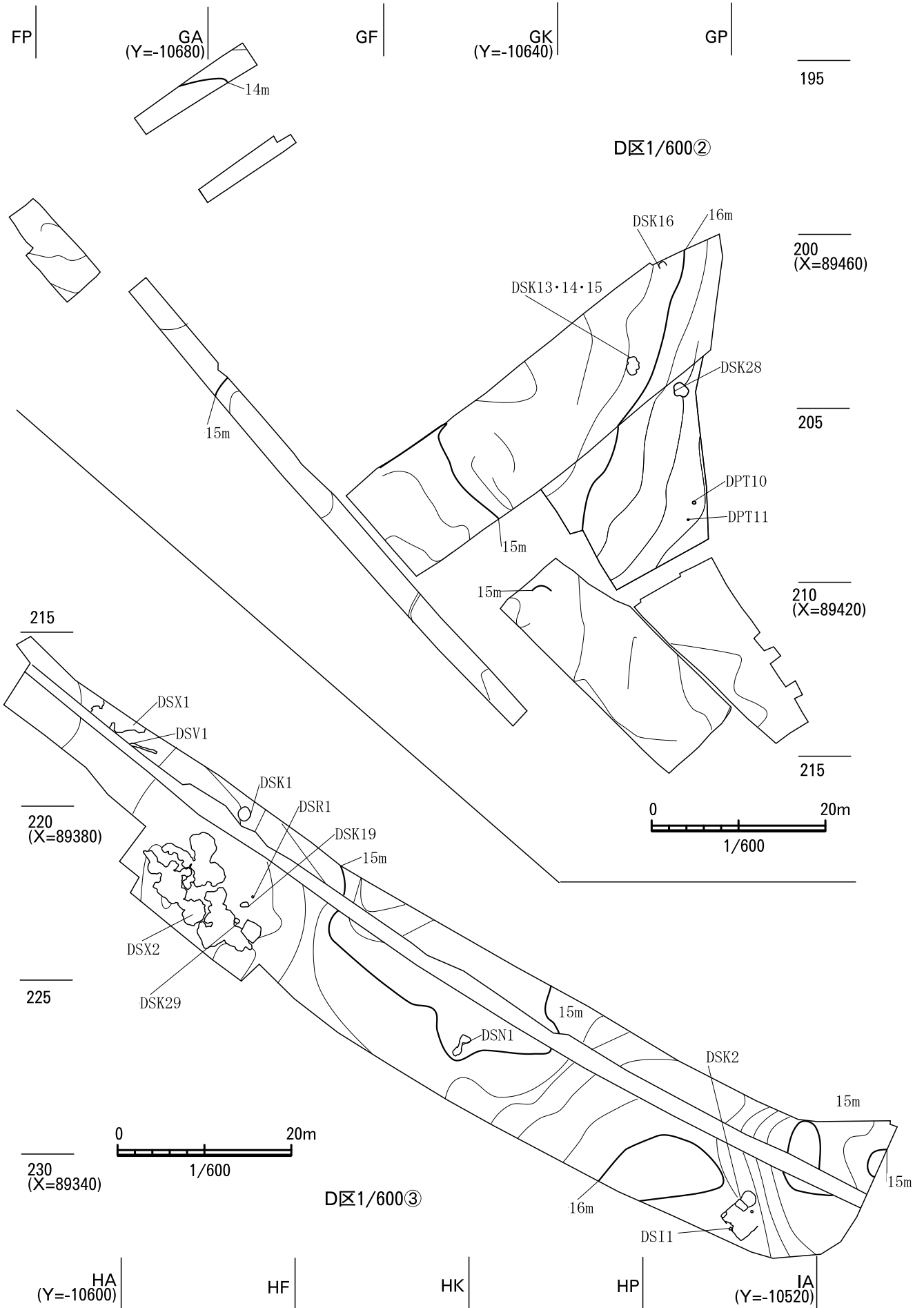


図59 D区遺構配置

第3章 D区の検出遺構と遺物

第1節 縄文時代の検出遺構と遺物

1 竪穴住居跡

第D2号竪穴住居跡 (図60)

[位置・確認] FQ - 179・180に位置する。標高13m前後の谷に面する緩斜面上の第1層上面で確認した。東側が大きく削平を受けている。

[平面形・規模] 平面形は円形で、規模は直径3mである。攪乱されているが、推定される床面積は6.7㎡ほどである。

[壁・床面] 壁・床面とも確認できたのは多くが西側の部分である。壁高は10～16cmで、床面からほぼ直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

[柱穴] Pit 1・3・4の3個のピットが柱穴となる。Pit 1は径46cm、深さ40cm、Pit 3は径22cm、深さ26cm、Pit 4は径24cm、深さ14cmである。Pit 1・3の堆積土は黒褐色土主体である。全体にローム粒を混入し、とくに上部にはローム塊が多い。柱痕等は確認されなかった。

[炉] 中央からやや北側に寄ったところで、円形の地床炉を検出した。規模は、径34cmで、床面から深さ5cm程下で焼土面が確認された。炉の堆積土にも焼土粒を含む。

[その他] Pit 5は浅い皿状のピットで、径80cmの円形を呈する。Pit 2は北東壁に隣接した浅いピットで、竪穴住居跡に伴う付属施設と思われる。

[堆積土] 10層に分層した。黒褐色土主体で、床面直上では炭化物の堆積も見られた。炭化材はPit 5周辺の床面で出土した。

[出土遺物] 1層を主体に縄文時代中期後葉のほぼ完形の土器や土器片が出土した。石器は、微小剥離痕のある剥片が出土した。

[時期] 出土遺物から、縄文時代中期最花式期に近い時期である。

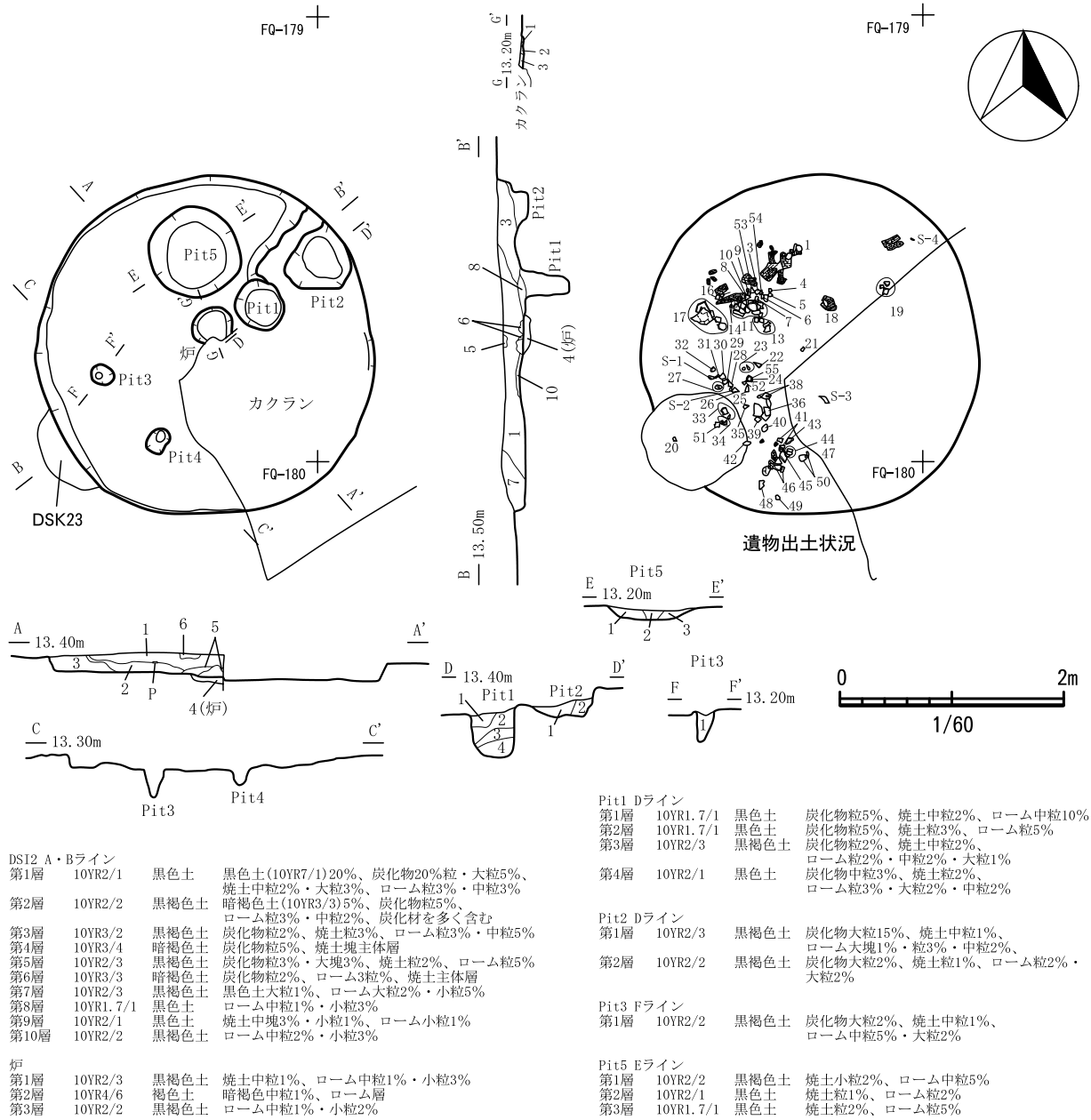


図60 第D2号竪穴住居跡

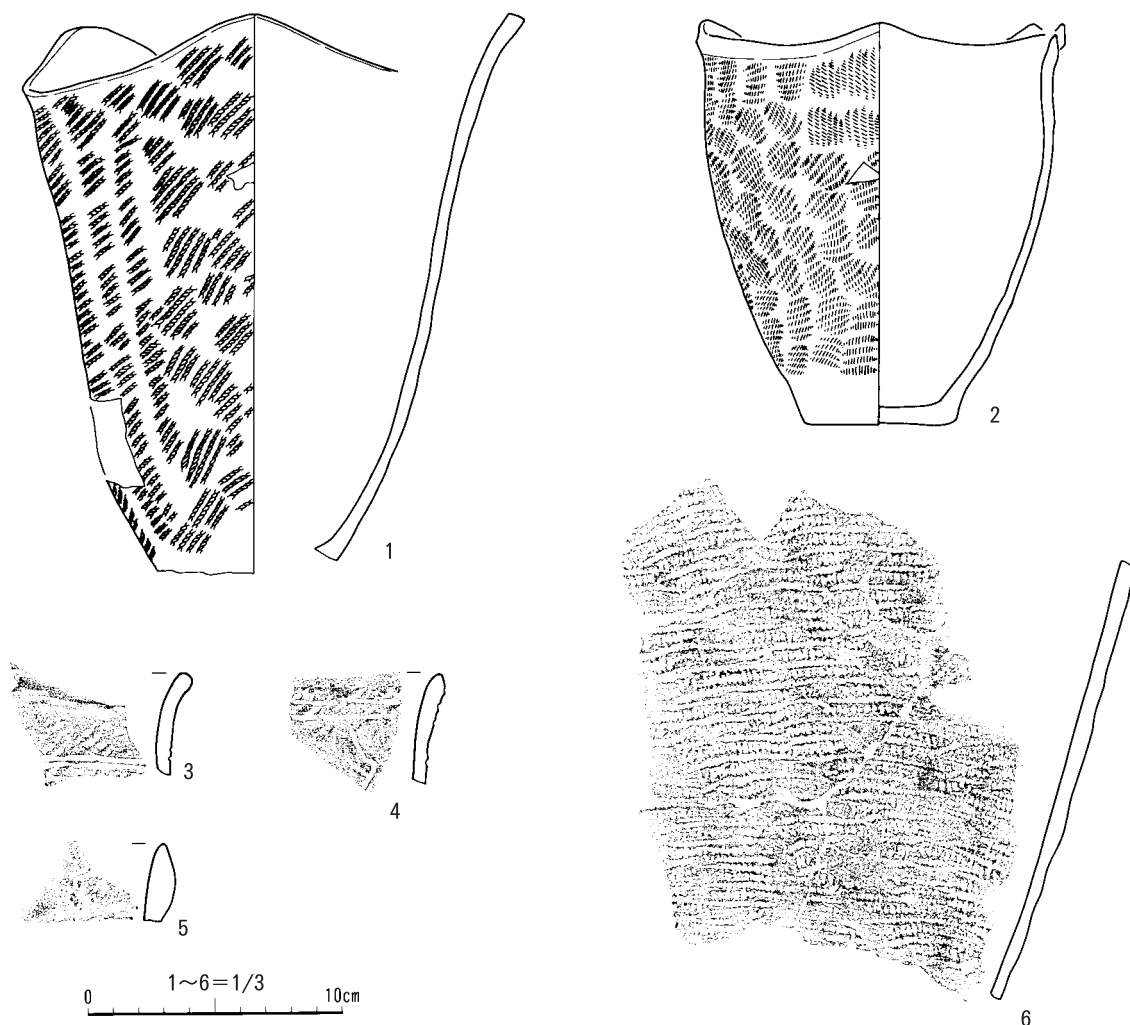


図61 第D 2号竪穴住居跡出土遺物

第D 3号竪穴住居跡 (図62) 確認のみ

[位置・確認] G C - 184・185に位置する。標高14mの 層上面で確認した。

[平面形・規模] 検出面の平面形はほぼ円形で、規模は長軸 4 m、短軸3.6mである。推定床面積は 11.4㎡である。

[壁・床面] 検出面から床面までの深さは10~18cmである。床面は起伏があり、壁は床面から緩やかに立ち上がる。

[柱穴] 確認していない。

[炉] 中央からやや南西側に寄ったところで、床面に被熱した焼土範囲を検出した。地床炉と考えられ、確認された規模は66cm×46cmである。

[堆積土] 3層に分層し、黒褐色土主体である。

[出土遺物] 確認面から、縄文時代中期中葉の土器片が出土した。

[時期] 出土遺物から、縄文時代中期と考えられる。

(坂本)

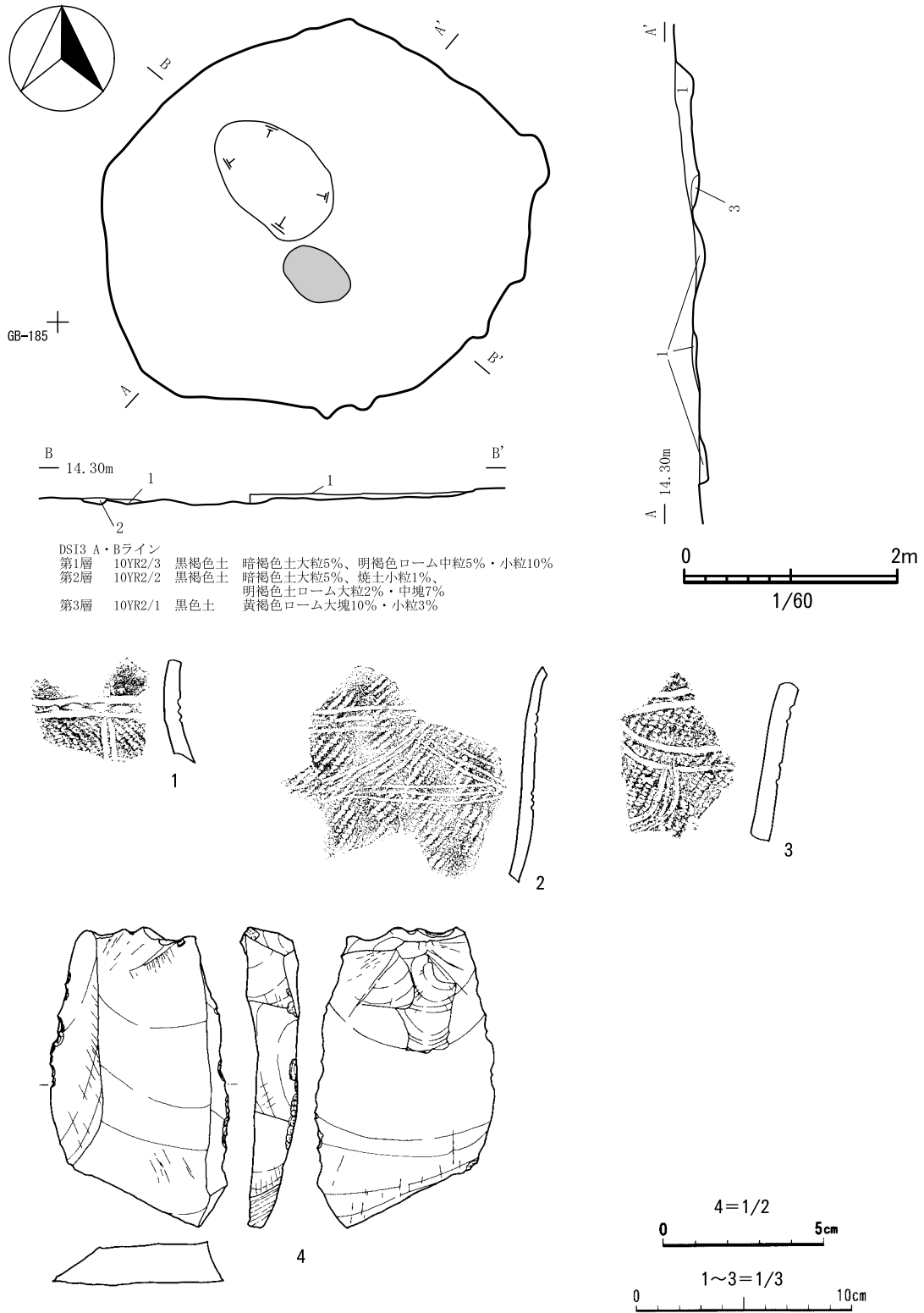


図62 第D3号竪穴住居跡・出土遺物

2 土坑

第D 2号土坑 (図63)

南東側を第D 1号竪穴住居跡Pit 1に切られている。堆積土は黒色土を主体とし、ローム粒が多量に混入し、人為的な堆積の可能性が高いものと思われる。壁は南東側半分では外傾しながら立ち上がり、北西側では緩く外傾しながら立ち上がる。底面にはやや凹凸がある。東側壁近くからは不整形の落ち込みを確認した。深さ5 cmと浅いものである。遺物は底面から土器・石器などが出土した。後期の所産である。 (小笠原)

第D 9号土坑 (図63)

堆積土は、黒褐色土主体で、全体にローム粒が混入している。3層は壁の崩落土と思われる。底面は、ほぼ平坦で、壁は底面からほぼ直線的に立ち上がる。遺物は、堆積土中から地文のみの胴部片がわずかに出土した。出土遺物から、時期は、縄文時代中・後期と考えられる。

第D 10号土坑 (図63)

小型の浅い土坑である。黒褐色土の堆積土で、底面付近に炭化物粒を微量に混入する。底面はほぼ平坦である。壁は北側が残存しており、底面から緩やかに立ち上がる。遺物は、1層中から土器の胴部片が出土した。縄文がわずかに観察される。出土遺物から、時期は、縄文時代中・後期と考えられる。

第D 11号土坑 (図64)

堆積土は黒褐色土主体で、全体にローム粒が混入する。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直線的に立ち上がる。遺物は、壁際付近の堆積土中から円筒上層d・e式期の土器の小片が出土した。出土遺物から、時期は縄文時代中期中葉と考えられる。

第D 12号土坑 (図64)

堆積土は黒褐色土主体で、下部でローム塊を多く混入する。壁の崩落による混入と思われる。底面はほぼ平坦で、壁は底面から直線的に立ち上がる。遺物は、堆積土中から口唇部が肥厚し、縄文のみを施文した土器が出土した。出土遺物から、時期は、縄文時代中期中葉と考えられる。

第D 16号土坑 (図64)

南側は削平されているが、平面形状は円形と思われる。黒褐色土主体の堆積土である。底面起伏があり、壁は底面から直線的に立ち上がる。遺物は1層中から無文の胴部片が出土した。出土遺物から、縄文時代後期と考えられる。

第D 17号土坑 (図64)

開口部の平面形はやや不整な楕円形である。黒褐色土主体の堆積土で、全体にローム粒を混入する。底面はやや起伏があり、湧水する。壁は底面から中位にかけてやや内傾して立ち上がり、中位から開

口部にかけて緩やかに立ち上がる。遺物は1層中から地文のみの胴部片が出土した。出土遺物から、時期は、縄文時代中期後半と思われる。(坂本)

第D19号土坑 (図64)

HE-222に位置する。形態は南壁が直線的な不整楕円形である。長軸95cm×短軸52cmで、深さは32cmである。堆積土は黒褐色土を主体とし、ローム粒や炭化物が混入し、特にローム粒が目立つ。人為的な堆積の可能性が高いものと思われる。底面は西側に向かって高くなり、壁は北側半分では緩く外傾して立ち上がり、底面から壁の屈曲は漸移的である。南側ではほぼ垂直に立ち上がる。確認面から壺形土器の上半部や、小型の鉢形土器が出土した。遺構としてとらえるべきか否か判断に迷うが、復元個体が出土したことから、遺構として扱った。後期の所産と思われる。(小笠原)

第D20号土坑 (図64)

開口部は崩落によるやや起伏のある平面形である。明黄褐色砂質土主体の堆積土で、土坑中央にレンズ状に堆積する。底面から壁にかけては黒色土で覆われており、人為堆積の可能性が高い。底面はほぼ平坦で、湧水する。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は、堆積土中から地文のみの胴部小片が出土しただけである。出土遺物から、時期は、縄文時代中・後期と思われる。

第D21号土坑 (図64)

黒褐色土と明黄褐色土が互層に堆積しており、人為堆積の可能性が高い。底面はやや起伏があり、湧水する。壁は底面から緩やかに立ち上がり、中位から上位にかけては一部に平坦面もみられる。遺物は2層中から縄文と沈線が施文された土器小片が出土した。出土遺物から、時期は縄文時代中・後期と考えられる。(坂本)

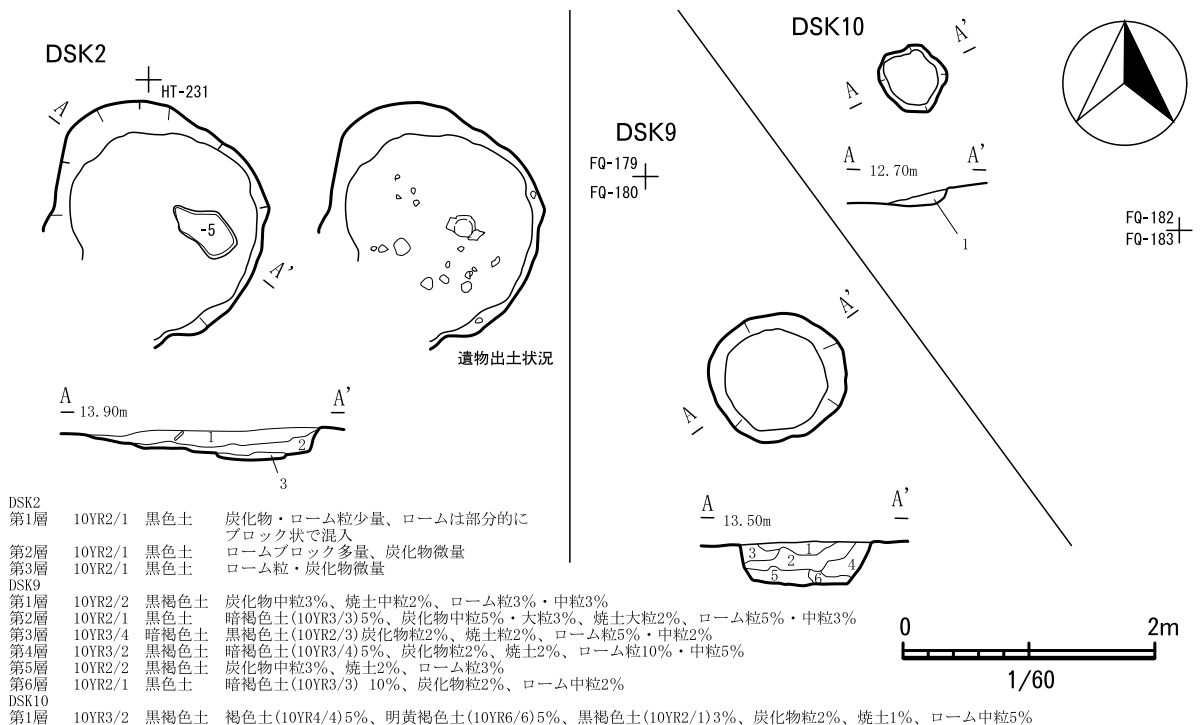
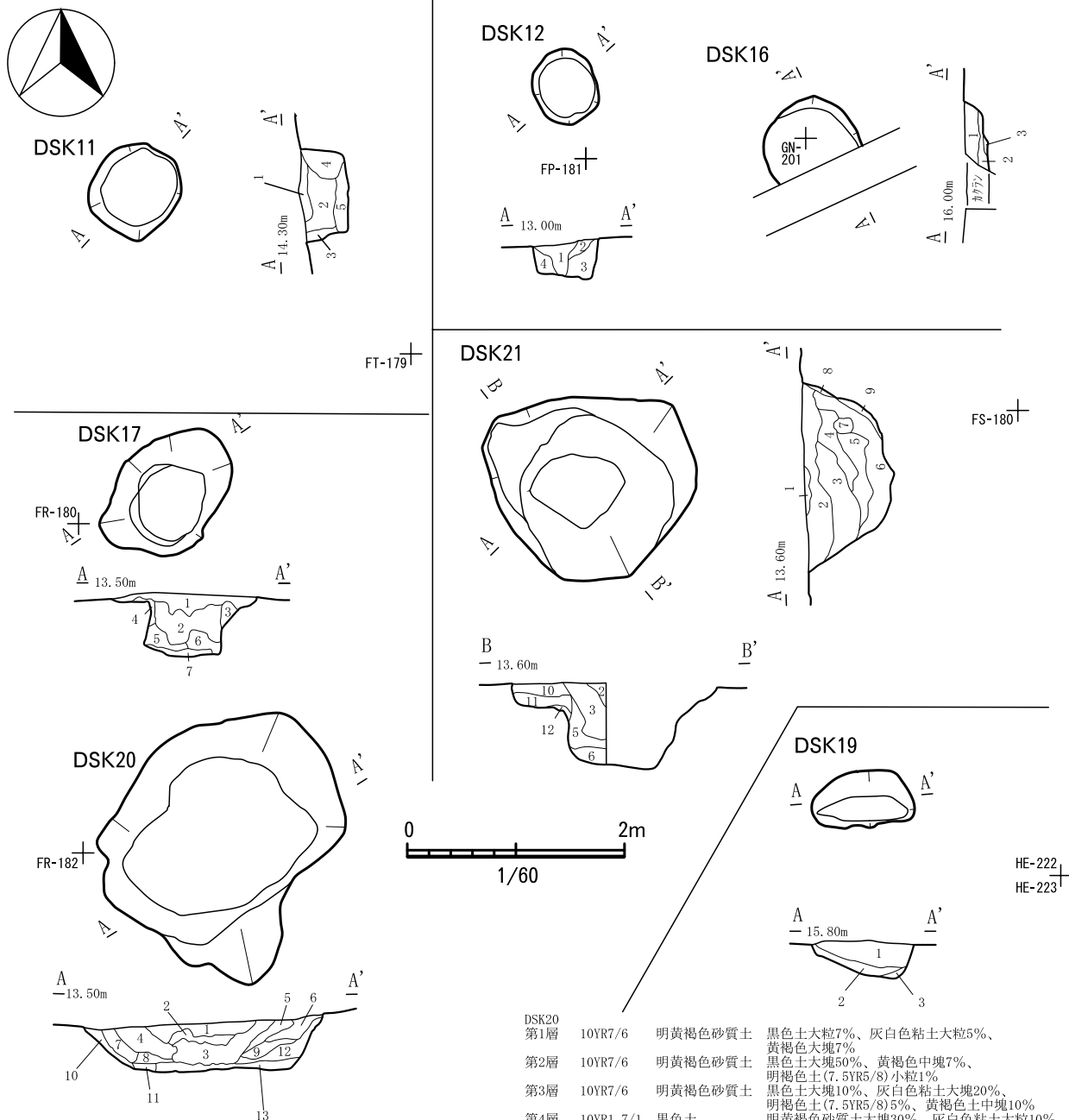


図63 D区土坑 (縄文時代)



DSK11	第1層	10YR1.7/1	黒色土	焼土小粒1%、ローム中粒2%・小粒5%
	第2層	10YR2/2	黒褐色土	黒色土大粒1%、焼土小粒20%、ローム大粒3%・小粒5%
	第3層	10YR2/3	黒褐色土	焼土小粒1%、ローム大粒3%・小粒5%
	第4層	10YR2/1	黒色土	暗褐色大塊10%、ローム中粒5%
	第5層	10YR1.7/1	黒色土	ローム中粒1%・小粒3%
DSK12	第1層	10YR2/2	黒褐色土	黄褐色ローム小粒3%
	第2層	10YR2/1	黒色土	黄褐色ローム大粒1%・小粒2%
	第3層	10YR3/4	黒褐色土	黄褐色ローム大塊3%・小粒3%
	第4層	10YR2/3	黒褐色土	黄褐色ローム大塊5%・小粒3%
DSK16	第1層	10YR1.7/1	黒色土	ローム中粒5%
	第2層	10YR2/1	黒色土	ローム大粒3%・小粒5%
	第3層	10YR2/3	黒褐色土	ローム大塊15%
DSK17	第1層	10YR1.7/1	黒色土	焼土中粒7%、ローム中粒5%・小粒10%
	第2層	10YR2/2	黒褐色土	焼土中粒5%、ローム大粒5%・小粒20%
	第3層	10YR2/1	黒褐色土	焼土小粒1%、ローム大粒2%・小粒7%
	第4層	10YR5/8	黄褐色土	黒色土中塊3%、焼土小粒1%
	第5層	10YR1.7/1	黒色土	ローム大粒2%・小粒3%
	第6層	10YR2/3	黒褐色土	ローム大塊20%・小粒5%
	第7層	10YR2/1	黒褐色土	ローム大塊20%・小粒3%
DSK19	第1層	10YR2/2	黒褐色土	炭化物粒(φ2~3mm)2%、ロームブロック大塊5%、ローム粒(φ1~3mm)10%
	第2層	10YR2/2	黒褐色土	黒色土(10YR2/1)2%、炭化物粒(φ2~4mm)1%、ローム粒(φ1~3mm)5%、ローム中粒(φ5~7mm)20%
	第3層	10YR6/8	明黄褐色土	

DSK20	第1層	10YR7/6	明黄褐色砂質土	黒色土大粒7%、灰白色粘土大粒5%、黄褐色大塊7%
	第2層	10YR7/6	明黄褐色砂質土	黒色土大塊50%、黄褐色中塊7%、明褐色土(7.5YR5/8)小粒1%
	第3層	10YR7/6	明黄褐色砂質土	黒色土大塊10%、灰白色粘土大塊20%、明褐色土(7.5YR5/8)5%、黄褐色土中塊10%
	第4層	10YR1.7/1	黒色土	明黄褐色砂質土大塊30%、灰白色粘土大粒10%、明褐色土中粒(7.5YR5/8)2%
	第5層	10YR1.7/1	黒色土	浅黄色砂質土(2.5Y7/4)大塊20%、黄褐色土中粒5%
	第6層	10YR2/3	黒褐色土	明黄褐色砂質土大粒7%、灰白色粘土大粒15%、明黄褐色土中粒3%
	第7層	10YR2/2	黒褐色土	明黄褐色砂質土大粒3%、褐色土大粒2%、暗褐色土大塊10%
	第8層	10YR7/6	明黄褐色砂質土	黒色土中塊3%、褐色土大粒3%
	第9層	10YR7/6	明黄褐色砂質土	黒色土中塊15%、灰白色粘土大粒5%、明褐色土(7.5YR5/8)小粒5%
	第10層	10YR6/8	明黄褐色土	黒色土中塊10%
	第11層	10YR3/4	暗褐色土	明黄褐色砂質土大塊20%
	第12層	10YR7/6	明黄褐色砂質土	黒色土大塊40%、明褐色土(7.5YR5/8)大粒5%
	第13層	10YR3/4	暗褐色土	明黄褐色砂質土大塊30%
DSK21	第1層	10YR2/1	黒色土	黄橙色砂質土(10YR8/6)大粒7%・小粒5%、黄褐色粘土(10YR5/6)10%
	第2層	10YR2/2	黒褐色土	褐色土ローム大塊5%、黄橙色砂質土大塊20%、黄褐色土大塊15%
	第3層	10YR8/6	黄橙色砂質土	黒色土40%、褐色土ローム小粒15%
	第4層	10YR1.7/1	黒色土	暗褐色土大粒20%、褐色土ローム大粒7%
	第5層	10YR2/1	黒色土	黄橙色砂質土(10YR7/8)大塊20%・小粒10%、暗褐色大粒10%、褐色土大粒5%
	第6層	10YR7/8	黄橙色砂質土	黒色土大塊30%、暗褐色土大塊10%
	第7層	10YR6/6	明黄褐色土	褐色土40%
	第8層	10YR4/6	褐色土	暗褐色土大塊20%、黄褐色土大粒(10YR5/8)大粒10%、黒褐色土中塊5%
	第9層	10YR7/6	明黄褐色砂質土	
	第10層	10YR3/3	暗褐色土	黒色土大粒1%、黄褐色土ローム中粒3%
	第11層	10YR4/6	褐色土	黒色土大塊15%、焼土大粒1%、黄褐色ローム大粒10%
	第12層	10YR6/8	明黄褐色砂質土	

図64 D区土抗(縄文時代)

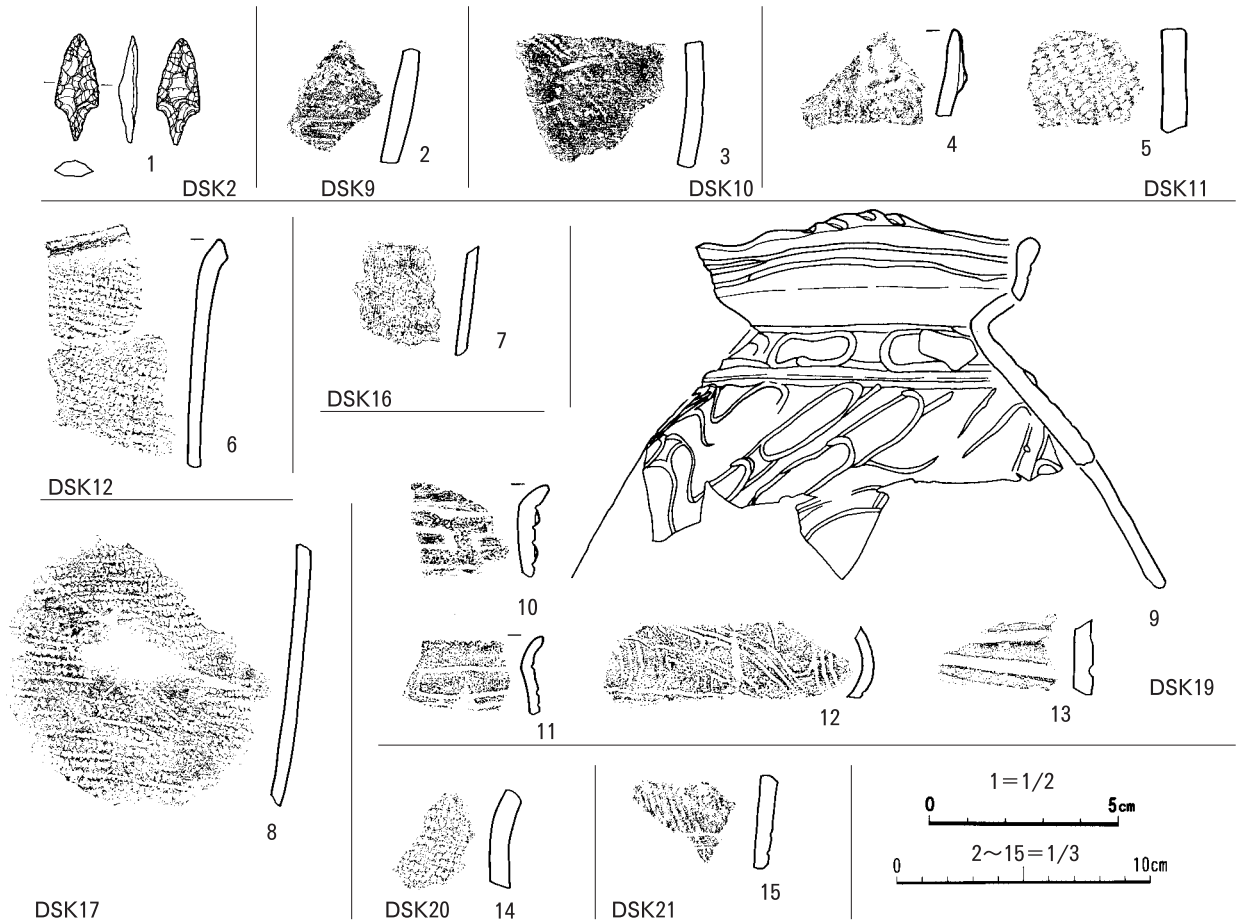


図65 D区縄文時代土坑出土遺物

3 溝状土坑

第D 1号溝状土坑 (図66)

HB - 218に位置する。西側上端部が若干攪乱を受けている。長軸330cm、短軸30cmで、深さは70cmである。堆積土は黒褐～暗褐色土が主体で、堆積状況及び混入物から自然堆積と考えられる。壁は長軸端部が袋状に掘り込まれ、それ以外はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。(小笠原)

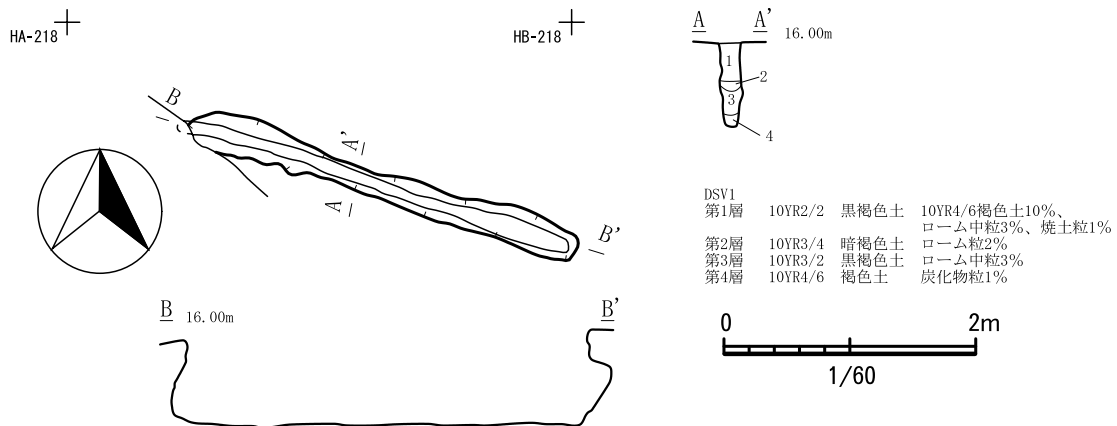


図66 D区溝状土坑

4 土器埋設遺構

第D 1号土器埋設遺構 (図67)

[位置・確認] HE - 222に位置する。第 層中で土器の輪郭を検出し確認した。

[掘方・堆積土] 土器は第 層中に埋設されており、掘方は明確ではない。そのため、土器埋設遺構として埋置されたものか、厳密には判断できない。土器内の堆積土は黒褐色土で、ローム粒や炭化物・焼土粒が微量混入する。

[土器] 鉢形の土器が正立状態で埋設されている。

[時期] 出土土器から縄文時代後期の十腰内 式期である。

(小笠原)

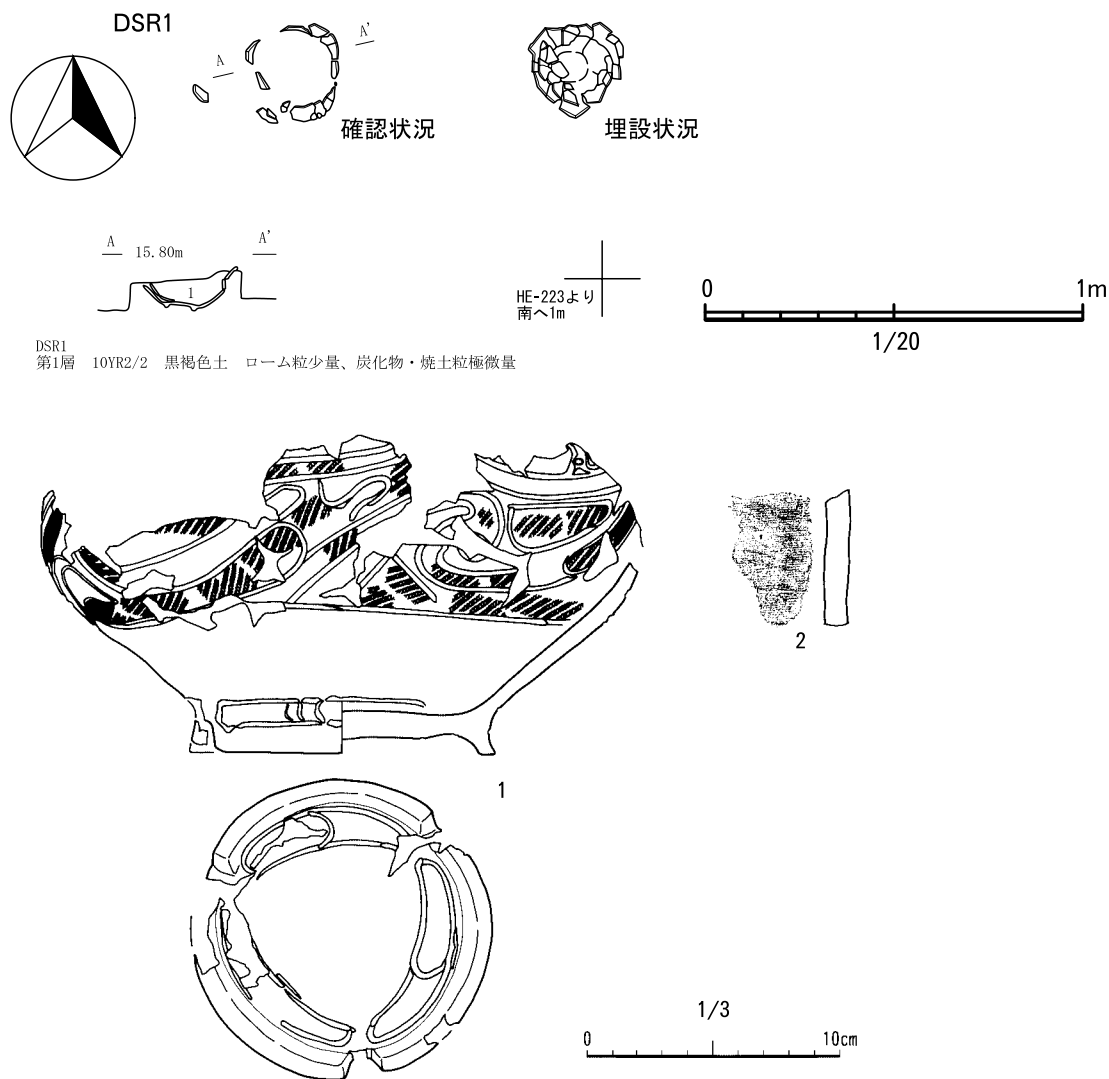


図67 第D 1号土器埋設遺構・出土遺物

5 焼土遺構

第D 1号焼土遺構 (図68)

[位置・確認] HK - 226・227に位置する。第 層精査中に焼土と土器の出土により確認した。

[平面形・規模] 焼土は南北に長いメガネ状に広がる。長軸は225cmで、短軸は北側で105cm、南側で70cmである。その間にも幅40cmほどの焼土が繋ぐように広がる。掘方も焼土の広がりと同様メガネ状で、北側は120×100cmの東西に長い不整楕円形で、深さは10cm前後である。南側は115×80cmの南北に長い不整楕円形で、深さは5cm前後である。その間は幅35～45cm、深さ5cm前後で溝状に繋がる。

[壁・底面] 掘方底面は平坦で、南北の落ち込みがやや深く、連結する溝状の落ち込みの部分がやや高い。底面から壁にかけては緩やかに連続して立ち上がる。

[堆積土] 第2層が主体を占め、ほぼ全体が焼土層である。第3層は被熱の度合いが弱く、焼土化していないものと思われる。上面は削平を受けており、状況は不明である。

[出土遺物] 掘方底面から、少なくとも4個体以上の土器が出土した。それらは完形ないしはそれに近いものである。焼土と混在するような出土状況で、使用時の状況に限りなく近い位置関係を示しているものと考えられる。土器は円筒下層b2式で、本遺構の時期も同時期と判断される。(小笠原)

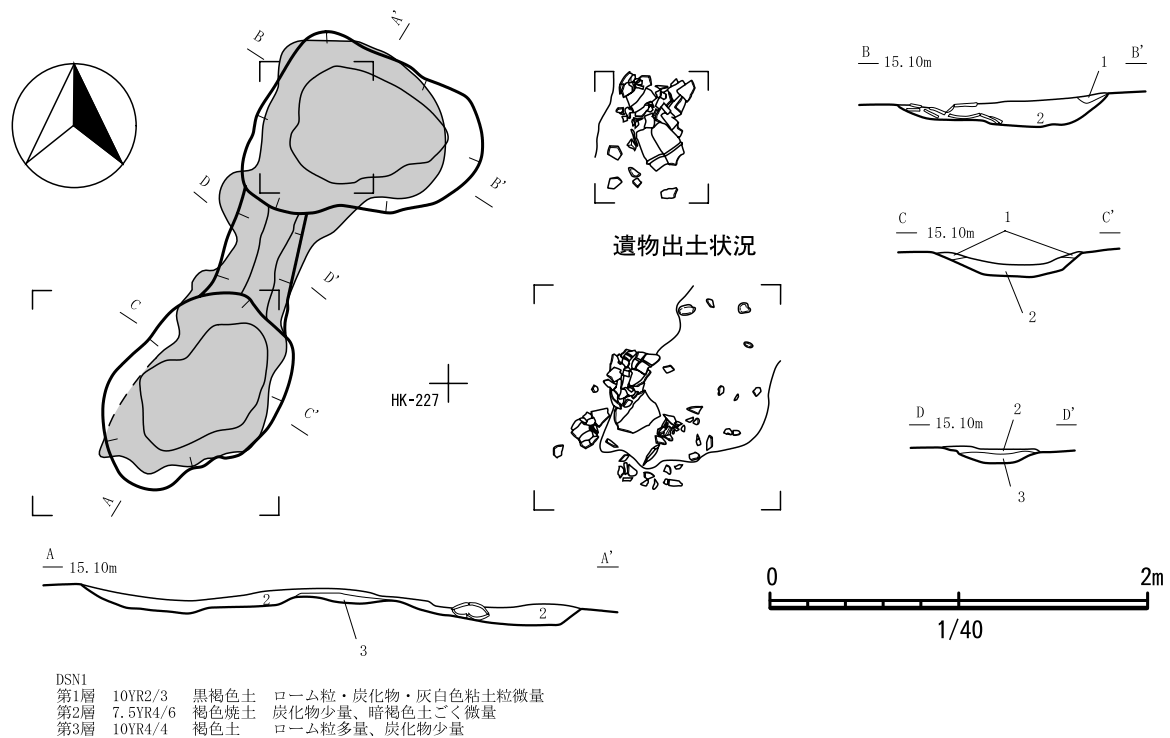


図68 第D 1号焼土遺構

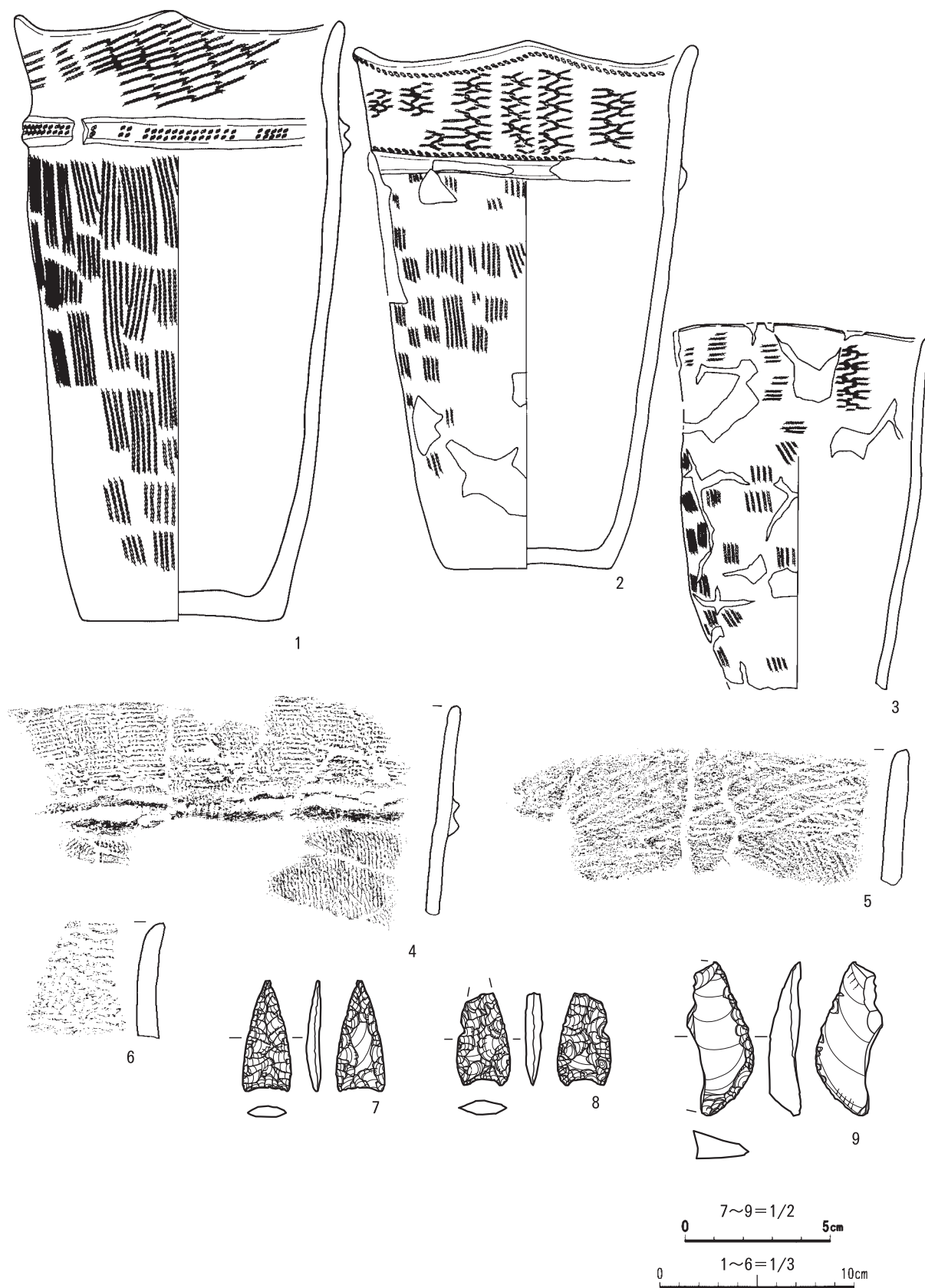


图69 第D 1号烧土遺構出土遺物

6 性格不明遺構

第D1号性格不明遺構 (図70)

[位置・確認] GT～HA-217に位置する。不整形のローム質土が混在した黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複] なし。ただし、北東側が調査区外で南西側は下水のヒューム管埋設により壊されている。

[平面形・規模] 全体の平面形・規模は不明である。壁のプランが不整形であることから、第D2号性格不明遺構と同様、目的とする「形」がなかった可能性が高い。

[壁・底面] 壁は全体に緩く外傾して立ち上がる部分が多いが、ほぼ垂直だったり、わずかではあるが底面近くが袋状に掘り込まれたりと一定しない。底面は凹凸があるが漸移的であり、次の第D2号性格不明遺構で見られたような掘り込みが連続するものではない。

[出土遺物] 堆積土中から十腰内 式土器が出土した。

第D2号性格不明遺構 (図71)

[位置・確認] HB～E-220～223に位置する。不整形の黒褐色土や不均質なローム質土の広がりとして確認した。

[重複] 堆積土としては重複関係がわかる部分もあるが、基本的には一連のものとして判断した。

[平面形・規模] 北西-南東に不整形に広がるプランで、最大値で北西-南東側では約17m、北東-南西側では約9mである。特に「形」を意識して掘り込まれたものとは思えず、場所によって計測値の振幅が大きい。

[壁・底面] 壁は垂直ないしやや外傾して掘り込まれる。所々には第 層だけ袋状に掘り込まれていることが確認された。底面は第 層まで掘り込まれている部分もあるが、大部分は第 層まで達しており、50～100cmほどの落ち込みが連続する部分が多い。

[堆積土] ローム質土を主体とする層と、黒～黒褐色土が主体となる部分がある。前者は人為的(壁の崩落土も含まれる)、後者はより人為的な堆積と考えられる。堆積土の断面観察によって巨視的に判断すれば、南西側が北西側より堆積順が古いと思われる。つまり、南西側がより早く掘り込まれ、それが埋まり(埋められ)つつ、北西側へと変化していった可能性がある。それと対応するように南西側ではローム質土を主体とする堆積土が主で、北西側では黒色土を主体とした堆積土である。当初の開口部にローム質土を廃棄しながら掘り込みが続けられ、廃棄された最終段階ではそのまま放棄されたものではないかと思われる。

[出土遺物] 堆積土中から十腰内 式土器が出土した。 (小笠原)

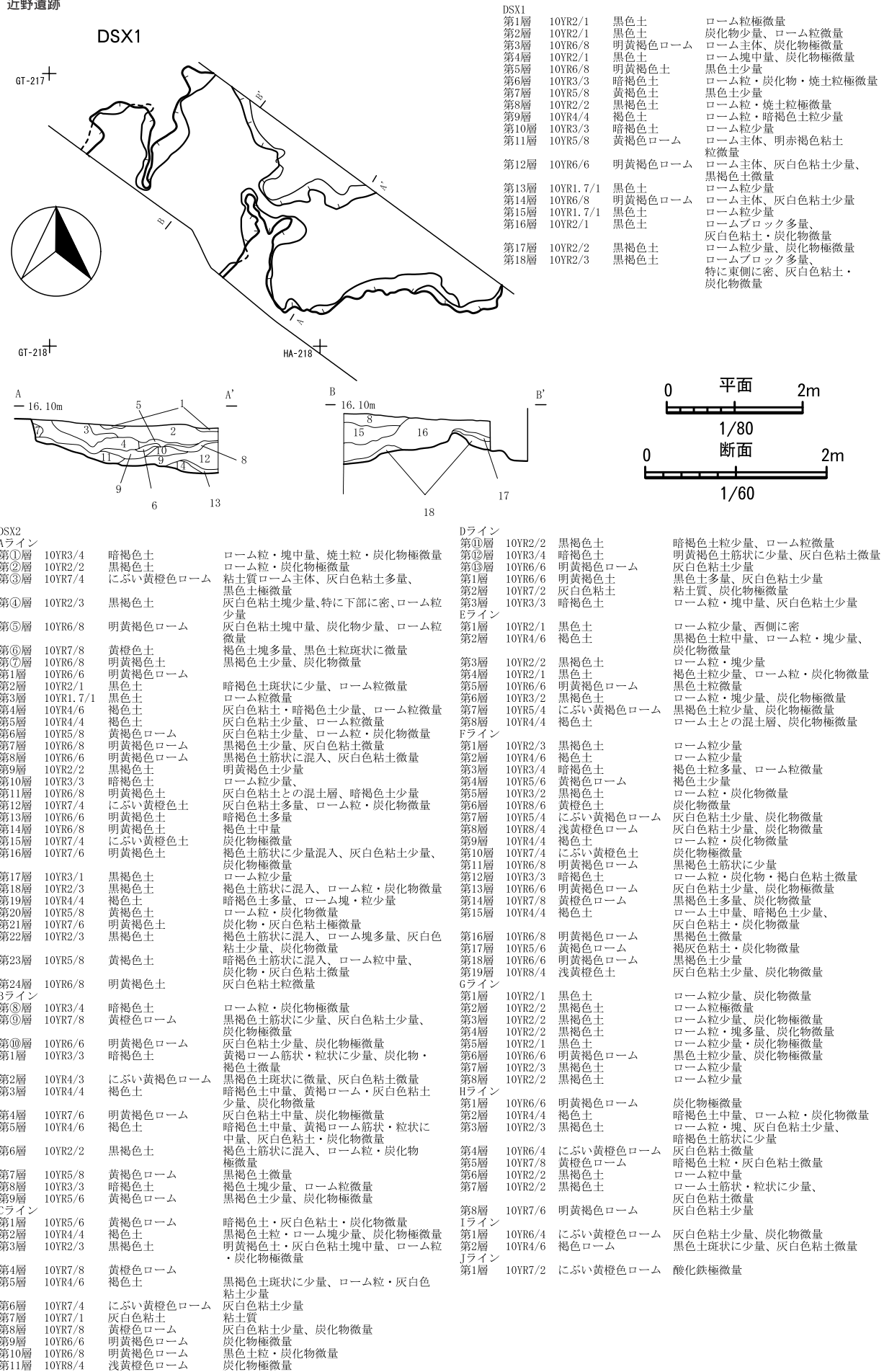


図70 第D1号性格不明遺構

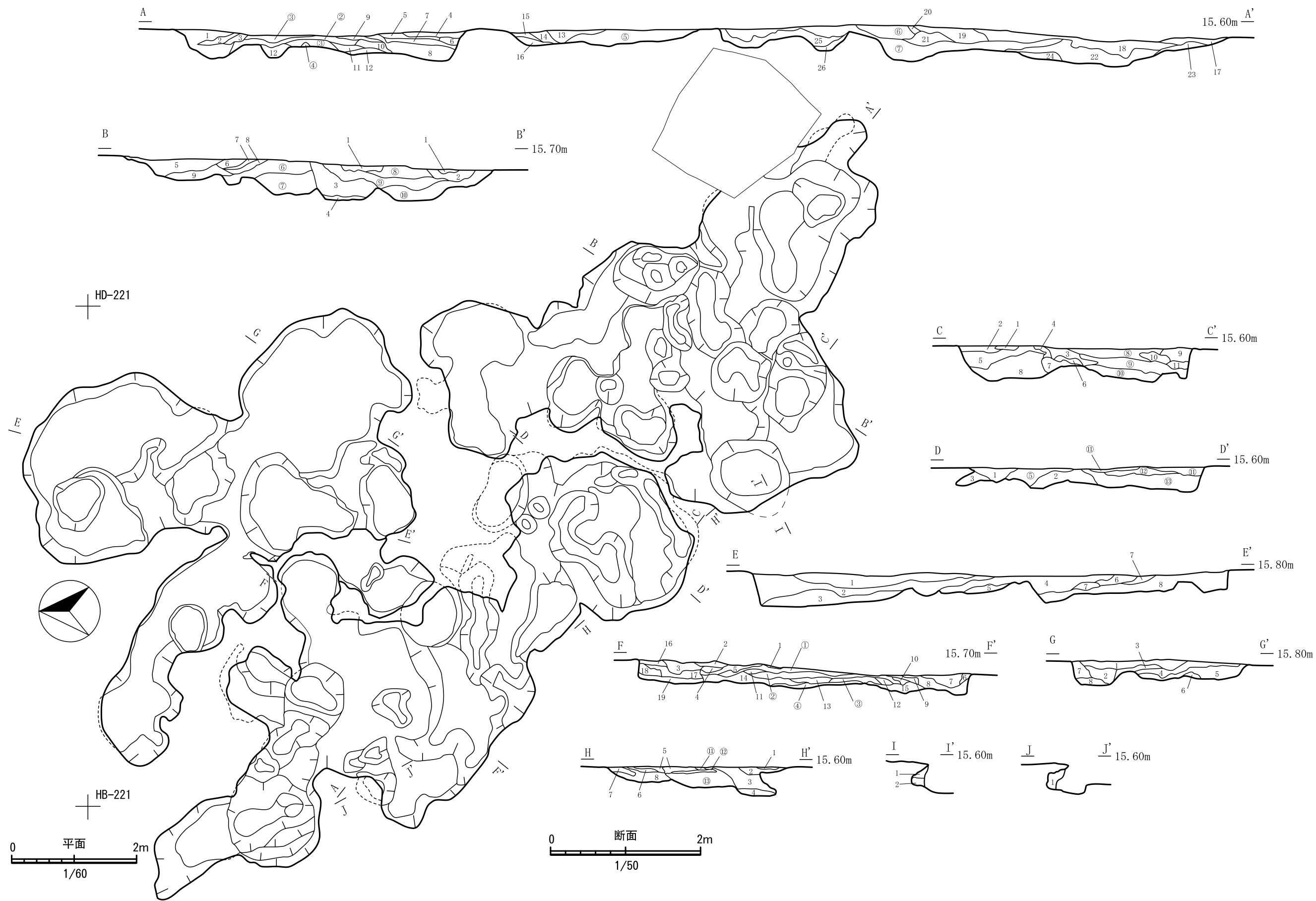


図71 第D2号性格不明遺構

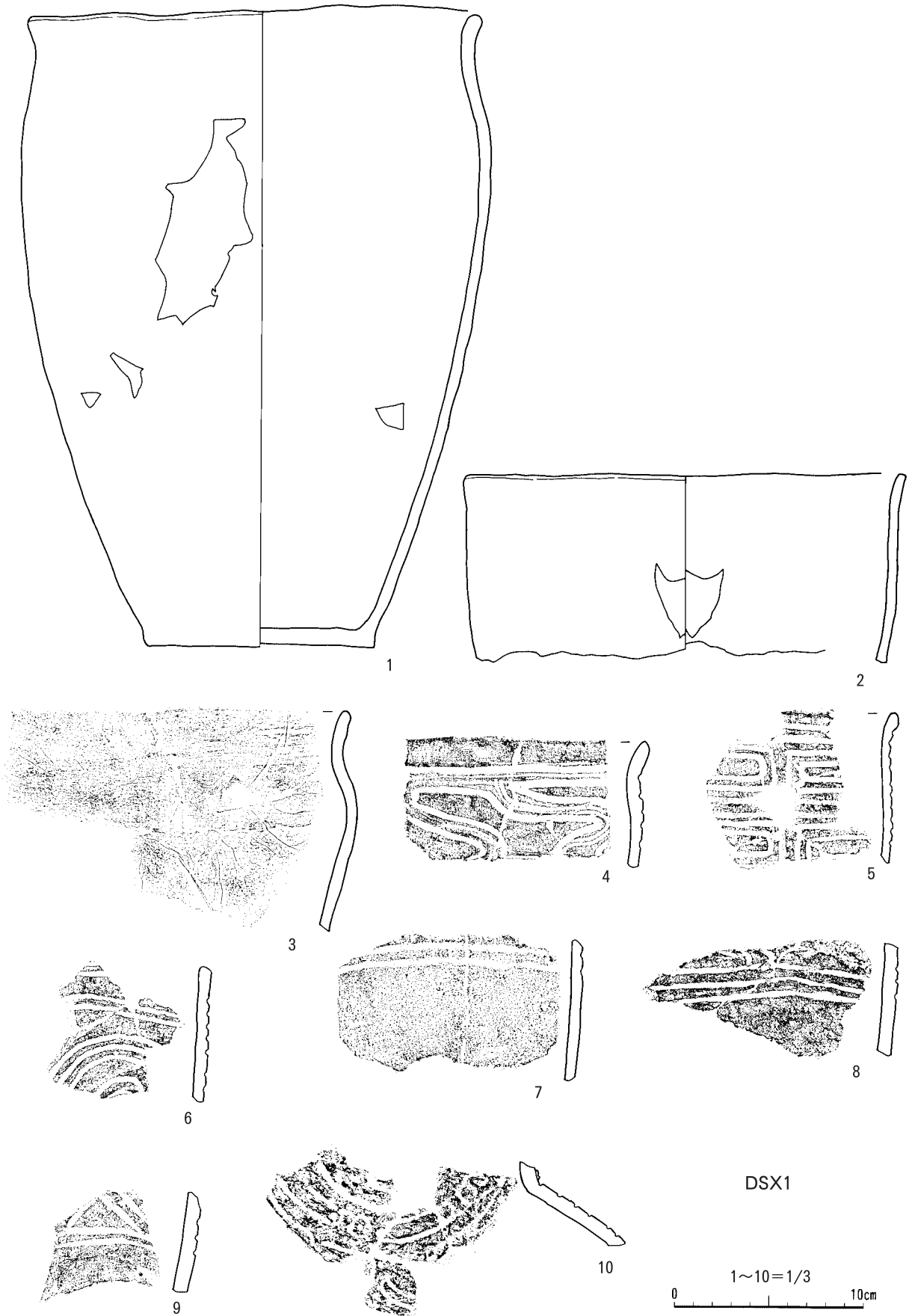


図72 第D区性格不明遺構出土遺物

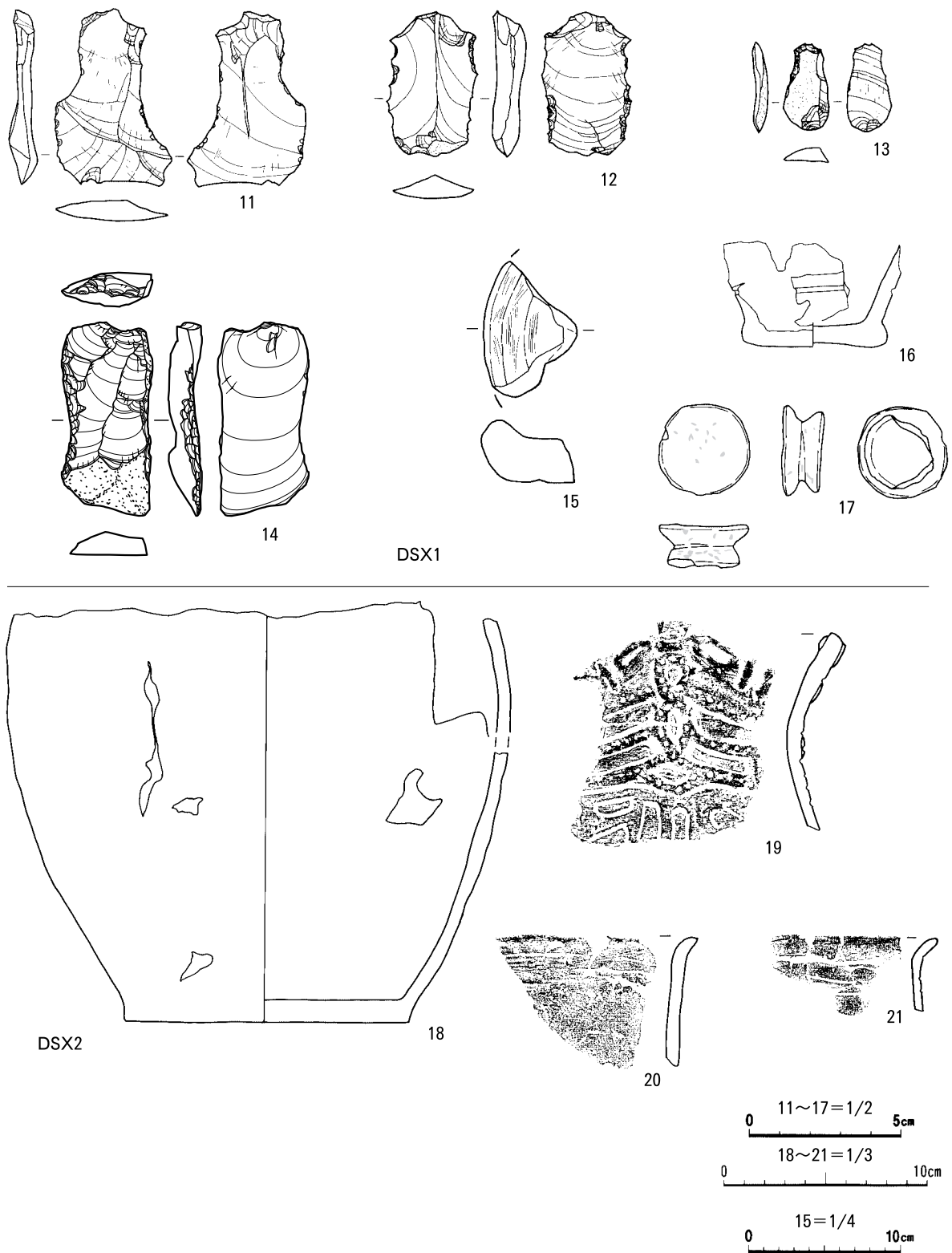


图73 D区性格不明遺構出土遺物

第2節 平安時代の検出遺構と遺物

1 竪穴住居跡

第D1号竪穴住居跡 (図74)

[位置・確認] H S・T - 231・232に位置する。第 層上面の標高15.9m前後の平坦地で検出した。

[重複] 他の遺構との重複はないが、上面は削平され壁は確認されず、床面と掘方のみが残存していた。また、溝状の攪乱が入っている。

[平面形・規模] 確認できた範囲では、南西壁で3.5m、北西壁で3.1m以上の方形と見られる。カマドの位置を本遺跡で主体を占める南東側とすれば、主軸方位はN - 140° - Eほどである。

[壁・床面] 前述のとおり壁は確認されていない。床面はローム質土を多量に含む貼床が見られ、平坦である。

[壁溝] 確認されなかった。

[柱穴] 床面から柱穴の可能性のあるピットが2個検出された。Pit 3は円形の、Pit 4はやや方形に近い掘方で、深さはPit 3・4とも50cmほどの深さである。Pit 4では断面観察により柱痕が確認された。ただし、両者はそれぞれ北東壁と南西壁のほぼ中央から確認されたものの、それ以外のピットは確認されず上屋構造については不明な点が多い。

[カマド] 床面南隅付近で焼土と白色粘土を確認した。カマド火床面及び構築材の一部と見られる。上述のとおり検出位置から、カマドは南東壁のやや南寄りに設置されていたものと思われる。焼土は径40～50cmで不連続に確認され、壁から80cmほど離れて形成された火床面と考えられる。焼土の厚さは2～3cmほどである。

[その他] 床面北隅と西隅で土坑を確認した。Pit 1は長軸140cm、短軸90cmほどの長方形である。深さは約50cmである。Pit 2は長軸70cm、短軸40cmほどの長楕円形で、深さは約30cmである。双方とも主体をしめる堆積土はロームと黒色土の混土層で、人為的な堆積状況を示す。上面には貼床は見られなかったため、住居機能時には開口していたものと思われるが、判断が難しい。また、貼床除去後、2基の土坑を検出した。Pit 5は長軸160cm、短軸105cmほどの長方形である。深さは約20cmである。Pit 6は長軸260cm、短軸140cmほどの短辺の一方が窄まる台形に近い形状で、深さは約20cmである。Pit 5・6とも底面には凹凸が見られ、一定しない。Pitと表記したが、掘方の可能性が高い。

[堆積土] 住居跡内の堆積土は観察できなかった。

[出土遺物] ピット内や貼床内から土師器甕・坏などがわずかに出土した。 (小笠原)

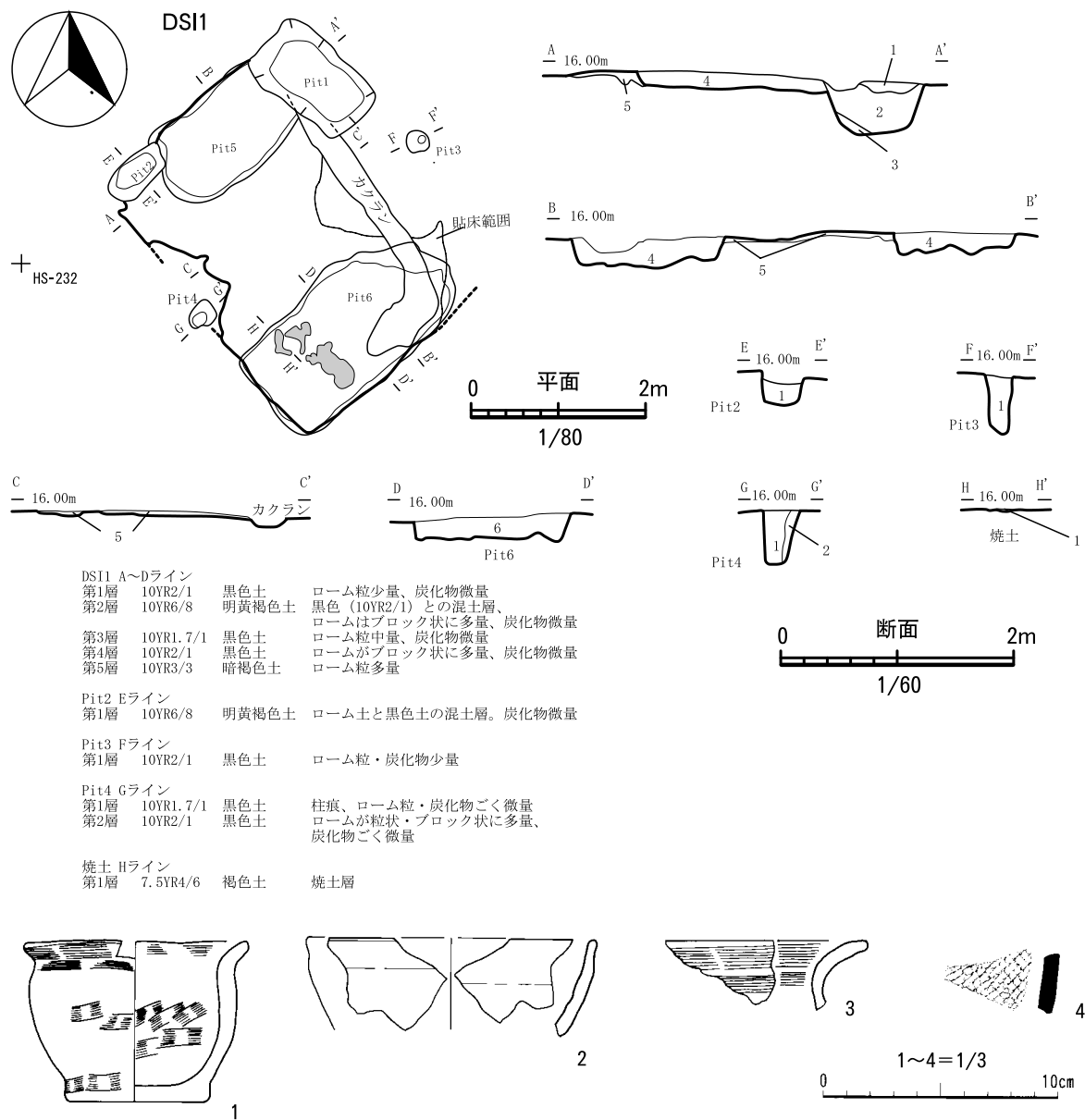


図74 第D1号竪穴住居跡・出土遺物

2 土坑

第D5号土坑 (図75)

斜面に構築された浅い土坑で、底面西側には径90cm程の円形ピットが掘りこまれている。堆積状況からこのピットはDSK5に伴うものと考えられる。堆積土は黒褐色土主体で、1層中では火山灰ブロックが混入する。この範囲は土坑中央で広がる。2・3層中には炭化物が多く混入し、底面では、中央部分から壁際にかけて出土した。底面はほぼ平坦で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。円形ピットの底面は起伏があり、湧水する。堆積土はローム塊と暗黒色土との混合土である。遺物は出土しなかったが、火山灰の堆積状況から古代の土坑と考えられる。 (坂本)

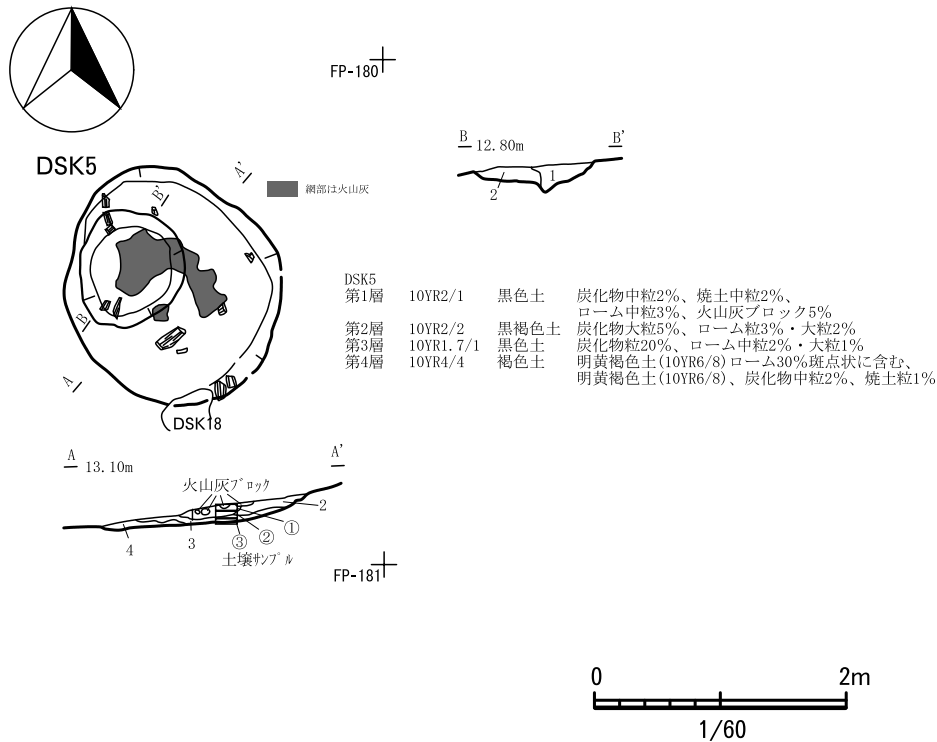


図75 D区土坑 (平安時代)

第3節 時期不明の検出遺構と遺物

1 掘立柱建物跡

第D1号掘立柱建物跡 確認のみ

[位置・確認] GE - 186・187に位置する。第1層上面で検出した。長軸方向はN - 26° - Wである。

[平面形・規模] 南北方向柱列2間×東西方向柱列1間の建物跡で、平面形はほぼ長方形である。桁行長3.36m、梁行長2.08m、柱穴間隔は、1.10m～1.20mである。掘方は、平面形がほぼ円形で、径16～22cmである。

[堆積土] 検出面は黒褐色土主体である。

[時期] 出土遺物もなく、時期は不明である。 (坂本)

2 土坑

第D1号土坑 (図76)

HE - 220に位置する。形態は長径160cm、短径135cmのやや楕円形に近い。深さは40cmである。堆積土は黒～暗褐色土で、主体となる第1・2層はローム粒が多量に混入し、人為的な堆積の可能性が高い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面にはやや凹凸が見られたほか、壁際から楕円形状の落ち込みを3ヶ所検出した。深さは10cm前後と浅い。出土遺物はなく、時期は不明である。 (小笠原)

第D3号土坑 (図76)

平面形全体は方形だが、不整楕円形の窪みに長方形の浅い掘りこみが隣接している。堆積状況や平面形の状況からこれらは一連のものと捉えられる。土坑全体を覆う堆積土は黒褐色土で、やや深い不整楕円形の窪みには暗黒色土が堆積する。底面は、不整楕円形の窪みには起伏があるが、浅い掘りこみはほぼ平坦である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺物は出土せず、時期は不明である。

第D4号土坑 (図76)

黒褐色土主体の堆積土で、全体にローム粒が混入する。底面は根のカクランがあるもののほぼ平坦である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺物は出土せず、時期は不明である。

第D6号土坑 (図76)

黒褐色土主体の堆積土である。底面はほぼ平坦で、壁は底面から中位までほぼ直線的に立ち上がり、中位から確認面にかけてはやや緩やかに立ち上がる。遺物は、底面のほぼ中央で礫石器1点が出土した。時期は不明である。

第D7号土坑 (図76)

堆積土は黒褐色土主体で、一部に暗黒色土を含む。底面は、ほぼ平坦で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺物は出土せず、時期は不明である。

第D8号土坑 (図76)

平面形はやや南東側に張り出す形状の浅い土坑である。底面は全体に起伏があり、東側がやや窪む。壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺物は出土せず、時期は不明である。

第D13号土坑 (図76)

D S K 14・15と重複し、これらよりも新しい。黒褐色土主体の堆積土である。底面はやや起伏がある。壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺物は出土せず、時期は不明である。

第D14号土坑 (図76)

D S K 13・15と重複し、D S K 13よりも古い。D S K 15との重複関係は不明である。堆積土は黒褐色土主体で、暗黒色土と黒褐色土が一部互層になる。底面はほぼ平坦で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺物は出土せず、時期は不明である。

第D15号土坑 (図76)

D S K 13・14と重複し、D S K 13より古い。D S K 14との重複関係は不明である。重複する土坑のなかで最も浅い掘り込みである。黒褐色土主体の堆積土である。底面はやや起伏があり、壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺物は出土せず、時期は不明である。

第D18号土坑 (図76)

D S K 5に隣接するが新旧関係は不明である。黒褐色土主体の堆積土で、全体にローム塊が混入する。底面はやや起伏があり、壁は底面から直線的に立ち上がる。遺物は出土せず、時期は不明である。

第D23号土坑 (図76)

やや直線的でいびつな円形である。上部は黒褐色土主体、下部は暗黒色土主体の堆積土である。8層上面にはローム塊が混入する。底面はほぼ平坦である。断面形状は、底面から壁の中位にかけてやや袋状で、中位から検出面にかけては直線的である。遺物は出土せず、時期は不明である。

第D24～28号土坑 確認のみ

確認作業のみ行ったもので、標高14mの平坦地に立地する。計測値等は土坑計測表に記載した。

第D29号土坑 (図76)

板状の灰黄褐色粘土と黄褐色土の堆積する浅い土坑である。粘土は検出面ではおよそ60cm、厚さ最大10cmの範囲で土坑全体に広がる。遺物は出土せず、時期は不明である。 (坂本)

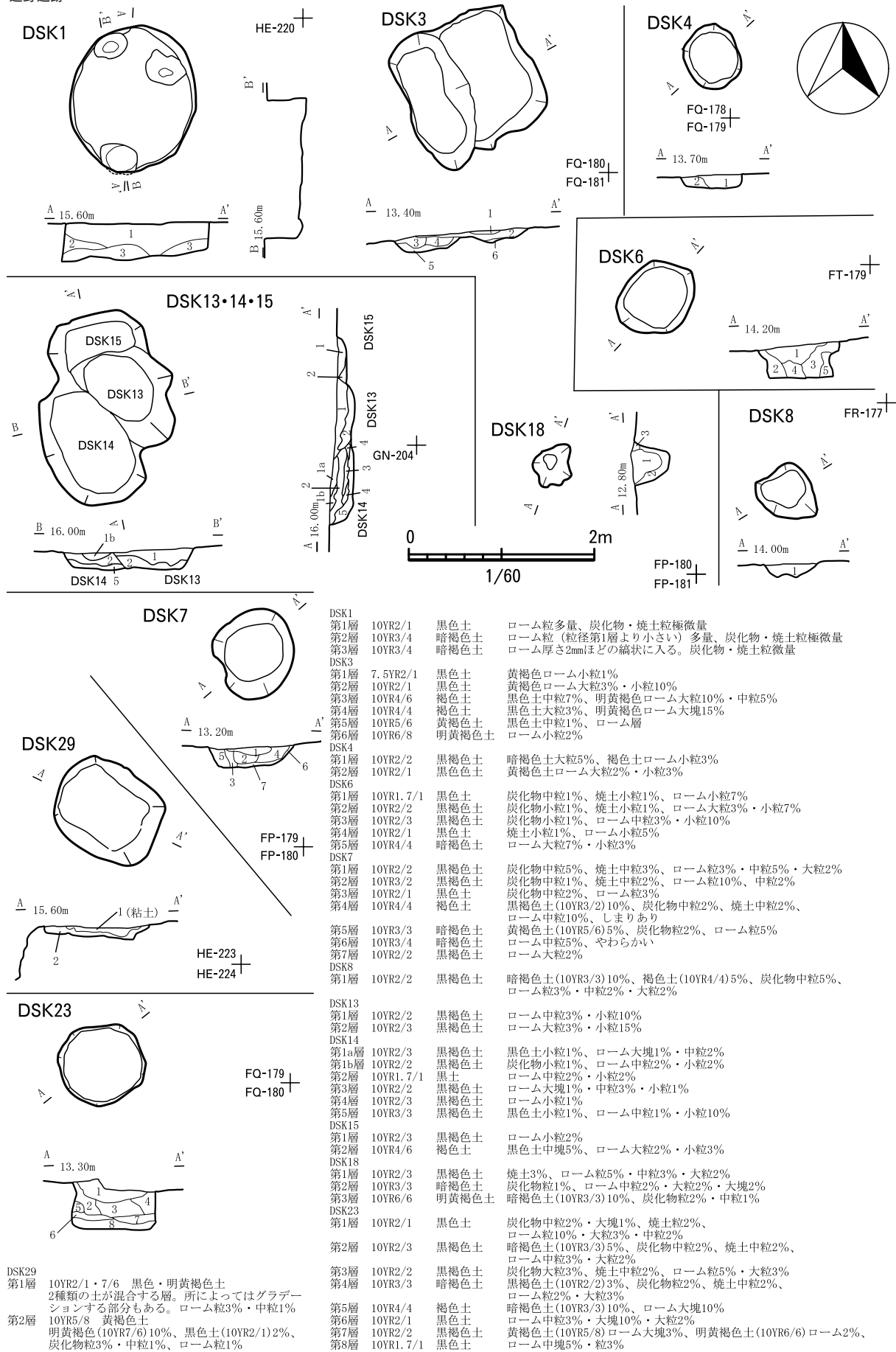


図76 D区土坑 (時期不明)

3 溝跡

第D2号溝跡 (図77)

[位置・確認] 標高13~16mの緩傾斜地、F P ~ G B - 175~178に位置する。第 層上面で確認した。両端とも調査区域の外に延びており、全体は検出できなかった。

[平面形・規模] 平面形はL字状である。傾斜地に直交してほぼ一直線に構築され、斜面上部では90度屈曲する。規模は、全体の長さ約28.15m、幅35~40cm、深さ8~30cmである。標高15.5m付近で約3mに渡って途切れる。

[壁・床面] 断面形は概ね逆台形状であるが、一部皿状になる。底面はやや起伏があり、溝の高低差は約2.5mで、西側に向かって傾斜している。

[ピット] 標高約13.5m付近で底面に掘り込まれたピットを1個検出した。径16cm、底面からの深さは約20cmである。

[堆積土] 黒褐色土主体の堆積土で、いずれの箇所でも底面直上の堆積土にローム塊やローム粒が混入しているのが確認された。標高15m付近では、検出面で焼土が約20cmの範囲で広がっていた。

[出土遺物] 1層中から縄文時代後期の土器片が出土した。このほか、石篋が出土した。

[時期] 時期は不明だが、溝の区画が現在の土地区画と非常に似通っている。 (坂本)

4 ピット

ピット (PIT 1~3) (図77)

[位置・確認] 調査を行ったピットは3個で、F S - 180・181に位置する。第 層上面で検出された。

[平面形・規模] 平面形は、すべて円形で、規模はPIT 1 - 径24cm、深さ20cm、PIT 2 - 径41cm、深さ8cm、PIT 3 - 径28cm、深さ28cmである。

[堆積土] すべて黒褐色土主体の堆積土である。

[時期] 時期は不明である。 (坂本)

ピット (PIT 4~11) 確認のみ

確認作業のみ行ったもので、標高14mの平坦地に立地する。PIT 7~9は、列状の配置を成すと思われる。

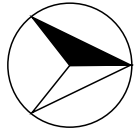
D区PIT計測表

番号	グリッド	検出面	規模		備考
			平面形	検出面	
PIT 4	GB-182		円	(28) × (24)	
PIT 5	GB-183		楕円	(46) × (32)	
PIT 6	GA-184		楕円	(34) × (24)	
PIT 7	GE-186		円	(18) × (14)	ピット列?
PIT 8	GE-186		楕円	(23) × (12)	ピット列?
PIT 9	GF-186		円	(20) × (20)	ピット列?
PIT10	GO-207		円	(40) × (36)	
PIT11	GO-208		円	(22) × (18)	

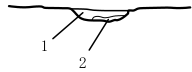
近野遺跡

FP-179
FQ-179

FP-178
FQ-178



A 13.70m A'



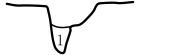
B 15.30m 焼土 B'



C 15.90m C'



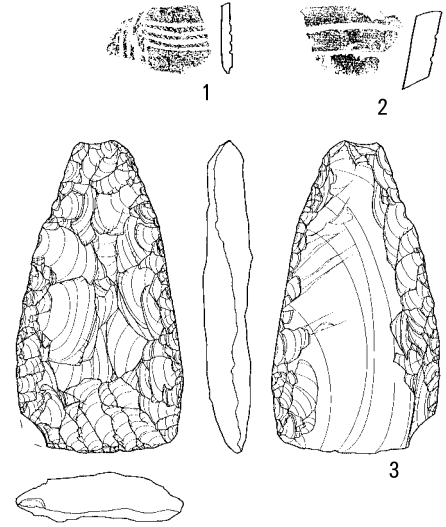
D 13.80m D'



断面 2m
1/60

FS-177
FT-177

FS-176
FT-176



0 3=1/2 5cm
0 1~2=1/3 10cm

DSD2

Aライン

第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム中粒1%・大粒2%
第2層 10YR4/6 褐色土 黒褐色土(10YR2/3)5%、ローム大粒1%・粒10%

Bライン

第1層 10YR2/2 黒褐色土 褐色土(7.5YR4/4)15%、黒色土(7.5YR4/4)15%、黒色土(10YR1.7/1)20%、炭化物大粒5%、焼土15%
第2層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物大粒2%、焼土粒2%、ローム中粒2%・大塊1%

Dライン

第1層 10YR2/1 黒色土 炭化物中粒3%、ローム粒5%・中粒2%

0 平面 5m
1/100

Cライン

第1層 10YR2/1 黒色土 ローム小粒1%
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム大粒3%・小粒2%
第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム大粒2%・小粒5%
第4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム大塊30%・小粒10%
第5層 10YR3/3 暗褐色土 ローム中粒7%・小粒5%

DPIT1

第1層 10YR2/2 黒褐色土
ローム粒2%、炭化物中粒2%
第2層 10YR2/1 黒色土
ローム粒5%、炭化物粒2%



DPIT2

第1層 10YR2/3 黒褐色土
ローム粒3%、焼土中粒1%

FR-181

DPIT3

第1層 10YR2/2 黒褐色土
暗褐色土5%、ローム粒3%、
炭化物粒1%
第2層 10YR2/3 黒褐色土
ローム粒2%
第3層 10YR5/6 黄褐色土
暗褐色土5%、炭化物粒1%



FS-181

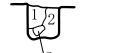


PIT2



PIT1

C 13.50m C'



0 平面 2m

1/80

0 断面 2m

1/60

GB-176
GC-176

GC-175

図77 第D2号溝跡、ピット・出土遺物

第4節 谷の調査

1 概要

D区の谷部（調査D2区）は県道路線部分の調査である。調査した谷の範囲は長さが17m、谷幅は上流側で15m、下流側で20mの約300m²である。谷底面の標高は9.2～9.6mで、台地との比高差は約5mである。

谷の末端部の状況については、先行して行ったD区台地部のトレンチ調査にて確認できた。谷の南側GA190以南では、谷部は確認されず、基本層序第 層面を検出した。標高は13mである。D区の谷は予想よりも短く、南北方向グリッド187ライン前後で立ち上がるようである。谷の全長は30m前後と考えられる。

谷はやや東に湾曲しながら、南から北方向に流れる。その先は三内丸山遺跡の南の谷と合流し、沖館川へと続く。

谷は底面幅が狭い、V字状を呈する。下流に向かって谷右側斜面（D区台地側）には、テラス状に広がる箇所が認められる。左側斜面（E区台地側）は、右側斜面に比べると傾斜が緩やかである。特に標高11m以上は、等高線の間隔が広くなり、右側斜面とは対照的である。

2 堆積土

谷の堆積土は、先に調査した本遺跡の大谷F区（『近野遺跡』収録）の層序に基づき、層序番号を付した。D区谷断面図中の層序番号は、断面毎に個別に付した。個別の層序番号は明朝の算用数字（1、2、3層）を用いた。ゴシック数字（1、2、3層）はF区谷の層序と対応する。

谷の基本層序（詳細は『近野遺跡』を参照）

第1層	10YR3/1	黒褐色土主体	ローム粒、暗褐色土混入。	中世以降の堆積層
第2層	10YR2/1	黒色土主体	植物繊維40%、ローム粒混入。	中世以降の堆積層
第3層	10YR5/6	褐色土主体	ローム粒、黄褐色土、黒褐色土混入。	中世以降の堆積層
第4層	10YR5/8	黄褐色ローム主体	褐色土、褐灰色土混入。	（無遺物：崩落土）
第5層	10YR3/3	暗褐色土主体	植物繊維50%混入。	中世以降の堆積層
第6層	10YR2/1	黒色土主体	植物繊維20%、褐灰色粘土塊5%混入。	中世以降の堆積層
第7層	10YR3/4	暗褐色土主体	植物繊維30%、ローム粒・砂粒混入。	平安時代の堆積層
第8層	白頭山火山灰層			
第9層	10YR3/3	暗褐色土主体	植物繊維20%、砂30%、火山灰塊部分的に混入。	平安時代の堆積層
第10層	10YR3/2	黒褐色土主体	砂との混合土。植物繊維20%混入。	平安時代の堆積層
第11層	10YT4/2	灰黄褐色砂主体	植物繊維・暗褐色土各10%混入。	（無遺物：砂）
第12層	10YR2/1	黒色土主体	泥炭層。植物繊維多量混入。	縄文時代の堆積層
第13層	10YR5/4	にぶい黄褐色ローム		（無遺物：崩落土）
第14層	10YR3/2	黒褐色土主体	泥炭層。砂との混合土。	縄文時代の堆積層

第15層	10YR5/1	褐灰色砂主体	部分的に黒褐色土（泥炭層）混入。	縄文時代の遺物含む。
第16層	10YR5/4	にぶい黄褐色ローム	13層V-比べ、青味を帯びる。	（無遺物：地山・基盤面）

ベルトは約4m間隔で谷を横切る位置に設定した。このなかで、4カ所を図示した（図78～80）。谷北壁（層序A）と南壁（層序D）は第1層から、ベルト6（層序B）・5（層序C）は白頭山火山灰除去後の第9層から分層し、図化した。

第1～6層相当（中世以降の層）：谷全体に堆積する。中央で部分的に泥炭化するが、大半は乾いた状態である。F区谷でみられた第3・4層相当の崩落土は右側斜面（D区側）で確認された。

第7層相当（平安時代の層）：第8層の白頭山火山灰層の上に、均一な厚さで堆積する。厚さは40cmである。

第8層（白頭山火山灰層）：谷全面に層状堆積する。厚さは約10cmである。左岸の斜面（E区側）に沿って斜めに堆積するが、右岸では水平に堆積する。火山灰が確認されていない谷中央部の幅約2mが当時の流路に相当する。流路は大きく蛇行し、下流側では幅が狭く、右岸に砂層がみとめられることから、途中から水の流れが変化していたことが考えられる。

第9・10層相当（平安時代の層）：砂や褐色粘土・植物繊維を含む。堆積状況は火山灰と同様、右岸では水平に堆積する。厚さは下流では30cm、上流では10cmほどである。木製品・自然木・種子を多量に含む。

第11層相当（砂層）：D区谷では、F区ほど明瞭に確認されず、断続的にみられる。厚さは10～20cmである。

第12～15層相当（縄文時代の層）：谷中央部に堆積する。幅は1m未満で、深さは50cmほどである。縄文時代の流路幅は狭く、V字谷であったことが想定される。平安時代のように大きく蛇行していない。縄文時代の堆積層は左岸では斜面に沿って斜めに堆積するが、右岸は砂質ロームに覆われている。黒褐色土の泥炭層を主体とするが、堆積層下位では褐色砂と黒褐色土が幾重にも互層する。

第16層相当（縄文時代以前）：下流部左岸では縄文時代の包含層の下、砂質ロームを30cm掘り下げた面で自然木が確認された（図82）。自然木は谷底面に横たわり、長さ2m、幅20～40cmの大木であった。自然木の炭素年代測定結果は約31390±230年前であった。樹種は確定されていないが、針葉樹の可能性が高い。

この結果は、B区とF区で確認された針葉樹の埋没樹と同等の年代観である。出土した層も縄文時代の包含層の下に堆積する砂質ロームまたは砂質粘土である。ただ、縄文時代の包含層からの深さは各地点で異なる。西側のB区では遺構確認面から6m下と深く、F区では谷底部で検出された第1号木組遺構の底面から80cm直下で出土した。最も東側に位置するD区谷では30cmと浅い。また、出土した標高でみると、D区とF区は約9m、B区は12mと段丘側では高くなる。

テラス状の広がり（崩落土）について

右岸に平坦なテラス状の広がりが2ヶ所確認された。下流側の標高10mと上流側の標高10.5m付近にみられる。北壁・南壁の断面にて、白頭山火山灰と平安時代の堆積層（第9・10層相当）が水平に堆積する部分である。

平安時代の堆積土を除去すると、基盤面である砂質ローム面が検出する。このローム面は谷中央まで広がり、縄文時代の堆積層を覆っている。ロームの下に縄文時代の包含層が潜ることから、このロームは縄文時代以降、白頭山火山灰降下以前に堆積したものといえる。調査時に、右岸は湧水により基盤面が脆弱になり、部分的に斜面が滑落することが確認された。この平坦面は、このように湧水により弱くなった斜面の崩落によって形成されたものと考えられる。また、縄文時代の流路の底面は下流側にて確認できたが、上流側で確認できなかったのは、この崩落土が、左岸まで達し、流路を塞いだことに起因する。縄文時代の流路が塞がれたことにより、流路が右岸よりに移行したものと想定される。そして、平安時代の面で確認されたような流路に変化したものと考えられる。

このような崩落土はF区でも確認されている。F区では大規模な斜面の崩落が、縄文時代中期末から後期の境に発生したものと考えられる。F区崩落面上の堆積土中に縄文時代後期の遺物が含まれ、崩落土の1m直下から前期・中期の遺物が出土する状況を確認できたことで時期を特定した。D区では、このような状況を明確には確認できなかった。後期の遺物は、主に下流側の流路から出土しており、中期の遺物と混在するため、中期と後期の包含層を区分することは出来なかった。F区の崩落土のように特定できないが、D区の崩落がF区と同じ頃に起こった可能性も考えられる。

註) 崩落土の形成・埋没樹を含めた近野遺跡周辺の地質については、『近野遺跡』第1章第6節で山口義伸氏によって報告されている。詳細はこちらを参照頂きたい。

3 平安時代の包含層について (図83)

平安時代の遺物は谷全体から出土している。遺物は自然木が大半を占めるが、土師器や木製品も出土している。土師器は坏の破片が多くみられる。木製品は加工が明瞭なものは少なく、割材・板材・自然木の端部を加工したものなどである。谷中央部から下流にかけて、板材など加工材が集中している。また、自然木ではあるが、ヤチダモの枝の集中する箇所も確認された。明確は人為な痕跡は、左岸で検出した杭である。杭は白頭山火山灰の上位、谷基本層序第7層中で3本確認した。杭は長さ35～40cm、幅4～5cm、厚さ2cmの板材で、谷底面に向かい、斜面に沿って斜めに打ち込まれている。杭の上流側には板材がまとまっていることから、板材と関連した設備の一部として設置されたことも予想される。

4 縄文時代の包含層について (図81・82)

縄文時代の遺物は主に下流側で確認された。上流側では、崩落土に覆われた箇所が多いため、遺物は崩落土の下面で出土した。主に前期・中期の遺物が確認されているが、後期以降の遺物も少なからずみられる。下流側では土器・石器のほか、種子が堆積土全体に含まれる。主にトチノキの種皮片が散在する。トチノキの種皮片は包含層の上位に多く、特にまとまる箇所が左岸で確認された(トチ範囲S×1)。この層には中期後半から後期の遺物が多く含まれている。下位では砂層と黒褐色土層が互層し、これらにトチの破片が混入する。上位にくらべ、集積といえるまとまりは認められなかった。下位では中期後葉の遺物が目立つが、その他の時期の土器片も出土している。トチノキの破片が含まれる堆積土を回収し、水洗選別を行った。この結果(第4章第5節参照)から、D区谷のトチノキの破片は、F区で検出されたトチノキ種皮片集積遺構のように廃棄されたものではなく、自然堆積の様

相が高い。

トチノキの破片が集中する周辺からも木質遺物が多量に出土したが、F区のような遺構や人為的痕跡は確認されなかった。図82中のW-305はトチノキの集積に関連する板材と思われたが、固定する杭がないこと、遺物の劣化が激しく明瞭な加工がみられないことから、加工材とは断定できなかった。明瞭な加工痕跡が認められた木製品は図化（図93）したもののみである。この中で、把手付きの木鉢が注目される。木鉢は、縄文時代の包含層下位に位置する。トチノキの破片を多量に含む上位層直下の谷基本層序第13層相当の崩落した砂質粘土中から出土した。

F区は縄文時代中期後半を主体とし、利用された谷である。これに対し、D区谷は明瞭な遺構・施設が確認されてないが、出土遺物から縄文時代中期後葉から後期にかけて利用された谷と言える。

また、トチノキの利用に関しては、中期後葉にはすでに利用していた可能性が高い。（杉野森）

5 出土遺物

1) 土器

平安時代の土器（図84）…谷基本層序第9層を主体とし、第7～10層から出土した。図示したのは土師器の坏で、土師器甕は破片が少量出土したのみである。1・2はロク口成形後、内面にミガキ調整・黒色処理が施されたものである。3は器高が低く皿形に近いもので、他の坏に比べ器厚が厚い。7はロク口不使用の坏で、器高が高い。外面胴部はケズリ調整が顕著で、内面は横方向のナデ調整である。8は高台付坏である。（小笠原）

弥生時代の土器（図84）…谷（D2区）からは弥生時代のものと思われる土器片が10点出土し、そのうち6点を図示した。掲載していない4点の遺物は地文縄文のみのももの3点、摩滅している小片1点である。

9は口唇部に一定方向からの刺突が施される甕口縁部片である。他の弥生時代の遺物よりも器厚が厚く、口頸部にはRL斜縄文が、胴部には縦走縄文が施される。

10～13は沈線文と縄文が施文されるもので、14は縄文のみ施文されるものである。10・11は同一個体の甕と思われるもので、胴部がやや膨らむ器形をなす。いずれも胴部文様帯の破片でRL縄文施文後、平行する沈線で挟み、さらに列点を組み合わせて施文しており、大柄な鋸歯文もしくは重層する菱形文をなすものと思われる。青森市小牧野遺跡、大間町烏間遺跡などで類似する資料が出土している。12は列点がないものの、モチーフは10・11と同じと思われる。13は胴部下端の文様帯区画部分で、平行沈線2条と鋸歯文1条の組み合わせからなり、胴部下半には縞縄文が施文される。胴部文様帯には異条のLを撚ったRL原体を使用しており、胴部下半もRL縄文であるが異なった縄を用いている。14は甕胴部破片で、RL原体を用いて縦走する縞縄文としている。

時期的には、9が厚い器厚を有していることや口唇部に刺突が施文されること、しっかりとした縄文を施文するなどの点でやや古い様相を示しており、中期末頃と思われる。10～14は、胴部文様に縄文施文後沈線で縁取る施文手法や縞縄文などの特徴から後期初頭のものと推察される。（神）

縄文時代の土器（図84～20）…15・16は前期の円筒下層式である。17～43は中期の土器で、26までは円筒上層式である。上層式の中でも後半代のもが多い。27～41は大木系の土器で、30～33、41は胴部地文上部に刺突が巡るもので、最花式である。34～36は大木10式で、全面に縄文が施文されるものと、磨消縄文の2種が見られる。46～57は後期の土器で、46～52は十腰内式である。52は格子状の沈線が施文される。53～55は十腰内式で、54・55は沈線を縁取るように刺突が加わる。56・57は後期末の土器片である。60～62は地文のみの深鉢の胴部下半から底部付近で、不明確であるが後期後半を中心とした時期のものと考えられる。63～66は晩期の土器で、63は晩期初頭、66は大洞A式である。

67は後期のミニチュア土器で、台付鉢の底部・台部である。（小笠原）

2) 石器（図88～91）

剥片石器…第12～15層から出土している。総計61点出土した。

石鏃は4点出土した。基部の挟りが深い無茎凹基（1）、かえしに丸みのある有茎凸基（2・3）、棒状のもの（4）に分けられる。石匙は1点（5）で、縦長剥片の末端を摘み部とし、打面側を刃部としている。横断面形は三角形となる。この断面形状から、刃部が尖状となる石錐の可能性もある。削器は2点出土した。6は2辺に連続した調整が施され、刃部角はやや急である。7は左辺に連続した調整がなされ、刃部は鋸歯状となる。石核は9点あり、全て珪質頁岩である。自然面を有するものが多く、残存する大きさから、原石は10cm程度の小振りなものを含んでいたことが考えられる。9は平坦な打面から、10は調整打面からハードハンマーの直接打撃で素材剥片が剥離されている。このほか、二次調整のある剥片13点、剥片24点である。

礫石器…85点出土した。磨り石は20点（10～20）あり、楕円礫の両面に広範囲で平滑な部分がみられるもの、側面または器面に明瞭な磨り面を有するものに区分される。12・16は断面形が三角形となり、全面を敲打または研磨加工がみられる。石冠の未製品と思われる。敲き石は18点で、端部または器面に敲打痕がみられる（21・22・24）。凹み石は15点である。円礫の器面に掘り鉢状の凹みをなす（23・25～29）。28・29は破損した石皿を転用している。石錘は3点出土した。大きさ12cm前後の円礫の長軸方向の両端部を両面加工され、挟りを作る。30は短軸方向にも挟りがある。加工礫は9点で、自然礫の縁辺を部分的に剥離加工されたもの、磨製石斧を素材とし剥離加工されたものがある。石皿・台石は9点出土した。図化した3点以外は破片資料である。このほか、磨製石斧の破片2点、使用痕跡のある礫片が8点出土した。石材はデイサイト、凝灰岩が多く用いられている。

3) 土製品（図92）

三角形土製品1点、ミニチュア土器6点が出土した。2は三脚の小型土器である。

4) 石製品（図92 - 8・9）

2点出土した。8は石棒の頭部である。表面に平滑なすり面があるが、ほかは成形時の敲打痕のままで、研磨された痕跡はみられないことから未製品と思われる。9も未製品で孔が貫通していない。

5) 木製品 (図93・94)

平安時代の木製品...加工痕、使用痕のある木製品が50点出土した。大半が、脆く崩れやすいため、原況を留めているものが少なく、図化できたものは6点である。1～4は杭である。1は丸木を素材とする。工具による、削り痕や切痕が明瞭である。2～3は白頭山火山灰の上層から打ち込まれた杭である。柱目の板材を素材とする。側面や器面に加工があり、4の端部には焦げがみられる。5は丸木の両端部を面取りされている。用途は不明である。6は形状から、機織具と思われる。この他は板材や板状・角状木製品・箸など出土した。

縄文時代の木製品...1は谷南壁ベルト中から出土した杭である。第14層上面で検出し、杭先端は基盤である砂質ローム層まで達する。2は削り痕のあるヤチダモの枝である。このようなヤチダモの枝は破片で多数出土したが、脆弱なため、破片の接合は不可能であった。3は片口鉢である。やや楕円形を呈する。把手は鉢の縁に対し水平に位置する。欠損している把手の反対側は、残りの破片との位置関係および鉢の厚さから、把手が無い可能性が高い。片口鉢と思われる。樹種はクリの木で、木取りは横木である。また、鉢全体に成形時のままの状態でも粗く、成形痕が残存する。仕上げである研磨の痕跡がないことから、成形途中のものと思われる。ただ、谷で出土していることから、形が完成しているため、仕上げが粗い状態で、水汲みなどの作業に使用したことも予想される。(杉野森)

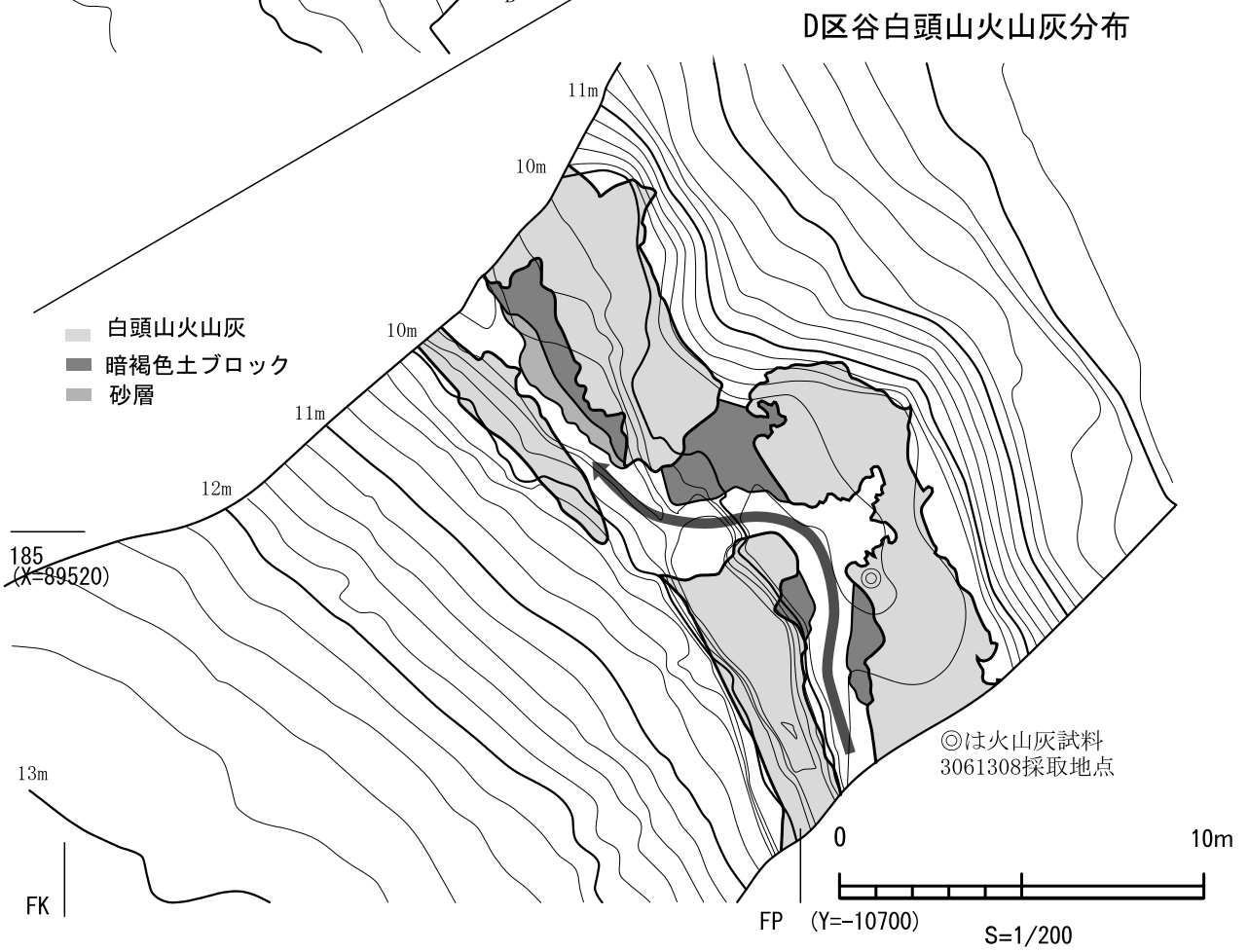
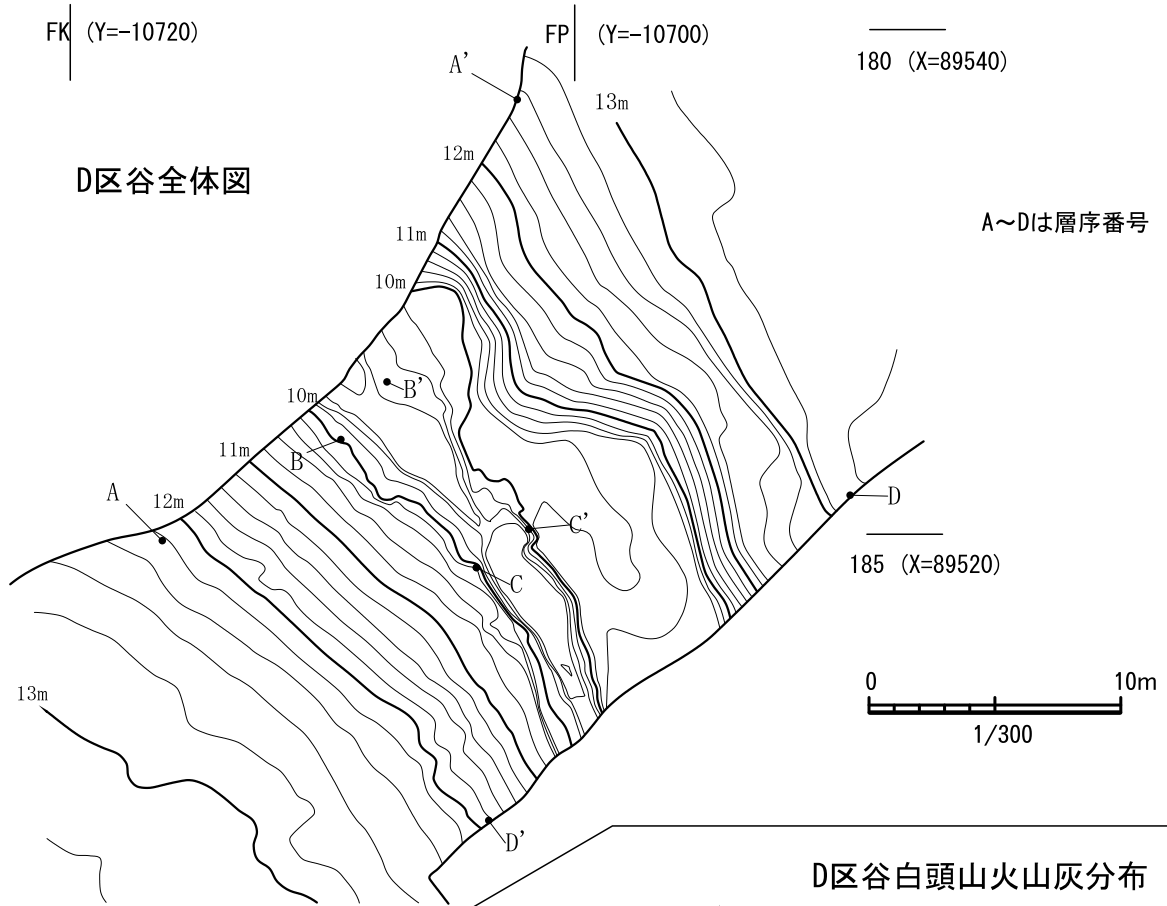


図78 D区谷全体図

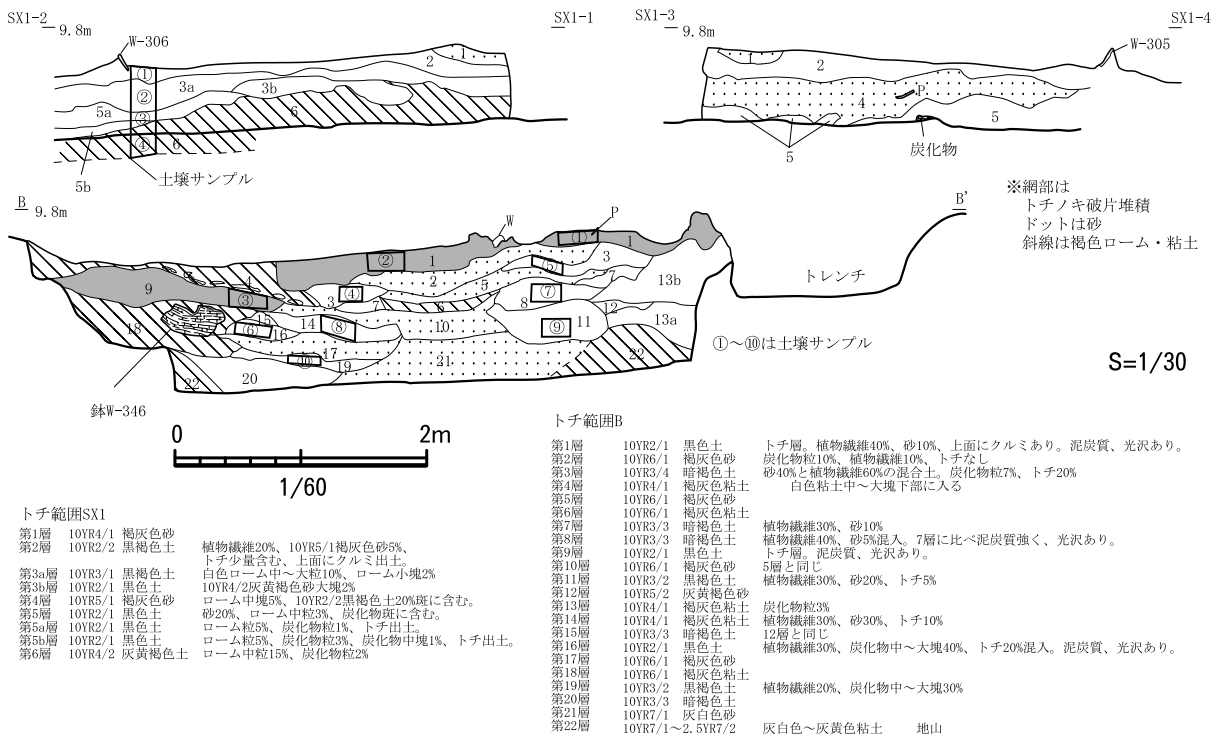
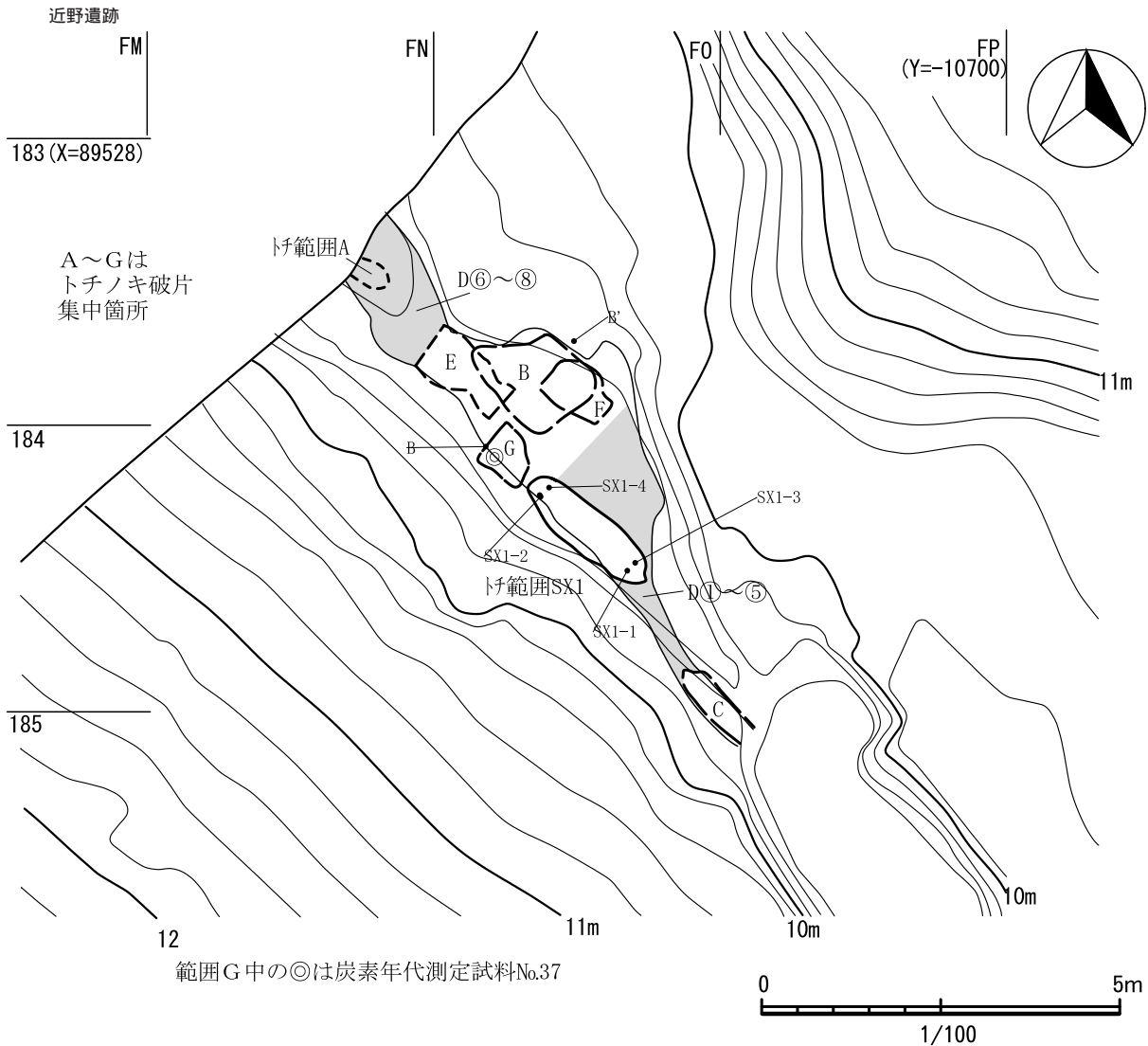


図81 D区谷トチ破片分布状況

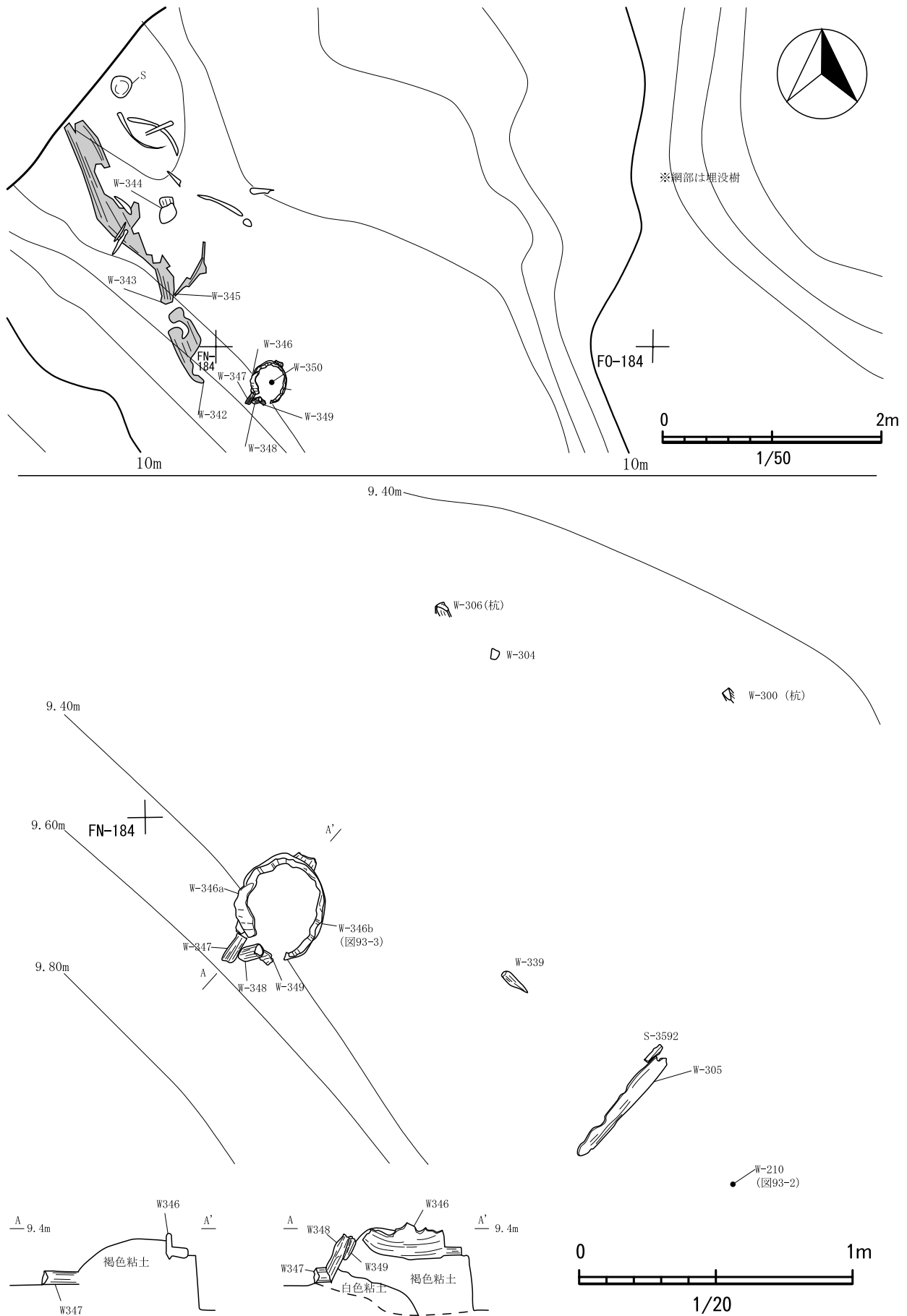


図82 D区谷縄文時代の木質遺物の出土状況

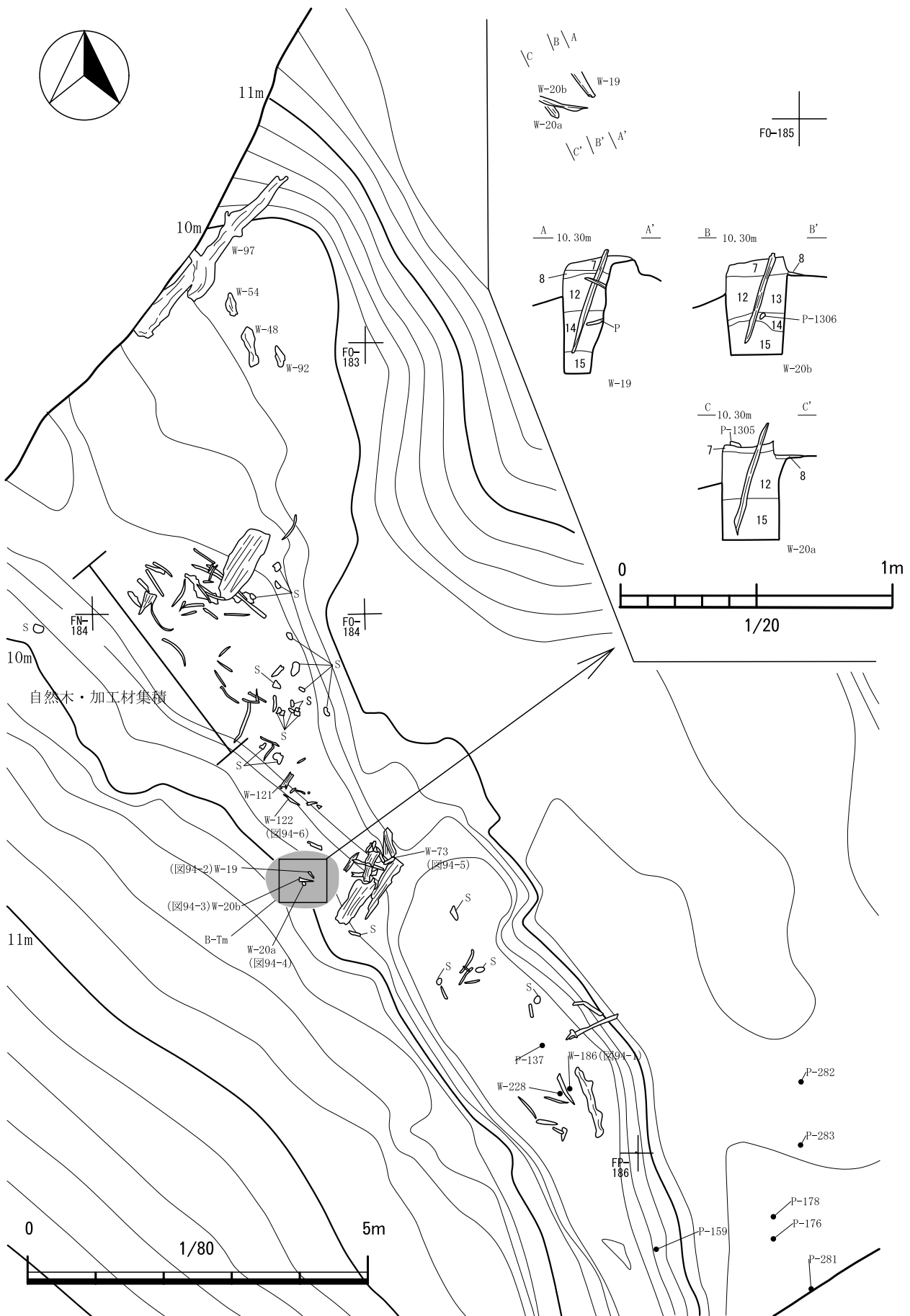


図83 D区谷古代の木質遺物出土状況

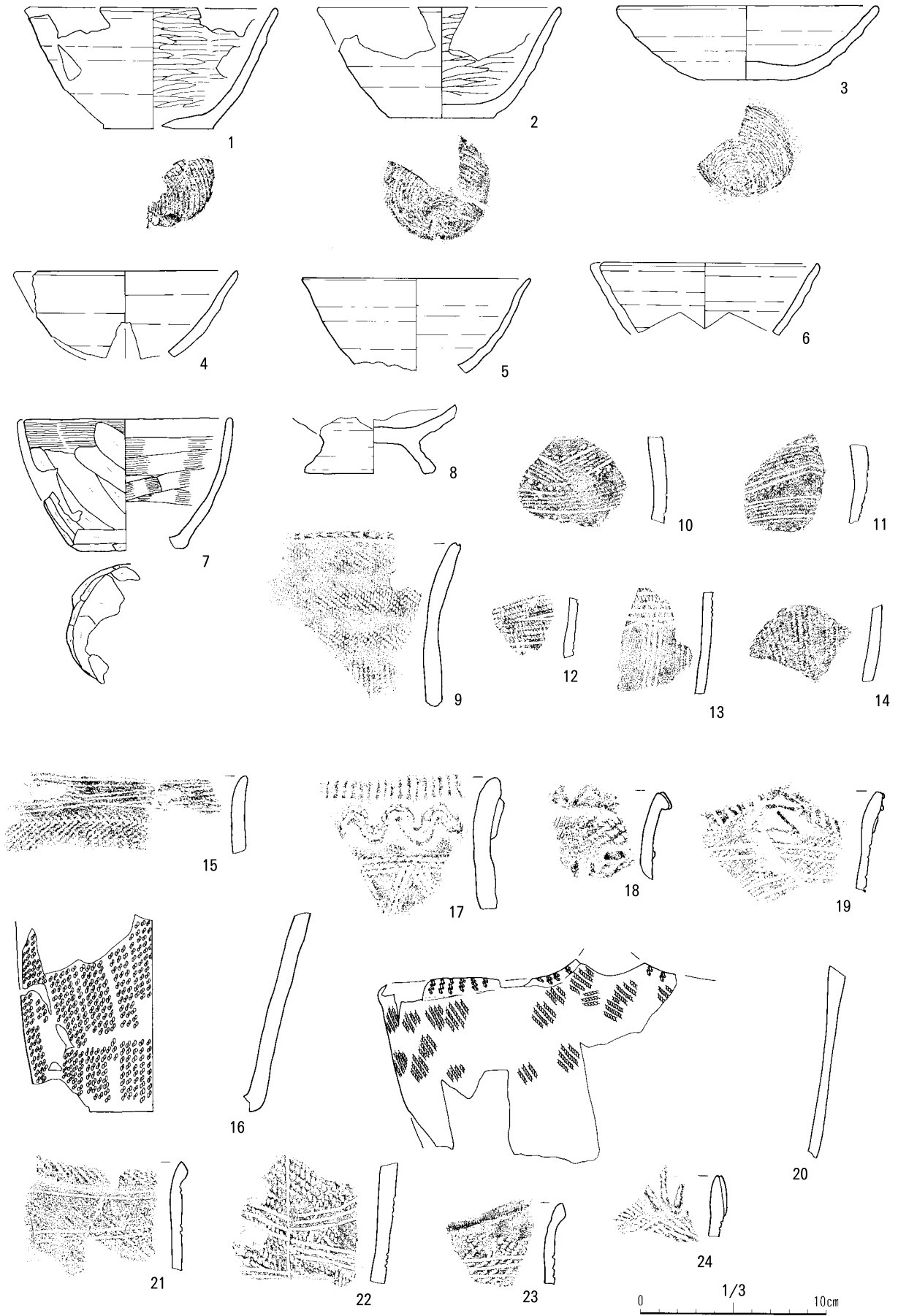


図84 谷 (D2区) 出土土器

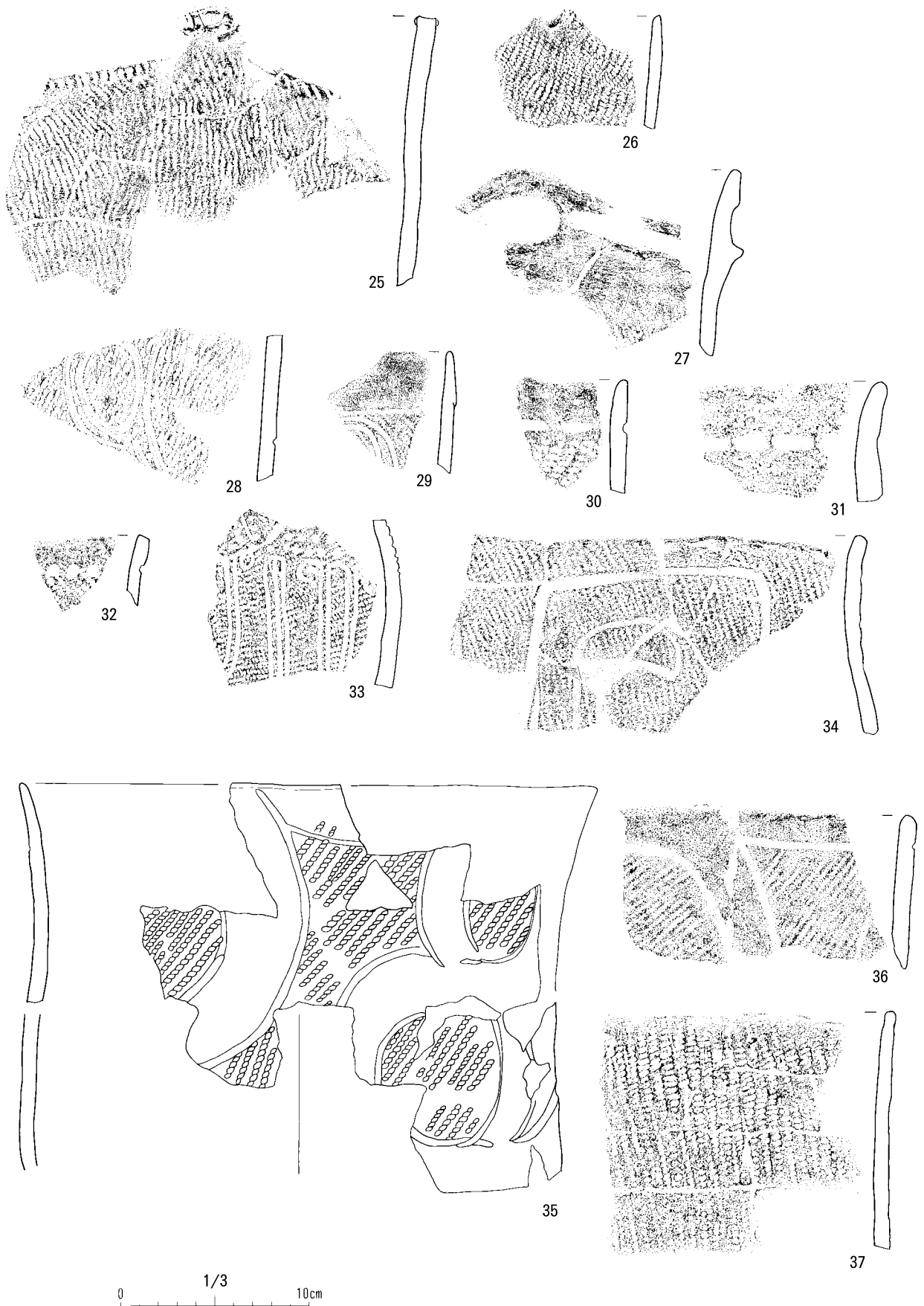


图85 谷 (D2区) 出土土器

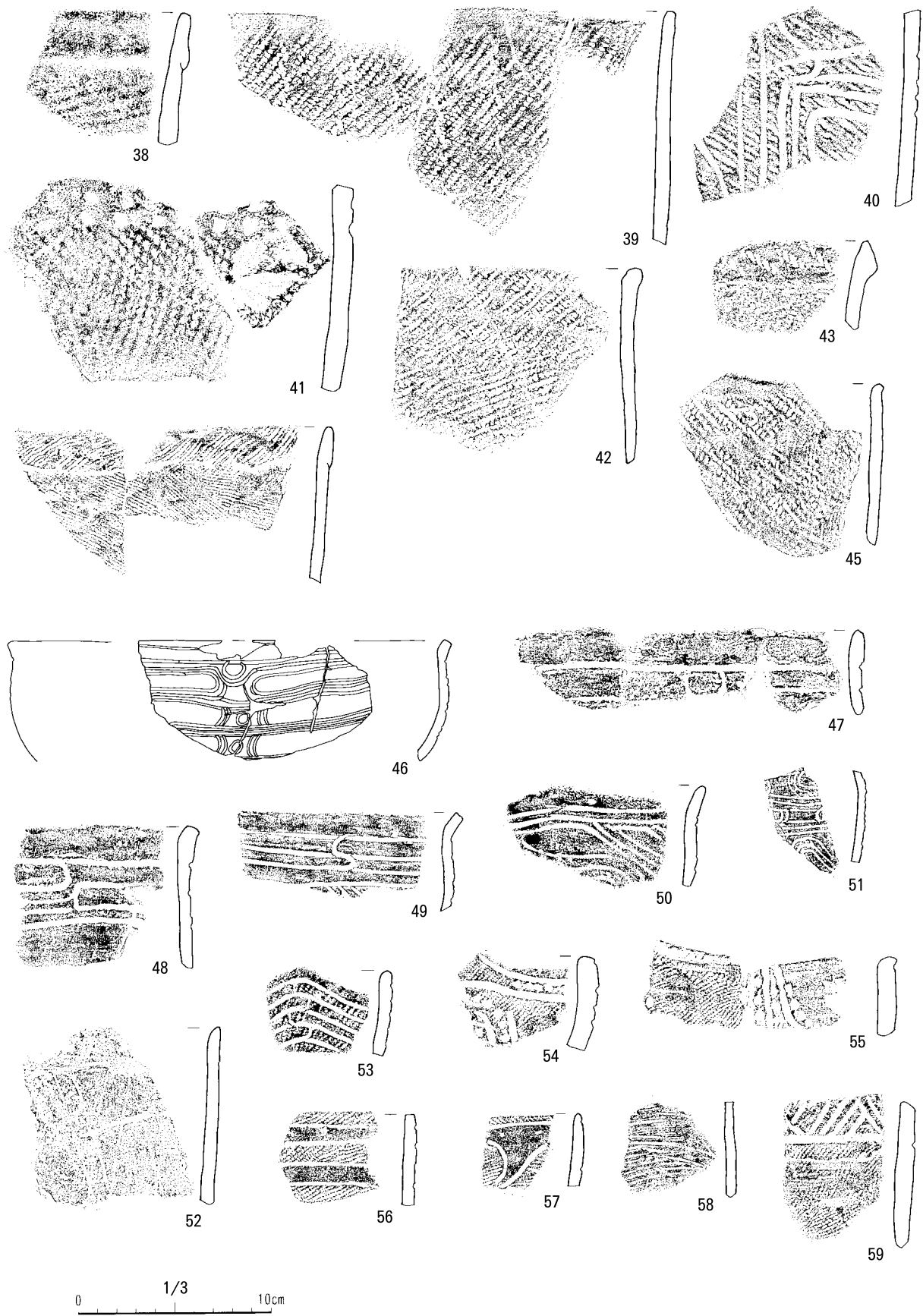


図86 谷 (D2区) 出土土器

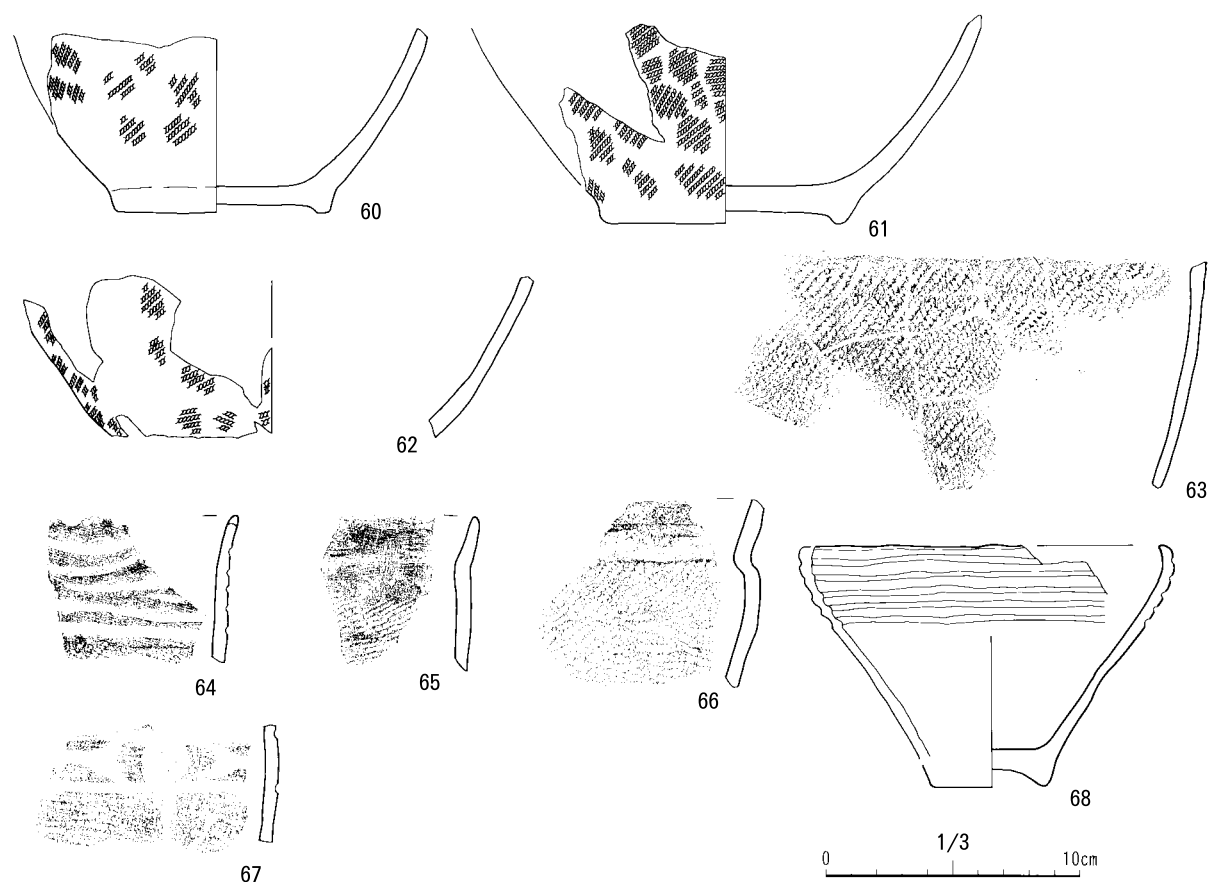


图87 谷 (D 2 区) 出土土器

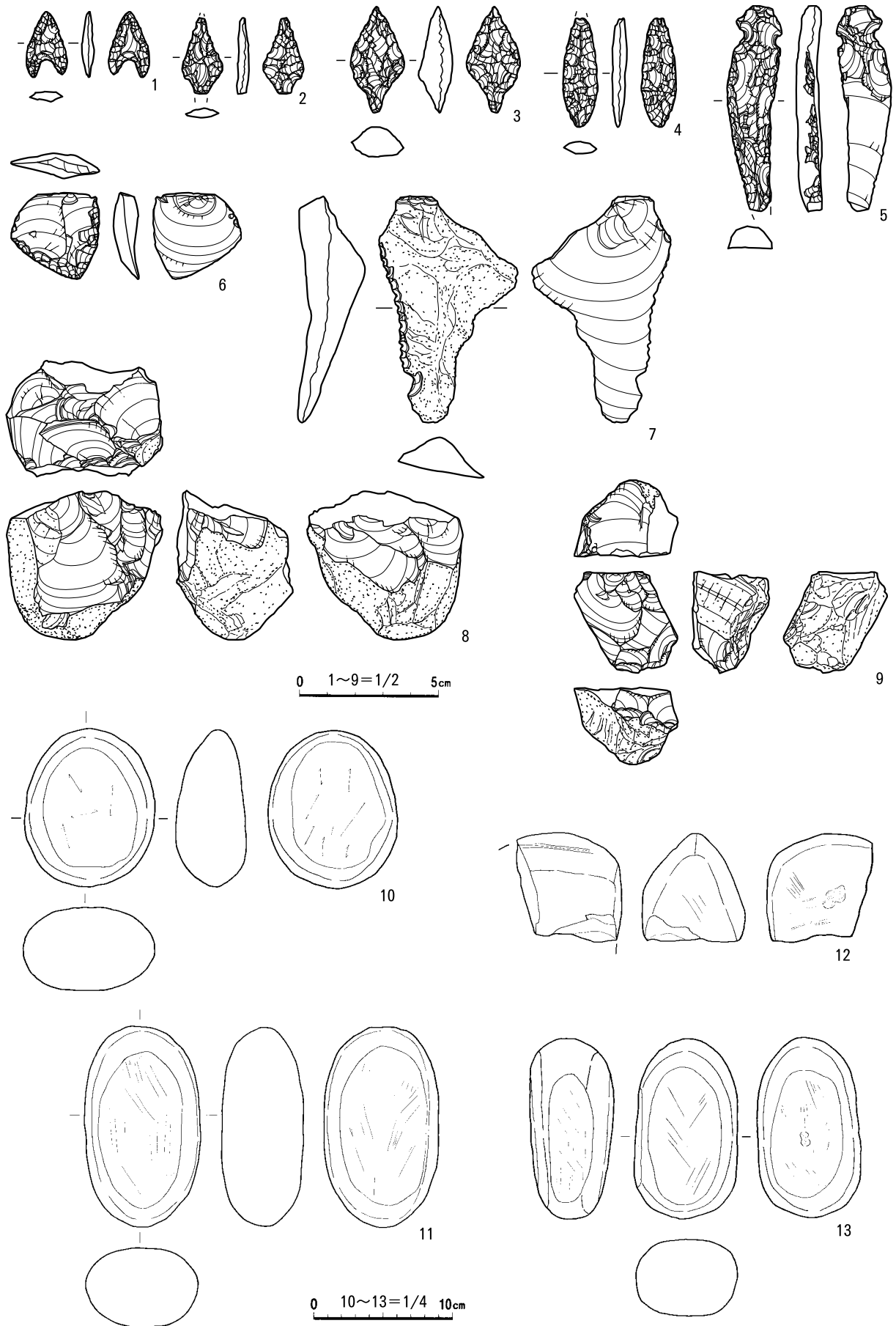


図88 谷 (D2区) 出土石器

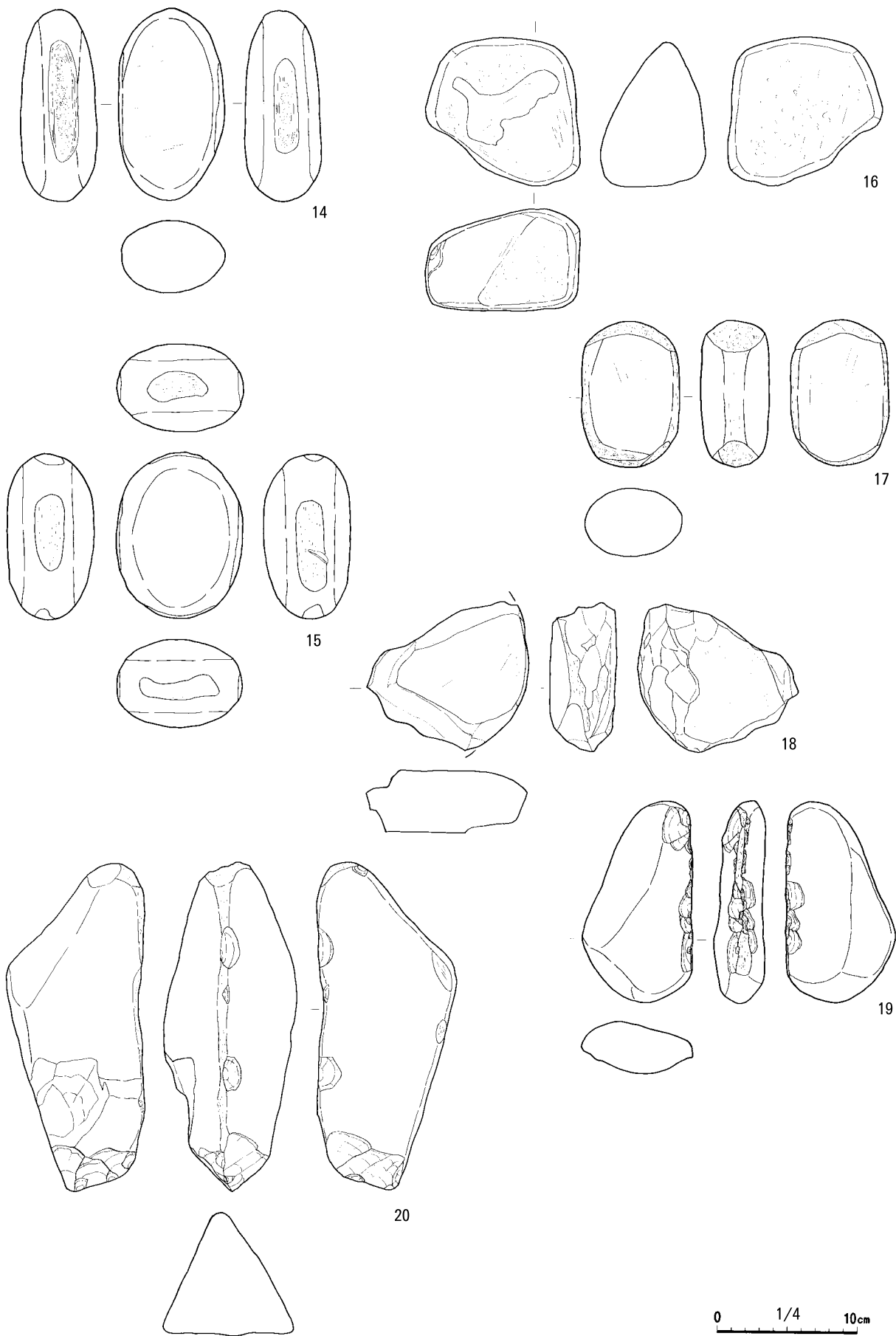


图89 谷 (D 2 区) 出土石器

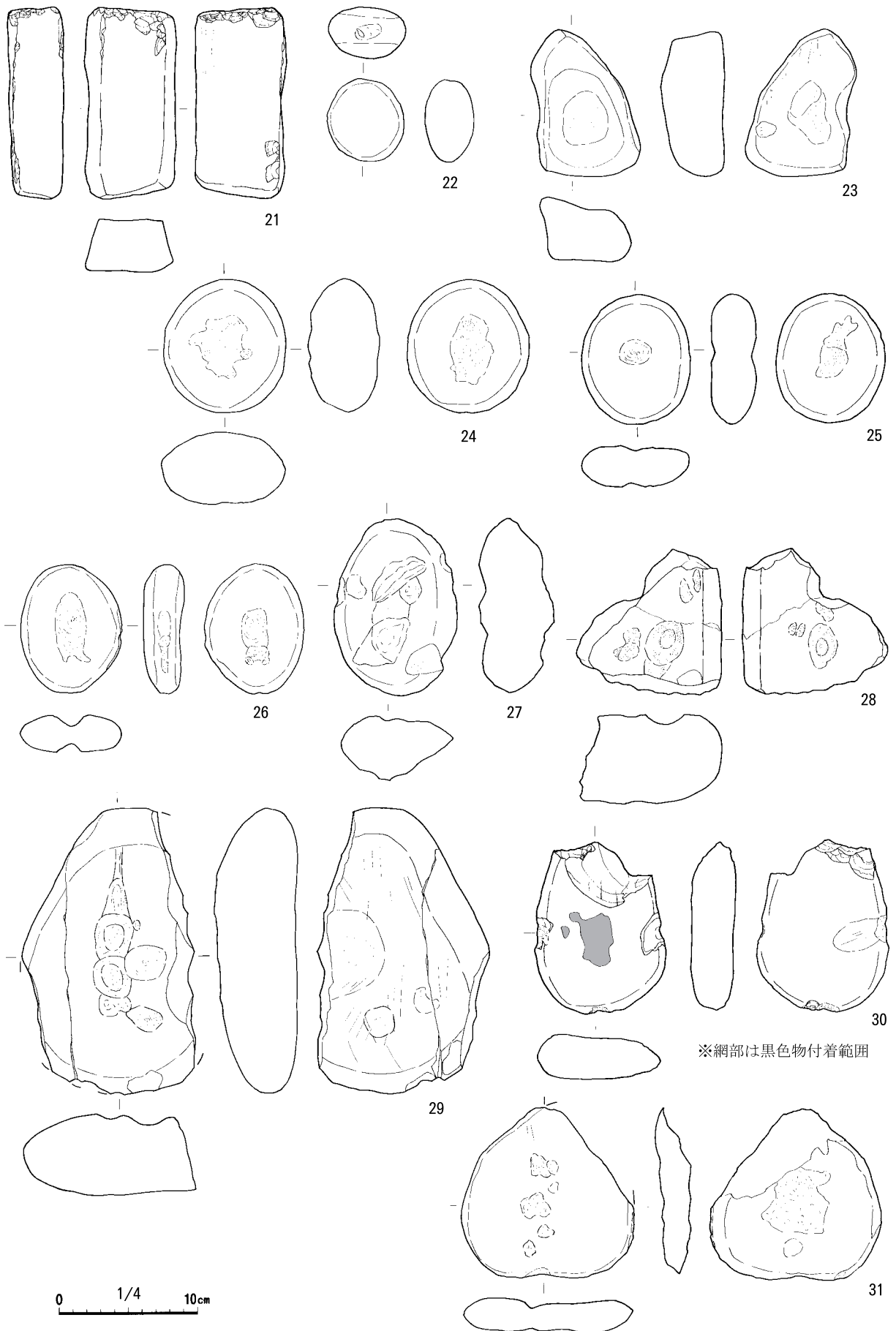


図90 谷 (D2区) 出土石器

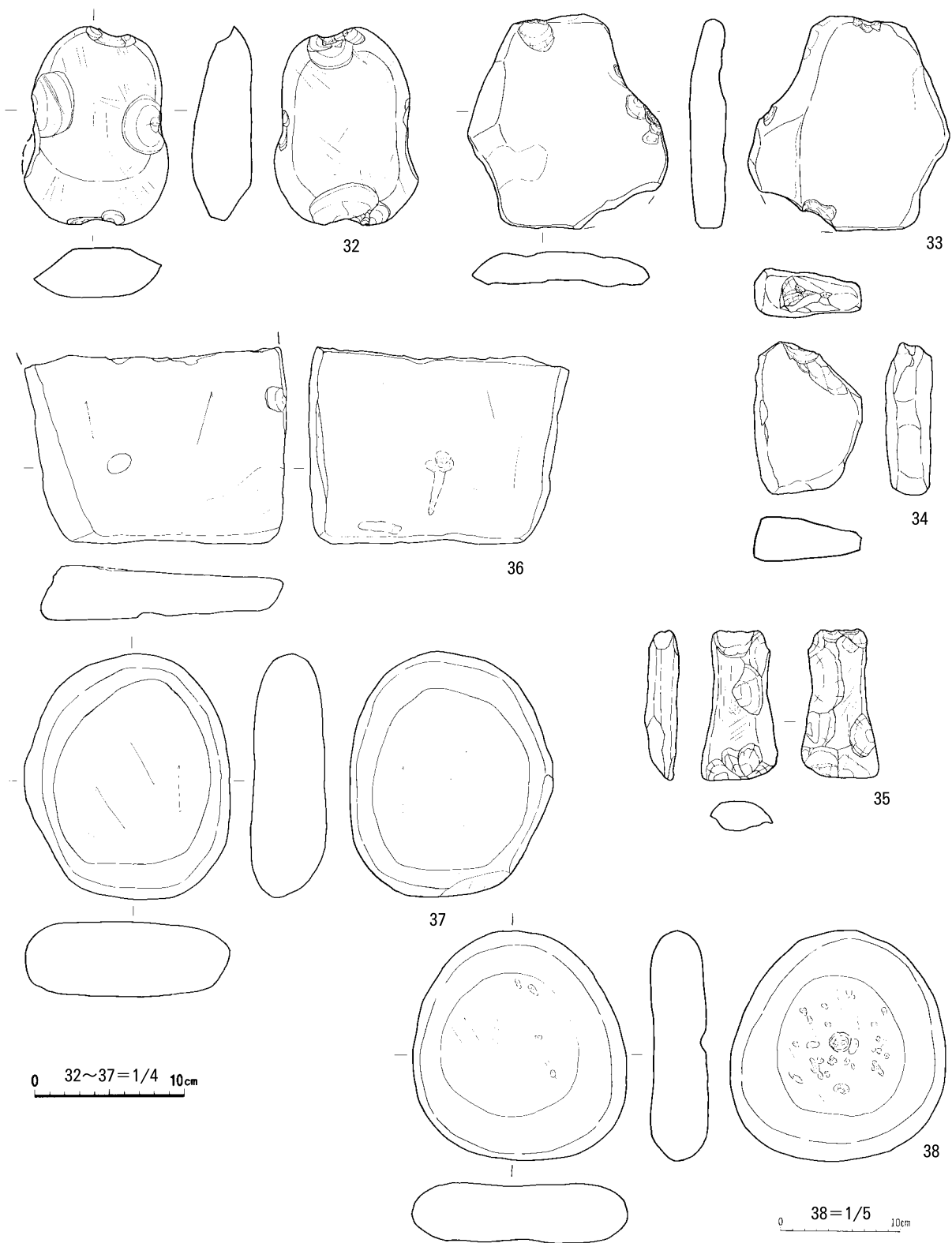


图91 谷 (D 2区) 出土石器

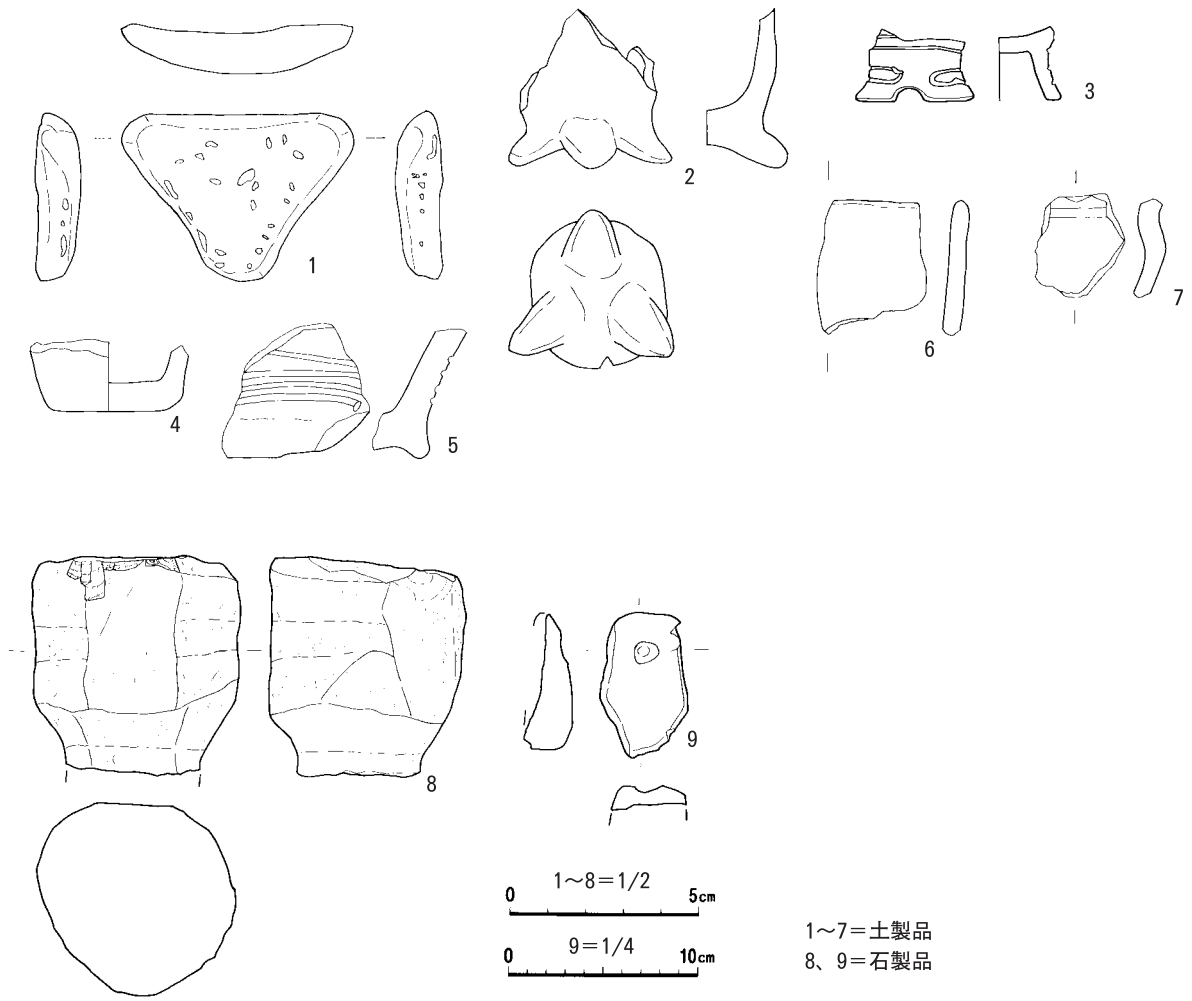


図92 谷 (D 2 区) 出土土・石製品

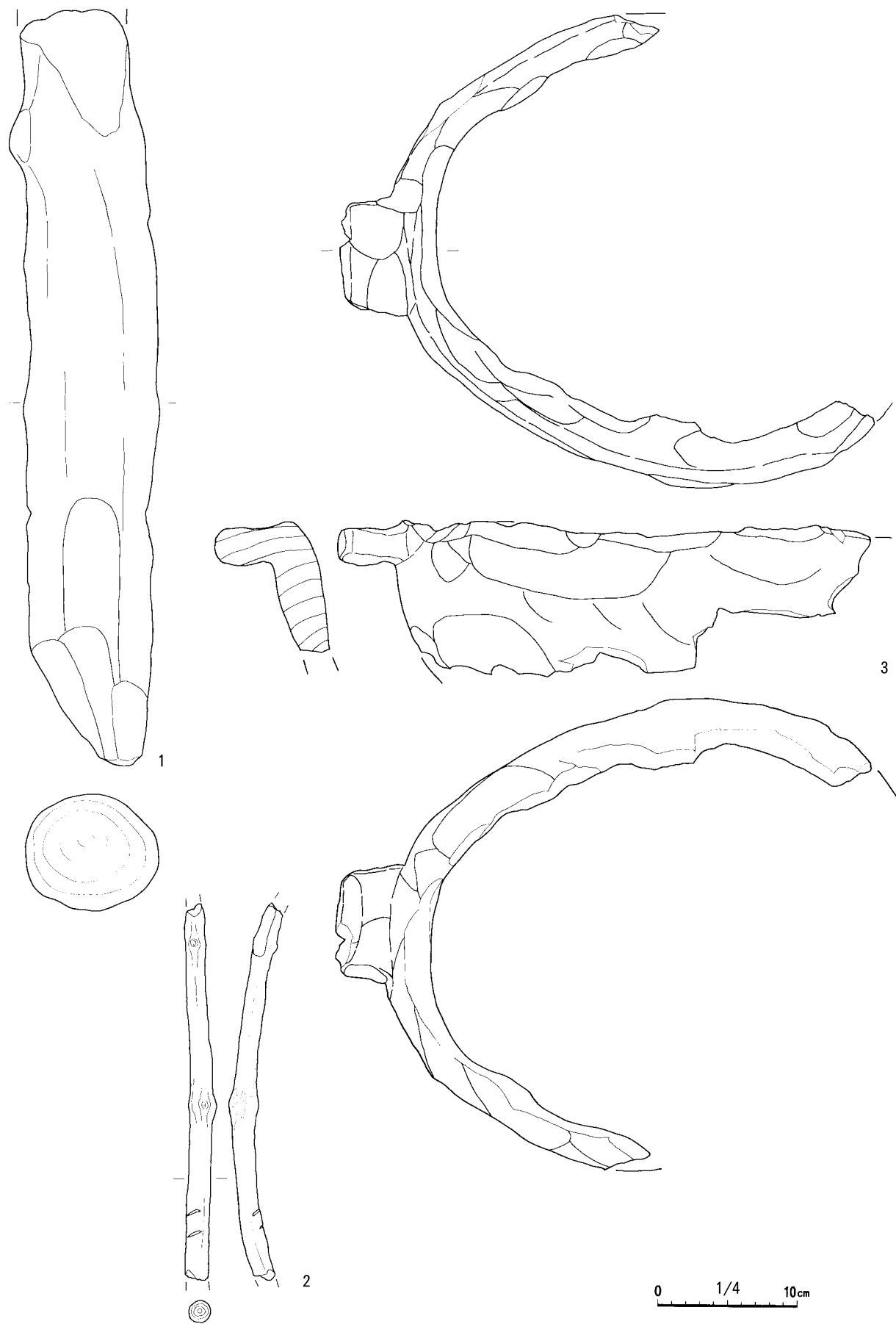


图93 谷 (D 2 区) 出土木製品 (繩文)

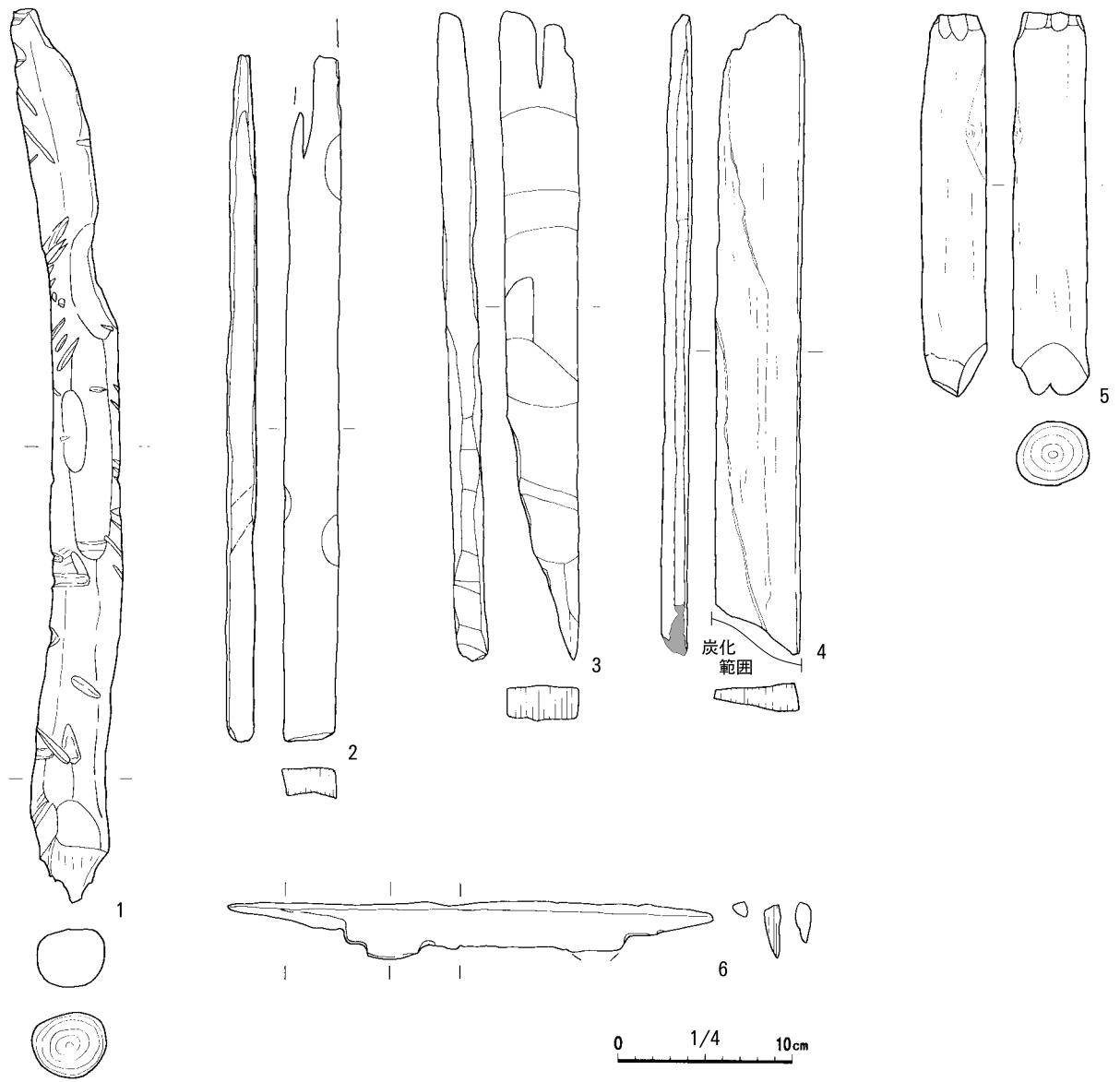


図94 谷 (D2区) 出土木製品 (平安)

第5節 遺構外出土遺物

1 土器

縄文時代前期... 1～4は円筒下層式。

縄文時代中期... 5は円筒上層式、6・7は大木10式である。

縄文時代後期... 8～14は十腰内 式の土器片である。

時期不明... 15は地文のみで貫通孔（補修孔？）がある。中期から後期のものと思われる。

弥生時代... 17～19は平行沈線・変形工字文が施文されたもので、弥生時代前期に位置づけられるものと思われる。 (小笠原)

2 石器

剥片石器は、東西方向H Aラインから東側の調査区域で、18点出土した。

石鏃（1）は、長さに対し幅が広めの有茎石鏃である。裏面は被熱により大きく欠けている。かえしは片側が直線的で、もう一方は基部との境がやや不明瞭である。石材は玉髄質珪質頁岩である。

石匙は4点出土した（2・3・5・7）。縦長剥片を素材とする横型2点（2・7）と縦型2点（3・5）である。5は摘み部以外には調整はみられず、裏面に小規模の二次調整がみられるのみである。7は形状を整えるための調整が部分的に施され、素材剥片の縁辺をそのまま刃部としている。刃部には微小剥離痕が認められる。

石筥（4）は、刃部両面に調整が施され、形状はバチ形を呈する。

削器（6）は、表面の両側縁に連続調整を施されている。

石核（8）は、全面をハードハンマーの直接打撃によって素材剥片を剥離されたものである。裏面が主要な作業面と考えられる。

使用された石材は、1の石鏃と玉髄の剥片1点を除き、珪質頁岩である。

礫石器は、磨製石斧の小破片1点のみである。石斧の石材は角閃岩である。 (杉野森)

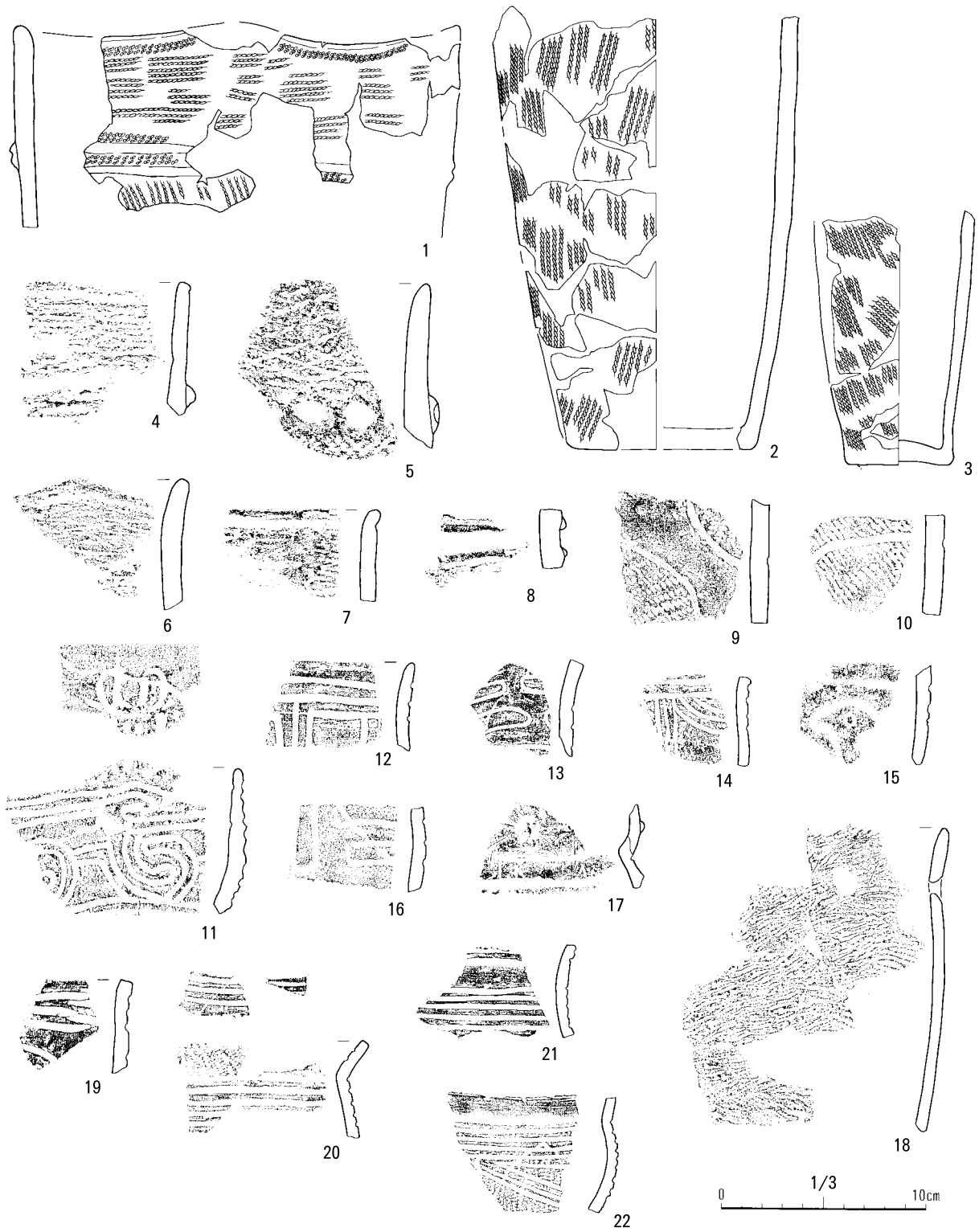


図95 D区遺構外出土土器

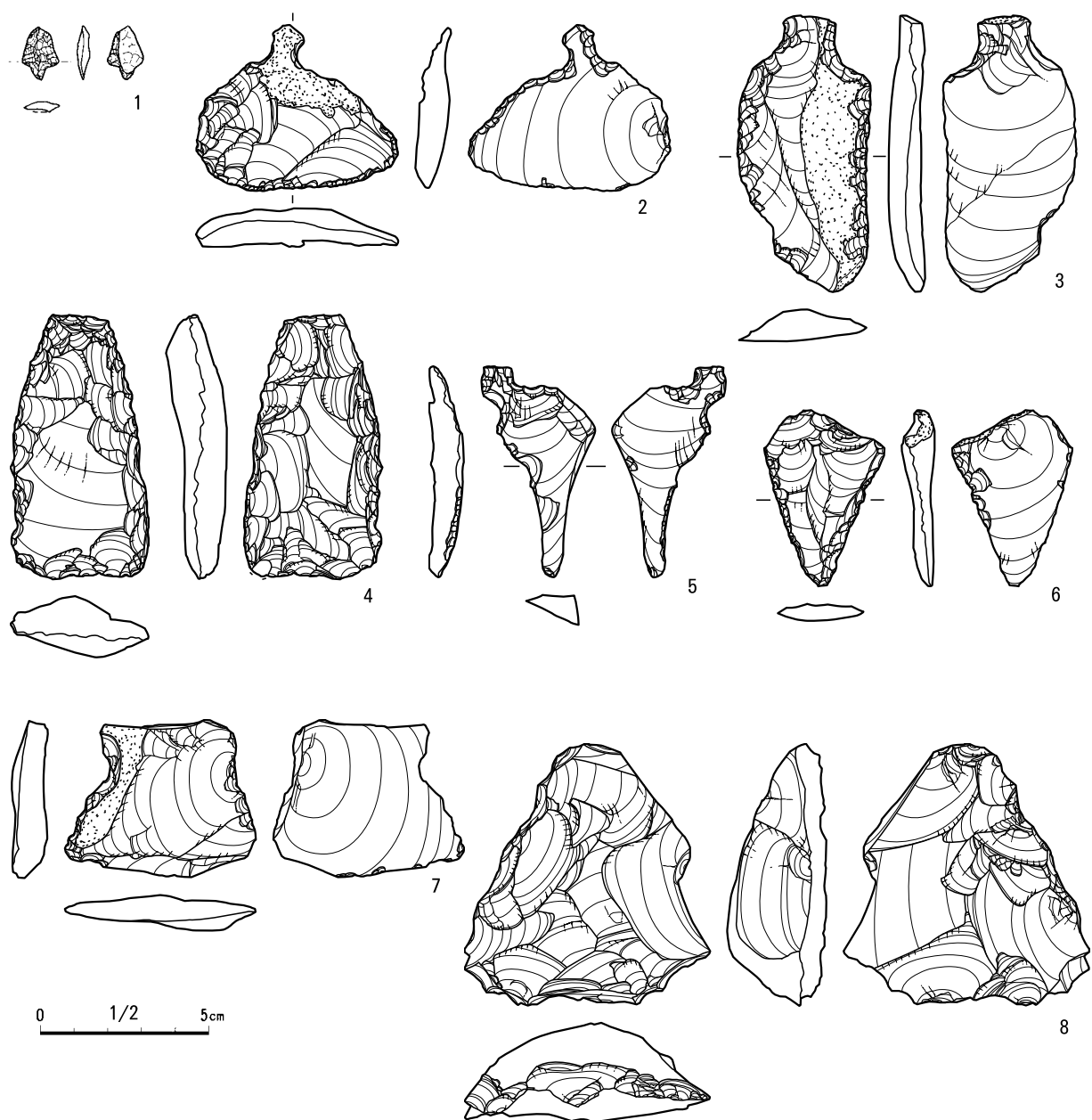


图96 D区遺構外出土石器

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定（1）

放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

近野遺跡は、青森県青森市安田字近野219（北緯40°48'27"、東経140°42'04"）に所在する。

(2) 遺跡の立地

近野遺跡は沖館川右岸に広がる低位段丘面（標高18m程）上にある。近野遺跡は継続的に発掘調査が行われており、これまでに縄文時代や平安時代の遺構・遺物が多数確認されている。

(3) 測定の意義

複数の遺構から採取された試料の年代測定を実施し、各遺構の使用年代を特定するとともに、遺跡の存続期間等を推定する根拠とする。

(4) 測定対象試料

測定試料は、CSI3土坑の埋土1層から出土した木炭（IAAA-60555）、CSI10外周溝の2層から出土した木炭（IAAA-60556）、CSK3の埋土3層から出土した木炭（IAAA-60557）、CSI7の埋土3層から出土した木炭（IAAA-60558）、CSK39底面から出土した木炭（IAAA-60559）、CSK42の埋土3層から出土した木炭（IAAA-60560）、DSI2の埋土3から出土した木炭（IAAA-60561）、DSK3の埋土1層から出土した木炭（IAAA-60562）、DSK5底面から出土した木炭（IAAA-60563）、DSN1底面から出土した木炭（IAAA-60564）、合計10点である。測定試料は、採取後アルミホイルに包まれ、常温で保存・乾燥された。

(5) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。その後、90℃で乾燥する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精

製する。

- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(6) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(7) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の炭素¹⁴濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、²検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4) ¹³Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される¹³Cの値を用いることもある。

¹³C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_S - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_S - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、¹⁴A_S：試料炭素の¹⁴C濃度：(¹⁴C/¹²C)_Sまたは(¹⁴C/¹³C)_S

¹⁴A_R：標準現代炭素の¹⁴C濃度：(¹⁴C/¹²C)_Rまたは(¹⁴C/¹³C)_R

¹³Cは、質量分析計を用いて試料炭素の¹³C濃度（¹³A_S = ¹³C/¹²C）を測定し、PDB（白亜紀のペレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に¹³C/¹²Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した¹³Cを用いることもある。この場合には表中に【加速器】と注記する。

また、¹⁴Cは、試料炭素が¹³C = -25.0（‰）であるとしたときの¹⁴C濃度（¹⁴A_N）に換算した上で計算した値である。（1）式の¹⁴C濃度を、¹³Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_N = ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + ^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_S \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + {}^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_s \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$${}^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_N - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない ${}^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好でその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

${}^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon)がよく使われており、 ${}^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$${}^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = {}^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\text{‰})$$

国際的な取り決めにより、この ${}^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age ; yrBP)が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [({}^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

5) ${}^{14}\text{C}$ 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示する。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベースを用い、OxCalv3.10較正プログラムを使用した。

(8) 測定結果

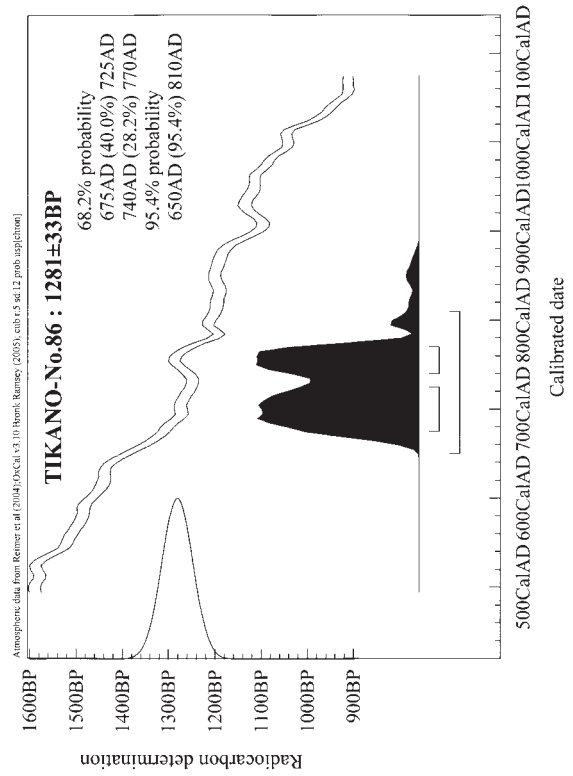
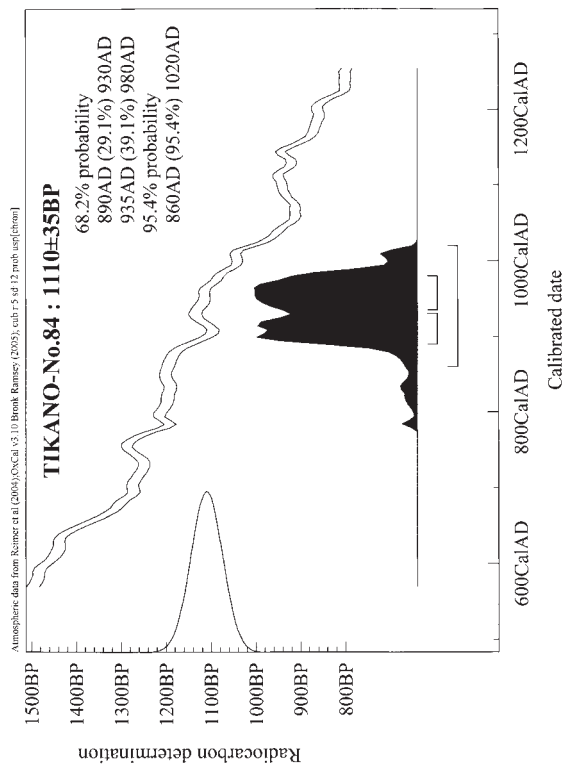
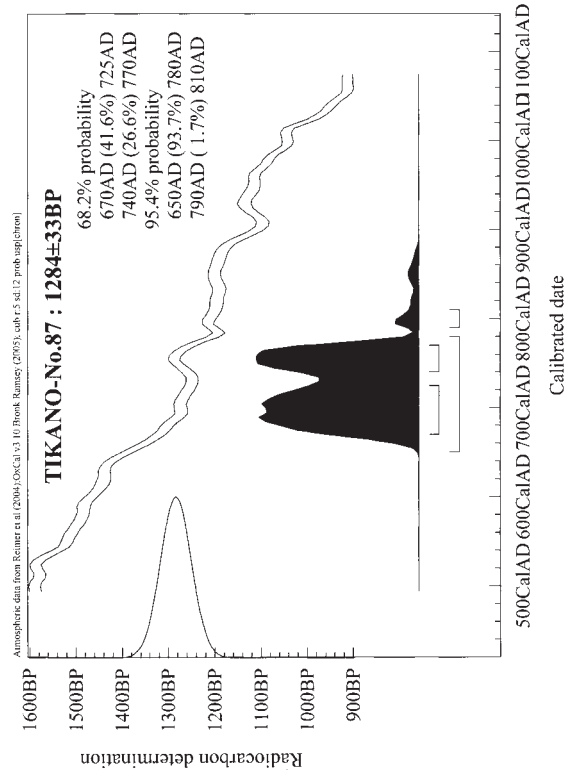
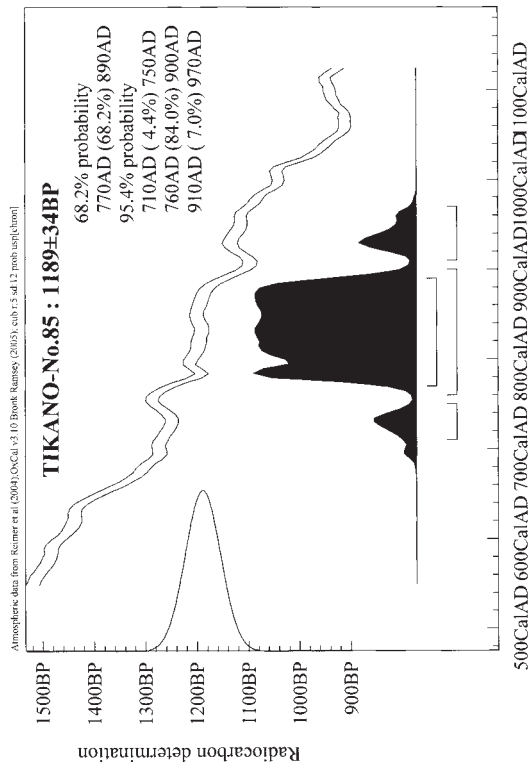
CSI3土坑から出土した木炭 (IAAA-60555) が $1110 \pm 40\text{yrBP}$ 、CSI10外周溝から出土した木炭 (IAAA-60556) が $1190 \pm 30\text{yrBP}$ 、CSK3から出土した木炭 (IAAA-60557) が $1280 \pm 30\text{yrBP}$ 、CSI7から出土した木炭 (IAAA-60558) が $1280 \pm 30\text{yrBP}$ 、CSK39から出土した木炭 (IAAA-60559) が $1250 \pm 30\text{yrBP}$ 、CSK42から出土した木炭 (IAAA-60560) が $3550 \pm 40\text{yrBP}$ 、DSI2から出土した木炭 (IAAA-60561) が $4450 \pm 40\text{yrBP}$ 、DSK3から出土した木炭 (IAAA-60562) が $1160 \pm 30\text{yrBP}$ 、DSK5から出土した木炭 (IAAA-60563) が $1230 \pm 30\text{yrBP}$ 、DSN1から出土した木炭 (IAAA-60564) が $4980 \pm 40\text{yrBP}$ とする年代値が提示された。最も古い遺構は、縄文時代前期に属するDSI2とDSN1である。それより新しい時期の遺構は、縄文時代後期前葉に相当するCSK42である。それ以外の遺構は、古代の遺構であり、若干の時期差は認められるが、飛鳥時代半ばから平安時代前半までの250年程の間に含まれる。

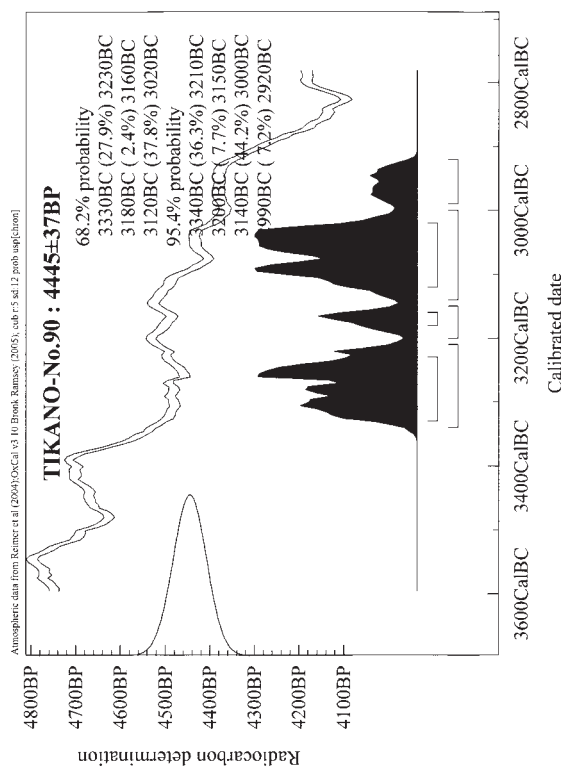
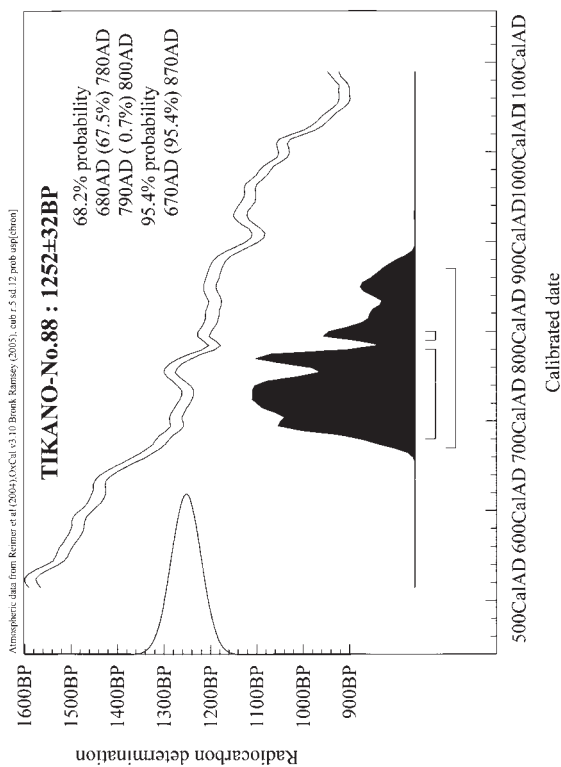
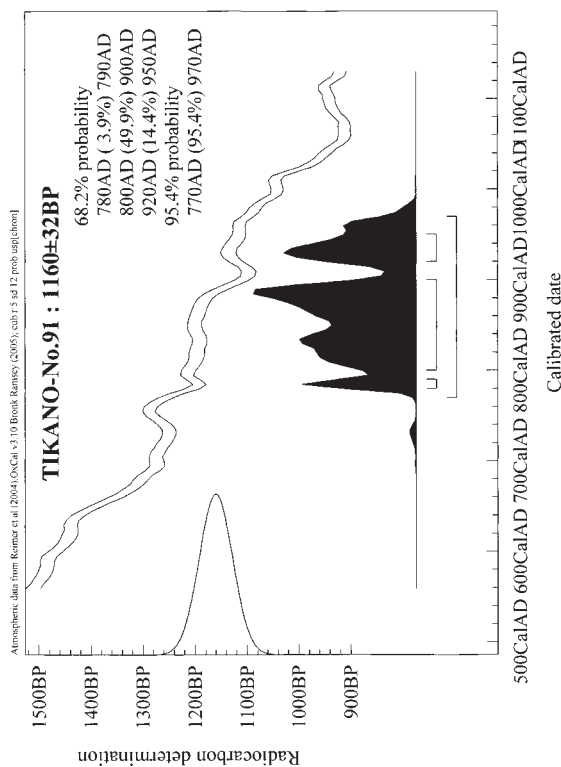
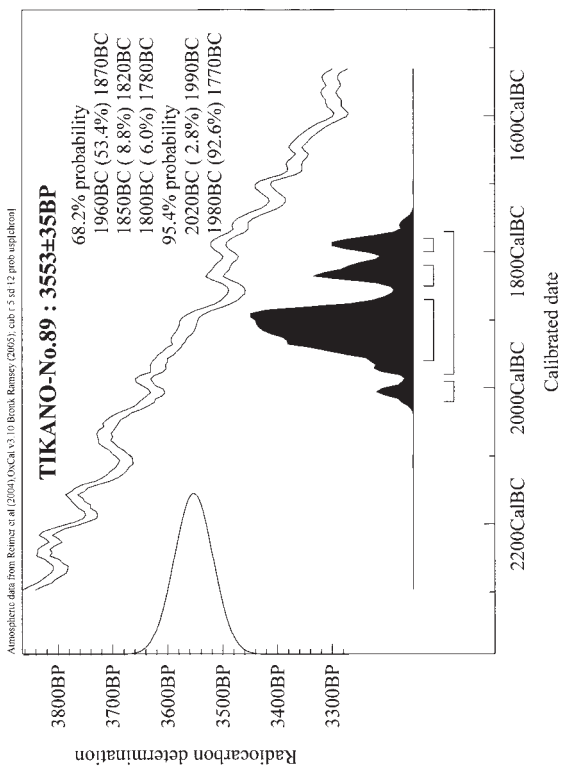
参考文献

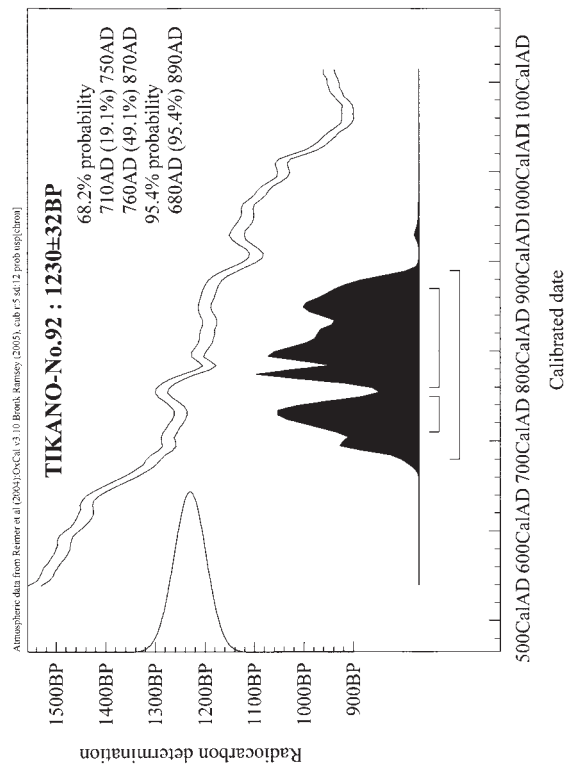
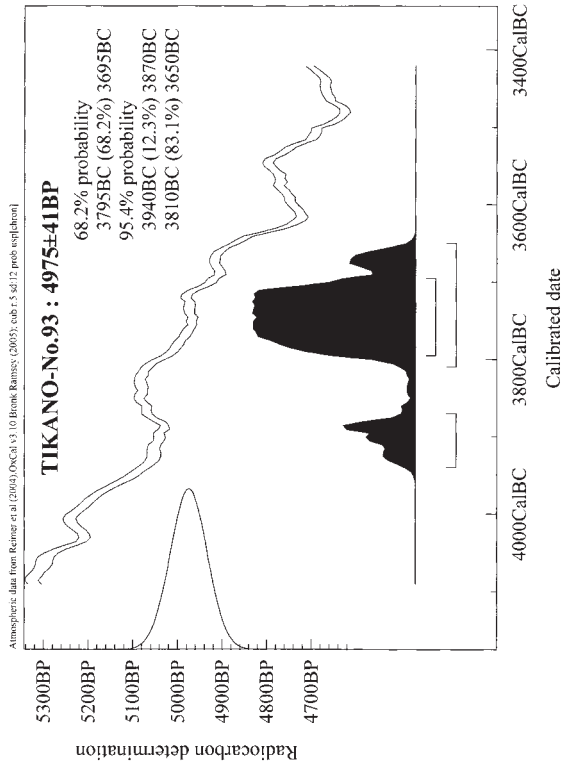
Stuiver, M. and Polash, H. A. (1977) Discussion: Reporting of ${}^{14}\text{C}$ data. *Radiocarbon*, 19:355-363

表 1 - 1 試料データ

試料番号 試料名	図版 番号	出土位置 試料	試料	補正年代	実年代	測定方法、期間 試料種、前処理など	未補正年代	13C (‰)
IAAA-60555 TIKANO-No. 84	16	第 C 3 号竪穴住居 跡Pit4 1層	木炭	1110 ± 40	860AD ~ 1020AD	A M S 木炭 Acid Alkali Acid処理	1080 ± 30	-23.16 ± 0.66
IAAA-60556 TIKANO-No. 85	26	第 C 10号竪穴住居 跡外周溝 2層	木炭	1190 ± 30	710AD ~ 750AD 760AD ~ 900AD 910AD ~ 970AD	A M S 木炭 Acid Alkali Acid処理	1190 ± 30	-24.90 ± 0.71
IAAA-60557 TIKANO-No. 86	35	第 C 3 号土坑 3層	木炭	1280 ± 30	650AD ~ 810AD	A M S 木炭 Acid Alkali Acid処理	1260 ± 30	-23.77 ± 0.66
IAAA-60558 TIKANO-No. 87	22	第 C 7 号竪穴住居 跡 3層	木炭	1280 ± 30	650AD ~ 780AD 790AD ~ 810AD	A M S 木炭 Acid Alkali Acid処理	1280 ± 30	-24.64 ± 0.64
IAAA-60559 TIKANO-No. 88	37	第 C 39号土坑底面	木炭	1250 ± 30	670AD ~ 870AD	A M S 木炭 Acid Alkali Acid処理	1220 ± 30	-23.16 ± 0.81
IAAA-60560 TIKANO-No. 89	38	第 C 42号土坑 3層	木炭	3550 ± 40	2020BC ~ 1990BC 1980BC ~ 1770BC	A M S 木炭 Acid Alkali Acid処理	3580 ± 30	-26.28 ± 0.67
IAAA-60561 TIKANO-No. 90	60	第 D 2 号竪穴住居 跡 3層	木炭	4450 ± 40	3340BC ~ 3210BC 3200BC ~ 3150BC 3140BC ~ 3000BC 2990BC ~ 2920BC	A M S 木炭 Acid Alkali Acid処理	4550 ± 40	-31.07 ± 0.70
IAAA-60562 TIKANO-No. 91	76	第 D 3 号土坑 1層	木炭	1160 ± 30	770AD ~ 970AD	A M S 木炭 Acid Alkali Acid処理	1250 ± 30	-30.49 ± 0.70
IAAA-60563 TIKANO-No. 92	75	第 D 5 号土坑底面	木炭	1230 ± 30	680AD ~ 890AD	A M S 木炭 Acid Alkali Acid処理	1260 ± 30	-26.78 ± 0.65
IAAA-60564 TIKANO-No. 93	68	第 D 1 号焼土遺構 底面	木炭	4980 ± 40	3940BC ~ 3870BC 3810BC ~ 3650BC	A M S 木炭 Acid Alkali Acid処理	4990 ± 40	-26.14 ± 0.66







第1節 放射性炭素年代測定 (2)

青森県埋蔵文化財調査センター

様

No.1406
(株)地球科学研究所

件名: 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

未補正14C年代 (y BP) : (同位体分別未補正) 14C年代 “measured radiocarbon age”
試料の 14C / 12C 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前 (BP) かを計算した年代。

14C年代 (y BP) : (同位体分別補正) 14C年代 “conventional radiocarbon age”
試料の炭素安定同位体比 (13C / 12C) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り 14C / 12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料の $\delta^{13}C$ 値を -25 (‰) に基準化することによって得られる年代値である。
(Stuiver, M. and Polach, H.A. (1977) Discussion: Reporting of 14C data. Radiocarbon, 19 を参照のこと)
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

$\delta^{13}C$ (permil) : 試料の測定 14C / 12C 比を補正するための 13C / 12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表現する。

$$\delta^{13}C (\text{‰}) = \frac{(13C/12C)[\text{試料}] - (13C/12C)[\text{標準}]}{(13C/12C)[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、 $13C/12C [\text{標準}] = 0.0112372$ である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴの U-Th 年代と 14C 年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース (“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40 (3)) により約 19000yBP までの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP 以前のデータはまだ不完全であり今後改善される可能性が高いため、補正前のデータの保管を推奨します。

“The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a “best fit” compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results.”

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄
acid washes : 酸洗浄
acid etch : 酸によるエッチング
none : 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155

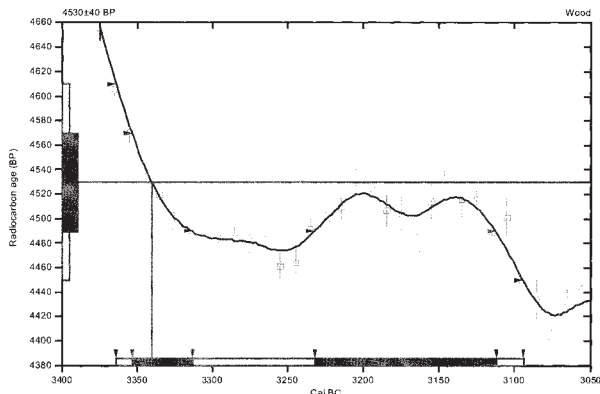
表1-1 試料データ

試料番号 試料名	図版 番号	出土位置 試料	試料	補正年代	実年代(Cal BP)	測定方法、期間 試料種、前処理など	未補正年代	13C (‰)
Beta-186356 No35-D2-W343	82	D区谷FN-183 15 層	生木	31390 ± 230		AMS-Standard wood acid/alkali/acid	31390 ± 230	-25.1
Beta-186357 No36-D2-W350	82	D区谷FO-184 15 層	生木	4530 ± 40	5310 ~ 5040	AMS-Standard wood acid/alkali/acid	4570 ± 40	-27.5
Beta-186358 No37-D2-S Ae s	81	D区谷FO-184 12 層、トチ範囲G	種	4540 ± 40	5320 ~ 5050	AMS-Standard charred material acid/alkali/acid	4540 ± 40	-24.8

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-27.5;lab.mult=1)

Laboratory number: **Beta-186357**
 Conventional radiocarbon age: **4530±40 BP**
 2 Sigma calibrated result: **Cal BC 3360 to 3090 (Cal BP 5310 to 5040)**
 (95% probability)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age
 with calibration curve: **Cal BC 3340 (Cal BP 5290)**
 1 Sigma calibrated results: **Cal BC 3350 to 3310 (Cal BP 5300 to 5260)** and
Cal BC 3230 to 3110 (Cal BP 5180 to 5060)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Taima, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

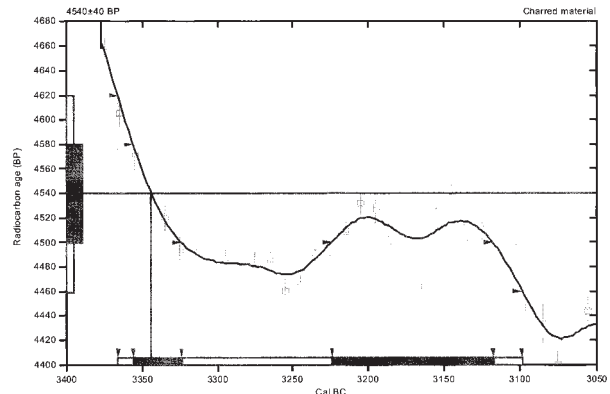
Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 3167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-24.8;lab.mult=1)

Laboratory number: **Beta-186358**
 Conventional radiocarbon age: **4540±40 BP**
 2 Sigma calibrated result: **Cal BC 3370 to 3100 (Cal BP 5320 to 5050)**
 (95% probability)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age
 with calibration curve: **Cal BC 3340 (Cal BP 5290)**
 1 Sigma calibrated results: **Cal BC 3360 to 3320 (Cal BP 5310 to 5270)** and
Cal BC 3220 to 3120 (Cal BP 5170 to 5070)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Taima, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 3167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

第2節 近野遺跡D区谷の古環境解析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

近野遺跡は沖館川右岸に広がる段丘上に位置し、国指定特別史跡三内丸山遺跡に隣接する。遺構の大半は低位段丘面上に形成されているが、調査区の中には大きな谷が入り込んでいる。これまでの発掘調査により、縄文時代の竪穴住居跡、平安時代の竪穴住居跡はじめ、土坑、掘立柱建物跡、埋設土器、溝跡などが検出されている。また、谷の部分では、縄文時代のトチの水さらし場とみられる遺構が確認されている。

当社ではこれまで、縄文時代から平安時代以降の古環境変遷に関する分析調査を、珪藻化石、花粉化石、種実同定、昆虫同定などの方法を応用してきた。これまでの分析調査成果をみると、縄文時代前期にはクリが周辺の森林で多くを占めていたものが、縄文時代中期になると減少し、トチノキが増加する。この時期には、F区で水場遺構やトチ塚が作られている。縄文時代の終わりに入るとトチノキとクリが減少し、かわってブナやナラ類などが増加してくる。今回は、D区谷のベルトの断面で採取した試料について、主に縄文時代を中心とした層位を分析対象とすることにより、植物利用と森林植生変遷との関係について情報を得る。

1. 試料

分析試料は、当社技師が現地調査時にD区谷のベルト2、ベルト5、ベルト6断面から採取した。なお、ベルト2の試料名は別名の北壁セクション2となっていたが、名前の統一を図るためベルト2の名称を用いる。ベルト2では、柱状に2点の試料を採取した(試料番号1・2)。今回は、試料番号1から、B-Tm直上にあたる10層(古代)に相当する部分を選択し、分析を実施した。ベルト5では、10点(試料番号1-10)の試料を採取した。ここでは、縄文時代前期とされる16層(試料番号8)、縄文時代後期とされる14層(試料番号7)と13層(試料番号6)、それ以降の堆積物である11層(試料番号4)と5層(試料番号3)に関して分析を行う。ベルト6では、5点の試料を採取した。このうち、縄文時代中期前後と考えられるトチを含む泥炭層を中心に4点の分析を行う。以上10点について、珪藻分析、花粉分析、種実同定を実施する。

2. 分析方法

(1)珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer and Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に

対する適応能を示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率3.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

(2)花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3)種実同定

土壌試料を水に一晩液浸し、試料の泥化を促す。篩を通して水洗し残渣を集める。篩は試料に応じて4.0、2.0、1.0、0.5mmなどを適宜重ねて用いるが、最終的には秤量した土壌中に含まれる0.5mm以上の残渣を全て回収するようにした。双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な植物遺体等を抽出する。抽出された植物遺体と種実遺体単体試料の形態的特徴を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）等と比較し、種類の同定・計数をおこなう。細片を含むため個体数推定が困難である種類は、表中に「+」と表示する。分析後の植物遺体等は、種類毎にピンに詰め、純水による液浸保存処理を施す。

3.結果

(1)珪藻分析

結果を表1、図1に示す。いずれの試料も珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は、70%前後と化石の保存状態が良い。産出分類群数は、合計で23属141種類である。以下に珪藻化石群集の特徴を述べる。

・ベルト2（図79、D区谷北壁中、サンプル）

試料番号1は、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻）が多産するが、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好氣的環境に耐性のある陸生珪藻も約35%産出する。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられない種）、真+好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）が優占する。陸生珪藻では、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群（伊藤・堀内，1991）の *Hantzschia amphioxys* が約20%産出し、同じく陸生珪藻A群の *Navicula mutica*、*Pinnularia borealis* を伴う。淡水～汽水生種では、少量の塩分や塩類を含む水域に生育する *Rhopalodia gibberula*、等が産出する。水生珪藻では、とくに多産するものはなく流水不定性の *Caloneis tenuis*、*Diploneis ovalis*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Navicula elginensis*、湿地等に生育する *Pinnularia esoxiformis*、*Pinnularia subrupestris*、*Pinnularia substomatophora* 等が産出する。沼沢湿地付

着生種群は、水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や湿地で優勢な出現のみられる種群である(安藤,1990)。

・ベルト5 (図80、試料番号 ~ と対応)

本地点では、珪藻化石群集の特徴から試料番号7と9を境として2区分される。

試料番号9は、陸生珪藻が水生珪藻を上回る。陸生珪藻の主なものは、水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群(伊藤・堀内,1991)の*Amphora normanii*、未区分陸生珪藻の*Caloneis angustivalva*、陸生珪藻A群(伊藤・堀内,1991)の*Hantzschia amphioxys*等が産出する。水生珪藻では、好流水性で中-下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*、好止水性の*Diploneis oblongella*、沼沢湿地付着生種群の*Navicula elginensis*等が産出する。中-下流性河川指標種群は、河川中-下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する種群ある(安藤,1990)。

試料番号7-3は、互いに群集が近似しており、流水性で中-下流性河川指標種群の*Meridion circularae* var. *constrictum*が20-30%と多産し、同じく中-下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の*Eunotia pectinalis* var. *minor*、流水不定性の*Gomphonema parvulum*を伴う。

・ベルト6 (図79、試料番号 ~ と対応)

本地点では、水生珪藻が優占するが、珪藻化石群集の特徴から試料番号2と3を境として2区分される。

試料番号4、3は、中-下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*、*Meridion circularae* var. *constrictum*が、流水不定性の*Gomphonema parvulum*が10-30%と多産する。

試料番号2、1は、前試料に加えて流水不定性で沼沢湿地付着生種群の*Eunotia pectinalis* var. *minor*、池沼や泥炭地などに主に生育する好止水性の*Eunotia duplicoraphis*が15%前後と多産する。

(2)花粉分析

結果を表2・図2に示す。全体の傾向は、これまで数回にわたって調査を実施してきた花粉化石群集に類似する。

縄文時代前期頃と思われるベルト5の試料番号8は、クリ属の割合が非常に高いのが特徴で、他は種類数、個体数ともに減少する。縄文時代中期頃と考えられるベルト6では、トチノキ属が増加し、クリ属が減少する傾向がみられる。草本花粉はイネ科などがみられるが、出現率は全体として低い。縄文時代後期と考えられるセクション5の試料番号6-8は、トチノキ属、クルミ属が多産する。それ以降の試料番号3・4ではこれらが次第に減少し、かわってスギ属やブナ属などが増加する。古代とされるベルト2の試料番号1は、草本花粉の割合が非常に高いのが特徴で、特にイネ科やヨモギ属の割合が高くなっている。木本花粉が花粉全体に占める割合は、縄文時代と比べると極端に低くなる。木本花粉としては、スギ属、クマシデ属 - アサダ属、ハンノキ属、ブナ属などが多くみられる。

(3)種実同定

結果を表3に示す。全体的な傾向は、これまで調査したF区に類似する。縄文時代前期では、沢筋などに多い落葉樹が多産する。縄文時代中期-後期では、これに加え、トチノキの種子が局地的に多産する。古代にはいると、木本類はほとんどみられなくなり、草本類が急増する。以下に、本分析によって得られた種実・葉の形態的特長などを木本、草本の順に記述する。

<木本>

・オニグルミ(*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *Sieboldiana*(Maxim.)Kitamura) クルミ科クルミ属
核が検出された。全体の1/3程度が残存する。淡灰褐色、完形ならば広卵形で、先端部分がやや尖る。径30mm程度。1本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線に沿って割れている。核皮は硬く、表面は縦方向に溝状の浅い彫紋が走りごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

・サワシバ(*Carpinus cordata* Blume) カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。灰褐色、卵状長楕円形でやや偏平。長さ5mm、幅3mm、厚さ2.5mm程度。頂部には6~10個の歯牙があり、花柱は短い。線形で2個の柱頭は欠損する。果皮両面にはそれぞれ5-6個の縦隆条が配列する。

・アサダ(*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属

果実が検出された。灰褐色、縦に長い滴形。先端は尖り、両面正中線の上に稜がある。長さ6mm、幅2.5mm、厚さ1.5mm程度。果皮両面にはそれぞれ10本程度の縦隆条が配列する。

・ブナ(*Fagus crenata* Blume) ブナ科ブナ属

殻斗の破片が検出された。4裂した1片の破片と基部が残存する、大きさ7mm程度。表面には刺状突起が密布するが、突起は柔らかいため、先端部分を欠損する。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

炭化した果実片が検出された。大きさは1cm程度。薄くて湾曲しており、内側に内果皮(いわゆる渋皮)が付着している。

・コナラ属(*Quercus*) ブナ科

果実破片が検出された。着点が一部残存するが、表面はざらつき、維管束の穴が輪状に並ぶ。果皮外面の破片は平滑で、縦方向の細かな溝がある。

・ヤマグワ(*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

種子が検出された。黄褐色で三角状広倒卵形。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になり薄い。長さ2mm、幅1.5mm程度。一辺が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・タムシバ - コブシ(*Magnolia salicifolia*(Siebld et Zucc.)Maxim.-*Magnolia kobus* DC.) モクレン科モクレン属

種子が検出された。黒褐色、腎臓形でやや偏平。長さ7mm、幅10mm、厚さ5mm程度。背面は凸状に膨らみ、腹面正中線には幅広い縦溝と下端に臍がある。種皮は薄く硬く、表面は平滑。

・マタタビ属(*Actinidia*) マタタビ科

種子が検出された。黒褐色、楕円形で両凸レンズ形。長さ2mm、幅1.5mm程度。基部はやや突出し、切形。種皮は硬く、表面には円形・楕円形などの凹点が密布し網目模様をなす。

・キイチゴ属(*Rubus*) バラ科

核(内果皮)が検出された。淡黄褐色、半円形-三日月形。径2mm程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

・キハダ(*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

核(内果皮)が検出された。核は黒色、半横広卵形でやや偏平。長さ4.5mm、幅3mm程度。内果皮は

厚く硬く、表面には浅く細かい網目模様があり、ざらつく。

・ウルシ属(*Rhus*) ウルシ科

核が検出された。茶褐色、楕円形で偏平。大きさは6mm程度。中央部はわずかに凹む。表面はやや平滑。

・カエデ属(*Acer*) カエデ科

種子が検出された。褐色、丸みを帯びた楕円体または偏平で翼の部分を欠損する。長さは大型のもの8mm程度で、複数の種を含む。背腹両面の正中線上に稜がある。果実表面には葉脈状の隆条模様がある。種子は大きさ5mm程度。扁平で一端にへそがある。表面は柔らかくて弾力があり、疣状の模様が密に配列する。

・トチノキ(*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

種子と果実の破片が検出された。種子は完形ならば偏球形で径20-30mm程度、種皮は不規則に割れており、大きなもので1.5cm程度。種皮は薄く硬く、微細な搔傷紋があり光沢の強い黒色の部分と、粗面で光沢のない灰褐色の部分にわかれる。果実は大きさ1cm程度。幼果の破片とみられる。果皮は肉厚。表面は茶褐色でざらつく。

・ブドウ属(*Vitis*) ブドウ科

種子が検出された。灰褐色、広倒卵形、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。長さ3.5mm、径3mm程度。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は柵状で薄く硬い。なお、属レベルの同定の根拠となる背面が欠損した固体は、ブドウ科にとどめた。

・タラノキ(*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属

核(内果皮)が検出された。茶褐色、半月形でやや偏平。長さ2mm、幅1.3mm程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。

・ウコギ科(*Araliaceae*)

核(内果皮)が検出された。黄褐色、半広卵形で偏平。長さ1.5-2mm、幅1.3mm程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背腹両面の正中線は稜をなす。表面は粗面。形状はウド(*Aralia cordata* Thunb.)に似る。

・エゴノキ属(*Styrax*) エゴノキ科

種子が検出された。黒褐色、卵形で長さ10mm、径7mm程度。基部は切形で灰褐色の大きな臍点がある。表面には3本程度の縦溝が走る。種皮は厚く(1mm程度)硬く、外面は微細な網目模様がある。

・ムラサキシキブ属(*Callicarpa*) クマツヅラ科

核(内果皮)が検出された。淡~黄褐色、扁平で卵形。長さ2mm、幅1.5mm程度。背面は円みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部の内果皮が極めて薄く柔らかいため、破損しやすい。縁部分の内果皮は厚く、やや弾力がある。

・ニワトコ(*Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) Hara) スイカズラ科ニワトコ属

核(内果皮)が検出された。淡~黄褐色、炭化個体は黒色。広倒卵形でやや偏平、長さ2mm、幅1.3mm程度。基部はやや尖り、背面は円みがあり、腹面の中央は縦方向の鈍稜をなす。腹面下端には小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

- ・イネ科(Gramineae)

穎が検出された。淡褐色、狭卵形でやや偏平。長さ2mm、径1.5mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が縦列する。

- ・カヤツリグサ科(Cyperaceae)

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を含んでいるものを一括した。淡～茶褐色。倒卵形で三稜形や二面体など。径1.5-2mm程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。スゲ属 (*Carex*) と思われる個体を含む。

- ・カラムシ属(*Boehmeria*) イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径1.2mm程度。先端部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

- ・ギンギシ属(*Rumex*) タデ科

果実が検出された。暗褐色、広楕円状三稜形。長さ3mm、径2mm程度。三稜は鋭く明瞭で、両端は急に尖る。果皮表面はやや平滑。果実を覆う花被は心円形で径5mm程度。大きな網目模様の脈があり、縁に歯牙がある。脈の基部には楕円形のコブ状突起がつく。

- ・タデ属(*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。ヤナギタデと思われる個体などが含まれる。ヤナギタデ (*Polygonum hydropiper* L.) の果実は黒色、広卵状円形で両凸レンズ状。長さ2-2.5mm、幅1.5mm程度。両面正中線上に縦方向の稜があり、表面には明瞭な網目模様がありざらつく。

- ・アカザ科(Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

- ・ナデシコ科(Caryophyllaceae)

種子が検出された。茶褐色、腎臓状円形でやや偏平。径1mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

- ・ネコノメソウ属(*Chrysosplenium*)

種子が検出された。大きさは1mm程度。褐色、楕円形で表面は光沢がある。表面には微細な突起が全面を覆う。

- ・キジムシロ属 - ヘビイチゴ属 - オランダイチゴ属(*Potentilla* - *Duchesnea* - *Fragaria*) バラ科

核(内果皮)が検出された。灰褐色、腎形でやや偏平。大きさは1mm程度。内果皮は厚く硬く、表面は微細な網目もしくは筋状模様がありざらつく。

- ・ツリフネソウ(*Impatiens textori* Miq.) ツリフネソウ科ツリフネソウ属

種子が検出された。黒色、楕円体で、長さ4mm、径2mm程度。基部は三稜形の短い嘴状突起をなし、突起の先端に縦長の臍点がある。種皮は硬く、表面には不規則に絡み合った浅く光沢の強い隆起がある。

- ・スミレ属(*Viola*) スミレ科

種子が検出された。淡黄～淡灰褐色、広倒卵形。長さ1.5mm、径1mm程度。基部は尖り、頂部には円形の臍点がある。種皮は薄く、表面は細い縦筋が走りざらつく。種皮内面は横長の細胞が配列する。

・チドメグサ属(*Hydrocotyle*) セリ科

果実が検出された。黄褐色、半月形でやや偏平。径1mm程度。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面には1本の明瞭な円弧状の稜がある。

・セリ科(*Umbelliferae*)

果実が検出された。黄褐色、紡錘状長楕円形で偏平。長さ2mm、幅1mm程度。表面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

・シロネ属(*Lycopus*) シソ科

果実が検出された。くさび形で、長さ2mm、径1mm程度。周囲の縁は灰白色であるが、中央部はふくらみ褐色。表面はやわらかく、ざらつく。

・ナス科(*Solanaceae*)

種子が検出された。淡褐色、歪な腎臓形で偏平。径2mm程度。側面のくびれた部分に臍がある。種皮は薄く柔らかく、表面には臍を中心として同心円状に星形状網目模様が発達する。網目模様は微細で網目を構成する壁の幅は太くしっかりしている。

・カノコソウ属(*Valeriana*) オミナエシ科

種子が検出された。大きさは2mm程度。楕円形で扁平。表面は薄くて柔らかく、弾力がある。背面は球状に湾曲するが、腹面は平滑で中央に筋がある。

・メナモミ属(*Siegesbeckia*) キク科

果実が検出された。黒色、狭三角状菱形体で腹面方向へやや湾曲する。長さ2.5mm、径1mm程度。頂部には円形の臍がある。表面には浅い縦溝と微細な網目がある。網目の境壁は短く突出し、全体に微細な突起がある。

・キク科(*Compositae*)

果実が検出された。茶褐色、狭倒皮針形でやや偏平。長さ2.5mm、径1mm程度。頂部は切形で円形の臍がある。果皮表面には浅い縦溝と微細な網目があり、ざらつく。

4.考察

(1)堆積環境変遷

D区谷の堆積環境を検討することを目的として、珪藻分析を実施した。その結果、縄文時代前期に相当するベルト5の15層からは、好气的環境に適応する陸生珪藻が水生珪藻を上回る量だけ産出した。また、水生珪藻の中には、中～下流性河川指標種群を含む流水性種も低率ながら伴っていた。このことから、15層は流水域の堆積物であると思われるが、堆積後に一時的に離水・乾燥するような状況もあったと考えられる。これまではF区を中心に分析調査を行ってきたが、縄文時代前期の堆積物はいずれも流水域の堆積物であることが推定されており、一部の場所で後乾燥化を示す群集が検出されている。このことから、谷筋が異なっても当時の堆積環境はF区に類似していたとみられる。

一方、縄文時代中期から後期に相当する層位では、ベルト5、ベルト6ともに中～下流性河川指標種群を多産する流水性種や沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産し、陸生珪藻や止水域に生育する止水性種は低率である。このことから、当時の谷内は流水域であったと考えられる。これらの堆積物は比較的淘汰が悪く、泥炭層中の植物遺体も谷筋などに生育する木本類が主体である。このことから、植物遺体が谷斜面から水の営力によって運搬されて堆積したと考えられ、この泥炭は谷斜面等

に生育していた木本類に由来すると推定される。また、F区ではトチノキ種皮片集積遺構が検出されており、近野遺跡の谷では水さらしなどの加工が行われていたことが想定されている。F区やD区の結果より、谷に水が流れていたことが明らかになったことから、谷周辺がトチの調理・加工を行う適地であったことが伺われる。なお、ベルト6は、ベルト5の縄文時代後期前後の層位と珪藻化石群集が近似することから、堆積環境もほぼ同様であったと考えられる。ただし、ベルト5では砂質な堆積物が多いのに対し、ベルト6では有機質な堆積物が多く、種実遺体も多産する。河川の氾濫で有機物が集積するのは、流れの中心から外れた流速の遅い場所であることから(鈴木,1994など)、ベルト6の堆積物をもたらした時期の流速は、ベルト5に比べて穏やかであった可能性がある。

平安時代以降の堆積環境に関しては、これまでF区で調査を継続している。これによると、水生珪藻に加えて陸生珪藻も多産し、水生珪藻の中には沼沢湿地付着生種群や好塩性種を含んでいる。このことから、谷の埋積が進んで、沼沢～湿地のような浅い水域となり、離水した場所もみられるようになったと推測される。また、谷内における水生植物の繁茂や、周辺での耕作?などにより、水質が富栄養化したことが考えられる。今回は、1点のみの分析ではあるが、群集がF区のものと同様であることから、同様な堆積環境が示唆される。

(2)古植生と植物利用

縄文時代前期の花粉化石群集をみると、クリ属の割合が高い。一方種実遺体では、木本類ではサワシバ、タラノキ、カエデ属など林縁部に生育する低木類を中心に検出され、草本類ではカヤツリグサ科やウド?などがみられる。F区の結果なども加味すると、谷付近の森林を構成していた種類としては、オニグルミ、サワシバやアサダなどのシデ類、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属、クリ属、キハダ、カエデ属、トチノキ属、タラノキ、ミズキ、トネリコ属などの落葉樹が中心であったと考えられる。特に、ハンノキ属、シデ類、オニグルミ、トチノキ、トネリコ属など湿った所を好む種類は、谷筋を中心に生育していたものと考えられる。なお、クリ属の花粉化石は、今回高率に検出されているが、このような結果は近接する三内丸山遺跡でも同様である(金原, 1998; 安田, 1995)。三内丸山遺跡では、これをクリの栽培に結びつけている(安田, 1995など)。種実の堆積過程について今後吟味する必要があるが、少なくともこれまでの結果ではクリの種実が谷内でほとんど見られないことから、その生産域は谷沿いではない可能性が高い。クリの花粉は虫媒花であるが、尾状花序で花数も多いため、花粉生産量が多く、飛散能力も高いことが知られている。このことから、クリ林が存在した場所はより山よりと思われるが、現段階では不明な点も多く、今後材同定結果など含め検討すべき課題と考える。

また、花粉分析の結果から、「トチの水さらし場」が作られた縄文時代中期を境にして、クリが多い森林から、トチノキやコナラ亜属が多い森林へ変化してきたことが推測される。隣接する三内丸山遺跡の花粉分析結果においても、縄文時代前期に多かったクリ属の割合が、縄文時代中期には減少する傾向が確認されている(金原, 1998; 安田, 1995)。このことから、クリ属の減少は、三内丸山遺跡を含めた地域的な変化ととらえることができる。三内丸山遺跡では縄文時代前期にクリが栽培・利用されていたと考えられているが(南木ほか, 1998aなど)、縄文時代中期になると何らかの理由でクリの栽培・利用が縮小あるいは途絶えた可能性が指摘されている(安田, 1995など)。今回の結果をみると、縄文時代中期にはクリ属の花粉化石が減少することから、何らかの理由で食糧資源としての

クリが枯渇した可能性もある。そのため、隣接する近野遺跡でトチノキの利用が始まったのかもしれない。トチの種実には谷内から多量に検出され、その中には幼果も含まれることから、谷付近に生育していたと考えられ、加工場所と採取場所は近接していたものと推測される。トチの花粉化石や種実遺体はいずれも縄文時代中期に極大となるが、これが自然に増加したのか、あるいは人為的なものに由来するかは現在のところ不明である。

一方、三内丸山遺跡では多くの種実遺体を得られており、有用な種類も多く得られている（岡田，伊藤，1995，南木ほか，1998a；南木ほか，1998b）。縄文時代の層準から出土した種実を比較してみると、ともに、温帯～冷温帯を中心に分布する針葉樹や落葉広葉樹が多産する点では一致し、種類構成も類似している。しかし、これまでの結果を見ると、三内丸山遺跡では人為的と思われる破壊、集積、廃棄などの痕跡が認められるのに対し、近野遺跡ではトチ以外に廃棄したと考えられる痕跡はいまのところ認められていない。なお、近野遺跡でこれまで検出された種実のうち、オニグルミ、ナラ類、ブナ、ブドウ属、トチノキ、マタタビ属、ニワトコ、ミズキ、ヤマグワなどが可食植物として利用可能である。

縄文時代後期以降の堆積物をみると、これまでの結果と同様に、ブナ属やコナラ属、スギ属などの花粉化石が多産する。周辺はブナやナラ類を中心とする広葉樹林が存在したと推定されるが、ブナ属は冷温帯で極相林を作る種類であることから、本遺跡周辺ではクリやトチノキなどが減少し、ブナ林へと変化したことが伺われる。このような変化は、縄文時代には人為的な営力などにより極相林が発達しなかったが、その後遷移が進んで極相林になったことに由来すると考えられる。三内丸山遺跡の結果（安田，1995など）などから、縄文時代にクリの栽培など大規模な人為的な土地利用がなされていたことが推測されるが、そのために極相林（この付近ではブナ林）が発達しなかった可能性がある。その後もトチノキの利用など人為的な植生干渉が続いたが、その後森林への植生干渉がなくなったため、極相林に遷移が進行したと推測される。ただし、谷の浸食などの土地的要因によっても遷移が滞ることもあることから、一概に人為的な植生干渉が原因であるとも断定できず、今後さらなる検討が望まれる。

平安時代の花粉化石・種実遺体群集は、これまでの分析結果も含めると、基本的に草本類を主とする組成である。これらは、人里などに草地を作る種類であることから、耕地の拡大などにもなって森林が切り開かれて草地化し、そこにこれらの種類が生育するようになったと思われる。今回は、栽培植物は検出されていないが、これまでの結果をみるとイネ、ソバ、アワ・ヒエ、エゴマ、アサが検出されており、当時の栽培が想定される。

引用文献

- 安藤 一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
 Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*,10, 35-47.
 原口 和夫・三友 清・小林 弘,1998,埼玉の藻類 珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.
 伊藤 良永・堀内 誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.
 石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
 金原 正明,1998,花粉・種実・寄生虫卵から探る.縄文生活.文化財を探る科学の眼 1 化石・骨・木製品を探る,平尾 良光・山岸 良二編,国土社,12-14.
 小杉 正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用.第四紀研究,27,1-20.
 Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.

J. CRAMER, 353p.
 Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, *Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae*. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/1*. Gustav Fischer Verlag, 876p.
 Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, *Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae*. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2*. Gustav Fischer Verlag, 536p.
 Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, *Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae*. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/3*. Gustav Fischer Verlag, 230p.
 Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, *Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema*. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/4*. Gustav Fischer Verlag, 248p.
 南木 睦彦・齋藤 由美子・辻 誠一郎, 1998b, 三内丸山遺跡第6鉄塔スタンダードコラムの大型植物化石群. 青森県埋蔵文化財調査報告書 第249集 三内丸山遺跡 - 第6鉄塔地区調査報告書2 (第2分冊), 青森県教育委員会, 15-17.
 南木 睦彦・辻 誠一郎・住田 雅和, 1998a, 三内丸山遺跡第6鉄塔地区 a, b層から産出した大型植物遺体(化石). 青森県埋蔵文化財調査報告書 第249集 三内丸山遺跡 - 第6鉄塔地区調査報告書2 (第2分冊), 青森県教育委員会, 35-51.
 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
 岡田康博・伊藤由美子, 1995, 三内丸山遺跡にみる植物利用. 考古学ジャーナル, 389, 20-24.
 鈴木一久, 1994, 1993年9月9日野洲川洪水氾濫堆積物の3次元形態と堆積構造: 1回の洪水氾濫で形成された複数の逆級化構造ユニット. 地質学雑誌, 100, 867-875.
 安田 喜憲, 1995, クリ林が支えた高度な文化. 縄文文明の発見, 梅原 猛・安田 喜憲編著, PHP, 118-153.

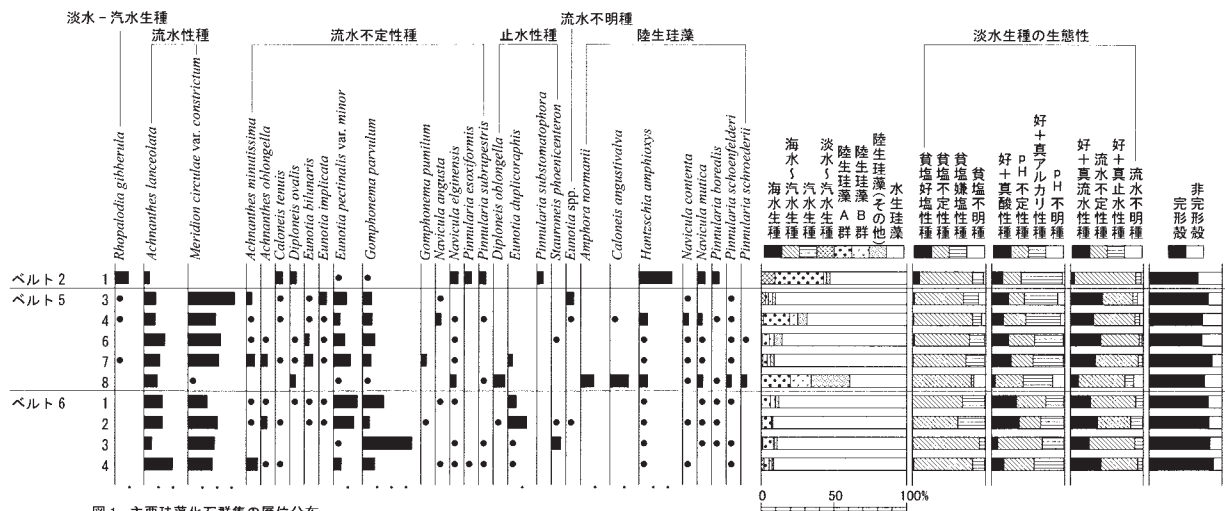


図1. 主要珪藻化石群集の層位分布
 海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は3%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

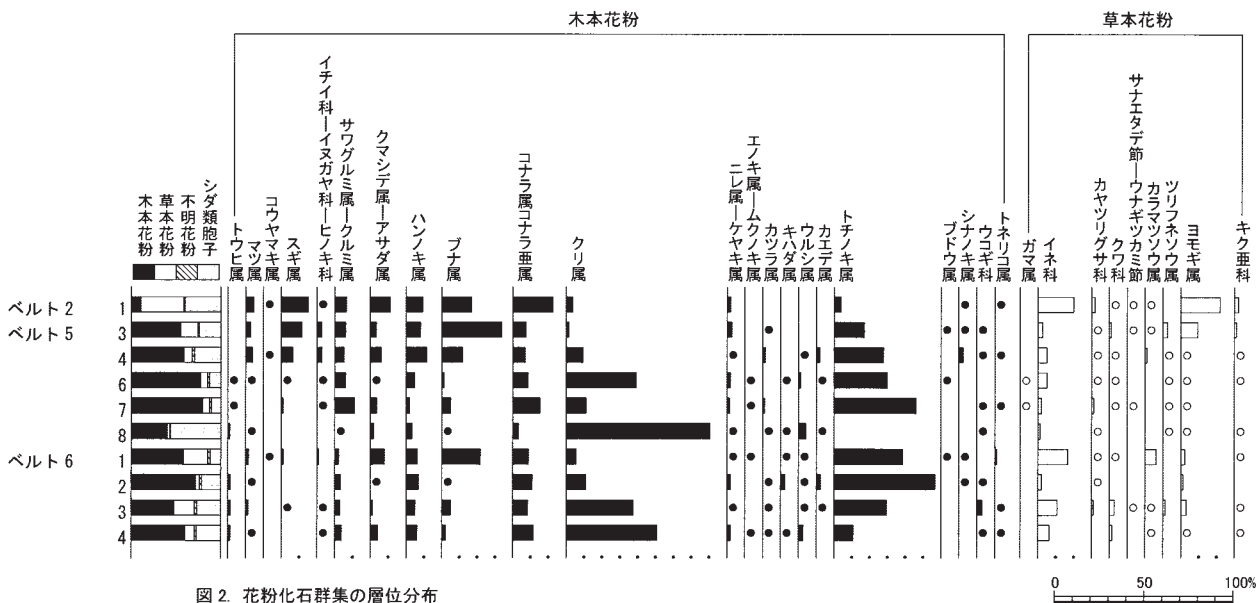


図2. 花粉化石群集の層位分布
 出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

近野遺跡

表1. 珪藻分析結果(1)

種 類	生態性			環境 指標種	ベルト									
	塩分	pH	流水		2	5					6			
					1	3	4	6	7	9	1	2	3	4
Nitzschia plana W.Smith	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	1	1	1	-	-	1	-	1
Nitzschia obtusa var. scalpelliformis Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	1	-	-	-	-	-	-	1	3
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		19	5	1	-	1	-	-	-	-	-
Achnanthes convergens H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Achnanthes helvetica (Hust.)Lange-B.	Ogh-hob	ac-il	r-ph		-	1	-	-	-	-	2	5	-	2
Achnanthes laevis Oestrup	Ogh-hob	ac-il	unk		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	8	17	15	29	22	18	26	26	11	40
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	8	1	1	12	-	3	1	-	16
Achnanthes oblongella Ostrup	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	2	9	-	1	9	-	4
Achnanthes rostrata Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	4	2	2	1	-	-	2	-	6
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	4	-	-	-	-	-	5
Amphora normanii Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	18	-	-	-	-
Aulacoseira italica (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	2	4	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-
Caloneis angustivalva Petit	Ogh-unk	unk	unk	RI	-	-	6	-	-	26	-	-	-	-
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
Caloneis hyalina Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	3	-	-	-	-	1	1	-	-	1
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis tenuis (Greg.)Krammer	Ogh-ind	al-il	ind		10	1	1	-	2	-	-	2	-	1
Caloneis undulata (Greg.)Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Cymbella amphicephala var. hercynica (A.Schmidt)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1	-	2	-	-	-	-	4	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	4	1	1	-	-	-	3	-	-	-
Diatomella balfouriana (W.Smith)Grevil	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Diploneis elliptica (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	RA,T	-	1	-	2	-	-	1	-	-	-
Diploneis oblongella (Naegeli)Cleve-Euler	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	16	-	1	-	-
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	9	-	-	1	3	8	1	-	-	-
Diploneis parva Cleve	Ogh-ind	ind	ind		4	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	2	1	2	-	2	1	-	-	-
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	ind		-	4	4	7	12	-	1	2	-	-
Eunotia diodon Ehrenberg	Ogh-hob	ac-bi	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia duplicoraphis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	7	-	12	27	2	4
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia gracialis Meister	Ogh-hob	ind	l-bi		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	11	2	5	1	-	4	3	-	-
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	1	-	-	-	2	1	-	1
Eunotia muscicola var. tridentula Noerpel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	6	-	-	1	6	3	1
Eunotia naegelii Migula	Ogh-hob	ac-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	1	19	9	16	24	1	34	29	6	11
Eunotia praeurupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia praeurupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia tenella (Grun.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	3	-	3	1	-	1	-	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	11	2	-	-	-	-	1	-	-
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria parasitica (W.Smith)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
Frustulia constricta Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	3	-	-	1	-	-	1	-
Frustulia vulgaris var. capitata Krasske	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	2	1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	2	-	4	-	1	2	-
Gomphonema angustatum var. undulata (Greg.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	5	-	-	-	1
Gomphonema dichotomum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	1	-	-	3	-	1	1	1	-
Gomphonema occultum Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	5	2	1	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	5	13	13	17	12	1	30	10	69	17
Gomphonema parvulum var. lagenula (Kuetzing)Frenguelli	Ogh-ind	ind	r-ph	S	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	8	-	-	2	-	-
Gomphonema subclavatum (Grun.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	-	1	2	3	-	-	-	1	1
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	46	-	12	1	2	12	5	5	6	5
Meridion circulae Agardh	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	68	38	46	43	4	27	42	37	34
Navicula angusta Grunow	Ogh-ind	ac-il	ind	T	-	3	8	-	-	-	1	-	-	1
Navicula coconeiformis Gregory	Ogh-hob	ind	r-ph		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	1	8	1	1	2	-	1	-	1
Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	1	1	-	4	-	-	-	-
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	2	1	-	1	-	3
Navicula cryptotenella Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	12	-	1	6	1	9	1	-	4	1
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	-	-	-	1	-	-	-	-	1
Navicula gallica var. perpusilla (Grun.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	3	-	-	1	-	-	-	-
Navicula hamburgii Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB,T	-	1	-	1	-	3	2	-	-	-
Navicula ignota var. palustris (Hust.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1	-	-	-	1	-	-	-	1
Navicula joubaudii Germain	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula lapidosa Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	11	-	7	4	1	8	3	1	3	-
Navicula nymphaeum Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
Navicula placenta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	RI	2	2	1	-	-	1	-	-	-	-
Navicula rutneri var. chilensis Krasske	Ogh-unk	unk	unk		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-

表1. 珪藻分析結果(2)

種 類	生態性			環境 指標種	ベルト 2		ベルト5					ベルト6			
	塩分	pH	流水		1	3	4	6	7	9	1	2	3	4	
Navicula seminulum Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	-	-	3	1	2	-	-	-	-	1	
Navicula subcostulata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	2	3	1	3	-	3	1	-	-	
Navicula tantula Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI,U	-	-	-	2	4	-	2	-	-	-	
Navicula tenelloides Hustedt	Ogh-unk	unk	r-ph	J,U,RI	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
Navicula tuscula (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-bi		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	6	2	1	-	-	1	-	-	2	
Neidium affine (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-bi		-	-	2	1	-	-	-	-	1	2	
Neidium affine var. longiceps (Greg.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi		-	-	-	-	-	1	-	-	-	3	
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	2	1	-	1	6	2	1	1	-	
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	1	1	1	1	1	-	1	4	-	
Neidium bisulcatum (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RI	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	-	1	-	-	-	1	-	-	-	2	
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	
Nitzschia debilis (Arnott)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	
Nitzschia dissipata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	3	1	-	-	2	-	-	2	
Nitzschia linearis W.Smith	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	2	1	-	-	-	1	-	-	
Nitzschia nana Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
Nitzschia tubicola Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	1	-	-	-	-	-	-	3	
Orthoseira roeseana (Rabh.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	10	-	6	-	-	1	2	1	2	-	
Pinnularia borealis var. brevicostata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
Pinnularia divergentissima (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	
Pinnularia esoxiformis Fusey	Ogh-hob	ac-il	ind		10	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-	
Pinnularia intermedia (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
Pinnularia krookii (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	
Pinnularia lenticuloides H.Kobayasi	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	-	-	1	-	2	1	1	1	-	
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	1	1	-	-	1	-	-	-	
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	1	-	2	-	1	3	1	
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	1	-	1	-	2	-	
Pinnularia schoenfelderii Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	2	5	1	7	1	-	4	1	
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	1	-	8	-	-	-	-	
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		4	-	-	-	-	-	1	-	1	1	
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	-	2	3	5	3	1	3	1	1	1	
Pinnularia subrupestris Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		10	-	2	-	-	2	-	-	1	1	
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Pinnularia viridiformis Krammer	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	1	-	1	-	2	-	
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	
Sellaphora laevisissima (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-	-	-	-	1	-	5	-	
Sellaphora laevisissima var. perhibita (Hust.)Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind		6	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	U	2	1	1	2	1	-	3	-	1	2	
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1	2	-	-	-	-	-	1	-	
Stauroneis borrichii (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	
Stauroneis kriegeri Patrick	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	2	2	2	-	2	4	2	3	
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
Stauroneis legumen (Ehr.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	1	4	-	1	1	-	5	
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	1	-	-	-	2	13	-	
Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	2	-	-	1	1	-	-	-	
Stauroneis thermicola (Petersen)Lund	Ogh-unk	unk	unk	RI	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	-	-	1	1	-	-	-	4	1	
Surirella linearis W.Smith	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
Surirella tenera Gregory	Ogh-hob	ind	l-bi		-	1	1	-	-	-	2	1	1	-	
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	
淡水～汽水生種					19	6	3	1	2	0	0	1	1	4	
淡水生種					185	207	198	203	204	201	206	206	202	200	
珪藻化石総数					204	213	201	204	206	201	206	207	204	204	

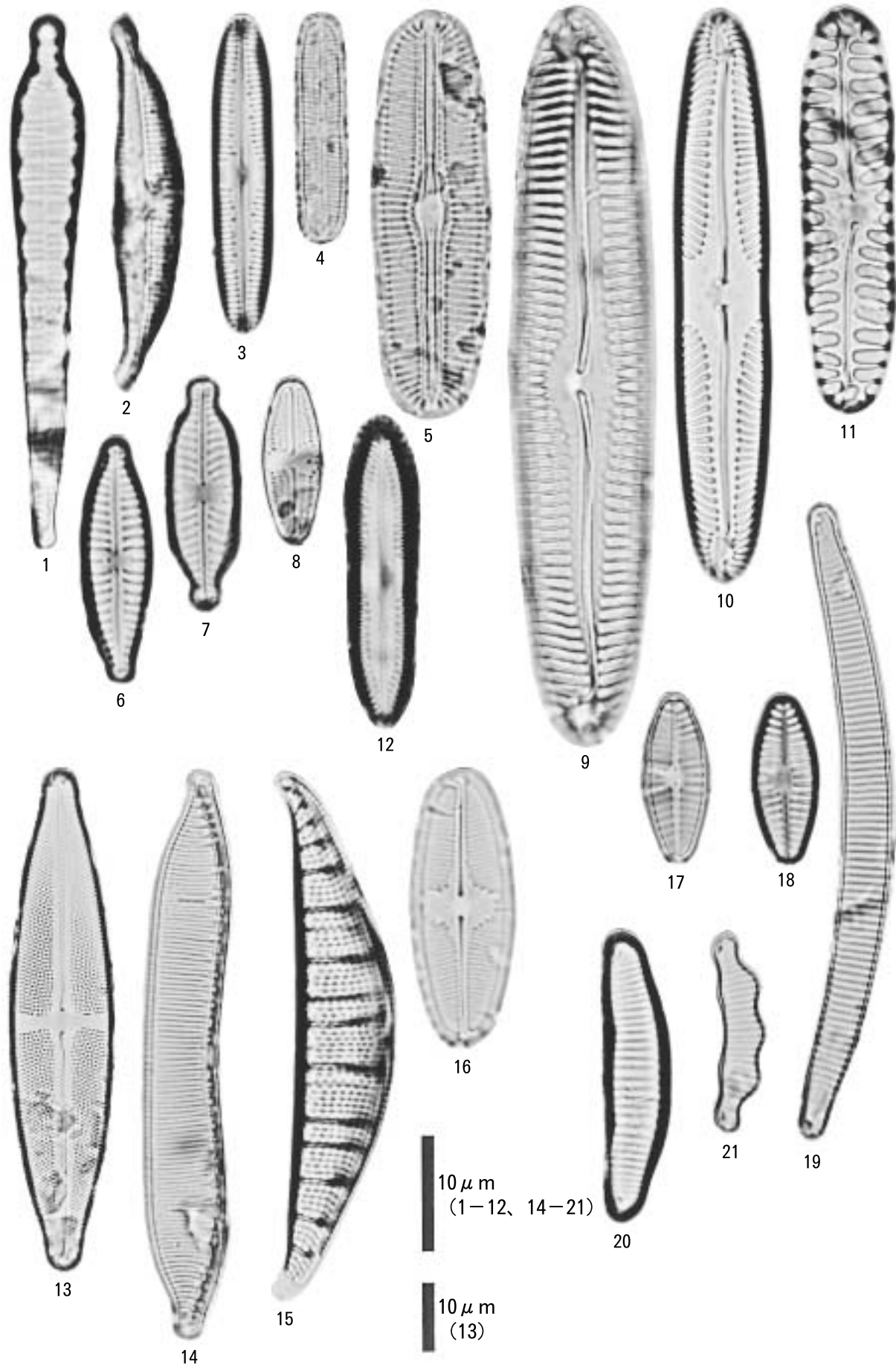
凡例

- | | | |
|---------------------|---------------------|------------------|
| H.R. : 塩分濃度に対する適応性 | pH : 水素イオン濃度に対する適応性 | C.R. : 流水に対する適応性 |
| Meh : 汽水生種 | al-bi : 真アルカリ性種 | l-bi : 真止水性種 |
| Ogh-Meh : 淡水 - 汽水生種 | al-il : 好アルカリ性種 | l-ph : 好止水性種 |
| Ogh-hil : 貧塩好塩性種 | ind : pH不定性種 | ind : 流水不定性種 |
| Ogh-ind : 貧塩不定性種 | ac-il : 好酸性種 | r-ph : 好流水性種 |
| Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種 | ac-bi : 真酸性種 | r-bi : 真流水性種 |
| Ogh-unk : 貧塩不明種 | unk : pH不明種 | unk : 流水不明種 |

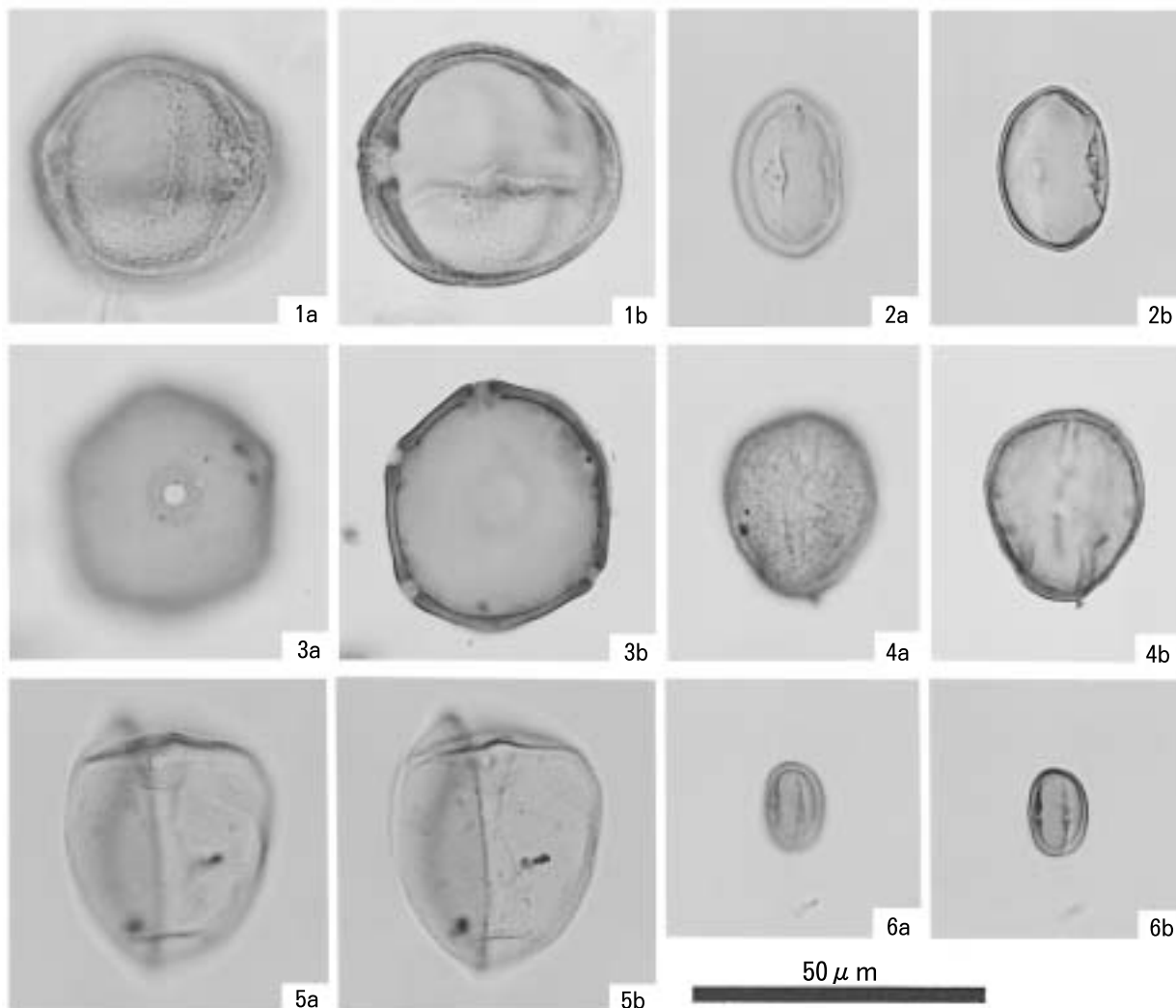
環境指標種群

- J:上流性河川指標種, K:中～下流性河川指標種, O:沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)
 S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)
 R:陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

图版 1 珪藻化石



図版 2 花粉化石

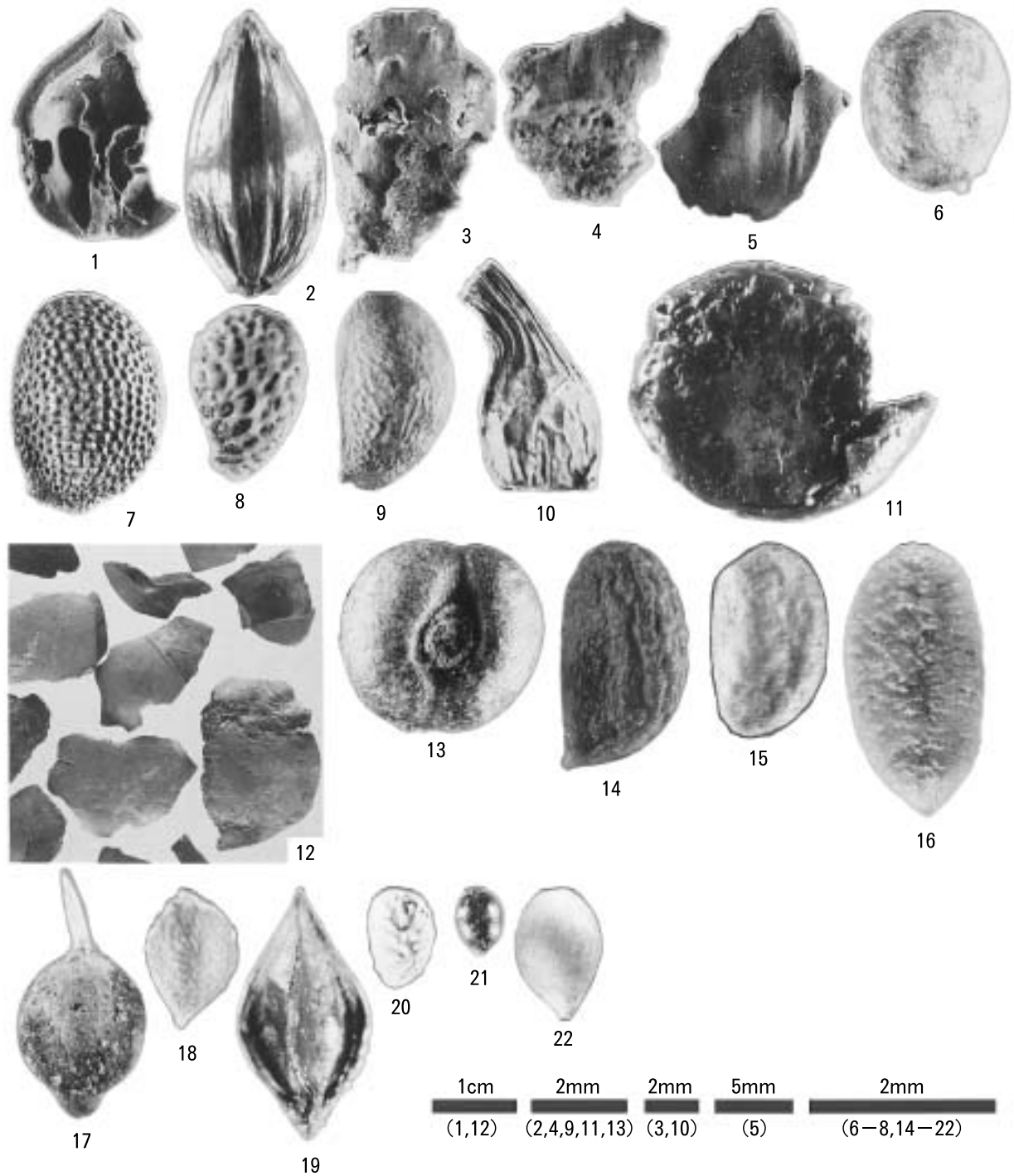


- | | |
|------------------|-------------------|
| 1. ブナ属 (ベルト5;3) | 2. トチノキ族 (ベルト6;1) |
| 3. クルミ属 (ベルト5;6) | 4. コナラ亜属 (ベルト6;4) |
| 5. イネ科 (ベルト2;1) | 6. クリ属 (ベルト6;4) |

(図版 1 珪藻化石)

1. *Meridion circularae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck (ベルト5;3)
2. *Amphora normanii* Rabenhorst (ベルト5;9)
3. *Caloneis tenuis* (Greg.) Krammer (ベルト2;1)
4. *Caloneis angustivalva* Petit (ベルト5;9)
5. *Diploneis oblongella* (Naegeli) Cleve-Euler (ベルト5;9)
6. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (ベルト6;3)
7. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs (ベルト5;9)
8. *Navicula mutica* Kuetzing (ベルト2;1)
9. *Pinnularia rupestris* Hantzsch (ベルト2;1)
10. *Pinnularia substomatophora* Hustedt (ベルト2;1)
11. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (ベルト2;1)
12. *Pinnularia schroederii* (Hust) Krammer (ベルト5;9)
13. *Stauroneis phoeniceteron* (Nitz.) Ehrenberg (ベルト6;2)
14. *Hantzshia amphioxys* (Her.) Grunow (ベルト2;1)
15. *Rhopalodia gibberula* (Her.) O. Muller (ベルト2;1)
16. *Achnanthes helvetica* (Hust.) Lange-B. (ベルト6;2)
17. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (ベルト5;3)
18. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (ベルト5;3)
19. *Eunotia bilunaris* (Her.) Mills (ベルト5;3)
20. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (ベルト5;3)
21. *Eunotia muscicola* var. *tridentula* Noerpel & Lange-Bertalot. (ベルト5;6)

図版3 種実遺体



- | | |
|-------------------------------------|---------------------|
| 1. オニグルミ核(ベルト5;7) | 2. アサダ果実(ベルト6;1) |
| 3. ブナ殻斗(ベルト6;1) | 4. コナラ属果実(ベルト5;7) |
| 5. クリ果実(ベルト6;4) | 6. ヤマグワ属種子(ベルト6;2) |
| 7. マタタビ属種子(ベルト6;2) | 8. キイチゴ属核(セクション2;1) |
| 9. キハダ核(ベルト6;2) | 10. カエデ属果実(ベルト6;4) |
| 11. ウルシ属核(ベルト6;2) | 12. トチノキ種子(ベルト6;3) |
| 13. ブドウ属種子(ベルト6;2) | 14. タラノキ核(ベルト6;2) |
| 15. ウコギ科(ウド?)核(ベルト6;3) | 16. ニワトコ核(ベルト6;2) |
| 17. カヤツリグサ科果実(ベルト5;3) | 18. カラムシ属果実(ベルト6;3) |
| 19. ギシギシ属果実(ベルト6;3) | |
| 20. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属核(ベルト2;1) | |
| 21. ネコノメソウ属種子(ベルト5;3) | |

第3節 近野遺跡出土の炭化植物種子

札幌国際大学博物館 客員研究員 椿坂恭代

1. 遺跡の所在と性格

遺跡の名称 : 近野遺跡 (青森県遺跡番号01065)

遺跡の所在地 : 青森県青森市大字安田字近野219, 外

発掘調査期間 : 平成13年～平成15年

調査の担当機関 : 青森県埋蔵文化財調査センター

遺跡の主な年代 : 縄文時代 (中期後半, 後期), 平安時代

遺跡の立地

近野遺跡は青森市街地の南西方約4km地点に位置する。沖館川南岸に展開する低位段丘上にあつて、標高は10～18mである。

その他の検出遺構・遺物などの詳細については本文を参照されたい。

2. 扱った資料

今回、扱った資料は、平成15年度に調査を実施した平安時代 (9世紀頃) の竪穴住居跡からものである。採取した土壌をフローテーション法で処理し、その後、第1次選別で炭化植物種子などを抽出し送付され、これらの資料を実体顕微鏡で観察し撮影を行なった。検出された植物種子の出土表は第1表に示しておく。

3. 竪穴住居跡 (CSI7)から検出された種子

イネ *Oryza sativa* L. (図版1-1a,2a : CSI7の焼土から出土)

竪穴住居跡のカマド、覆土 (焼土ブロック)、Pit1から出土。果実は長楕円形で腹面の下部に胚がある。側面にやや隆起した縦の稜線がある。資料のなかには2aに示したような粒形が狭長でシナ状態のものなどが混在していた。計測値は1a.長さ4.00mm,幅2.20mm,厚さ1.55mm, 2a.長さ3.80mm,幅1.30mm,厚さ1.20mm。

オオムギ *Hordeum vulgare* L. (図版1-3a : CSI7の焼土から出土)

竪穴住居跡の覆土 (焼土ブロック) から出土。果実は紡錘状楕円形。腹面には縦溝があり、背面はほぼ平らで下部に楕円形の胚がある。資料は1粒のうえ、変形が著しく表面に残る穎の剥離痕は確認できなかった。種子の形態からみて皮性オオムギの可能性が高い (1998 椿坂)。計測値は長さ4.70mm,幅2.30mm,厚さ1.70mm。

コムギ *Triticum aestivum* L. (図版1-4a : CSI7のカマドから出土)

竪穴住居跡のカマドから出土。果実は短楕円形。腹面の中央には縦溝があり、背面はほぼ平らで背面の下部にはやや円形の胚がある。資料は被熱による変形が著しい上、1粒の出土で詳細な分類は困

難である。しかし、大きさは筆者らの言うエゾコムギ (1990 吉崎・椿坂) の範疇に属するものであろう。計測値は長さ3.15mm,幅2.40mm,厚さ2.30mm。

アワ *Setaria italica* (L.) P. Beauv (図版1-5a : CSI7の焼土から出土)

竪穴住居跡のカマド, 覆土 (焼土ブロック), 覆土 (9層), Pit1から出土。穎果はやや球形。背面には果長の2/3ほどの長さで胚がある。その反対側の腹面には小さなヘラ型のヘソがある (1993 椿坂)。種子はすべて穎の取れた状態で出土。計測値は長さ1.30mm,幅1.25mm,厚さ1.00mm。

キビ *Panicum miliaceum* L. (図版1-6a : CSI7の焼土から出土)

竪穴住居跡のカマド, 覆土 (焼土ブロック) から出土。穎果はやや球形または広卵形。背面には果長の1/2ほどの胚があり, その反対側の腹面にはヘラ形状のヘソがある (1993 椿坂)。種子はすべて穎の取れた状態で出土。計測値は長さ1.90mm,幅1.70mm,厚さ1.30mm。

ヒエ属 *Echinochloa* Beauv. (図版1-7a : CSI7の焼土から出土)

竪穴住居跡の覆土 (焼土ブロック) から出土。穎果は広楕円形。背面には果長の1/2ほどを占める楕円形の大きな胚がある。その反対側の腹面にはヘラ形状のヘソがある (1993 椿坂)。出土したヒエは2粒とも穎が付いた状態で詳細な分類は出来なかった。計測値は長さ2.60mm,幅1.60mm,厚さ1.10mm。

シソ属 *Perilla* L. (図版1-8a : CSI7のカマドから出土)

竪穴住居跡のカマドから出土。種子は扁平球形でその表面に大きな網目状の模様がある。この形態を持つ種子にエゴマ *Perilla frutescens* var. *japonica*とシソ *Perilla frutescens* var. *japonica*がある。両者とも形態と表皮の構造が類似している部分が多く, 分類は困難である。エゴマには白色と褐色の二品種ある (1942 近藤)。白エゴマの果皮の表面構造は, 褐色エゴマ, シソの果皮にはない特有の突起した大きな網目構造がある。その下に網目状の構造が見られる。エゴマはシソよりサイズが大きい。今回, 検出されたシソ属種子は1粒で保存状態が悪いため詳細な分類は出来なかった。計測値は長さ1.90mm,幅1.70mm。

アサ *Cannabis sativa* L. (図版1-9 : CSI7の焼土から出土)

竪穴住居跡の覆土 (焼土ブロック) から出土。種子は広楕円形。腹面に縦に2条の稜角がある。種皮の表面は被熱されると斑状になる。アサは純粋に栽培したものか, 集落や耕地周辺に半野生状態にあったのかの判断はつかない。破片のため計測はしていない。

アカザ属 *Chenopodium* L. (図版1-10 : CSI7の焼土から出土)

竪穴住居跡のPit1, 覆土 (焼土ブロック), 覆土 (9層) から出土。種子は扁平球形。側面には嘴状に突出したヘソがある (資料の左上)。アカザ *Chenopodium album* var. *centrorubrum* Makinoとシロザ *Chenopodium album* L.が分布しているが種子の形態からは種までの分類は困難である。計測値は長さ1.30mm,幅1.30mm,厚さ0.70mm。

タデ科 POLYGONACEAE (図版1-11: CSI7の焼土から出土)

竪穴住居跡のPit1, 覆土(焼土ブロック)から出土。瘦果は扁平レンズ形。タデ科種子は類似する形態が多いため詳細な分類は困難である。計測値は長さ1.80mm,幅1.20mm,厚さ0.90mm。

ニワトコ属 *Sambucus* L. (図版1-12: CSI7の焼土から出土)

竪穴住居跡の覆土(焼土ブロック)から出土。種子は狭楕円形。背面は円みがあり, 腹面は鈍稜をなす。種皮は皺状に隆起した模様があり粗面である。これらの特徴からニワトコ *Sambucus racemosa* L.と判断される。計測値は長さ2.20mm,幅1.20mm,厚さ0.70mm。

ウルシ属 *Rhus* L. (図版1-13: CSI7の焼土から出土)

竪穴住居跡の覆土(焼土ブロック)から出土。種子は歪んだ扁円形でやや扁平。類似した形態を持つ種子としてウルシ *Rhus verniciflua* Stokes; ヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq., ツタウルシ *Rhus ambigua* Lavallee ex Dippel, ヌルデ *Rhus javanica* L.などがあるが, 形態から種までの分類は困難である。計測値は長さ2.00mm,幅2.70mm,厚さ1.60mm。

ブドウ科 VITIDACEAE (図版1-14: CSI7の焼土から出土)

竪穴住居跡の覆土(焼土ブロック)から出土。堅果は広倒卵形, 背面は円みがあり, 倒へら形の凹みがある。腹面の中央に稜をなす。稜の両側に針形の凹みがある。ブドウ科種子の特徴である腹面の両側にある針形の凹みが観察されたことからブドウ科と判断される。破片のため詳細な分類は出来なかった。破片のため計測はしていない。

キハダ属 *Phellodendron* Rupr. (図版1-15: CSI7,Pit1から出土)

竪穴住居跡のPit1から出土。種子は半横広卵形で表皮に浅い凹みによる網目模様がある。これらの特徴からキハダ *Phellodendron amurense* Rupr.と判断される。計測値は長さ4.60mm,幅2.70mm,厚さ1.60mm。

クルミ属 *Juglans* L. (図版1-16: CSI7,9層から出土)

竪穴住居跡のカマド, Pit1, 覆土(焼土ブロック), 覆土(9層)から出土。すべて内果皮の破片である。核表面には縦に浅い溝状の模様がある。これらの特徴からオニグルミ *Juglans sieboldiana* Maximと判断される。破片のため計測はしていない。

その他に不明として扱った資料は, 保存状態が悪いため分類できなかったものである。また, アワ, キビ, ヒエ属と思われるものがあるが, 被熱による変形が激しく分類することができなかった資料を不明ミレットとして扱った。

4. 若干のコメント

検出された植物資料は, 平安時代(9世紀頃)の竪穴住居跡からのものである。栽培種子はイネ,

オオムギ、アワ、ヒエ属、キビ、シソ属、アサの組成である。野生種子では畑地雑草で知られるタデ科、アカザ属、木本類はブドウ科、キハダ属、クルミ属が検出されている。

近年、フローテーション法の導入により青森県の平安時代の一般的な栽培植物の組成が解ってきている（1998 吉崎・椿坂, 2006a,b 椿坂）。イネ、オオムギ、コムギ、アワ・キビ・ヒエ属、その他にアズキ、ダイズ、ウリ科、シソ属、アサ、アブラナ科などが存在するという状況である。

今回、土壌を採取した住居生活面の炭化物の保存状態はあまりよい状態ではなかったようである。炭化種子の検出状況を見ると、カマドからは僅か、覆土（焼土ブロック）から纏まって栽培植物種子が検出されている。調査担当者の説明によると、この焼土ブロックは、堆積土が人工的に埋め戻された様相を呈することから、別の地点から住居跡の窪みに廃棄されたものと考えているという（詳細については本文第2章第2節を参照のこと）。こうした状況の中から検出された炭化種子は量的な多寡はあるが青森県の平安時代に見られる栽培植物の組成である。

こうして、植物遺体を定期的に採集し検討することによって、立地の相違による栽培植物組成のあり方や、集落相互間の栽培植物の補完関係などの実情が見えてくると思う。

第1表 炭化種子出土表

	遺構名	グリッド	層位	イネ		オオムギ	コムギ	アワ	キビ	ヒエ属	シソ属	アサ	タデ科	アカザ属	ニワトコ属	ウルシ属	ブドウ科	キハダ属	クルミ属	不明ミレット	不明
				粒	片	粒	粒	粒	粒	粒	粒	粒	粒	粒	粒	粒	粒	粒	粒	粒	粒
1	CSI7 覆土	GN-247	9層					21						1					6	1	
2	CSI7 覆土（焼 土ブロッ ク）	GM-247	3層相当	79	87	1		666	224	2		1	1	1	1	2	1		7	36	1
3	CSI7 カマド	GM-247	カマド 2層																2		1
4	CSI7 カマド	GM-247	カマド 9層		1		1		3										3	1	
5	CSI7 カマド	GM-247	カマド 10層上位					2											3	1	
6	CSI7 カマド	GM-247	カマド 10層中位																2		
7	CSI7 カマド	GM-247	カマド 10層下位																		1
8	CSI7 カマド	GM-247	カマド 15層					7	1		1								4		
9	CSI7 Pit1	GN-247	1層	2				17					3	1				1	64	2	

引用文献

近藤萬太郎

1942：「農林種子學」後編 456-462 株式会社 養賢堂

椿坂恭代

1993：アワ・ヒエ・キビの同定 「先史時代と関連科学」261-281 吉崎昌一先生還暦記念論文集

1998：オオムギについて 「道を辿る」245-250 石附喜三男先生を偲ぶ刊行委員会

2006a：八戸市潟野遺跡出土の炭化植物種子「潟野遺跡」169-178 青森県埋蔵文化財調査報告書第412集 青森県教育委員会

2006b：倉越（2）遺跡・大池館遺跡出土の炭化植物種子「大沢遺跡・寒水遺跡・倉越（2）遺跡・大池館遺跡」297-301 青森県埋蔵文化財調査報告書第417集 青森県教育委員会

吉崎昌一・椿坂恭代

1998：青森県高屋敷館遺跡出土の平安時代の植物種子「高屋敷館遺跡」370-384,図1-4 青森県埋蔵文化財調査報告書第243集 青森県教育委員会

図版 1



第4節 近野遺跡から出土した木材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、近野遺跡の縄文時代および平安時代の木製品・自然木について樹種同定を実施し、各時期の木材利用や古植生に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、谷（D2区）から出土した木製品11点である。

2. 分析方法

各木製品について、木取及び加工痕等について観察を行った後、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。芯持丸木等の3断面の切片作成が困難な木製品については、接合面や破損部を対象として数mm角の木片を採取し、木片から3断面の切片を作成している。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考としている。また、各樹種の木材組織配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考としている。

3. 結果

樹種同定結果を表1-3に示す。木製品等には針葉樹2種類（トウヒ属・アスナロ）、広葉樹4種類（アサダ・ニレ属・トチノキ・トネリコ属）に同定された。なお、W-121は広葉樹の樹皮であった。同定された各種類の解剖学的特徴等を記す。

・トウヒ属 (*Picea*) マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂道は、年輪界付近に3個が接線方向に並んだ状態で観察される。放射組織は、仮道管、柔組織、樹脂道、エピセリウム細胞で構成されるが、樹脂道とエピセリウム細胞の多くは破損している。放射柔組織の垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。放射仮道管の有縁壁孔のフチは主としてトウヒ型。分野壁孔はトウヒ型で、1分野に3-5個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・アスナロ (*Thujaopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.) ヒノキ科アスナロ属

表1. 樹種同定結果

番号	図版	地区	層位	時代	器種	木取	樹種
W-19	94-2	D2	7層	古代	杭(板材)	柁目板	アスナロ
W-20a	94-4	D2	7層	古代	杭(板材)	柁目板	アスナロ
W-20b	94-3	D2	7層	古代	杭(板材)	柁目板	アスナロ
W-73	94-5	D2	7層	古代	不明	芯持丸木	トネリコ属
W-121	83	D2	12層	古代		-	樹皮
W-122	94-6	D2	12層	古代		柁目板	アサダ
W-186	94-1	D2	10層	古代	不明	芯持丸木	トチノキ
W-228	83	D2	12層	縄文	弓状	芯持丸木	トチノキ
W-336	93-1	D2	12層	縄文	杭	芯持丸木	トチノキ
W-342	82	D2	15層			分割材	トウヒ属
W-347	82	D2	15層		自然木	芯持丸木	ニレ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

現在の分布を考慮すれば、アスナロの変種であるヒノキアスナロの可能性が高い。しかし、木材組織の特徴からアスナロとヒノキアスナロを区別することは困難であり、ヒノキアスナロを含む意味でアスナロとする。

・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

・ニレ属 (*Ulmus*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-6細胞幅、1-40細胞高。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-15細胞高で階層状に配列する。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

4.考察

樹種同定を実施した木材は、縄文時代の弓状品、自然木、古代の板材等である。縄文時代の弓状品は、いずれも芯持丸木であり、樹種はトチノキであった。似たような形状を呈する2点が同一樹種であることから、トチノキの木材を意図的に選択した可能性もある。本遺跡では、これまでも縄文時代の木製品や炭化材などについて樹種同定を実施しているが、トチノキの確認例は知られていない(嶋倉,1979;パリノ・サーヴェイ株式会社,2005;植田,2005)。しかし、隣接する三内丸山遺跡で実施された花粉分析結果(吉川ほか,2006)では、トチノキ属の花粉化石は各層から連続して検出され、特に縄文時代中期後半以降には検出量が増大し、トチノキ林が拡大したことが明らかとなっている。そのため、トチノキの木材は、縄文時代を通して周辺で入手可能であったと考えられる。また、自然木はニレ属であり、遺跡内および周辺にニレ属が生育していたことが推定される。この結果は、三内丸山遺跡の花粉分析や自然木の調査結果(吉川ほか,2006;Noshiro and Suzuki,2006)とも矛盾しない。

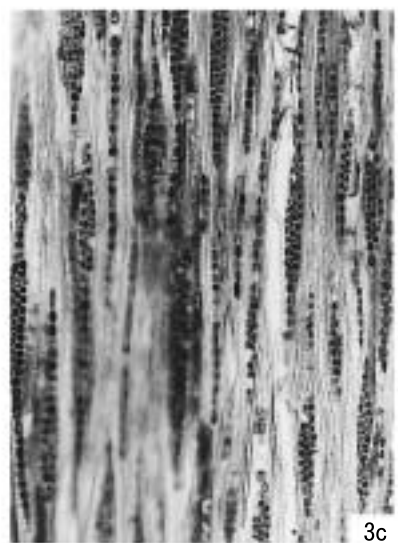
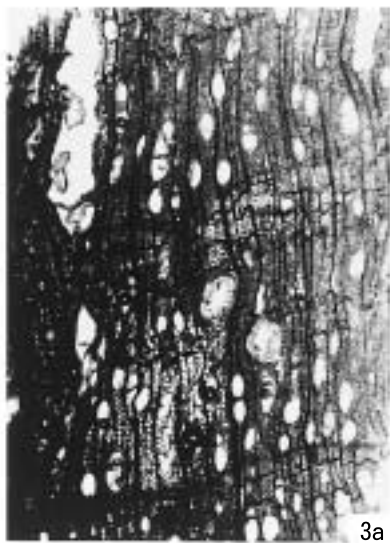
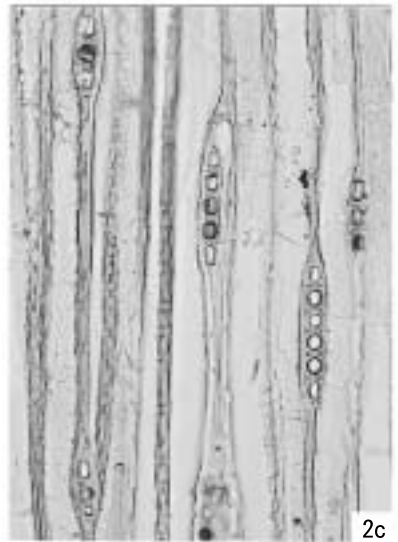
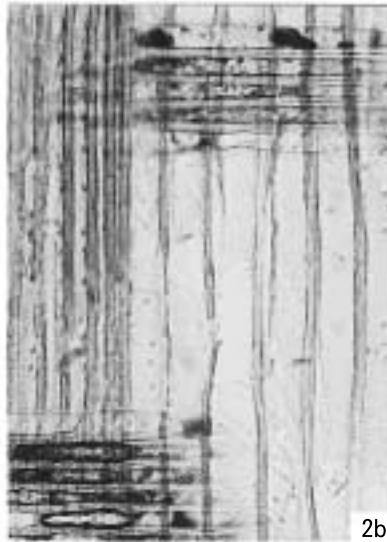
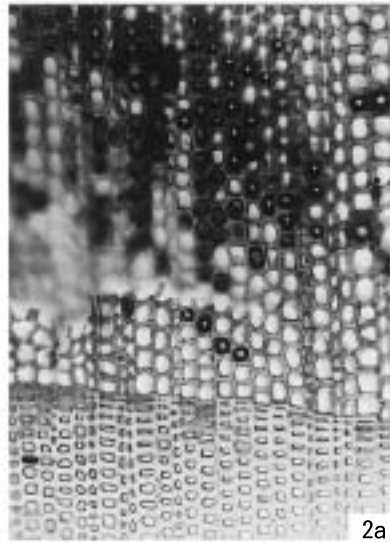
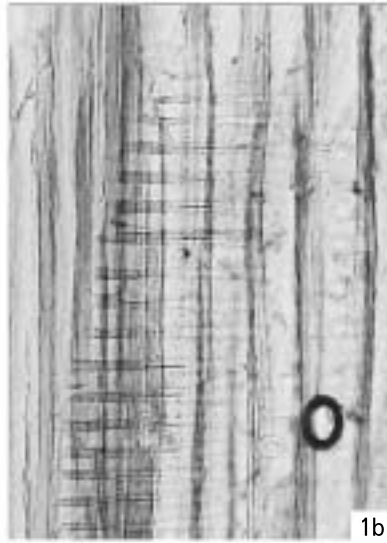
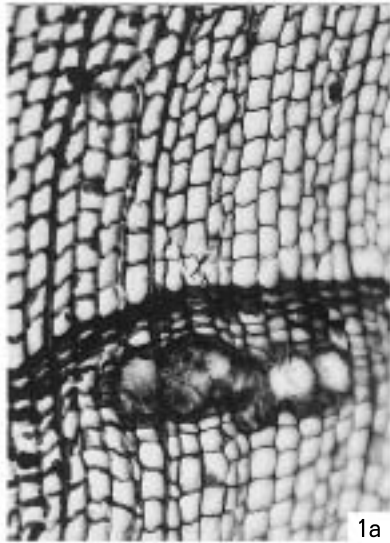
平安時代の木製品は、板材(柁目板)が全て針葉樹のアスナロであった。アスナロは、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性が高い。本遺跡でこれまでに実施された調査では、箸、用途不

明品、炭化した建築部材等に認められた例がある（高橋,2002;パリノ・サーヴェイ株式会社・株式会社パレオ・ラボ,2004;植田,2005）。アスナロは、現在の遺跡周辺には分布していないが、遺跡内で建築部材に利用されていること、ヒノキアスナロの現在の分布地が青森湾を囲むようにみられること（宮脇,1987）等を考慮すれば、本遺跡周辺にもかつては分布していた可能性がある。一方、器種不明の芯持丸木はトネリコ属であった。トネリコ属は、重硬で強度が高い材質を有する。本遺跡の過去の調査では、トネリコ属もアスナロと共に建築部材に確認されており、強度を必要とする用途に利用されていたことが推定される。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載 .木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載 .木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載 .木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載 .木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載 .木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 宮脇 昭(編),1987,日本植生誌 東北.至文堂,605p.
- Noshiro Shuichi and Suzuki Mitsuo,2006,Utilization of forest resources in early Jomon period at and around the Sannai-maruyama site in Aomori Prefecture,northern Japan.辻 誠一郎・能城 修一(編)「植生史研究特別第2号 三内丸山遺跡の生態系史」,日本植生史学会,83-100.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2005,E区遺構出土炭化材の樹種.「青森県埋蔵文化財調査報告書第394集 近野遺跡VIII」,青森県埋蔵文化財調査センター・青森県教育委員会,292-293.
- パリノ・サーヴェイ株式会社・株式会社パレオ・ラボ,2004,B区住居跡から出土した炭化木材の樹種について.「青森県埋蔵文化財調査報告書第370集 近野遺跡VII」,青森県埋蔵文化財調査センター・青森県教育委員会,255-260.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- 嶋倉 巳三郎,1979,青森市近野遺跡から出土した炭化材の樹種.「青森県埋蔵文化財調査報告書第47集 近野遺跡発掘調査報告書(IV)」,青森県教育委員会,321-323,図版51-54.
- 高橋 利彦,2002,青森市近野遺跡出土材の樹種.「青森県埋蔵文化財調査報告書第315集 近野遺跡VI」,青森県埋蔵文化財調査センター・青森県教育委員会,46-48.
- 植田 弥生,2005,E区遺構出土炭化材の樹種.「青森県埋蔵文化財調査報告書第394集 近野遺跡VIII」,青森県埋蔵文化財調査センター・青森県教育委員会,294-301.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 吉川 昌伸・鈴木 茂・辻 誠一郎・後藤 香奈子・村田 泰輔,2006,三内丸山遺跡の植生史と人の活動.辻 誠一郎・能城 修一(編)「植生史研究特別第2号 三内丸山遺跡の生態系史」,日本植生史学会,49-82.

図版1 木材(1)



1. トウヒ属(W-342)

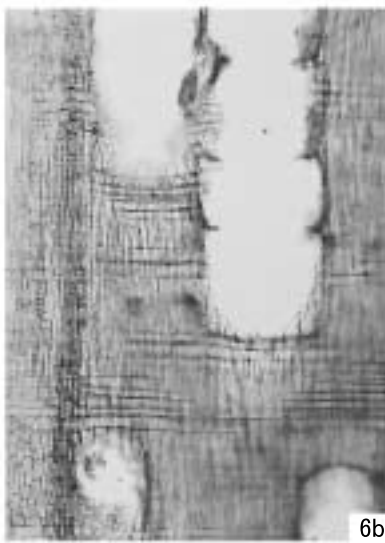
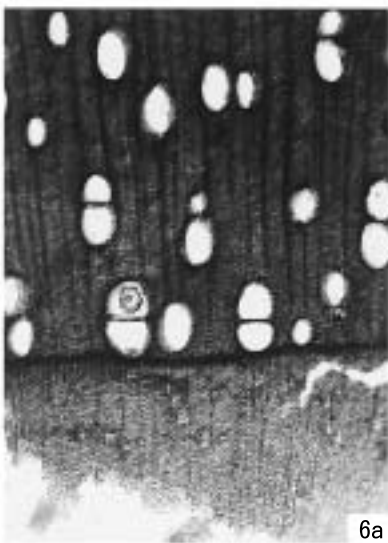
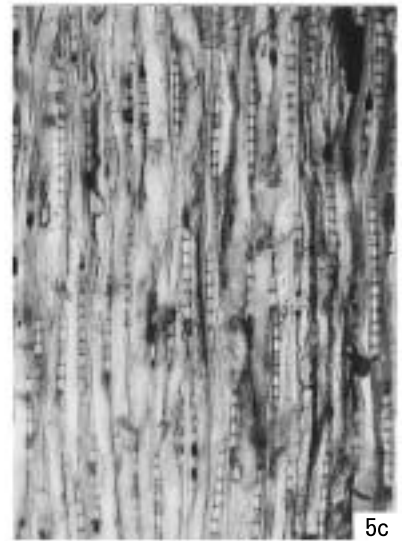
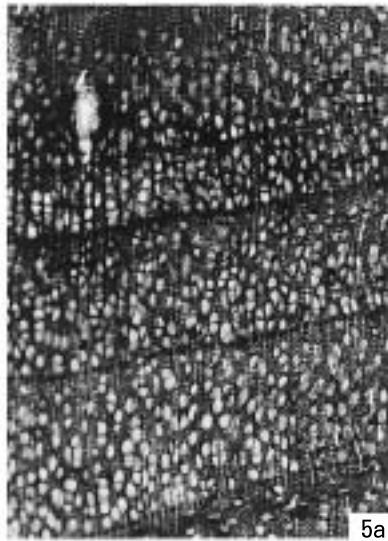
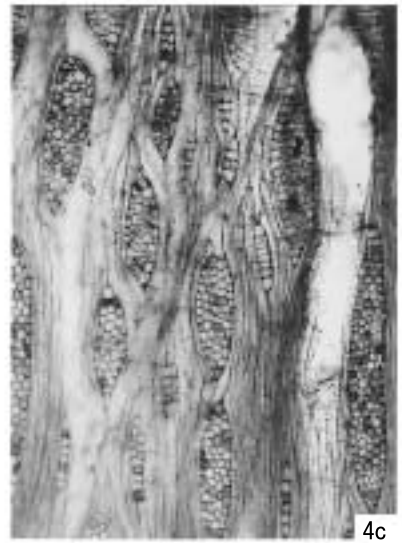
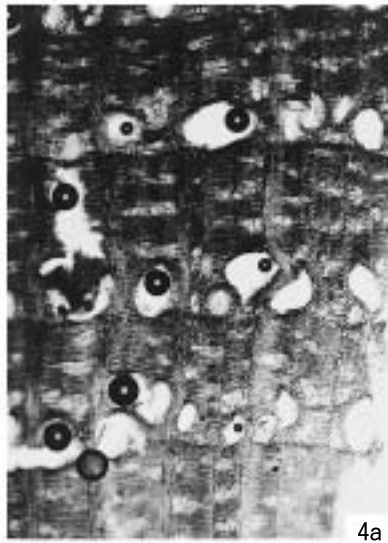
2. アスナロ(W-20b)

3. アサダ(W-122)

a: 木口、b: 柀目、c: 板目

200 μm : 3a
 200 μm : 1-2a*3b、c
 100 μm : 3b、c

図版 1 木材(2)



4. ニレ属(W-347)
5. トチノキ(W-336)
6. トネリコ属(W-73)
a: 木口、b: 柁目、c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

第5節 D区谷出土の種実類分析

はじめに

D区谷は遺跡北側に南東から北西に流れる枝谷で、北西端は三内丸山遺跡南の谷に合流する。谷堆積土14層中（縄文時代中期末）にトチノキ種子片が集中することを確認し、種実類の分析を目的に土壌を採取した。採取した土壌は計量後、水洗し、選別、同定を行った。その方法については、近野遺跡（2006.3）の第1章第4節を参照されたい。

1 トチノキ種子片集中箇所から産出した種実類

D区谷ではトチノキ種子片集中箇所の土壌をA～Gの8地点に区分けして取上げた。各地点から産出した種実類を表1にまとめた。

トチノキは、種子片はD1、D2、E地点で多い。いずれの地点からも幼果実、未成熟種子、果皮片が産出している。トチノキ種子片は5mm～1cm程度の破片が多い。サワシバ、キハダ、エゴノキ属、ミズキ、ニワトコ属などが多く産出している。草本類ではウドが最も多く、ミゾソバ、ツリフネソウが次いで多く産出している。

オニグルミ内果皮は破片が多く、炭化した破片もある。クリは炭化子葉が産出している。また、特に量が多くはないが、ウルシ属の内果皮及び炭化内果皮を産出する。E～G地点ではコナラ属果皮片が多い。これらは人為的に廃棄されたものであると考えられる。

産出する種実類は地点による大きな差異はなく、いずれの地点でもほぼ同じ傾向を示している。

2 D区谷周辺の古環境

縄文時代中期末のD区谷の周辺はトチノキ、カエデ、コナラ、サワシバ、ハリギリなどの高木になるような落葉広葉樹に囲まれ、ツリフネソウ、スゲ属、イシミカワ、ミゾソバなどの湿地性草本が生育し、比較的的自然度が高い環境であったと思われる。F区谷の環境とも近似し、縄文時代中期中葉から末葉にかけて近野遺跡周辺ではほぼ同じ環境であったことが示唆される。

D区から採取された古環境分析のための試料による花粉・珪藻・種実類の分析結果でも周辺環境ではトチノキ、クマシデ属、コナラなどを主体とする落葉広葉樹であり、珪藻から谷自体が流水域であることが報告され、本結果と整合している。

3 トチノキ種子片集積の植物利用

D区のトチノキ種子片の集中箇所は、谷に沿うように約8地点で確認された。いずれもトチノキ種子の破片が堆積しているが、F区のトチノキ種子片集積遺構（FSX-11）のように層状に堆積せず、いずれの地点でもトチノキ幼果実、未成熟種子、果皮片も産出しているため、プライマリーな堆積層はなく、谷に廃棄されたトチノキ種子片が流水により、再堆積した結果であると考えられる。

オニグルミ、クリ、ウルシ属、ヤマブドウなども同様に廃棄されたものと思われる。14層から出土した遺物から廃棄された時期は縄文時代中期末葉から後期初頭と考えられ、縄文時代中期中葉から継続して集落内でトチノキの利用が行われていることがわかった。これは中期中葉よりトチノキの花粉

が増加するという分析結果とも整合する。

F区谷では縄文時代中期中葉からトチノキの拡大がはじまるが、三内丸山遺跡南の谷では縄文時代後期以降にトチノキの拡大が始まり、その拡大は縄文時代中期から後期にかけての気候の冷涼化ではなく、人為的な要因が強いことが指摘されている（吉川2006）。近野のF区・D区谷と南の谷を一本の谷とみると上流部のF区からトチノキの増加が始まるようにも見える。近野遺跡の分析結果で見ると限りはより自然度が高い近野側で早くにトチノキが増加し、一方人の関与が強くみられる南の谷周辺ではトチノキの増加が遅れているように思われる。F区、D区のトチノキの種子片の出土量は食料としては量が少ないが、環境の変化に俊敏に適応しようとする結果ともとらえられる。

今後周辺の遺跡の分析結果ともあわせて、クリ林の減少とトチノキ林の増加と人の利用を考える必要がある。（伊藤）

引用参考文献

- 吉川昌伸ほか 2006 「三内丸山遺跡の植生史と人の活動」 『三内丸山遺跡の生態系史』
植生史研究特別号第2号49-82.
青森県教育委員会 2006 『近野遺跡』

D区谷 トチノキ種子片集中箇所 産出種実類集計表

分類名	部位・形状 / 地点 層	A	B	C	D	D	D	E~G	トチ	SX1	一括
		14	14	14	14	14	14	14	14砂	14	
モミ属	<i>Abies</i>										
ビャクシン属	<i>Juniperus</i>										1
イヌガヤ	<i>Cephalotaxis harringtonia</i> (Knight)K.Koch										
オニグルミ	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr.										
			39.5		1	1					1 2
		1	68	3	3	3		4	2	4	47
		1	21	1	4	1		1		1	82
				8	9						22
クマシデ	<i>Carpinus tschonoskii</i>			30	13		3	19			
サワシバ	<i>C. ordata</i> Blume			83	2	3	22	17	85	21	9
								8			2
クマシデ属	<i>Carpinus</i>	7	143	4	2						10
			21								
			3								
コナラ属	<i>Quercus</i>	1	5	1					6		
		7	50	20.3	14		3	70.9	13	14	6.4
							2	1			
		1	10	3				11			1
クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.		19		12	4		38	2		
			1								
ヤマグワ	<i>Morus bombycis</i> Koidz.	1	11		2			6			1
ホオノキ	<i>Magnolia obovata</i> Thunberg.		1		0.5						
コブシ	<i>M. kobus</i> DC.		4		2		2			1.5	1
					1.5						
サクラ属サクラ節	<i>Prunus</i> sect. <i>Pseudocerasus</i>							1			
キイチゴ属	<i>Rubus</i>		1						2		
キハダ	<i>Phellodendron amurense</i> Rupr.	11	151	9	22		14	46	2.5	6.5	20.5
ニガキ	<i>Picrasma quassioides</i> (D.Don) Benn.		0.5		0.5						
ウルシ属	<i>Rhus</i>	0.5	20	5	2		3	11		4	2
			2								
			3	2	2		1	2			2
ミツデカエデ	<i>Acer cissifolium</i> (Sieb.etZucc.)K.Koch				1						
ハウチワカエデ近似種	<i>Acer cf.japonicum</i> Thunb.	1	27		1		11.5	21.5		5	
カエデ属	<i>Acer</i>	1						4			
			1.5								
トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	+	69.1	2	4	2	5	23		60	7
			12	8	0.5		2	7	4	1	1
		49.5	690	69.3	124.3	17.3	107.5	261.7	18	43.7	33
		7	72.5	22	23	6	4	42	1	23	13
		6	127	15.5	16	3	7	35		31	7
クマヤナギ	<i>Berchemia</i>		1								
ヤマブドウ	<i>Vitis coignetiae</i>	1	30.5	10	129	5	1	5.5		8	5
マタタビ	<i>A. polygama</i> (Sieb. et Zucc.) Planch. et Maxim.		1								
サルナシ	<i>Actinidia arguta</i> (Sieb. et.Zucc.) Planch. ex Miq.				1						
エゴノキ	<i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc.		2	1							
		12	15	4							
エゴノキ属	<i>Styrax</i>		19		2		3	11	3	2	
			52.5		8		17	94	10	5	
タラノキ	<i>Aralia elata</i> (Miq.) Seeman	1	49	6	8	1	2	15	1	9	3
ウコギ属	<i>Acanthopanax</i>							3			
ハリギリ	<i>Kalopanax pictus</i> (Thunb.) Nakai	2	21.5		1	1	1	18			
ウリノキ属	<i>Alanigum</i>		1			1					
ミズキ	<i>Cornus controversa</i> Hemsley		14	2	10	2	2	2		3	11.5
ムラサキシキブ属	<i>Callicarpa</i>		3								
クサギ	<i>Clerodendron trichotomum</i> Thunb.		1		2						1
ニワトコ属	<i>Sambucus sieboldiana</i> (Miq.) Blume ex Graebn.		27		15			17		20	3
カンボク	<i>Viburnum opulus</i> L.var. <i>calvesns</i> (Render)Hara		3	1	1						
ゴマギ	<i>Viburnum sieboldii</i> Miq.							2			
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	1	5	1							1

分類名	部位・形状 / 地点	層	A	B	C	D	D	D	E~G	トチ	SX1	一括
			14	14	14	14	14	14	14	14	14砂	14
ホタルイ属	<i>Scirpus</i>	種子		1					1			5
カヤツリグサ科	Cyperaceae	種子		19		1						1
スゲ属	<i>Carex</i>	果実	1	18					1	6		
クワクサ	<i>Fatoua villosa</i>	種子									0.5	1
カナムグラ	<i>Humulus scandens</i> (Lour.)Merrill	種子		3								1
イシミカワ	<i>Polygonum perfoliatum</i> Linn	果実		6					4			
ミソソバ	<i>P. thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	果実	18	216	1	7	2	21	115			17
タデ属	<i>Polygonum</i>	果実	4			1						2
タデ科	Polygonaceae	果実		5					7			
マメ科	Leguminosae	種子									1	
ツリフネソウ属	<i>Impatiens textori</i> Miq.	種子	3	46.5		5		2	10			5
ノブドウ	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> ver. <i>Heterophylla</i>	種子							1			
スマレ属	<i>Viola</i>	種子	1	14		1		2	4	1		1
ウド	<i>Aralia cordata</i> Thunb.	内果皮	40	847	4	34		26	123	19	135	3
セリ科	Umbelliferae	果実		1	1		4					3
ナス属	<i>Solanum</i>	種子	1	2								1
ソクス	<i>sambucus chinensis</i>	内果皮		1					1			
ミヤマニガウリ	<i>Schizopepon bryniaefolius</i> Maxim.	種子		2								
キク科	Compositae	種子		2						1		1
冬芽			16	123	2	8		14	60	1	7	1
虫卵				7		3					2	
昆虫				1								
その他				6	1	2	1					5
針葉樹		球果片				1						1



図1 トチノキ破片 回収地点

第6節 近野遺跡D2区谷の火山灰について

弘前大学・理工学部・地球環境学科

柴 正敏

近野遺跡より採集された、火山灰サンプル(6試料)について、以下の観察・分析を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる(町田・新井、2003)。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザー(以下EPMA)がもちいられるようになってきた。本報告では、1試料(試料番号3061308)の火山ガラスについてEPMA分析を行った。使用したEPMAは弘前大学・理工学部所有の日本電子製JXA-8800RL、使用条件は加速電圧15 kV、試料電流 3×10^{-9} アンペアである。

ガラスの形態及び共存鉱物(表1)より、試料3061308, 45,48及び49の4試料は、白頭山苦小牧テフラ起源のガラスよりなる。これら4試料には、アルカリ長石、エジリンオーゾライト及びヘデン輝石が認められる。試料3061308について、火山ガラスのEPMA分析を行った(表2)。表2から明らかのように、9成分の含有量について、既存の白頭山苦小牧テフラ起源のガラス組成(Machida, 1999; 柴ほか, 2000)と良く一致する。本遺跡に産する白頭山苦小牧テフラ起源のガラス組成は既存のデータと同様、二つの組成クラスターを持っている。すなわち、比較的肉厚で気泡径が中程度のガラスは、よりSiO₂に乏しくCaOやK₂Oに富み(B-Tm(a))、一方、気泡径が大きく良く発泡したガラスあるいは気泡径が小さく発泡度の低いガラスは、よりSiO₂に富みCaOやK₂Oに乏しい組成を持っている(B-Tm(b))。

試料47の1試料は十和田aテフラに対比される。褐色ガラスが多量に含まれることや、粗粒な軽石粒子が存在することによって識別される。

試料46の1試料は、針状のホルンブレンドや変質した軽石ガラスが認められることより、再堆積した十和田八戸テフラと考えられる。褐色ガラスが含まれることから、十和田aテフラが混入している可能性がある。

(参考文献)

青木かおり・新井房夫(2000)、三陸沖海底コアKH94-3、LM-8の後期更新世テフラ層序。

第四紀研究、第39巻、107-120。

Machida, H.(1999), Widespread tephra catalog in and around Japan : Recent progress.

第四紀研究、第38巻、194-201。

町田 洋・新井房夫(2003)、新編火山灰アトラス - 日本列島とその周辺 - . 東京大学出版会、pp.336.

柴 正敏・重松直樹・佐々木 実(2000)、青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成(1)。弘前大学理工学部研究報告、第1巻、第1号、11-19。

柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実(2001)、十和田火山、降下軽石の化学組成変化 - 宇樽部の一露頭を例として - . 弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11-17。

柴 正敏・岩下紗弥佳 (2005)、青森県に分布する白頭山苦小牧テフラに含まれる火山ガラスの化学組成。白神研究、第2号、65 - 71.

柴 正敏・佐々木 実 (2006)、十和田火山噴出物のガラス組成変化、月刊地球、第28巻、第5号、322-325.

表1. 近野遺跡D区火山灰試料

試料番号	位置	ガラス及び鉱物	ガラスの帰属	特記事項
3061308*	D区谷	ガラス(pm,bw)、アルカリ長石、エジリンオーゾライト、ヘデン輝石、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm	
45	D区谷北壁東側上位火山灰層	ガラス(pm,bw)、アルカリ長石、エジリンオーゾライト、ヘデン輝石、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm	
46	D区谷北壁東側間層	ガラス(pm,bw)、褐色ガラス、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、ホルンブレンド、鉄鉱	再堆積したTo-H	軽石、岩片(径~1.5mm)
47	D区谷北壁東側下位火山灰層	ガラス(pm bw)、褐色ガラス(多)、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	軽石、岩片(径2.0~1.5mm)
48	D区谷南壁東側火山灰層	ガラス(pm,bw)、アルカリ長石、エジリンオーゾライト、ヘデン輝石、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm	
49	D区谷南壁西側火山灰層	ガラス(pm,bw)、アルカリ長石、エジリンオーゾライト、ヘデン輝石、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、ホルンブレンド、鉄鉱	B-Tm(主)、To-H	基盤のTo-Hを取り込んでいる可能性あり

bw = バブルウォール型、pm = 軽石型、B-Tm = 白頭山苦小牧テフラ、To-a = 十和田aテフラ、To-H = 十和田八戸テフラ、* = 研磨薄片作成、 = より非常に多い

表2. 近野遺跡D区、火山ガラスのEPMAデータ

白頭山苦小牧テフラ													
		SiO2	TiO2	Al2O3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	n	Total	EPMA
試料番号 30061308 D区谷 B-Tm(a)	最小	64.84	0.29	13.93	4.67	0.00	0.05	0.78	5.38	5.37	9	99.07	WDS
	最大	68.31	0.50	15.43	5.82	0.37	0.20	1.42	6.50	6.39			
	平均	66.23	0.37	14.63	5.33	0.14	0.10	1.19	6.12	5.89			
	標準偏差	1.048	0.066	0.489	0.358	0.106	0.05	0.179	0.413	0.299			
Machida(1999)	B-Tm(a)	68.4	0.4	14.8	4.5	0.1	0.1	1.0	5.4	5.3	15		WDS
試料番号 30061308 D区谷 B-Tm(b)	最小	73.73	0.16	9.50	4.34	0.03	0.00	0.21	5.14	4.53	6	98.43	WDS
	最大	75.11	0.42	10.61	4.61	0.13	0.07	0.32	6.27	5.07			
	平均	74.40	0.26	10.17	4.47	0.10	0.02	0.24	5.59	4.75			
	標準偏差	0.549	0.099	0.385	0.112	0.038	0.024	0.04	0.394	0.195			
Machida(1999)	B-Tm(b)	75.3	0.2	10.7	4.1	0.0	0.1	0.3	4.7	4.5	19		WDS

測定値は無水で100%になるように再計算した。FeO*全鉄をFeOとして計算した。 nは分析の点数を表す。WDSは、波長分散型EPMAを表す。

試料番号の採取位置は、

- 3061308は図78参照
- 45~47は図79参照
- 48~49は図80参照

第7節 近野遺跡出土土器の胎土分析

松本建速（東海大学文学部）

1. はじめに

青森県青森市近野遺跡出土の縄文土器と土師器の化学成分の測定をおこなったので、以下にその結果を報告し、若干の考察をおこなう。本遺跡は、縄文時代早期～平安時代まで断続的に続いた集落遺跡である。東北北部では、早期後半～前期にかけて、胎土には植物繊維が混ぜられる。そして、中期以降にはそれが混入されなくなるのだが、本遺跡でも同じである。

そこで、時期ごとに胎土の化学成分に違いがあるのか否か、また、それぞれの土器がどこの土で作られたのかを考えることを目的として、胎土分析をおこなった。

なお、本分析では、試料作成準備を松本および東海大学学生小川 温、鈴木高史、前田浩孝、横山諒人が、試料作成・分析を明治大学理工学部市川慎太郎、中山健一がおこなった。報告は、分析、結果を市川、中山が、他の項目と結果の一部を松本が作成した。

2. 試料

本遺跡出土の土器32点、土製品および炉壁3点、遺跡構成土層採取の粘土1点の合計36点を試料とした（表1）。土器の内訳は、早稲田6類4点、円筒下層d1式4点、円筒上層a・b式4点、円筒上層c式4点、大木10式併行土器4点、十腰内式4点、晚期土器4点、平安時代土師器2点、平安時代製塩土器2点、平安時代支脚1点である。平安時代の羽口2点、炉壁1点、遺跡を構成する土層から採取した砂質粘土（CSX1：図40参照）が1点である。

3. 方法

分析には、波長分散型蛍光X線分析装置（以下ではWDXRFと略す）を用い、定量した。

4. 分析

（1）試料作成

土器の一部を折り取り、器表面の風化した部分を電動やすりで削り、メノウ乳鉢を用いて、指先に粒子感が感じられなくなるまで粉碎した。その後、電気炉で500℃で2時間加熱し、炭素を除去したものを試料に供した。

試料は、試料と融剤の比率を1：10とするガラスビードとし、定量に用いた。ガラスビード作製の手順は以下である。試料約0.4gと融剤約4.0gを秤量、十分に混合した。融剤は、電気炉で700℃、8時間加熱した無水四ホウ酸リチウムを用いた。試料と融剤の混合物を白金るつぼに入れ、BEAD SAMPLER NT-1200を用いて熔融・成型した。800℃、120秒の予備加熱、1200℃、120秒の本加熱、1200℃、120秒の揺動加熱をおこない、その後、急冷してガラス化した。測定はガラスビードの下にアクリル板を敷き、30mmのホルダーマスクに入れて実施した。

(2) 実験

明治大学理工学部設置の波長分散型蛍光X線分析装置（以下ではWDXRFと略す）、Rigaku Rix 3100を用いた。X線管球にはRhを、分光結晶はLiF(200)、PET(002)、Ge(111)、TAP(001)を用い、管電圧50kV、管電流80mAで動作させた。検出器は、ガスフロー型プロポーショナル・カウンターとシンチレーション・カウンターを用い、プロポーショナル・カウンターにはPRガスを $50\text{cm}^3\text{min}^{-1}$ で流した。測定は真空雰囲気下で、試料を30rpmで回転させながらおこなった。

定量には、産業技術総合研究所発行の標準試料JG1（花崗岩）で作成したペレット状試料を同様の条件で測定し、その値を、各元素の分析値を標準化する際に用いた。

測定した元素は、Si、Al、Fe、Ti、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Zr、Sr、Rb、Yの14元素である。SiからPまでの10元素は、地殻を構成する主要元素であり、他地域の岩石および土壌、土器試料等との比較をおこなうさいの基礎となる。またZrからYまでの4元素は、地殻平均として20ppm以上含まれ（メイスン,B.1970）、今回の分析法でも、精度の高い測定ができる元素だからである。

5. 結果

測定した14元素のうち、主要10元素は、酸化物として計算し、分析結果を表1に掲載した。Feは Fe_2O_3 として算出した。また、分析方法の正確さを検証するために旧地質調査所発行の岩石標準試料(JA-1)を測定したところ、その推奨値とよく一致した値が得られた(表2)。

なお、10元素の酸化物のトータル値が100%にならないが、その大部分は、土器中に含まれる水の値である。炭素が除去しきれていない場合もあるかもしれないが、その値はごく微量と考えられる。

6. 考察

(1) 各元素のみの値の算出

表3として、主要10元素について、各々の元素単体として換算した値を掲載した。これまでに報告されている、ICP-AESを用いた分析値との比較をおこなうさいに便利だからである。

(2) Mn濃度から推測する利用された粘土層

Mn濃度は、土器製作に利用された粘土層を推定するのに重要である。一般的には、白色系の粘土の場合、それは0.05%以下である(松本2003a)。本試料の場合、砂質粘土である試料24が0.05%、試料5・7が0.05%、試料25が0.06%、試料4が0.07%、試料12が0.08%であるが、残りの30点は0.02~0.04%に収まる。0.05%よりも高いものが3点あるが、それらも若干高い程度である。これは、白色系の粘土を主体とした原料に、褐色系の粘土や砂を混和した結果なのか、粘土層本来の値なのか、不明だが、多くのものは白色系粘土層を利用したと考えてよいであろう。

(3) Ca・Na・K濃度から見た胎土の比較

地殻を構成する鉱物は、石英や長石類のフェルシック鉱物と輝石、角閃石、黒雲母などのマフィック鉱物とに分けられる。そして、地殻の大半は前者が占めるのだが、特に長石類が約60%を長石類であると言われる(地学団体研究会編1995)。地質に差異がある場合、その基本的な特徴は、長石類の化学成分に反映される場合が多い。また、土器の胎土とされるシルトや粘土鉱物の多くは、長石類が基本となっている。したがって、長石類を構成する化学成分に差異が見られるならば、それは、地域

差を反映している可能性が高い。

石英はSi、O、長石類はSi、Al、Ca、Na、K、Oで構成される。そして一般には、Ca・Na・Kの3元素を用いれば、産地ごとの粘土の差を見ることができ、東北北部地域の第四紀層の粘土を用いた場合には、長石の主要元素であるK、Na、Caを用いた、 $K/Na + Ca$ と $Ca/Na + K$ の2つの指標（以下では長石の指標と呼ぶ）が、産地ごとの成分の違いを良く反映することが知られている（松本2003a）。その2指標のグラフを作成した（図1-1）。本試料の場合、どの型式とも、多くは同じようなばらつきであるが、試料17は、多少、離れた値である。

図2として、本遺跡近隣に所在する、三内丸山遺跡出土土器・土偶・粘土、近野遺跡採取粘土（松本2003b）の分析例を転載した。図の示された「近野遺跡灰白色粘土」（近野遺跡F区谷壁面から採取）の値は、本試料24や多くの試料の値に近い。他に、 $K/Na + Ca$ が1～1.1あたりの粘土は近野遺跡にあるのだがそれらは、灰白色ではなく、Mnの値が0.1%を越しており（松本2003b）、土器等に利用されたとは言い難い。したがって、試料17の平安時代の支脚については、もう少し検討が必要だが、それ以外の試料については、遺跡周辺の白色系粘土層が利用された可能性が高い。

なお、イオン半径が類似している関係で、一般に、StはCaと、RbはKと同じ挙動を示し、SrとRbとの相関は、先に見た結果と類似することになる。土器胎土の場合、地域差を見るには、SrとRbの相関図がより適するという（三辻1983）。しかしながら、本試料の場合、Ca、Na、Kらを用いた指標による結果とRb、Stを使った指標とにほとんど違いはない（表3）ので、図示はしなかった。

（4）Fe・Mg濃度から見た胎土の比較

マフィック鉱物中にはFeとMgが共存し、それらの比率あるいは相関図は、胎土成分の何らかの差を示す。そこで、地域差を示すことが多い $K/Na + Ca$ をX軸にとり、 Mg/Fe をY軸とした相関図を作った（図1-2）。しかしながら、 Mg/Fe では、本試料をタイプごとに分けることはできなかった。

7. まとめ

（1）WDXRFを用いて、青森県青森市近野遺跡出土の早稲田6類、円筒下層d1式、円筒上層a・b式、円筒上層c式、大木10式併行土器、十腰内式、晩期土器、平安時代の土師器、遺跡内粘土層採取の土試料の化学成分を測定した。主要10元素については、酸化物として、微量元素については、元素単体として算出した。考察の過程では、過去の文献値との比較の利便性を考え、主要元素も、元素のみの値に換算した。

（2）Mn濃度は、ほとんどの試料が0.02～0.05%までに収まり、どの型式の土器の作成においても、一般的には白色系の粘土層が利用されたと推測できた。

（3）周辺遺跡出土の同時代試料の文献値との比較の結果、本試料の大部分も、遺跡周辺の白色系粘土を利用していると推定できた。

8. おわりに

青森市近野遺跡から出土した縄文時代早期～平安時代の土器の胎土分析をおこなった結果、それらは、時代を越えて、同じ地域の土で作られたと考えられた。多くは遺跡周辺の白色系の粘土が利用されたのであろう。ただし、土師器の支脚のように、少し異なる胎土のものがあつたが、それがどこの

ものであるかは本分析では明確にできなかった。今後も、さらに多くの土器や粘土試料の分析につとめ、基礎資料の蓄積をおこなう必要がある。

謝辞 本分析において、明治大学理工学部工業化学科教授、中村利廣先生には、たいへん多くの便宜をはかっていただきました。感謝申し上げます。

引用・参考文献

地学団体研究会編 1995 『鉱物の科学 新版地学教育講座』 3巻 東海大学出版会
 松本建速 2003a 「誘導結合プラズマ発光分光分析 (ICP-AES) による東北北部古代土器の胎土分析」 『第四紀研究』 42巻1号 1-12頁 日本第四紀学会
 2003b 「三内丸山遺跡粘土採掘坑粘土と遺跡出土土器の成分分析」 『特別史跡三内丸山遺跡年報』 6号 59-64頁 青森県教育委員会
 三辻利一 1983 『古代土器の産地推定法』 ニュー・サイエンス社
 メイスン,B.(松井義人・一國雅巳訳) 1970 『一般地球化学』 岩波書店 [Mason,B.1966 Principles of Geochemistry.]

表1 分析値一覧

試料	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Total	Rb	Sr	Y	Zr	器種等
1	1.39	0.557	26.8	53.9	0.263	1.17	1.18	1.16	0.050	6.43	92.8	78.6	109	20.9	220	早稲田6
3	1.18	0.795	26.9	54.0	0.116	1.19	0.868	1.22	0.028	6.03	92.3	92.0	86.6	21.8	209	早稲田6
4	0.983	1.65	20.3	59.8	0.059	1	1.17	1.53	0.095	7.85	94.5	68.4	80.7	12.0	172	早稲田6
5	1.20	0.644	22.3	60.3	0.050	1.41	1.38	1.10	0.036	4.80	93.2	66.4	137	31.1	183	早稲田6
7	1.88	1.11	23.2	59.2	0.063	1.30	1.89	1.00	0.066	4.85	94.5	80.6	156	29.8	176	円筒下層 d 1
8	1.77	0.567	23.8	59.8	0.092	1.49	1.14	1.26	0.034	4.45	94.4	88.0	136	30.8	234	円筒下層 d 1
9	1.39	0.472	28.0	55.1	0.104	0.974	1.19	1.14	0.051	4.52	93.0	71.0	99.9	36.7	241	円筒下層 d 1
10	2.13	0.964	19.9	64.1	0.058	1.27	2.07	0.914	0.048	3.87	95.3	98.2	180	18.4	167	円筒下層 d 1
11	1.60	1.08	23.1	59.9	0.056	1.55	1.42	0.931	0.054	4.20	93.9	129	146	13.5	177	円筒上層 c
12	1.76	1.13	23.1	57.8	0.118	0.818	2.00	0.960	0.104	6.40	94.2	69.4	139	19.9	184	円筒上層 c
14	1.27	1.01	26.9	53.5	0.068	1.15	1.14	0.872	0.041	5.31	91.3	99.9	98.9	18.9	160	円筒上層 c
15	1.86	0.508	24.9	58.5	0.066	0.538	2.72	0.915	0.039	1.59	91.6	45.6	177	17.3	168	円筒上層 c
21	1.43	1.10	24.2	58.3	0.164	1.55	1.12	0.970	0.036	4.68	93.5	109	117	27.9	175	十腰内 I
22	1.21	0.729	24.6	61.4	0.101	1.02	1.03	1.28	0.031	3.83	95.2	78.5	96.3	24.8	234	十腰内 I
24	1.15	0.535	20.5	67.7	0.090	1.29	0.567	0.846	0.050	2.99	95.7	68.0	84.8	17.0	167	十腰内 I
25	1.60	1.22	21.0	60.8	0.052	1.62	1.33	1.01	0.081	5.89	94.6	116	142	28.9	175	十腰内 I
2006 2	1.84	0.802	20.9	64.3	0.559	1.77	2.20	0.846	0.034	3.73	96.9	102	213	15.9	166	円筒上層 a・b
3	2.11	0.488	20.0	67.2	0.262	1.14	2.21	0.796	0.028	1.56	95.8	46.0	164	18.3	164	円筒上層 a・b
4	1.23	0.514	21.3	62.0	0.208	1.08	1.64	0.908	0.033	4.84	93.8	76.5	142	24.7	189	円筒上層 a・b
5	1.85	0.784	23.0	62.0	0.251	1.20	2.49	0.851	0.062	3.32	95.8	82.4	197	21.3	139	大木10併行
6	1.76	1.03	20.3	67.6	0.036	1.18	1.94	0.839	0.026	4.30	98.9	79.4	155	21.7	166	大木10併行
7	1.63	0.732	20.7	62.5	0.160	0.945	2.38	0.867	0.045	5.97	95.9	71.1	187	35.2	157	大木10併行
8	1.94	0.899	20.4	65.7	0.120	1.37	2.06	0.956	0.035	2.60	96.1	105	172	15.6	191	大木10併行
9	1.92	0.875	20.1	63.6	0.120	1.13	2.85	0.676	0.036	4.66	96.0	94.6	226	12.8	119	晩期 土器
10	1.58	0.539	19.0	65.9	0.057	1.19	1.45	0.712	0.037	7.50	98.0	77.3	115	28.3	156	晩期 土器
11	1.53	1.34	21.3	65.8	0.056	1.69	1.88	0.908	0.039	3.78	98.4	120	157	19.1	164	晩期 土器
12	1.89	0.866	19.2	67.5	0.146	1.64	2.18	0.709	0.023	2.45	96.5	111	210	15.6	136	晩期 土器
13	1.51	0.916	19.8	65.5	0.227	1.73	1.11	1.18	0.043	3.13	95.2	100	138	18.7	189	平安土師器
14	1.56	0.601	20.0	68.1	0.192	1.48	1.18	0.990	0.026	2.83	97.0	101	131	20.8	185	平安土師器
15	1.73	0.790	21.9	64.2	0.077	1.73	1.36	0.929	0.024	3.64	96.4	124	144	18.2	164	平安製塩土器
16	1.36	0.794	20.3	65.6	0.794	1.40	0.860	0.992	0.046	3.90	96.1	110	119	15.8	177	平安製塩土器
17	0.786	0.580	28.0	56.4	0.146	1.26	0.507	1.18	0.048	5.85	94.8	66.3	45.9	17.7	260	平安支脚
18	1.34	1.03	23.0	65.7	0.033	1.87	0.774	1.09	0.021	3.91	98.7	146	122	32.9	217	平安羽口
19	2.36	1.01	16.1	67.6	0.082	1.08	2.63	0.821	0.057	3.18	94.9	74.9	209	20.3	153	平安羽口
20	2.14	0.968	17.4	67.8	0.035	1.24	2.11	0.878	0.046	3.22	95.8	88.7	178	14.4	165	平安炉壁
24	1.45	1.61	19.9	64.3	0.035	1.30	1.62	1.03	0.065	5.06	96.3	96.6	154	17.5	168	砂質粘土サンプル

表 2

Table 7 Analytical results of major elements in the GSJ rock reference sample.

	JA-1 (andesite)		Recommended value ^a
	Present method		
Na ₂ O	3.77	(0.4)	3.84
MgO	1.56	(0.4)	1.57
Al ₂ O ₃	15.6	(0.5)	15.2
SiO ₂	63.8	(0.1)	64.0
P ₂ O ₅	0.161	(0.7)	0.165
K ₂ O	0.788	(0.4)	0.77
CaO	5.63	(0.1)	5.70
TiO ₂	0.877	(0.3)	0.85
MnO	0.147	(0.4)	0.157
Fe ₂ O ₃ ^b	7.31	(0.2)	7.07
Total	99.6	(0.2)	99.3

^a Ref. 1.^b Total Fe as Fe₂O₃.(), Relative standard deviation % ($n = 5$). Major elements, in mass%, with 1:10 glass beads.1) N. Imai, S. Terashima, S. Itoh, A. Ando, *Geostandards Newslett.*, 19, 135 (1995).

表 3 換算値および各種指標の値

試料	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Zr	Sr	Rb	Y	K/Na+Ca	Ca/Na+K	Rb/St	Mg/Fe	Ti/Fe	器種等
1	25.20	0.70	14.18	4.50	0.04	0.34	0.84	1.03	0.97	0.11	220	109	78.6	20.9	0.518	0.421	0.721	0.075	0.155	早稲田 6
3	25.24	0.73	14.24	4.22	0.02	0.48	0.62	0.88	0.99	0.05	209	86.6	92.0	21.8	0.660	0.333	1.062	0.114	0.173	早稲田 6
4	27.95	0.92	10.74	5.49	0.07	1.00	0.84	0.73	0.83	0.03	172	80.7	68.4	12.0	0.530	0.536	0.848	0.181	0.167	早稲田 6
5	28.19	0.66	11.80	3.36	0.03	0.39	0.99	0.89	1.17	0.02	183	137	66.4	31.1	0.624	0.479	0.485	0.116	0.196	早稲田 6
7	27.67	0.60	12.28	3.39	0.05	0.67	1.35	1.39	1.08	0.03	176	156	80.6	29.8	0.393	0.546	0.517	0.197	0.177	円筒下層 d 1
8	27.95	0.76	12.60	3.11	0.03	0.34	0.81	1.31	1.24	0.04	234	136	88.0	30.8	0.581	0.320	0.647	0.110	0.243	円筒下層 d 1
9	25.76	0.68	14.82	3.16	0.04	0.28	0.85	1.03	0.81	0.05	241	99.9	71.0	36.7	0.430	0.462	0.711	0.090	0.216	円筒下層 d 1
10	29.96	0.55	10.53	2.71	0.04	0.58	1.48	1.58	1.05	0.03	167	180	98.2	18.4	0.345	0.562	0.546	0.215	0.202	円筒下層 d 1
11	28.00	0.56	12.23	2.94	0.04	0.65	1.01	1.19	1.29	0.02	177	146	129	13.5	0.584	0.410	0.884	0.222	0.190	円筒上層 c
12	27.02	0.58	12.23	4.48	0.08	0.68	1.43	1.31	0.68	0.05	184	139	69.4	19.9	0.248	0.720	0.499	0.152	0.129	円筒上層 c
14	25.01	0.52	14.24	3.71	0.03	0.61	0.81	0.94	0.95	0.03	160	98.9	99.9	18.9	0.543	0.430	1.010	0.164	0.141	円筒上層 c
15	27.35	0.55	13.18	1.11	0.03	0.31	1.94	1.38	0.45	0.03	168	177	45.6	17.3	0.134	1.064	0.258	0.275	0.493	円筒上層 c
21	27.25	0.58	12.81	3.27	0.03	0.66	0.80	1.06	1.29	0.07	175	117	109	27.9	0.691	0.341	0.932	0.203	0.178	十腰内 I
22	28.70	0.77	13.02	2.68	0.02	0.44	0.74	0.90	0.85	0.04	234	96.3	78.5	24.8	0.518	0.422	0.815	0.164	0.286	十腰内 I
24	31.65	0.51	10.85	2.09	0.04	0.32	0.41	0.85	1.07	0.04	167	84.8	68.0	17.0	0.851	0.211	0.802	0.154	0.242	十腰内 I
25	28.42	0.61	11.11	4.12	0.06	0.74	0.95	1.19	1.34	0.02	175	142	116	28.9	0.629	0.375	0.817	0.179	0.147	十腰内 I
2006 2	30.06	0.51	11.06	2.61	0.03	0.48	1.57	1.37	1.47	0.24	166	213	102	15.9	0.500	0.555	0.479	0.185	0.194	円筒上層 a・b
3	31.41	0.48	10.58	1.09	0.02	0.29	1.58	1.57	0.95	0.11	164	164	46.0	18.3	0.301	0.629	0.280	0.270	0.437	円筒上層 a・b
4	28.98	0.54	11.27	3.39	0.03	0.31	1.17	0.91	0.90	0.09	189	142	76.5	24.7	0.430	0.648	0.539	0.092	0.161	円筒上層 a・b
5	28.98	0.51	12.17	2.32	0.05	0.47	1.78	1.37	1.00	0.11	139	197	82.4	21.3	0.316	0.751	0.418	0.204	0.220	大木10併行
6	31.60	0.50	10.74	3.01	0.02	0.62	1.39	1.31	0.98	0.02	166	155	79.4	21.7	0.364	0.607	0.512	0.207	0.167	大木10併行
7	29.22	0.52	10.96	4.18	0.03	0.44	1.70	1.21	0.78	0.07	157	187	71.1	35.2	0.270	0.853	0.380	0.106	0.124	大木10併行
8	30.71	0.57	10.80	1.82	0.03	0.54	1.47	1.44	1.14	0.05	191	172	105	15.6	0.391	0.571	0.610	0.298	0.315	大木10併行
9	29.73	0.41	10.64	3.26	0.03	0.53	2.04	1.42	0.94	0.05	119	226	94.6	12.8	0.271	0.862	0.419	0.162	0.124	晩期 土器
10	30.81	0.43	10.06	5.25	0.03	0.33	1.04	1.17	0.99	0.02	156	115	77.3	28.3	0.447	0.480	0.672	0.062	0.081	晩期 土器
11	30.76	0.54	11.27	2.64	0.03	0.81	1.34	1.14	1.40	0.02	164	157	120	19.1	0.566	0.529	0.764	0.306	0.206	晩期 土器
12	31.55	0.42	10.16	1.71	0.02	0.52	1.56	1.40	1.36	0.06	136	210	111	15.6	0.460	0.564	0.529	0.305	0.248	晩期 土器
13	30.62	0.71	10.48	2.19	0.03	0.55	0.79	1.12	1.44	0.10	189	138	100	18.7	0.751	0.310	0.725	0.252	0.323	平安土師器
14	31.83	0.59	10.58	1.98	0.02	0.36	0.84	1.16	1.23	0.08	185	131	101	20.8	0.614	0.353	0.771	0.183	0.300	平安土師器
15	30.01	0.56	11.59	2.55	0.02	0.48	0.97	1.28	1.44	0.03	164	144	124	18.2	0.637	0.357	0.861	0.187	0.219	平安製塩土器
16	30.67	0.59	10.74	2.73	0.04	0.48	0.61	1.01	1.16	0.35	177	119	110	15.8	0.716	0.283	0.924	0.176	0.218	平安製塩土器
17	26.37	0.71	14.82	4.09	0.04	0.35	0.36	0.58	1.05	0.06	260	45.9	66.3	17.7	1.106	0.222	1.444	0.085	0.173	平安支脚
18	30.71	0.65	12.17	2.73	0.02	0.62	0.55	0.99	1.55	0.01	217	122	146	32.9	1.003	0.217	1.197	0.227	0.239	平安羽口
19	31.60	0.49	8.52	2.22	0.04	0.61	1.88	1.75	0.90	0.04	153	209	74.9	20.3	0.247	0.710	0.358	0.274	0.221	平安羽口
20	31.69	0.53	9.21	2.25	0.04	0.58	1.51	1.59	1.03	0.02	165	178	88.7	14.4	0.333	0.576	0.498	0.259	0.234	平安炉壁
24	30.06	0.62	10.53	3.54	0.05	0.97	1.16	1.08	1.08	0.02	168	154	96.6	17.5	0.483	0.537	0.627	0.274	0.174	砂質粘土サンプル

単位：主要元素 (重量%)、微量元素 (ppm)

近野遺跡

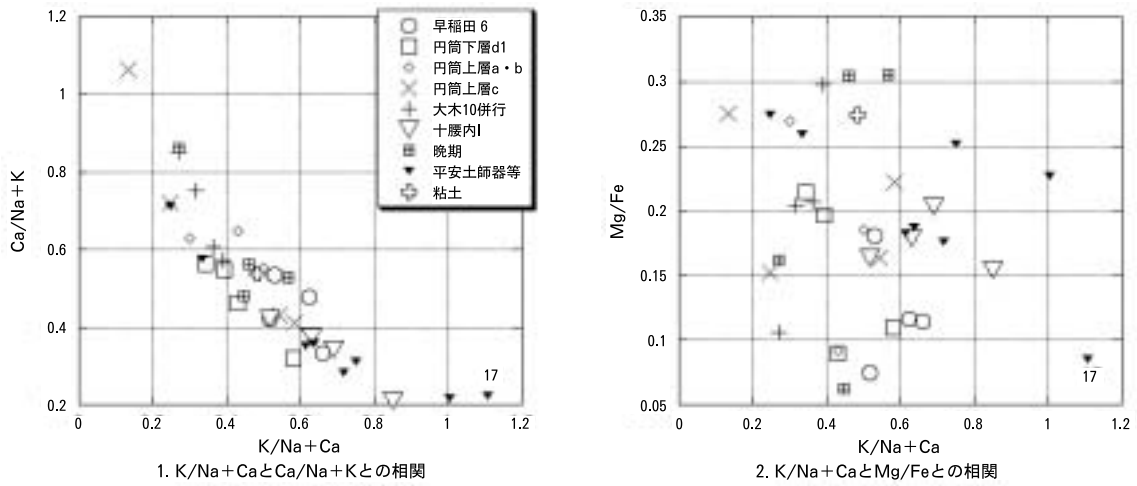


図1 近野遺跡出土土器胎土の化学成分の特徴

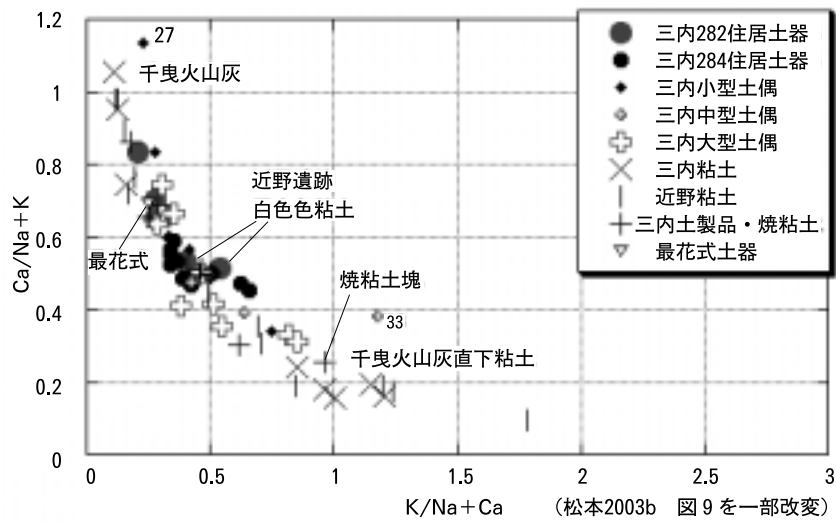
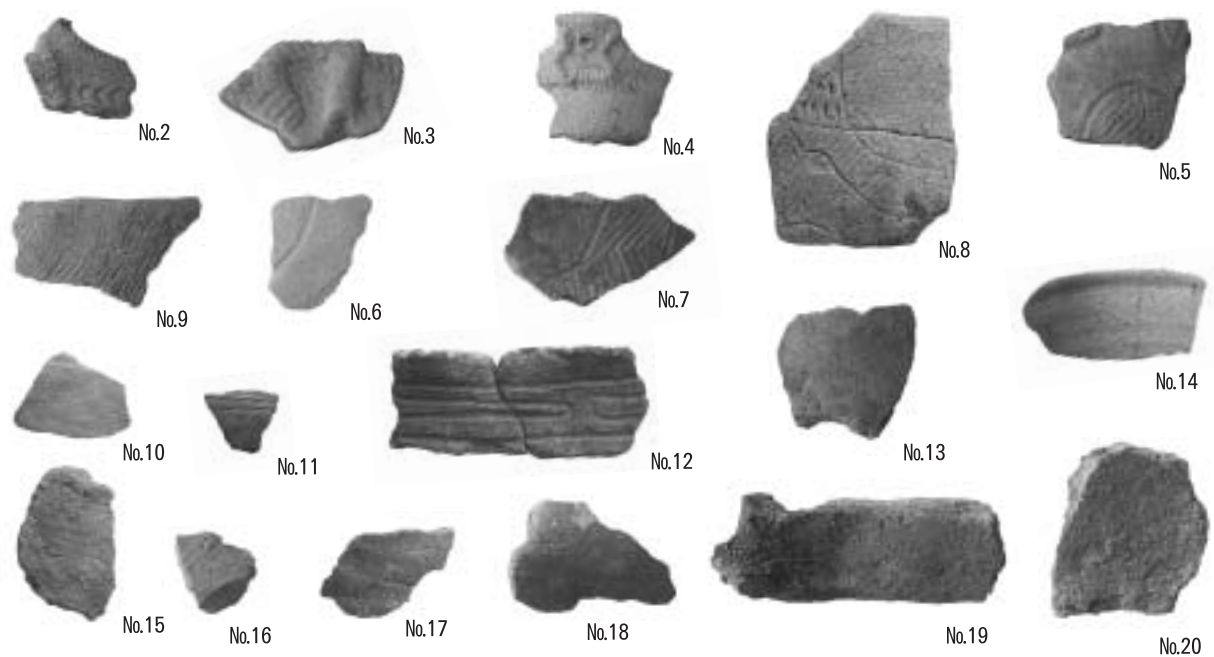


図2 三内丸山遺跡出土土器・土偶および近隣遺跡採取粘土の化学成分の特徴



分析試料 (2006 2 ~ 20) の外観

第5章 まとめ

平安時代の遺構と遺物に関するまとめ - これまでの調査から -

縄文時代の遺構については、『近野遺跡』の中で、総括的なまとめを行った。ここでは、平安時代の遺構・遺物について、概略をまとめておきたい。

近野遺跡からは、昭和50年代の調査も含め平安時代の遺構としては、竪穴住居跡167棟、掘立柱建物跡9棟、土坑45基（掘立柱建物跡と土坑は時期が明確なもののみ）、ほかに畠跡、円形周溝、溝跡などが検出されている。竪穴住居跡は建替・拡張があるもの、カマドや外周溝の造り替えがあるものもあり、それぞれ1棟でカウントした中にも、同一地点にある竪穴住居自体の存続年数も異なっていたのであろう。

本遺跡では、A～F区と分けした区域の中で、A区と谷であるF区を除いて、古代の竪穴住居跡が検出された。中でも分布が濃く主体となるのがB・E区である。

本報告書で取り上げたC区は、遺跡中央の谷（F区）の谷頭にあたり、B区とE区をつなぐ位置関係となる。ただし、C区の住居跡は第2章で記載したとおり、造成などの掘削により特に竪穴部の残存状態は良くない。これは、そのまま出土遺物にも反映しており、全体形が復元し得ないものが多く、床面やカマドの一括遺物には恵まれていない。

B区とE区検出の竪穴住居跡は、絶対数に違いがあるものの、時期的な把握が可能であり、比較が可能である。そのため、実質的にはこの両区域の土器群から差異や変遷を考えてみたい。

ここでいうB区やE区としての区分は、あくまでも平成13年度以降に行った調査内容を指し、昭和50年代に行われた区域については、説明の都合やその位置からE2区と、一応分けて記載する。

遺構配置図を一瞥して明確なのは、竪穴住居跡でのB（とC）区の外周溝・掘立柱部の存在である。E区にも掘立柱部が付随するものもあるがごくわずかであり、E2区では外周溝があるものは116棟中7棟である。また、どれほどの意味があるか判断できないが、遺構配置としてE区では竪穴住居跡が狭い範囲に密集し、わずかではあるが、住居跡が重複しているものもあるのに対し、B区では直線状に配置され、相互に重複関係はなく、外周溝も含めて建て替えが顕著である。ただし、それは外周溝の有無に置き換えてもよく、外周溝のないE・E2区では密集し、外周溝を伴うB・E2区では直線状に分布すると言える。

	B区	E区
住居跡形態	竪穴に掘立柱建物跡・外周溝が付属	竪穴のみ（掘立柱建物跡が付属するもの1棟）が多い、外周溝が伴うもの約5%
カマド	全て半地下式	地下式が1割
器種組成	土師器：坏、甕（大・中・小）、壺、埴	土師器：坏、甕（大・中・小）、壺、埴
	須恵器：坏、甕（大・中・小）、鉢、壺	須恵器：坏、甕（大・中・小）、皿、鉢、壺
	甕：ロク口甕少	甕：ロク口甕・非ロク口甕半々
	埴：非ロク口多	埴：ロク口多

上の表はB区とE区の遺構や遺物の違いを抽出することを念頭に作成したものである。上記のとおり、B区とE区では住居跡の形態（施設）に大きな違いがある。また、明確な差異とは言い難いが、カマドはE区では地下式が1割あるのに対し、B区は全て半地下式である。主軸方位は地形的な制約や利点などに左右されると思われ、B・E区ともそれぞれの区域においては同じであり、両区域通じてカマドは南東方向である。主柱穴配置でも、両区域で大きな違いは見られない。以上のことから、B区とE区の竪穴住居跡では、内部施設（カマド）や構造（柱穴配置）では同様でありながら、付随する掘立柱建物などにより、外観は異なっていたのであろう。

では、B区とE区の出土遺物はどのような差異があるだろうか。表のとおり、最も出土量が多い土師器では、B・E区に器種組成に違いは見られない。また、坏の形態等の属性についても大きな違いはない。しかし、甕はE区ではロクロ成形によるものが非ロクロ成形のものとおよそ半々であるが、B区では非ロクロ成形によるものが大半で、ロクロ成形される甕は中型以下のもののみである。この現象は埴においても見られ、E区のロクロ成形、B区の非ロクロ成形の対照は明確である。しかし、同じ区域において明確な一線を引けないのも事実で、E区でもロクロ成形甕と非ロクロ成形甕がおよそ半々のESI44があるほか、非ロクロ成形甕が卓越するESI27のような例もある。

年代的な位置づけについては、すでに『近野遺跡』（青森県教委2005）でE区の住居跡に対して、9世紀後葉から10世紀前葉の年代が考えられている。B区の住居跡に対しても、後述する降下火山灰の状況から、この年代の中に収まるものとして考えてよいだろう。まずはそれを基本にして実年代を考えていくことにする。

実年代の指標となる遺物は本遺跡からは出土していない。そこで参考にするのが降下火山灰である。B区・E区とも、10世紀前半代とされる十和田a火山灰、白頭山火山灰が堆積する竪穴住居跡が存在する。それらが検出されないものでも、本来的でないのか、上面の削平により失われたものか判断が難しい。内訳で見ると、E区では十和田a火山灰が入るのが6棟、白頭山火山灰が入るのが1棟、B区では十和田a火山灰が入るのが1棟、白頭山火山灰が入るのが5棟、両者が入るのが1棟である。それぞれの区域では、出土土器に大きな時間差を認めがたいことから、火山灰の有無に関わらず時間的には近接したものと考えられる。もちろん、例外的な存在はあるにしても、B・E区とも10世紀半ば頃とされる白頭山火山灰の降下以前のものとしてとらえておいて大過ないだろう。

上に挙げたB区とE区の違いであるが、その要因の一つとして時間差の可能性が考えられる。差異の顕著な遺物として挙げた中に埴がある。三浦圭介氏によれば（三浦1995）、埴は「9世紀後半に普及し」、「使用頻度は9世紀後半・10世紀初頭」で、「10世紀以後ロクロ使用頻度が低下する」、とされる。これをそのまま当てはめれば、ロクロを使用し製作される埴が多いE区は9世紀後半、ロクロ非使用の埴が多いB区は10世紀初頭から前葉に位置づけられるものと、ひとまずとらえておく。また、ロクロ甕と非ロクロ甕がおよそ半々で、ロクロ甕の大きさも大・中・小が見られるE区は、それらが中・小型だけになるB区よりも時間的に先行するものと思われる。E区では十和田a火山灰が入り込む住居跡が多く、B区では白頭山火山灰が入り込む住居跡が多いことは、間接的にそれを支持しているようにも思われる。

一応このような対比は可能であるが、注目しなければならないのはE区南東に当たるE2区である。この区域についてはすでに三浦圭介氏によって『近野遺跡・三内丸山()遺跡』において、詳細な分析がなされている。

E2区出土遺物も踏まえた上で、再度検討しよう。まず、土師器の器種組成であるが、B・E区と違いはない。しかし、先に年代差の指標とした埴では、ロクロ成形と非ロクロ成形の両者が出土して

いる。また、甕（大）においても同様にロクロ成形と非ロクロ成形の双方が見られる。つまり、特に塙で顕著に見られたB・E区の中間的な様相を示しているものと思われる。

全ての竪穴住居跡が、区域ごとに明確な時間的な差異をもっているわけではないことは明らかである。個々の竪穴住居跡について、遺物の出土量や降下火山灰、調査に至るまでの残存状況（攪乱・削平状況）の面から見て、等しく考察しうるものではない。なぜなら、主軸方位、カマド設置方向、柱穴配置などの遺物以外の側面から違いを見出す事ができないからである。

今一度出土遺物から集落の変遷を概観し、まとめとする。

三浦氏が指摘したとおり、最も古く位置づけられるのは、底部周縁を手持ちヘラケズリされた坏が出土した第126号竪穴住居跡と、それに切られる第127号竪穴住居跡であろう。数量的に充足しないが、内面再調整・黒色処理で占められる。この特徴から9世紀前半代が考えられる。それ以外でこのような坏は、E1号竪穴住居跡で1点出土しているに過ぎない。9世紀の後半代のものとして、先に挙げたロクロ成形塙とロクロ成形甕（大）を指標とすれば、E6・26・42・44号竪穴住居跡、第20・40・55・103・110・111号竪穴住居跡が該当する。これはE・E2区の外周溝をもたない住居跡の一部と考えてよいだろう。

それに続くものとして、非ロクロ成形塙・甕（大）、ロクロ成形甕（中）を指標とする。BSI4・6号竪穴住居跡、第75・77・78・97・119・122号竪穴住居跡が該当する。遺物は不明確であるもののB・E区の外周溝をもつ竪穴住居跡が主体となると考えておく。ただし、外周溝の有無によって、時間的には細分される可能性もある。これらを10世紀初頭から中葉ぐらいの時期を考えておきたい。

さらに続くものとして、塙とロクロ甕の消滅、非ロクロ成形甕においては頸部の屈曲が弱いもの・坏では皿に近い器高の低いものの卓越といった器形・器種がみられる土器群を指標とする。第2・15・43・115号竪穴住居跡が該当する。第15号住居跡からは耳皿が出土しており、三浦氏によれば本県における出現は10世紀の後半代としている。降下火山灰からみれば、昭和52年度の調査所見で、降下後に火山灰（十和田a火山灰とされる）を切って構築されていることから、時期的な根拠が支持される。E2区の外周溝を持たない竪穴住居跡の一部である。この中で第2号竪穴住居跡は外周溝をもつ竪穴住居跡である。筆者の年代比定に問題があるのかもしれないが、このタイプの竪穴住居跡にも時間幅があったのか、さらに検討を要する。ここでは、一応10世紀の後葉の年代として捉えておきたい。

大まかにみると、当初E区にあらわれた竪穴住居跡が数を増やし、9世紀の末頃～10世紀の初頭前後に外周溝をもつものが主体となる。分布も谷（F区）を挟み、その両側に直線状に配置される。集落の最終段階では再びE・E2区のみとなる。以上のような変遷を考える事ができる。

土師器編年の大枠は三浦氏によって組み立てられており、それに従う形で上記の年代を考えてきた。しかし、編年についての細部では異同も少なくない（工藤2000、齋藤2001、八木2007など）。実年代比定可能な遺物が少ない事による問題の解決の難しさについても改めていうまでもない。いちいち詳細は記さないが、各氏による編年案によっては、上記した年代に変更を要する可能性も否定しない。

先に住居形態（主軸方向、柱穴配置など）で違いが見られないとしたが、検討が不十分であり、さらなる考察が必要である。

（小笠原）

近野遺跡平安時代竪穴住居跡属性表

B区	規模(m)		周溝	柱穴	火山灰	主軸方位			外周溝	掘立	備考			
BSI01	6.94	×	6.4	無	d	白頭山火山灰	N	-	114	-	E	有	有	
BSI02	4	×	4.35	有	c	白頭山火山灰	N	-	125	-	E	有	無	焼失家屋
BSI03	5.8	×	4.4	有	c		N	-	125	-	E	無	有	
BSI04()	6.6		7	無	d		N	-	122	-	E	有	有	
BSI04()	5.2	×	5.5		d							有	有	
BSI05	2.4	×		有			N	-	115	-	E	有		
BSI06	5	×	6.56	有	d	白頭山火山灰	N	-	128	-	E	有	有?	
BSI07()	3.38	×	4	有	a		N	-	128	-	E	有?		
BSI07()	?		?	無	?							有		
BSI08	3.66	×	?	有			N	-	116	-	E	有		
BSI09()	5.6	×	?	有	a		N	-	118	-	E	有		
BSI09()	4		?		d									
BSI10	7.05	×	6.4	有	b	白頭山火山灰	N	-	130	-	E	有	有	
BSI11	?	×	?		?			-		-		有		BSI10の拡張前
BSI12	3.9	×	4.3	有	a		N	-	116	-	E	有	有	
BSI13	5	×	?		d		N	-	123	-	E	有	有	
BSI15	6.3	×	5.75	有	a	白頭山火山灰	N	-	128	-	E	有		
BSI16	6.94	×	6.4	有	d	白頭山火山灰	N	-	130	-	E	有	有	
BSI17	6.24	×	5.4	有	a			-		-		有	有	BSI16の拡張前
BSI20	4.1	×	?	有				-		-		有	有	BSI17の拡張前
BSI18	4.3	×	4.4	有	a		N	-	130	-	E	有	有	BSI16より古い
BSI19()	?	×	?					-		-		有		
BSI19()	?											?		
BSI19()	?			有								有	有	
BSI21	?											有		

E区	規模(m)		周溝	柱穴	火山灰	主軸方位			外周溝	掘立	備考			
ESI01()	4.82	×	4.52	有	a		N	-	123	-	E			
ESI01()	4.25	×	4	無	a									
ESI02	2.68	×	2.66	無	a		N	-	126	-	E			
ESI03	4.38	×	3.68	有	a	白頭山火山灰	N	-	140	-	E			
ESI04	5.3	×	?	有			N	-	113	-	E			
ESI05()	5.4	×	4.8	有	b		N	-	124	-	E		有	
ESI05()	3.25	×	3.12	有	a									
ESI06()	5.76	×	5.05	有	d		N	-	125	-	E		有	
ESI06()	4.2	×	4.2	有	c									
ESI07	4.54	×	?	有	a		N	-	109	-	E			
ESI11	5.1	×	4.82	有	b		N	-	158	-	E		有	
ESI20	4.6	×	4.48				N	-	136	-	E			
ESI23()	3.82	×	?	有	?		N	-	125	-	E			
ESI23()	2.93	×	?		?									
ESI24	4.62	×	4.02	有	a		N	-	115	-	E			
ESI25()	4.95	×	4.54	有	a	白頭山火山灰	N	-	131	-	E			
ESI25()	?		?	無	?									
ESI26()	6.33	×	5.25	有	a	白頭山火山灰	N	-	138	-	E			
ESI26()	5.4	×	4.8	有	a									
ESI26()	4.18	×	4.03	有	a									
ESI27	4.03	×	3.23	無	a	白頭山火山灰	N	-	131	-	E			
ESI31	3.75	×	3.4	有	a		N	-	126	-	E			
ESI33	6.34	×	?	無	?		N	-	110	-	E			
ESI35	2.5	×	2.2	無	a		N	-	140	-	E			
ESI36	3.4	×	3.2	有	a	十和田a火山灰	N	-	116	-	E			
ESI39()	5.02	×	4.97	有	a		N	-	145	-	E			
ESI39()	3.96	×	3.62	有	a									
ESI40	3.44	×	2.76	無	a		N	-	142	-	E			
ESI41	4	×	3.75	有	a		N	-	123	-	E			
ESI42()	5.51	×	3.6	有	a	白頭山火山灰	N	-	121	-	E			
ESI42()	3.88	×	3.06	有	a									
ESI43	4.5	×	4.46	有	a		N	-	126	-	E			
ESI44()	5.28	×	4.48	有	a	白頭山火山灰	N	-	141	-	E			
ESI44()	3.91	×	3.19	有	a								有	
ESI47	3	×	?	無	?		N	-	137	-	E			
ESI48	6	×	4	有	a		N	-	139	-	E			
ESI51	2.68	×	2.04	無	a		N	-	118	-	E			

昭和52年調査	規模(m)			周溝	柱穴	火山灰	主軸方位				外周溝	掘立	備考	
2()	5.8	x	4.4	有	a		N	-	118	-	E	有		
2()	4.4	x	3.5	有										
3	?	x	?	有			N	-		-	E			
4	3.6	x	3.6	有	a		N	-	101	-	E			
5	5.2	x	5	有	a		N	-	145	-	E			
7()	4.6	x	3.9	有	a		N	-	110	-	E			
7()	3.4	x	2.7	有	a									
8	5.1	x	4.7	有	a		N	-	115	-	E			
9	4.2	x	3.5	有	a		N	-	140	-	E			
10	5.7	x	5.4	有	a		N	-	142	-	E			
11()	5.4	x	4.2	有	a		N	-	118	-	E			
11()	3.8	x	3.5	有	a									
12	3.4	x	3.1	無	a		N	-	115	-	E			
13	3.7	x	3.4	有	a		N	-	107	-	E			
15	5.7	x	5.4	有	a		N	-	111	-	E	無	無	新しい
16()	6.6	x	5.9	有	b		N	-	102	-	E			
16()	5.1	x	4.8	有										
17	3.5	x	3.1	有	a		N	-	112	-	E			
18	3.5	x	3.5	有	a		N	-	123	-	E			
19	6	x	5.7	有	a		N	-	125	-	E			腰板有
20	5.4	x	?	有			N	-	110	-	E			
21	7.1	x	5.6	有	a		N	-	126	-	E			
22	2.4	x	2.1	有	c		N	-	96	-	E			
23	3.3	x	3.1	有	a		N	-	108	-	E			
24()	6	x	5	有	a		N	-	131	-	E			
24()	4	x	3.5											
25	3.1	x	2.4	無	a		N	-	134	-	E			
26	3.8	x	3.6	有	d		N	-	110	-	E			
27	2.4	x	2.4	有	a		N	-	115	-	E			
28	6.2	x	5.9	有	a		N	-		-	E			
29	?	x	?				N	-		-	E			28の掘立部
30	3.8	x	3.6	有	a		N	-	123	-	E			
31	4.8	x	4.3	有	a		N	-	117	-	E			
32	4.5	x	4.5	有	a		N	-	104	-	E			
33	?	x	?	無	a		N	-		-	E			
34	?	x	?	有	a		N	-		-	E			
35	3.3	x	2.9	無	a		N	-	122	-	E			
36	2.9	x	2.7	無	a		N	-	120	-	E			
37()	5.9	x	5	有	a		N	-	107	-	E			
37()	4.3	x	4.1	有										
38()	6.6	x	6.2	有	a		N	-	115	-	E			
38()	5.8	x	5	有										
39()	7	x	6.6		a		N	-	116	-	E			
39()	5	x	4.6											
40	5.4	x	5.3	有	a		N	-	113	-	E			
41	?	x	?	有	a		N	-	101	-	E			
42	3.1	x	2.8	有	a		N	-	126	-	E			
43	?	x	?	無	a		N	-	109	-	E			
44	3.6	x	3.3	有	a		N	-	123	-	E			
45	3.6	x	3.2	無	a		N	-	128	-	E			
46	3.1	x	2.9	無	a		N	-	115	-	E			
47	4.2	x	3.1	有	a		N	-	105	-	E			
48	3.2	x	3	有	a		N	-	95	-	E			
49	2.8	x	?	無			N	-	123	-	E			
50	?	x	?	有	c		N	-	125	-	E			
51	?	x	?				N	-	?	-	E			
52	5	x	4.9	無	a		N	-	125	-	E			
53	4.6	x	3.4	有	a		N	-	136	-	E			
54	3.4	x	3.4	有	a		N	-	130	-	E			
55	5.7	x	5.1	有	a		N	-	130	-	E			
56	5.6	x	5.6	有	a		N	-	140	-	E			
57()	5	x	4.4		a		N	-	132	-	E			
57()	4.2	x	4											
57()	3.5	x	3.3											
58	4	x	3.8	有	a		N	-	138	-	E			
59	?	x	?	有			N	-	125	-	E			

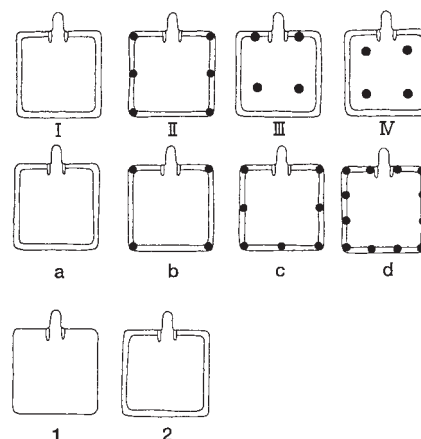
昭和52年調査	規模(m)			周溝	柱穴	火山灰	主軸方位				外周溝	掘立	備考	
	?	x	?				N	-		-				E
60	?	x	?	有			N	-	105	-	E			
61	3.2	x	2.8	無	a		N	-	113	-	E			
62	3.4	x	3.3	無	a		N	-	128	-	E			
63	4.2	x	3.7	有	a		N	-	120	-	E			
64	?	x	?				N	-	127	-	E			
65	?	x	?				N	-	134	-	E			
71	?	x	?				N	-		-	E	有		
75	4	x	3.8	無	a		N	-	115	-	E			
76	4	x	4.5	有	a		N	-	113	-	E			
77()	5.4	x	6	有	b		N	-	112	-	E			
77()	4	x	4											
78	5.1	x	4	有	a		N	-	120	-	E			
79	4.9	x	4.2	有	a	十和田 a 火山灰	N	-	128	-	E			
80	1.9	x	2.2	無	a		N	-	128	-	E			
81	2.3	x	3.1	無	a		N	-	106	-	E			
82	?	x	?	有	a		N	-	119	-	E			
83	2.6	x	2.3	無	a		N	-	135	-	E			
84()	4.8	x	4.4	有	d		N	-	104	-	E			
84()	4	x	4.2	有										
85	3.75	x	3.25	無	a		N	-	116	-	E			
86	?	x	?				N	-		-	E			
87	?	x	?	有			N	-		-	E			
88	3.6	x	3.3	有	b		N	-	134	-	E	有		
90	3.5	x	?	有	b		N	-	130	-	E			
91	4	x	4.4	有	a		N	-	115	-	E			
92	3.2	x	2.7	無	a		N	-	138	-	E			
93	3	x	2		a		N	-	130	-	E			
94	3.8	x	3.75	無	a		N	-	120	-	E			
95	6.2	x	6.3	有	a		N	-	130	-	E			腰板有
96	2.9	x	2.2	無	a		N	-	116	-	E			
97	3.2	x	3.1	無	a		N	-	139	-	E	有		
98	3.4	x	2.8	無	a	十和田 a 火山灰	N	-	134	-	E			
99	2.8	x	2.6	無	a		N	-	117	-	E			
100	3.6	x	3.6	有	a		N	-	132	-	E			
101A	5.2	x	4.9	有	a	十和田 a 火山灰	N	-	129	-	E			
101B	4.4	x	4.9	有	a		N	-	131	-	E	無	無	
102	4.5	x	3.8	有	a		N	-	145	-	E	無		
103	4.9	x	5.1	無	a	十和田 a 火山灰	N	-	131	-	E			
104	2.9	x	2.6	有	a		N	-	129	-	E			出入り口
105	4	x	3.2	無	a		N	-	132	-	E			
106()	4.8	x	5.3	有	a		N	-	133	-	E			
106()	4	x	4.6											
107	2.2	x	2.2	無	a		N	-	135	-	E			
108	?	x	?	有	a	十和田 a 火山灰	N	-		-	E			
109	4.1	x	4.1	無	a	十和田 a 火山灰	N	-	136	-	E			
110	3.9	x	4	有	a		N	-	135	-	E			腰板有
111	5	x	4.6	有	a		N	-	135	-	E	無	無	黄褐色火山灰
112	5.4	x	5	有	a	十和田 a 火山灰	N	-	127	-	E			
114	4	x	3.2	有	a		N	-	150	-	E			
115	4.5	x	4.2	有	a		N	-	140	-	E	無	無	黄褐色火山灰
116	4	x	2.8	無	a		N	-	145	-	E			黄褐色火山灰
117	3.6	x	4	有	a		N	-	135	-	E			
118	3.6	x	3.3	有	a	十和田 a 火山灰	N	-	130	-	E			
119()	4.4	x	4.1	有	a		N	-	128	-	E			
119()	4.1	x	4.1											
120	3.8	x	3.8	有	a		N	-	140	-	E			
122()	6.4	x	6.2	有	d		N	-	122	-	E			
122()	5.8	x	5.4	有	d									
123	4.6	x	4.4	有	a		N	-	126	-	E			
124	3.2	x	2.6	無			N	-	131	-	E			
125	5	x	4.1	有	a		N	-	132	-	E			
126	3.6	x	3.5	有	a		N	-	124	-	E	無	無	
127	3.2	x	?	有	a		N	-	130	-	E	無	無	
128	2.6	x	2.4	無	a		N	-	139	-	E			
129	3.4	x	2.8	無	b		N	-	122	-	E			
130	4.3	x	3.4	有	a		N	-	128	-	S			

柱穴の分類について

柱穴の分類基準は『近野遺跡』に依るが、
 支柱穴 と壁柱穴 c は区別ができないため、
 分類 は削除した。

なお、昭和50年代の調査における主軸方位
 は、当時の報告書から引用したが、表現の統一
 を図るため、N - ° - E に改めた。

柱穴配置分類



『近野遺跡』36頁図210を転載

近野遺跡調査遺構数一覧

時代	遺構種別	報告書	近野	近野	近野	近野	近野	近野	近野	近野	近野	近野	近野	近野市教委
		総数	D区	C区	F区	E区	A・B区	近野	近野	近野	近野	近野		
縄文時代	竪穴住居跡 S I	49	2	1		27	1		1	14	1			6
	掘立柱建物跡 S B	11				10	-			1				
	土坑 S K (小竪穴遺構含む)	172	10	6		70	13	1		14		46	1	11
	溝状土坑 S V	2	1								1			
	土器埋設遺構 S R	8	1	1		3	1					2		
	土器片集積遺構	4			2	-	2							
	捨て場	1		1										
	焼土遺構 S N	1	1											
	その他 S X (性格不明遺構)	3	2			1	-							
	木組遺構					1								
トチノキ破片集積遺構					1									
平安時代	竪穴住居跡 S I	170 (202)	1	7		26 (36)	18 (25)		1		54 (59)	61 (72)	2	
	掘立柱建物跡 S B	9		2		2	5							
	土坑 S K	44	1	3		1	36	3						
	溝跡 S D	28		3		1	16				4	1	2	
	円形周溝	1						1						
	畠跡	1				-	1							
	焼土・炭化物集積遺構	3				1	2							
	ピット、柱列	1				-	1							
	その他 S X (性格不明遺構)	1				1	-							
	木組遺構	1				2	-	1						
木敷遺構					1									
不明	土坑 S K	302	13	28		77	35				124	25		
	柱穴ピット	270	8	25		165	61							11
	掘立柱建物跡 S B	2	1									1		
	溝跡 S D	20	1	7								12		
	その他 S X (性格不明遺構)	6		6										

* 平安時代の住居跡の数値：上は検出数、下の()付数値は拡張部分を1軒として数えたものを含む総数である。

近野遺跡発掘調査一覧

青森県教育委員会

調査年	調査 (上:遺跡内の位置 下:調査原因)	調査結果	刊行年	報告書名
昭和48年 (1973) 1次	西側丘陵部斜面 青森県総合運動公園体育館建設予定地周辺	縄文時代：前期～晩期の遺物を含む包含層 平安時代：住居跡2軒	昭和49年 (1974)	青森県埋蔵文化財調査報告書第12集 近野遺跡(1)発掘調査報告書 - 県営運動公園建設関係埋蔵文化財発掘調査 -
昭和49年 (1974) 2次	南側台地部 青森県総合運動公園テニスコート建設予定地	縄文時代：後期前葉の遺物包含層と土坑群 平安時代：住居跡61軒	昭和50年 (1975)	青森県埋蔵文化財調査報告書第22集 近野遺跡発掘調査報告書() - 青森県総合運動公園建設関係発掘調査 -
昭和50年 (1975) 3次	中央台地部(2次調査の北側) 青森県総合運動公園テニスコート北側隣接地	縄文時代：後期前葉の土坑群200基 平安時代：住居跡19軒	昭和52年 (1977)	青森県埋蔵文化財調査報告書第33集 近野遺跡発掘調査報告書() 三内丸山()遺跡発掘調査報告書 - 青森県総合運動公園建設関係発掘調査 -
昭和51年 (1976) 4次	中央台地部(3次調査の北西側) 青森県総合運動公園体育館前庭部から沈床園	縄文時代：中期の住居跡1軒 平安時代：住居跡33軒		
昭和52年 1977 5次	北端台地(現 三内丸山遺跡近野地区) 青森県総合運動公園林間広場	縄文：中期中葉～後葉の集落跡、大型住居跡検出	昭和54年 (1979)	青森県埋蔵文化財調査報告書第47集 近野遺跡発掘調査報告書() - 青森県総合運動公園建設関係発掘調査 -
平成6年 (1996) 6次	西側～中央台地部(4次調査の北側) 県総合運動公園拡張整備事業の試掘	縄文時代：中期中葉の集落跡確認	平成9年 (1997)	青森県埋蔵文化財調査報告書第216集 近野遺跡 - 県総合運動公園拡張整備事業に伴う遺跡試掘調査報告 -
平成7年 (1997) 7次	西側～中央台地部(4次調査の北側) 都市計画道路里見丸山線予定地試掘	平安時代：集落跡確認		
平成12年 (2000) 8次	西側(B区)・南側(C区)台地部、中央の谷部(F区) 県立美術館	縄文時代：後期の土坑 平安時代：住居跡確認 谷部：遺物包含層確認	平成14年 (2002)	青森県埋蔵文化財調査報告書第315集 近野遺跡 - 県立美術館建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 -
平成13年 (2001) 9次	西側(B区)・中央(E区)台地部、中央の谷部(F区)の調査。南側(C区)の試掘 県立美術館、県道里見丸山線	縄文時代：中期中葉の集落跡検出 平安時代：集落跡検出	平成16年 (2004)	青森県埋蔵文化財調査報告書第370集 近野遺跡 - 県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 - 平成13～15年調査のA区・B区分収録
平成14年 (2002) 10次	西側(B区)・中央(E区)・南側(C区)台地部、中央の谷部(F区)、西側斜面(A区) 県立美術館、県道里見丸山線	縄文時代：中期中葉の集落跡、谷からトチの水さらし場遺構検出 平安時代：集落跡検出	平成17年 (2005)	青森県埋蔵文化財調査報告書第394集 近野遺跡 - 県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 - 平成13～15年調査のE区分収録
平成15年 (2003) 11次	西側(B区)・中央(E区)・南側(C区)・東側(D区)台地部、中央(F区)・東側(D2区)谷部 県立美術館、県道里見丸山線	縄文時代：中期中葉の集落跡、後期の遺構・遺物 平安時代：集落跡検出、谷から木組遺構検出	平成18年 (2006)	青森県埋蔵文化財調査報告書第418集 近野遺跡 - 県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 - 平成13～15年調査のF区分収録
平成18年 (2006) 12次	北東側緩斜面 県道里見丸山線	縄文時代の遺物出土	平成19年 (2007)	青森県埋蔵文化財調査報告書第432集 近野遺跡 - 県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 - 平成13～15年調査の南側(C区)・東側(D区)台地と谷(D2区)、平成18年分収録

青森市教育委員会

平成14年 (2002)	南東端緩斜面 民間事業(分譲宅地開発)に係わる事前調査	縄文時代：中期中葉の遺構・遺物主体	平成15年 (2003)	青森市埋蔵文化財調査報告書第68集 近野遺跡発掘調査報告書
-----------------	--------------------------------	-------------------	-----------------	----------------------------------

C区土坑計測表

番号	グリッド	重複・遺構 番号変更	検出 面	規模(cm)				時期
				平面形	検出面	底面	深さ	
1	FH-250			楕円	126 × 103	93 × 80	13	時期不明
2	FE-252			楕円	80 × 63	76 × 56	16	時期不明
3	FJ-251			長方	114 × 83	100 × 76	20	時期不明
4	FM-250			不整円	243 × 216	76 × 74	46	時期不明
5	FL・FM-249・ 250			円	238 × 200	203 × 170	33	縄文時代後期
6	FF-245・246			円	324 × 320	303 × 290	23	縄文時代中期
7	欠番							
8	FE-244			円	260 × 243	240 × 233	14	時期不明
9	FH・I-248・24 9			楕円	160 × 133	153 × 120	22	時期不明
10	FI・FJ-249			不整円	126 × 106	103 × 106	33	時期不明
11	欠番							
12	FL-246・247	< CSI3		楕円	(140) × 134	(115) × 148	34	縄文時代後期
13	FI・FJ-249			円	123 × 103	96 × 80	22	時期不明
14	欠番							
15	欠番							
16	FE-251			不整円	80 × 80	100 × 90	40	縄文時代後期(十腰内)
17	FH-251			不整円	80 × 73	63 × 63	13	時期不明
18	FE-251			楕円	63 × 53	43 × 40	16	時期不明
19	FG・FH-251			円	66 × 64	58 × 56	22	時期不明
20	欠番							
21	FF-251			円	46 × 46	40 × 36	20	時期不明
22	FE-251			不整円	63 × 60	53 × 53	23	時期不明
23	FG-251			楕円	73 × 63	53 × 46	10	時期不明
24	FE・FF-248・2 49			楕円	106 × 74	73 × 60	14	時期不明
25	GK-248			楕円	113 × 90	96 × 70	17	時期不明
26	FN-247・248	< CSD1		円	166 × 163	140 × 133	30	平安時代
27	GK-247			不整楕円	120 × 96	90 × 80		時期不明
28	欠番							
29	FN-251			円	94 × 80	80 × 70	17	時期不明
30	FM-254			楕円	133 × 83	116 × 60	18	縄文時代後期
31	FM-254			楕円	76 × 63	63 × 53	14	縄文時代前期?
32	欠番							
33	GL-248			不整長方	304 × 240	220 × 180	43	縄文時代後期(十腰内)
34	FE-268			楕円	64 × 44	50 × 36	14	時期不明
35	FE-269			隅丸長方	120 × 70	100 × 46	13	時期不明
36	FF-269			長楕円	120 × 43	106 × 36	10	時期不明
37	FG・FH-266			不整楕円	293 × 280	276 × 248	20	平安時代
38	FF・FG-265			楕円	190 × 176	180 × 140	30	平安時代
39	FF-266			不整円	113 × 100	103 × 84	10	時期不明
40	FG-266			楕円	86 × 66	73 × 60	23	時期不明
41	FE-266			円	140 × 120	126 × 103	22	時期不明
42	FF・FG-265			円	270 × 243	230 × 203	60	時期不明
43	FE-266・267			楕円	108 × (44)	88 × (28)	11	時期不明
44	FG-265			楕円	151 × 75	123 × 60	24	時期不明

D区土坑計測表

番号	グリッド	重複・遺構 番号変更	検出 面	規模(cm)				時期
				平面形	検出面	底面	深さ	
1	HD-220	-		楕円	160 × 135		40	
2	HS・T-231	<DSI1		不整円	185 × ?			縄文時代後期
3	FQ-180	-		方	150 × 146	130 × 116	18	時期不明
4	FQ-178	-		円	64 × 60	52 × 50	14	時期不明
5	FP-180	-		円	184 × (166)	166 × 154	22	平安時代
6	FT-179	-		円	86 × 72	66 × 58	38	時期不明
7	FP-179	-		円	86 × 86	66 × 60	20	時期不明
8	FR-177	-		不整円	64 × 56	40 × 34	12	時期不明
9	FR-180	-		円	106 × 104	82 × 80	32	縄文時代中・後期
10	FQ-182	-		円	54 × 50	44 × 40	12	縄文時代中・後期
11	FT-178	-		円	86 × 78	72 × 62	44	縄文時代中期中葉
12	FP-180	-		円	66 × 60	56 × 50	38	縄文時代中期中葉
13	GN-203・204	>DSK14・15		(楕円)	(120) × (76)	(86) × (57)	24	時期不明
14	GN-203・204	<DSK13、 ?DSK15		(楕円)	142 × (84)	118 × (66)	24	時期不明
15	GN-203・204	<DSK13、 ?DSK14		(楕円)	106 × (44)	74 × (32)	10	時期不明
16	GM・N-200・ 201	-		円	84 × (60)	80 × (54)	18	縄文時代後期
17	FS-180・181	-		不整楕円	128 × 100	72 × 64	56	縄文時代中期後半
18	FP-180	-		円	53 × 42	12	42	時期不明
19	HE-222	-		不整楕円	95 × 52		32	縄文時代後期
20	FS-181・182	-		隅丸長方	239 × 174	163 × 134	46	縄文時代中・後期
21	FS-180	-		不整円	190 × 188	70 × 66	82	縄文時代中・後期
22	欠番	DSI2へ変更	-	-	-	-	-	-
23	FQ-179・180	<DSI2		円	96 × 92	82	50	時期不明
24	GB-184	確認のみ		楕円	(110) × (84)	-	-	時期不明
25	GB-182	確認のみ		円	(110) × (100)	-	-	時期不明
26	GC-182	確認のみ。DSK27 と重複?		楕円	(94) × (54)	-	-	時期不明
27	GC-181	確認のみ。DSK26 と重複?		楕円	(180) × (96)	-	-	時期不明
28	GO-204	確認のみ		円	(164) × (156)	-	-	時期不明
29	HE-223	-		隅丸方	118 × 100	92 × 62	12	時期不明

C区縄文土器・弥生土器

図	No	出土位置	層位	種類	器種	時期	文様	備考
6	1	CSI6	堆積土	縄文土器	壺	十腰内	沈線(平行状・山形状)	
6	2	CSI6	堆積土	縄文土器	壺	十腰内	沈線(平行状)	
6	4	CSI6	1	縄文土器	鉢	十腰内	沈線(平行状・山形状)、口唇上面に刺突	
6	5	CSI6	堆積土	縄文土器	壺?	十腰内	沈線(平行状・連結)	
6	6	CSI6	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(曲線状)	
8	1	CSK5	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線、LR	
8	2	CSK5	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線	
8	3	CSK5	2	縄文土器		十腰内	無文、底面に渦巻状沈線	
8	6	CSK6	1	縄文土器	深鉢	円筒上層	結束第一種	旧CSI4
8	7	CSK12	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線、充填縄文	
8	8	CSK12	1	縄文土器	深鉢	中・後期	LR(横)	
8	9	CSK12	1	縄文土器	深鉢	中・後期	LR(縦)	
8	10	CSK16	堆積土	縄文土器		十腰内	沈線、縄文	
8	11	CSK16	2	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(渦巻状)	
8	12	CSK16	2	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(渦巻状)	
8	13	CSK16	2	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・鋸歯状)	
9	1	CSK16	2	縄文土器	深鉢		LR(横)、底部上げ底	
9	3	CSK31	1	縄文土器	深鉢	後期	縄文?	
9	4	CSK33	堆積土	縄文土器	台付鉢	十腰内	沈線(平行状・S字状)	
9	5	CSK33	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(クランク状)、充填縄文	
9	6	CSK33	1	縄文土器	鉢	十腰内	沈線(平行状・連結)	
9	7	CSK33	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線	
9	8	CSK33	1	縄文土器	深鉢	十腰内	貼付、沈線	
9	9	CSK33	3	縄文土器	深鉢	十腰内	無文、波状口縁	
9	10	CSK33	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・円形)	
9	11	CSK33	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線	
11	1	CSR1	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	橋状把手、沈線(平行・クランク状)	
11	2	CSR2	堆積土	縄文土器	鉢		無文	
38	1	CSK25	堆積土	縄文土器	鉢	十腰内	沈線	
38	4	CSK27	2	縄文土器	深鉢	中・後期	結束第一種	
38	5	CSK42	1	縄文土器	深鉢	最花	無文帯、刺突、RL、沈線	
38	6	CSK42	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線	
38	7	CSK42	1	縄文土器	深鉢		円形貼付、沈線	
38	8	CSK44	1	縄文土器	深鉢		貼付(L押)	
45	1	風倒木捨て場 FK-245		縄文土器	壺	十腰内	沈線(クランク状・同心円状)、LR	
45	2	風倒木捨て場 GL-249	・	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・山形状)	
45	3	風倒木捨て場 GM-249a	2・	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(クランク状)、条痕	
45	4	風倒木捨て場 GM-249		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・楕円状)	
45	5	風倒木捨て場 GM-248c		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・連結)	
45	6	風倒木捨て場 GM-249c	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・クランク状・S字状・連結)	
46	7	風倒木捨て場 GM-249a・b		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(楕円状・クランク状)、条痕	
46	8	風倒木捨て場 GM-249b	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・山形状)	
46	9	風倒木捨て場 GL-249	2	縄文土器	壺	十腰内	沈線(平行状・山形状)	
46	10	風倒木捨て場 GM-249b	・1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・山形状)	
46	11	風倒木捨て場 GL-249		縄文土器	壺	十腰内	沈線(平行状・山形状)	
46	12	風倒木捨て場 GM-249a	堆積土	縄文土器	壺	十腰内	壺形、橋状突手、隆沈線	
46	13	風倒木捨て場		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・クランク状)	
47	14	風倒木捨て場 GM-249b	堆積土			十腰内	無文	
47	15	風倒木捨て場 GM-248a	2・	縄文土器	深鉢	十腰内	無文	
47	16	風倒木捨て場 GL-249		縄文土器	深鉢	十腰内	無文	
47	17	風倒木捨て場 GM-249b	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	無文	
47	18	風倒木捨て場 GL-249	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線	
47	19	風倒木捨て場 GM-249a		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・鋸歯状・入組状)	
47	20	風倒木捨て場 GL-249b		縄文土器	深鉢	十腰内	無文、貫通孔	
47	21	風倒木捨て場 GL-249		縄文土器	鉢	十腰内	沈線(平行状・連結)	
47	22	風倒木捨て場 GM-249		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・入組状)	
47	23	風倒木捨て場 GM-248c	1	縄文土器	壺	十腰内	沈線(平行状)	

図	No	出土位置	層位	種類	器種	時期	文様	備考
48	24	風倒木捨て場 GL-249	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・連結)	
48	25	風倒木捨て場 GM-249a		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状)	
48	26	風倒木捨て場 GM-249	2	縄文土器	深鉢	十腰内	櫛歯状沈線(入組状)	
48	27	風倒木捨て場 GM-248	2	縄文土器	深鉢	十腰内	RL	
48	28	風倒木捨て場 GL-249	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	格子状沈線	
48	29	風倒木捨て場 GL-249	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・入組状)	
48	30	風倒木捨て場 GL-250	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(入組状)	
48	31	風倒木捨て場 GM-249		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(楕円・入組状)、L充填	
48	32	風倒木捨て場 GM-249	2	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・入組状)	
48	33	風倒木捨て場 GM-249		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・入組状)	
48	34	風倒木捨て場 GM-248	2	縄文土器	深鉢	十腰内	RL	
48	35	風倒木捨て場 GM-249b		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状)	
48	36	風倒木捨て場 GL-249		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・入組状)	
49	37	風倒木捨て場 GM-248	2	縄文土器	深鉢	十腰内	無文	
49	38	風倒木捨て場 GM-248a		縄文土器	深鉢	十腰内	口唇刻み、沈線(平行状・渦巻状)	
49	39	風倒木捨て場 GM-248a		縄文土器	深鉢	十腰内	櫛歯状沈線	
49	40	風倒木捨て場 GM-248c		縄文土器	深鉢	十腰内	櫛歯状沈線(渦巻状・入組状)	
49	41	風倒木捨て場 GM-249		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・楕円状)	
49	42	風倒木捨て場 GM-249a		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・楕円状)	
49	43	風倒木捨て場 GM-248	2	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状)	
49	44	風倒木捨て場 GM-249 b	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(入組状)、LR充填	
49	45	風倒木捨て場 GL-247	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	櫛歯状沈線	
49	46	風倒木捨て場 GM-249b	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	櫛歯状沈線	
49	47	風倒木捨て場 GM-249		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状)	
49	48	風倒木捨て場 GM-249		縄文土器	深鉢	十腰内	櫛歯状沈線(平行状・楕円状)	
49	49	風倒木捨て場 GL-249		縄文土器	深鉢	十腰内	口唇刻み、沈線(平行状・入組状)	
49	50	風倒木捨て場 GM-248c		縄文土器	鉢	十腰内	沈線、貼付(LR充填)	
49	51	風倒木捨て場 GL-249b		縄文土器	壺	十腰内	沈線(入組状)	
49	52	風倒木捨て場 GM-249		縄文土器	壺	十腰内	櫛歯状沈線(平行・入組・鋸歯状)	
49	53	風倒木捨て場 GL-249b	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状)	
49	54	風倒木捨て場 GM-249		縄文土器	深鉢	十腰内	櫛歯状沈線	
49	55	風倒木捨て場 GM-249		縄文土器	壺	十腰内	沈線(平行状・楕円状)	
49	56	風倒木捨て場 GM-249	2	縄文土器	深鉢	十腰内	口唇上面刻み、櫛歯状沈線	
49	57	風倒木捨て場 GM-249		縄文土器	壺	十腰内	沈線(平行状・鋸歯状)	
49	58	風倒木捨て場 GM-249		縄文土器	皿	十腰内	長方形	
52	1	FN- 247		縄文土器	深鉢	円筒下層b	RL押、L単絡1	
52	2	FJ- 249		縄文土器	深鉢	円筒上層c	貼付(大部剥落)、L押、刺突	
52	3	FE- 251		縄文土器	深鉢	円筒上層d	貼付	
52	4	FN- 249		縄文土器	深鉢	円筒上層d	LR、隆帯に沿って沈線	
52	5	FJ- 252		縄文土器	深鉢	円筒上層d	貼付	
52	6	FE- 251		縄文土器	深鉢	十腰内	RL?沈線、竹管状刺突	
52	7	FI- 249		縄文土器	壺	十腰内	隆帯、沈線	
52	8	-		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・鋸歯状)	
52	9	CSK37(平安時代の土坑)	-	縄文土器	鉢	十腰内	沈線(平行状・渦巻状)	
52	10	FE- 251		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線	
52	11	FD- 247	-	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線	
52	12	FF- 251		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・鋸歯状)	
52	13	FJ- 248		縄文土器	深鉢	十腰内	LR、沈線	
52	14	-	-	縄文土器	深鉢	十腰内		
52	15	FD- 246		縄文土器	鉢	十腰内	沈線	

D区縄文土器・弥生土器

図	No	出土位置	層位	種類	器種	時期	文様	備考
61	1	DSI2	堆積土	縄文土器	深鉢	上層 e ~ 榎林	RL(縦)、縦位の磨消	
61	2	DSI2	堆積土	縄文土器	深鉢	上層 e ~ 榎林	L(横)	
61	3	DSI2	1	縄文土器	深鉢	上層 e	LR、沈線	
61	4	DSI2	1	縄文土器	深鉢	上層 e ~ 榎林	LR、沈線	
61	5	DSI2	1	縄文土器	深鉢	上層 e	波頂部肥厚	
61	6	DSI2	1	縄文土器	深鉢	中期後半	LR付加条	
62	1	DSI3	1	縄文土器	深鉢	最花	無文帯、沈線、刺突、LR(縦)	

図	No	出土位置	層位	種類	器種	時期	文様	備考
62	2	DSI3	1	縄文土器	深鉢	上層 e ~ 榎林	RL(縦)、沈線	
62	3	DSI3	1	縄文土器	深鉢	上層 e ~ 榎林	RL(縦)、沈線	
65	2	DSK9	確認面	縄文土器	深鉢	中期後半	無文(条痕)	
65	3	DSK10	1	縄文土器	深鉢	中期後半	LR(縦)	
65	4	DSK11	2	縄文土器	深鉢	上層 d・e	貼付、RL(斜)	
65	5	DSK11	1	縄文土器	深鉢	中期	RL(横)	
65	6	DSK12	1・3	縄文土器	深鉢	上層 d・e	口唇肥厚、LR(縦)	
65	7	DSK16	1	縄文土器	深鉢	中・後期	無文	
65	8	DSK17	1	縄文土器	深鉢	中期後半	LR付加条(DSI2、61-6と同一個体)	
65	9	DSK19	確認面	縄文土器	壺	十腰内	沈線(平行状・楕円状)、隆帯	
65	10	DSK19	確認面	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線、貼付	
65	11	DSK19	確認面	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線	
65	12	DSK19	確認面	縄文土器	鉢	十腰内	沈線	
65	13	DSK19	確認面	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線	
65	14	DSK20	1	縄文土器	深鉢	中・後期	LR(縦)	
65	15	DSK21	2	縄文土器	深鉢	中期後半	LR(縦)、沈線	
67	1	DSR1	-	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・入組状)、底面にも沈線	
67	2	DSR1	確認面	縄文土器	深鉢		無文	
69	1	DSN1	底面	縄文土器	深鉢	円筒下層b2	L単絡3、隆帯(RLR押)、L単絡1	
69	2	DSN1	底面	縄文土器	深鉢	円筒下層b2	L単絡6A、LR押、単絡1	
69	3	DSN1	底面	縄文土器	深鉢	円筒下層b2	L単絡6A、隆帯(単絡1)、単絡1	
69	4	DSN1	確認面	縄文土器	深鉢	円筒下層b2	L単絡6A、単絡1	
69	5	DSN1	底面	縄文土器	深鉢	円筒下層b2	R単絡5、R単絡1	
69	6	DSN1	底面	縄文土器	深鉢	円筒下層b2	R単絡6A	
72	1	DSX1	2	縄文土器	深鉢	十腰内	無文	
72	2	DSX1	1	縄文土器	深鉢	十腰内	無文	
72	3	DSX1	1	縄文土器	深鉢	中・後期	LR(横)	炭化物付着
72	4	DSX1	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(入組状)	
72	5	DSX1	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線	
72	6	DSX1	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(同心円状)	
72	7	DSX1	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線	
72	8	DSX1	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線	
72	9	DSX1	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(鋸歯状)	
72	10	DSX1	1	縄文土器	壺	十腰内	沈線、竹管状刺突	
73	18	DSX2	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	無文	
73	19	DSX2	底面	縄文土器	深鉢	十腰内	貼付、刺突、沈線	赤色顔料塗布
73	20	DSX2	堆積土	縄文土器	深鉢	十腰内	無文	
73	21	DSX2	堆積土	縄文土器	鉢	十腰内	沈線	
77	1	DSD2	1	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線、LR?	
77	2	DSD2	1	縄文土器	深鉢	後期	沈線	
84	9	谷 FP- 186	9	弥生土器	口縁部	中期末	RL縄文、口唇部刺突。補修孔あり	口縁内面にスス付着、P-302
84	10	谷 FP- 185	10	弥生土器	胴部	後期初頭	RL縄文、沈線、刺突列	P-282
84	11	谷 FO- 185	9	弥生土器	胴部	後期初頭	RL縄文、沈線、刺突列	P-137
84	12	谷 FP- 186	9	弥生土器	胴部	後期初頭	RL縄文、沈線	P-159
84	13	谷 FN-183	9	弥生土器	胴部	後期初頭	RL縄文、沈線。文様帯中は異条のLを使用、胴部下半と原体異なる。	P-263
84	14	谷 FP- 185	9	弥生土器	胴部	後期初頭	RL縄文	P-176
84	15	谷 FO-185・FN184	15	縄文土器	深鉢	円筒下層d1	L押、結束第一種	P-2829,3563
84	16	谷 FN-184・FO-185・FN-183	14b	縄文土器	深鉢	円筒下層	L単絡1	P-3463,2930,2931,2935,3593,2929,3837,3703
84	17	谷 FM-183	14	縄文土器	深鉢	円筒上層a	貼付、RL押	P-3622
84	18	谷 FN-184	14b	縄文土器	深鉢	円筒上層d	貼付、LR(横)	P-3328
84	19	谷 FO- 186	12・13	縄文土器	深鉢	円筒上層e	貼付、RL押、LR(横)、沈線	P-730,744,749
84	20	谷 FN-184・FO-186・FN-185・FM-184		縄文土器	深鉢	円筒上層d・e		P-1989,728,668,202,747
84	21	谷 FO- 185	12	縄文土器	深鉢	円筒上層e	口唇縄文押、RL?沈線	摩耗顕著、P-1380,1381
84	22	谷 FP- 186	15	縄文土器	深鉢	円筒上層e	RL(横)、沈線	P-983
84	23	谷 FN- 183	13	縄文土器	深鉢	円筒上層e	口唇肥厚、RL(縦)、沈線	P-2803

近野遺跡

図	No	出土位置	層位	種類	器種	時期	文様	備考
84	24	谷 FN-184	14b	縄文土器	深鉢	円筒上層e	貼付、LR押、LR(縦)、沈線	P-3414
85	25	谷 FN-183・FN-184	14b	縄文土器	深鉢	円筒上層e	突起部貼付、口唇上面刻み、RL	P-3458,3460,3351,3513,3564,3552,3386,3345
85	26	谷 FM-183	12	縄文土器	深鉢	晩期?	LR(斜)	P-1436
85	27	谷 FN-183	14・15	縄文土器	深鉢	榎林	凹状沈線	P-2737,3207
85	28	谷 FN-184・FO-185	14b・15	縄文土器	深鉢	榎林	単絡1、沈線	P-3393,2727,3034,3045
85	29	谷 FO-185	13	縄文土器	深鉢	最花	折返口縁、RL(横)、沈線	P-2367
85	30	谷 FN-184	14	縄文土器	深鉢	最花	無文帯、刺突、LRL(横)	P-2512
85	31	谷 FM-183	12	縄文土器	深鉢	最花	無文帯、刺突	P-1224
85	32	谷 FM-183	14	縄文土器	深鉢	最花	無文帯、刺突、RL(横)	P-2956
85	33	谷 FN-183	14b	縄文土器	深鉢	最花	刺突、RL(縦)、沈線	P-3273
85	34	谷 FN-184・FO-184	12・13・14b・15	縄文土器	深鉢	大木10	RL(横)、沈線	P-2689,2408,2850,2852,2854,2878,3239
85	35	谷 FN-184	12~15	縄文土器	深鉢	大木10	沈線、充填縄文	P-1640,2044,1784,2657,2313,2101,2401,2455,2776,3582,2798,3313,3433,3320,3333,3404,3406,3405,3312,2996,2872,2999
85	36	谷 FN-184	12・13	縄文土器	深鉢	大木10	無文帯、沈線、RL(縦)	P-1647,1772
85	37	谷 FO-185・FN-184	13・14・15	縄文土器	深鉢	中・後期	RL(斜)	P-2562,3312,2993
86	38	谷	14	縄文土器	深鉢	中期後半	折返口縁、LR	P-3169
86	39	谷	12・13・14	縄文土器	深鉢	中・後期	RL(縦)	P-3007,3008,3006
86	40	谷 FO-185	14	縄文土器	深鉢	十腰内	LR(縦)、沈線(力字状・縦位)	P-2363
86	41	谷 FN-184	12	縄文土器	深鉢	最花	刺突、RL(横・斜)	P-1709
86	42	谷 FM-183	15	縄文土器	深鉢	中・後期	LR(横)	P-3441
86	43	谷 FN-184	12	縄文土器	深鉢	上層d・e	口唇肥厚、LR押、LR(横)	P-908
86	44	谷 FN-183	12・15	縄文土器	深鉢	中期後半	折返口縁、L(横)	P-2232,3062,3111
86	45	谷 FN-184	13	縄文土器	深鉢	中・後期	RL(横)	P-2653
86	46	谷 FN-184	14	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・連結)	P-2690,2817,2860
86	47	谷 FN-184	12・13	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・連結)	P-1960,2104,2180
86	48	谷 FN-184・FM-183	14	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・連結)	P-2696,3677
86	49	谷 FN-185	14	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・連結)	P-2564
86	50	谷 FN-185	12	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・連結)	P-1985
86	51	谷	14	縄文土器	鉢?	十腰内	沈線	P-3225
86	52	谷	10・13	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線、格子状沈線	摩耗顕著、P-9734
86	53	谷 FN-183	12	縄文土器	深鉢	後期	LR(横)、沈線	P-1892
86	54	谷 FM-183	12	縄文土器	深鉢	十腰内?	LR(横)、沈線、刺突	P-1872
86	55	谷 FM-183	15	縄文土器	深鉢	十腰内?	沈線、刺突、RL(縦)	P-1872
86	56	谷 FN-183	14	縄文土器	深鉢	十腰内・	沈線、LR	内面炭化物顕著、P-2899
86	57	谷 FN-183	14	縄文土器	深鉢	十腰内・	沈線、RL充填	P-2900
86	58	谷 FN-184	10	縄文土器	深鉢	?	条痕	P-1096
86	59	谷 FM-183	12	縄文土器	深鉢	?	沈線(鋸歯状)、LR(横)	P-1413
87	60	谷 FN-183・FM-183	10・12	縄文土器	深鉢	後・晩期	LR	P-1248,946,1424
87	61	谷 FO-185・FN-184	12	縄文土器	深鉢	後・晩期	L R	P-2329,3767,1458
87	62	谷 FN-184・FN-183	9・10・12	縄文土器	深鉢	後・晩期	LR	P-209,251,652,1145,898,864,908
87	63	谷 FN-185	14	縄文土器	深鉢	大洞B	沈線、LR	P-2549
87	64	谷 FN-184	14	弥生?	深鉢	弥生?	無文帯、R(縦)	P-2634
87	65	谷	14	縄文土器	深鉢	晩期?	無文帯、LR(横、斜)	P-3131
87	66	谷 FN-183・FO-185・FO-184	9・10・12	縄文土器	鉢	大洞A	平行沈線	P-102,3714,773,774,775
87	67	谷 FN-184	10・14	縄文土器	深鉢	大洞B	入組文	P-877,2406
95	1	HL-225		縄文土器	深鉢	円筒下層b	R短絡1、隆帯、(口唇部・隆帯上の押圧はRLRではない可能性有り)	摩耗顕著
95	2	HN-225		縄文土器	深鉢	円筒下層	L単絡1	

図	No	出土位置	層位	種類	器種	時期	文様	備考
95	3	HN-225		縄文土器	深鉢	円筒下層	L単絡1	
95	4	HN-226		縄文土器	深鉢	円筒下層b	R単絡6A、隆帯(縄文押)、摩耗	
95	5	HF-226		縄文土器	深鉢	円筒下層b	R単絡5、隆帯(円形刺突)	
95	6	-	-	縄文土器	深鉢	円筒下層b	R単絡6	
95	7	HN-225		縄文土器	深鉢	円筒下層b	縄文押、絡糸体回転	
95	8	GK-207		縄文土器	深鉢	円筒上層d	貼付	
95	9	I A-175		縄文土器	深鉢	大木10	沈線、RL(縦)充填	
95	10	FS-181		縄文土器	深鉢	大木10	LR(縦)、沈線	
95	11	HC-219	カクラン	縄文土器	鉢	十腰内	沈線(平行状・入組状)	
95	12	HA-218		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・カギ状)	
95	13	HM-227		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(楕円状)	
95	14	HN-227		縄文土器	深鉢	円筒上層e	沈線	
95	15	H I-223		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線、竹管状刺突	
95	16	HC-249	カクラン	縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状・カギ状)	
95	17	DSI1(平安時代の住居跡)	掘方堆積土	縄文土器	壺	十腰内	沈線、円形貼付	
95	18	FQ-191		縄文土器	深鉢		LL(横)、補修孔	
95	19	HI-222		縄文土器	深鉢	十腰内	沈線(平行状)	
95	20	DSI1(平安時代の住居跡)	掘方堆積土	縄文土器	鉢	大洞A・A'	工字文	
95	21	DSI1(平安時代の住居跡)	掘方堆積土	縄文土器	鉢	大洞A'	変形工字文	
95	22	DSI1(平安時代の住居跡)	掘方堆積土	縄文土器	鉢	弥生?	RL(斜)、変形工字文	

C区土師器・須恵器観察表

図	No	位置	層位	種類	器種	外面調整	内面調整	備考
14	1	CSI2	堆積土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
14	2	CSI2	堆積土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
14	3	CSI2	堆積土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
14	4	CSI2	堆積土	土師器	皿	ロクロ	ロクロ(ごく一部に指紋)	
14	5	CSI2	1	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデケズリ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
15	6	CSI2外周溝	3	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
15	7	CSI2外周溝	1	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデケズリ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
15	8	CSI2外周溝内土坑	2・3	土師器	甕	(口縁・胴上)ロクロ、(胴下)ナデケズリ、ケズリ	(口縁・胴上)ロクロ、(胴下)ナデ	
15	9	CSI2外周溝	2	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	
15	10	CSI2外周溝	1	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	
15	11	CSI2外周溝	2	須恵器	長頸壺	ロクロ	ロクロ	
15	12	CSI2外周溝	3	須恵器	壺	ロクロ ケズリ	ロクロ	
15	13	CSI2外周溝	2	須恵器	大甕	平行叩き	当て具痕	
17	1	CSI3外周溝	堆積土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
17	2	CSI3外周溝	堆積土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
17	3	CSI3外周溝	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
17	4	CSI3外周溝	2	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	
17	5	CSI3外周溝	1	土師器	小型甕	ロクロ	ロクロ	
17	6	CSI3外周溝	1・2	土師器	甕	ロクロ、(胴下)ナデケズリ	ロクロ	
17	7	CSI3外周溝	1	土師器	甕	(口縁・胴上)ロクロ、(胴下)ナデケズリ	ロクロ	
17	8	CSI3外周溝	1	土師器	甕	ロクロ(粘土付着)	ロクロ	
17	9	CSI3外周溝	2	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデケズリ	ナデ	
17	10	CSI3外周溝	2	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデケズリ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
18	11	CSI3外周溝	1	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデケズリ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
18	12	CSI3	2	須恵器	大甕	平行タタキb	ナデ、オサエ	
18	13	CSI3	2	須恵器	大甕	平行タタキa	オサエ	
20	1	CSI5	堆積土	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	
20	2	CSI5	堆積土	土師器	甕	(口縁・胴上)ロクロ、(胴下)ナデケズリ	ロクロ	
20	3	CSI5	1	土師器	甕	ロクロ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
20	4	CSI5	堆積土	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴)ユビアト、ナデケズリ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
20	5	CSI5外周溝	1・5	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
20	6	CSI5外周溝	2	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
20	7	CSI5外周溝	2・3	土師器	甕	ケズリ	ヨコナデ	
20	8	CSI5外周溝	3	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
21	9	CSI5外周溝	1	土師器	甕	ケズリ、粘土付着	ナデ	
21	10	CSI5外周溝	1	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	火禱
23	1	CSI7	床直	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	P-1
23	2	CSI7カマド	4	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
23	3	CSI7カマド袖上		土師器	坏	ロクロ(全体摩耗)	ロクロ(全体摩耗)	
23	4	CSI7	堆積土	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
23	5	CSI7	4	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
23	6	CSI7	2	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
23	7	CSI7	3(焼土)	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
23	8	CSI7	3	須恵器	壺	ケズリ	ロクロ	
23	9	CSI7	1	須恵器	甕	平行タタキb	オサエ	
23	10	CSI7	4	製塩土器				
23	11	CSI7	4	製塩土器				
23	12	CSI7	3	製塩土器				
25	1	CSI8	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
25	2	CSI8外周溝	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
25	3	CSI8外周溝	1	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
25	4	CSI8外周溝	1	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
25	5	CSI8	1	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
25	6	CSI8外周溝	1	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
25	7	CSI8外周溝	1	土師器	甕	ケズリ	ナデ	
25	8	CSI8	2	須恵器	壺	(口縁)ロクロ、(胴部)ロクロ	(口縁)ロクロ、(胴部)ロクロ	

図	No	位置	層位	種類	器種	外面調整	内面調整	備考
25	9	CSI8外周溝	1	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	
25	10	CSI8	2	須恵器	甕	ケズリ	ナデ	
26	1	CSI10	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	旧CSD7
26	2	CSI10	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	旧CSD7
26	3	CSI10	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	旧CSD7
26	4	CSI10	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	旧CSD7
26	5	CSI10	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	旧CSD7
26	6	CSI10	3	土師器	壺	ロクロ	ロクロ	旧CSD7
26	7	CSI10	2	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	旧CSD7
26	8	CSI10	1	須恵器	甕	平行タタキb	オサエ	旧CSD7
27	1	CSI11	1・2	土師器	坏	ロクロ	ミガキ	旧CSD8
27	2	CSI11	1	土師器	坏	ロクロ	ミガキ	旧CSD8
27	3	CSI11	2	土師器	坏	ロクロ	ミガキ	旧CSD8
27	4	CSI11	堆積土	土師器	坏	ロクロ	ミガキ	旧CSD8
27	5	CSI11	1	土師器	坏	ロクロ	ミガキ	旧CSD8
27	6	CSI11	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	旧CSV3
27	7	CSI11	1	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	ナデ	旧CSD8
27	8	CSI11	1	土師器	甕	ケズリ	ナデ	旧CSD8
29	1	CSB1		土師器	甕	ナデケズリ	ナデ	
31	1	CSK26	2	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
31	2	CSK26	2	土師器	甕	ケズリ	ナデ	内面漆?
31	3	CSK26	1	土師器	甕	ナデ		砂底
31	4	CSK26	1	須恵器	長頸壺	ロクロ	ロクロ	
31	5	CSK37	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
31	8	CSK38	堆積土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
31	9	CSK38	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
31	10	CSK38	堆積土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
31	11	CSK38	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
31	12	CSK38	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
31	13	CSK38	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
31	14	CSK38	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
32	1	CSK38	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
32	2	CSK38	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
32	3	CSK38	1	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	
32	4	CSK38	1	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
32	5	CSK38	1	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ	(口縁)ヨコナデ	
32	6	CSK38	1	土師器	甕	ケズリ	ナデ	砂底
32	7	CSK38	1	土師器	埴	ケズリ	ナデ	
34	1	CSD1	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
34	2	CSD1	1	土師器	甕	(口縁)ナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ナデ、(胴部)ナデ	
34	3	CSD1	1	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ、一部ナデ	
34	4	CSD4	1	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	
34	5	CSD4	1	須恵器	甕	平行タタキb		
34	7	CSD9	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
34	8	CSD9	堆積土	土師器	坏	ロクロ(摩滅激しい、一部剥落)	ロクロ(摩滅激しい)	
39	1	CSD11	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
39	2	CSD11	堆積土	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	内外面に黒色物質(煮こぼれ?)附着
39	3	CSD11	1	須恵器	甕	平行タタキb	オサエ	
39	4	CSD11	1	須恵器	甕	平行タタキb	オサエ	
43	1	CSX1	41・51・53	土師器	甕	ケズリ	ナデ	
43	2	CSX1	21	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	
43	4	CPIT1	1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
43	5	CPIT1	1	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
43	6	CPIT8	3	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
57	1	-	-	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
57	2	FG-268		土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
57	3	FG-254		土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
57	4	FG-255		土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
57	5	FT-250	カクラン	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	

図	No	位置	層位	種類	器種	外面調整	内面調整	備考
57	6	FG-265	-	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
57	7	FG-255		土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
57	8	FG-265	-	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
57	9	-	-	土師器	甕	ケズリ	ナデ	
57	10	FG-265	-	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	
57	11	FJ-253		須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	
57	12	FK-253		須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	
57	13	FC-248		須恵器	甕	平行タタキa		
57	14	FK-249		須恵器	甕	平行タタキa	オサエ	
57	15	FM-267		須恵器	甕	平行タタキa	オサエ	
57	16	FI-251		須恵器	甕	平行タタキa	オサエ	

D区土師器・須恵器

図	No	位置	層位	種類	器種	外面調整	内面調整	備考
74	1	DSI1	堆積土	土師器	甕	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	(口縁)ヨコナデ、(胴部)ナデ	
74	2	DSI1	貼床内	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	
74	3	DSI1 Pit1	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ	
74	4	DSI1	貼床内	須恵器	壺	平行タタキa	オサエ	
84	1	谷 FN-184・FN-183・FO-184	9	土師器	坏	ロクロ	ミガキ	内面剥落、P-407, 234,36,116,418
84	2	谷 FN-184・FM-183	9	土師器	坏	ロクロ	ミガキ	P-202,52,236,87,502
84	3	谷 FN-184	10	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	P-1028,1035
84	4	谷 FO-185	9・10・13	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	P-338,358
84	5	谷 FM-184・FM-183	9	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	P-207,216
84	6	谷 FO-185	10	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	P-336,2255
84	7	谷 FN-184	12	土師器	坏	ケズリ	ナデ	P-1642,1628,1648,1643
84	8	谷 FP-184	7	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	高台付き、P-557

C区土製品 (縄文時代)

図	No	位置	層位	種類	文様	時期・備考
6	3	CSI6	堆積土	ミニチュア土器	沈線(平行状・鋸歯状)	十腰内
6	9	CSI6	堆積土	ミニチュア土器	無文	
9	14	CSK33	1	有孔土製品		赤色顔料付着
38	3	CSK25	1・3	ミニチュア土器	沈線	十腰内
51	1	風倒木捨て場 GM-248	3	土偶		
51	2	風倒木捨て場 GM-249		ミニチュア土器	無文	深鉢
51	3	風倒木捨て場 GM-249a		ミニチュア土器	無文	深鉢
51	4	風倒木捨て場 GM-249		ミニチュア土器	無文	深鉢
51	5	風倒木捨て場 GM-249a		ミニチュア土器	無文	深鉢
51	6	風倒木捨て場 GM-248	3	ミニチュア土器		
51	7	風倒木捨て場 GL-248b		ミニチュア土器		
51	8	風倒木捨て場 GM-249c	堆積土	ミニチュア土器	無文、台付(スリット入)	深鉢
51	9	風倒木捨て場 GM-249		ミニチュア土器	沈線	深鉢
51	10	風倒木捨て場 GL-249	2	ミニチュア土器		
51	11	風倒木捨て場 GL-249	2	ミニチュア土器		
51	12	風倒木捨て場 GM-249		ミニチュア土器	無文	壺
51	13	風倒木捨て場 GM-248	3	有孔土製品		赤色顔料付着
51	14	風倒木捨て場 GL-249	2	有孔土製品		
51	15	風倒木捨て場 GL-248		円形土製品		C-2
51	16	風倒木捨て場 GM-249		鐔形土製品	無文、小破片	
51	17	風倒木捨て場 GL-248		腕輪?		
51	18	風倒木捨て場 GM-249		?		
51	19	風倒木捨て場 GM-248c		環状土製品?	沈線、竹管状刺突	
51	20	風倒木捨て場 GM-249		棒状土製品		
51	21	風倒木捨て場 GM-249a	堆積土	不明土製品	無文	
51	22	風倒木捨て場 GM-248c		有孔土製品		

図	No	位置	層位	種類	文様	時期・備考
56	1	CSI7(平安時代の住居跡)	3	土偶		P-159
56	2	FM-247		土偶		
56	3	FK-250		三角形土製品	縄文	土器片利用、周縁磨り
56	4	FI-253		ミニチュア土器		
56	5	GL-249		ミニチュア土器	無文	深鉢
56	6	FH-252		ミニチュア土器	無文	
56	7	FM-248		棒状土製品		
56	8	FI-251	表・	棒状土製品		
56	9	GM-249		焼成粘土塊		

C区土製品 (平安時代)

図	No	位置	層位	種類	備考
15	14	CSI2外周溝	2・3	土製支脚	
15	15	CSI2外周溝	2	土製支脚	
15	16	CSI2	2	羽口	P-1303
15	17	CSI2カマド1	貼床堆積土、 カマド堆積土	羽口	3個
18	14	CSI3	2	土製支脚	
18	15	CSI3外周溝	1	土製支脚	
21	11	CSI5外周溝	1	土製支脚	
23	10	CSI7	4	製塩土器	
23	11	CSI7	4	製塩土器	
23	12	CSI7	3	製塩土器	
23	13	CSI7	4	ミニチュア土器	
23	14	CSI7	1	ミニチュア土器	
23	15	CSI7	堆積土	耳栓	
32	8	CSK38	1	ミニチュア土器	
32	9	CSK38	1	製塩土器	色調2.5YR7/3淡赤褐色、重量6.6g、P-202
32	10	CSK38	1	土玉	
32	11	CSK38	1	焼成粘土塊	紐状、P-1
32	12	CSK38	1	焼成粘土塊	紐状、指頭圧痕、P-177
32	13	CSK38	1	焼成粘土塊	断面層状、P-102
32	14	CSK38	1	焼成粘土塊	指頭圧痕、
32	15	CSK38	1	焼成粘土塊	指頭圧痕
32	16	CSK38	1	焼成粘土塊	
32	17	CSK38	1	焼成粘土塊	繊維状圧痕、P-105
32	18	CSK38	1	焼成粘土塊	断面層状、P-177
32	19	CSK38	1	焼成粘土塊	初圧痕、断面層状、P-95
32	20	CSK38	1	焼成粘土塊	葉脈圧痕、P-256
32	21	CSK38	1	焼成粘土塊	繊維状圧痕、P-15
34	9	CSD1	1	羽口	
43	3	CSX4Pit1	堆積土	不明	
43	7	CPIT35	堆積土	ミニチュア土器	
57	17	FH-253		土製支脚	
57	18	FF-251		ミニチュア土器	
57	19	FF-253	-	ミニチュア土器	
57	20	FI-247		ミニチュア土器	

D区土製品 (縄文時代)

図	No	位置	層位	種類	備考
73	16	DSX1	堆積土	ミニチュア土器	
73	17	DSX1	1	耳栓	P-13
92	1	谷 FN-183	14	三角形土製品	P-2735
92	2	谷 FN-184	13	ミニチュア土器	P-2762、有脚
92	3	谷	14	ミニチュア土器	沈線、P-3230
92	4	谷 FO-184	9	ミニチュア土器	P-379
92	5	谷 FP-185	10	ミニチュア土器	P-628
92	6	谷 FO-186	12	ミニチュア土器	P-1158
92	7	谷 FN-184	12	ミニチュア土器	P-1710

C区剥片石器

図	No	位置	層位	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
6	7	CSI6	1	微小剥離痕のある剥片	珩質頁岩	63.0	23.0	13.0	8.3	
6	8	CSI6	2	両極打撃痕のある剥片	珩質頁岩	33.2	11.8	9.5	3.3	
8	4	CSK5	1	二次調整のある剥片	珩質頁岩	56.0	26.0	16.0	20.0	
9	2	CSK16	確認面	石筥	珩質頁岩	53.2	23.1	14.2	20.3	類。
9	12	CSK33	1	石鏃	珩質頁岩	38.0	13.4	6.2	2.6	有茎 b類、基部欠損。
9	13	CSK33	1	石鏃	珩質頁岩	42.2	13.2	4.7	2.3	無茎 c類。
34	6	CSD4	堆積土	大石平型石筥	珩質頁岩	33.9	20.0	10.2	4.4	
38	2	CSK25	3	石鏃	珩質頁岩	44.6	11.0	6.8	2.2	類。
50	1	風倒木捨て場 GM-249c	堆積土	大石平型石筥	珩質頁岩	27.9	21.2	8.9	3.8	
50	2	風倒木捨て場 GL-249	堆積土	大石平型石筥	珩質頁岩	25.0	20.0	7.0	2.5	
50	3	風倒木捨て場 GM-248	カクラン	二次調整のある剥片	珩質頁岩	42.0	20.0	3.0	4.0	微細剥離痕あり。
50	4	風倒木捨て場 GL-249	堆積土	石槍未製品	珩質頁岩	54.1	28.4	10.2	13.4	
50	5	風倒木捨て場 GL-249	堆積土	削器	珩質頁岩	78.2	35.6	11.5	28.6	
53	1	CM-247		石鏃	玉髓質珩質頁岩	11.5	13.5	3.0	0.1	a類。
53	2	CSI7	3	石鏃	珩質頁岩	21.0	13.2	4.0	0.6	有茎 a類。平安時代の住居跡出土。
53	3	CSI9	2	石鏃	鉄石英	28.1	14.5	6.7	1.8	有茎 a類。
53	4	CSI2外周溝	3	石鏃	珩質頁岩	35.0	12.3	4.9	1.5	有茎 a類。アスファルト付着。平安時代の住居跡出土。
53	5	FI-267		石鏃	珩質頁岩	36.0	12.5	5.7	2.2	有茎 b類。先端部欠損。
53	6	FI-267		石鏃	珩質頁岩	51.1	16.3	4.4	3.4	無茎 c類。先端部欠損。
53	7	CSI7	2	石鏃未製品	珩質頁岩	40.2	25.8	13.1	11.7	石槍の未製品の可能性もあり。平安時代の住居跡出土。
53	8	FM-248		石鏃未製品	珩質頁岩	38.8	16.5	9.3	4.6	
53	9	CSK28	確認面	石槍	珩質頁岩	80.9	42.2	17.6	59.6	
53	10	CSI5外周溝	1	石槍未製品	珩質頁岩	62.1	33.7	14.3	24.9	平安時代の住居跡出土。
53	11	FI-259		石匙	珩質頁岩	82.8	29.3	12.8	22.5	光沢痕あり。 類。
53	12	FI-252		石鏃	珩質頁岩	61.3	27.2	13.8	9.1	類。
53	13	GL-249b		石鏃	珩質頁岩	29.6	10.4	6.4	2.0	類。
53	14	FH-267		大石平型石筥	珩質頁岩	23.6	15.5	9.8	2.7	
53	15	GM-248c		大石平型石筥	珩質頁岩	22.0	15.0	8.0	1.6	
53	16	CSI7	4	大石平型石筥	珩質頁岩	28.0	17.0	8.5	3.1	平安時代の住居跡出土。
53	17	GM-249b		二次調整のある剥片	珩質頁岩	34.5	15.5	9.9	3.8	搔器もしくは石筥の未製品。
53	18	GM-249c		削器	珩質頁岩	49.5	42.1	20.2	49.1	
53	19	GM-248c		削器	珩質頁岩	68.3	38.4	16.5	51.8	縁辺摩耗顕著。
53	20	FK-251		削器	珩質頁岩	61.2	24.5	9.7	10.8	微細剥離あり。
53	21	CSD6 GM-249b	1	搔器	珩質頁岩	51.9	36.9	9.4	19.5	
53	22	GM-248c		削器	珩質頁岩	53.8	48.6	12.9	28.3	
53	23	FK-251		削器	珩質頁岩	31.7	57.8	15.7	20.1	
54	24	FF-246		削器	珩質頁岩	78.0	50.0	13.0	57.3	
54	25	GL-249		二次調整のある剥片	珩質頁岩	39.7	11.2	8.7	3.1	
54	26	GL-249	-	両極打撃痕のある剥片	珩質頁岩	24.0	20.0	8.0	3.0	
54	27	GM-248d		両極打撃痕のある剥片	珩質頁岩	24.0	23.0	10.0	4.1	
54	28	FK-249		二次調整のある剥片	黒曜石	22.0	13.0	5.0	1.3	
54	29	GM-249		石核	珩質頁岩	34.0	41.2	29.3	51.5	
54	30	GM-248c		石核	珩質頁岩	34.1	38.0	32.4	48.9	

D区剥片石器

図	No	位置	層位	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
62	10	DSI3	2	微小剥離痕のある剥片	珩質頁岩	94.0	56.0	13.0	88.3	
65	1	DSK2	堆積土	石鏃	珩質頁岩	28.5	11.8	5.1	1.2	有茎 b類。アスファルト付着。
69	7	DSN1	底面	石鏃	珩質頁岩	38.2	16.9	5.2	2.6	無茎 a類。
69	8	DSN1	2	石鏃	珩質頁岩	31.9	18.5	6.0	3.3	無茎 a類。先端欠損。被熱あり。
69	9	DSN1	2	削器	珩質頁岩	53.1	23.2	11.2	8.5	
73	11	DSX1	1	微小剥離痕のある剥片	珩質頁岩	58.0	39.0	8.0	12.6	
73	12	DSX1	1	微小剥離痕のある剥片	珩質頁岩	48.0	30.0	9.0	11.9	
73	13	DSX1	1	二次調整のある剥片	玉髓質珩質頁岩	30.0	16.0	8.0	2.1	
73	14	DSX1	1	削器	珩質頁岩	63.9	30.2	11.3	22.2	
77	3	DSD2	1	石篋	珩質頁岩	83.3	44.4	13.2	47.1	類。
88	1	谷 FP-185	15	石鏃	珩質頁岩	23.9	14.9	4.6	1.0	無茎 a類。
88	2	谷 FN-183	14	石鏃	珩質頁岩	27.6	14.7	4.5	1.2	有茎 b類。基部欠損。
88	3	谷 FM-183	12	石鏃	珩質頁岩	38.5	19.4	12.4	6.1	有茎 b類。
88	4	谷 FN-184	13	石鏃	珩質頁岩	39.4	12.8	5.4	2.5	棒状 b類。
88	5	谷 FN-184	13	石匙	珩質頁岩	74.5	20.0	9.5	12.6	縦型 類。
88	6	谷 FN-183	14	削器	珩質頁岩	31.4	32.1	9.2	7.4	
88	7	谷 FN-185	14	削器	珩質頁岩	81.9	50.2	24.2	44.7	微細剥離あり。
88	8	谷 FO-186	12	石核	珩質頁岩	53.8	56.5	42.9	137.2	
88	9	谷 FP-186	12	石核	珩質頁岩	36.9	37.6	27.9	36.5	
96	1	DSI1Pit2	堆積土	石鏃	玉髓質珩質頁岩	17.0	11.0	4.0	0.3	有茎 a類。
96	2	HM-227		石匙	珩質頁岩	49.5	60.1	11.5	24.7	横型 類。
96	3	HD-221		石匙	珩質頁岩	82.2	39.9	11.0	32.6	縦型 類。
96	4	DSI1Pit1	堆積土	石篋	珩質頁岩	78.4	41.2	18.2	48.9	類。
96	5	HN-225		石匙	珩質頁岩	62.7	34.0	10.5	9.3	縦型 類。
96	6	DSI1	1	削器	珩質頁岩	52.4	35.8	10.0	11.3	
96	7	HM-226		石匙	珩質頁岩	46.7	56.8	10.7	26.6	横型 類。微細剥離あり。
96	8	HK-225		石核	珩質頁岩	77.9	73.1	29.5	142.9	

C区礫石器

図	No	位置	層位	器種	石材	備考	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
8	5	CSK5	1	凹み石	デイスайト	2面使用	94.0	67.0	52.0	334.0
18	16	CSI3外周溝	1	砥石	凝灰岩	破損面使用	90.0	125.0	64.0	566.4
37	6	CSK37	1	敲き石	安山岩	2面使用、磨り面あり。	126.0	80.0	66.0	674.7
37	7	CSK37	1	石皿・台石	凝灰岩	1面平坦、凹痕あり。	145.0	156.0	60.0	1733.2
43	8	CPIT59	1	石皿・台石	凝灰岩	1面平滑	199.0	212.0	37.0	2010.5
50	6	風倒木捨て場	1	凹み石	凝灰岩	石皿片転用。2面使用。	68.0	83.0	19.0	71.8
54	31	GL-249		磨製石斧	片岩	刃部欠損	(64.0)	(42.0)	16.0	11.4
54	32	FG-252		磨製石斧	角閃岩	基部欠損	(47.0)	(48.0)	21.0	39.1
54	33	GL-249b		磨製石斧	ヒン岩	基部欠損。端部に敲打痕。	(44.0)	48.0	30.5	24.8
54	34	CSI8	1	石皿	熔結凝灰岩	平安時代の住居跡出土。	172.0	131.0	61.0	1375.8
54	35	CSI12	1	凹み石	デイスайト	平安時代の住居跡出土。	101.0	74.0	75.0	439.8
54	36	CSI8	1	磨り石	安山岩	平安時代の住居跡出土。	105.0	92.0	53.0	731.7
54	37	CSX1	堆積土	磨り石	デイスайト	平安時代の遺構出土。	(96.0)	75.0	37.0	395.1
54	38	FJ-249		敲き石	泥岩	端部使用。	91.0	49.0	30.0	212.9
54	39	CSI7	2	敲き石	流紋岩	平安時代の住居跡出土。	100.0	41.0	38.0	226.6
55	40	CSI9、FG-265	2	凹み石	安山岩	端部に敲打痕あり。	85.0	46.0	34.0	194.1
55	41	CSI9、FF-265	1	凹み石	デイスайト	一部被熱により変色。	170.0	68.0	33.0	434.4
55	42	CPIT8	1	凹み石	安山岩	平安時代のピット出土。	150.0	70.0	50.0	547.1
55	43	CSI8	2	石錘	安山岩	平安時代の住居跡出土。	100.0	99.0	96.0	391.6
55	44	CSI8外周溝	堆積土	石錘	凝灰岩	平安時代の住居跡出土。	113.0	92.0	22.0	164.3
55	45	CSK14	1	石錘	安山岩		92.0	83.0	31.0	281.7
55	46	FJ-250		石錘	デイスайト	敲打痕あり。	91.0	92.0	31.0	331.9
55	47	FM-250		石錘	流紋岩	敲打痕あり。	100.0	87.0	24.0	257.8
55	48	CSI9	堆積土	石錘	デイスайト	凹み痕あり。	123.0	96.0	32.0	448.4
55	49	CSI9、FG-265	2	石錘	安山岩	凹み痕、磨り面あり。	102.0	94.0	35.0	349.2
55	50	GL-248		石皿	凝灰岩	縁あり。	(47.0)	89.0	29.0	79.8

D区礫石器

図	No	位置	層位	器種	石材	備考	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
73	15	DSX1	堆積土	石皿	軽石凝灰岩	縁あり。	91.0	63.0	38.0	49.0
88	10	谷 FN-183	14c	磨り石	流紋岩	2面使用。	115.0	95.0	53.0	804.5
88	11	谷 FO-185	12	磨り石	ヒン岩	2面使用。	145.0	83.0	59.0	1197.1
88	12	谷 FN-184	14b	磨り石	安山岩	器面研磨。断面三角状。	80.0	77.0	76.0	516.6
88	13	谷 FO-184	12	磨り石	安山岩	光沢あり。	131.0	76.0	62.0	922.6
89	14	谷 FO-185	13	磨り石	ヒン岩	1面、2側面使用。	136.0	76.0	52.0	785.6
89	15	谷 FN-184	12	磨り石	凝灰岩	敲打成形、一部研磨。石冠状。	108.0	111.0	95.0	941.7
89	16	谷 FN-183	14	磨り石	ヒン岩	1面、2側面、両端部使用。	120.0	62.0	62.0	1058.1
89	17	谷 FO-185	12	磨り石	安山岩	側縁全面使用。	105.0	70.0	50.0	584.0
89	18	谷 FN-184	14b	磨り石	デイスайト	1面使用。	107.0	116.0	50.0	649.5
89	19	谷	13	磨り石	安山岩	1側面剥離加工、磨り面あり。	142.0	80.0	37.0	522.2
89	20	谷 FO-185	13	磨り石	ヒン岩	三角柱状。	236.0	95.0	90.0	1889.9
90	21	谷 FO-185	12	敲き石	凝灰岩	端部、側縁に剥離痕あり。	140.0	68.0	40.0	622.8
90	22	谷 FP-187	2	敲き石	デイスайト	端部使用。	60.0	56.0	38.0	178.7
90	23	谷 FN-184	14	敲き石	凝灰岩	2面使用。	105.0	67.0	46.0	494.5
90	24	谷 FN-183	14c	敲き石	デイスайト	2面使用。	97.0	89.0	53.0	544.0
90	25	谷 FN-184	14b	凹み石	安山岩	2面使用。	94.0	80.0	34.0	288.7
90	26	谷 FN-184	14b	凹み石	凝灰岩	2面使用、1側面磨り面あり。	95.0	74.0	30.0	249.1
90	27	谷	13	凹み石	安山岩		130.0	90.0	45.0	580.5
90	28	谷 FN-184	14	凹み石	凝灰岩	石皿転用。	(105.0)	(103.0)	76.0	830.8
90	29	谷 FN-184	14	凹み石	凝灰岩	石皿転用。	207.0	125.0	60.0	1758.3
90	30	谷 FN-184	12	石錘	デイスайト	黒色物付着。	126.0	96.0	33.0	482.7
90	31	谷	15	石錘	凝灰岩	敲打痕あり。	(120.0)	124.0	23.0	456.5
91	32	谷 FO-185	13	石錘	凝灰岩	黒色物付着。	135.0	97.0	35.0	514.7
91	33	谷 FN-184	15	加工礫	ハンレイ岩	縁辺に挟り。	144.0	135.0	25.0	648.5

図	No	位置	層位	器種	石材	備考	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
91	34	谷 FN-184	14b	加工礫	凝灰岩	端部片面に剥離加工。	103.0	71.0	32.0	309.9
91	35	谷 FM-183	15	加工礫	ヒン岩	磨製石斧使用。縁辺に剥離加工。	102.0	52.0	24.0	110.8
91	36	谷 FN-184	14b	石皿	凝灰岩	2面使用。	133.0	178.0	39.0	1310.8
91	37	谷 FM-184	12	石皿	安山岩	2面使用。	165.0	137.0	51.0	1792.5
91	38	谷 FM-183	12	石皿	安山岩	2面使用、1面に敲打痕あり。	194.0	180.0	50.0	2528.4

C区石製品

図	No	位置	層位	器種	石材	備考	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
56	11	CSX 1	37	石棒	デイサイト		(105.0)	(90.0)	(63.0)	638.8
56	12	FJ-252		加工品	軽石	搦り鉢状の凹み、器面研磨。	92.0	76.0	46.0	66.9

D区石製品

図	No	位置	層位	器種	石材	備考	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
92	1	谷 FO-184	13	石棒未製品	凝灰岩	敲打成形。	(117.0)	111.0	102.0	1859.5
92	2	谷 FN-184	14	未製品	凝灰岩	未貫通孔あり。	40.0	25.0	13.0	8.9

D区谷木製品

図	番号	位置	層位	種類	樹種	木取り	備考	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)
93	1	FQ-186 南壁面	12	杭	トチノキ	芯持丸木	W-336 樹種同定	55.4	9.5	8.5
93	2	FO-184	12	加工材		芯持丸木	W-210	27.2	2.3	1.6
93	3	FO-184	15	把手付鉢	クリ	横木	W-346	口径 45×35	残存高 11.0	3.0
94	1	FP-186	10	用途不明	トチノキ	芯持丸木	W-186 樹種同定	51.2	4.2	3.8
94	2	FO-184	7	杭(板材)	アスナロ	証目	W-19 樹種同定	39.5	3.3	1.7
94	3	FO-184	7	杭(板材)	アスナロ	証目	W-20b 樹種同定	36.1	4.5	1.9
94	4	FO-184	7	杭(板材)	アスナロ	証目	W-20a 樹種同定	37.0	5.0	1.5
94	5	FO-184	7	用途不明	トネリコ属	芯持丸木	W-73 樹種同定	21.9	4.2	3.7
94	6	FO-184	12	機織具	アサダ	板目	W-122 樹種同定	27.8	3.9	1.0

引用・参考文献

- 草間俊一・金子浩昌ほか 1971 『貝鳥貝塚』 花泉町教育委員会
- 工藤 清泰 2000 「浪岡町の古代遺跡」『浪岡町史 第一巻』 浪岡町
- 小林達雄編 1988 『縄文人の道具 古代史復元3』 講談社
- 小島 俊彰 1995 「三角形土製品」『縄文文化の研究』9 雄山閣
- 葛西 勳 2002 『再葬土器棺墓の研究 縄文時代の洗骨葬』 「再葬土器棺墓の研究」刊行会
- 齋藤 淳 2001 「津軽海峡領域における古代土器の変遷について」『研究紀要』第4号 青森大学考古学研究所
- 佐々木由香 2000 「縄文時代の「水場遺構」に関する基礎的研究」『古代』第108号 早稲田大学考古学会
- 中島 栄一 1995 「石冠・土冠」『縄文文化の研究』9 雄山閣
- 能登 健 1983 「信仰儀礼に関わる遺物(1)」『前神道期 神道考古学講座1』 雄山閣
- 春成 秀爾 1996 「性象徴の考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告66』 国立歴史民俗博物館
- 三浦 圭介 1995 「古代」『新編弘前市史 資料編 考古編』 弘前市
- 八木 光則 2007 「蝦夷と「律令」」『九世紀の蝦夷社会』奥羽史研究叢書9 高志書院
- 渡辺 誠 1975 『縄文時代の植物食』 雄山閣出版
- 青森県 2002 『青森県史 別編 三内丸山遺跡』
- 青森県教育委員会 1974 『近野遺跡(1)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第12集
- 青森県教育委員会 1975 『近野遺跡発掘調査報告書()』青森県埋蔵文化財調査報告書第22集
- 青森県教育委員会 1977 『近野遺跡発掘調査報告書()・三内丸山()遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第32集
- 青森県教育委員会 1978 『三内澤部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
- 青森県教育委員会 1979 『近野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第47集
- 青森県教育委員会 1997 『近野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第216集
- 青森県教育委員会 2003 『近野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第315集
- 青森県教育委員会 2004 『近野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第370集
- 青森県教育委員会 2004 『岩渡小谷(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第371集
- 青森県教育委員会 2005 『近野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第394集
- 青森県教育委員会 2006 『近野遺跡』青森市埋蔵文化財調査報告書第418集
- 青森市教育委員会 2003 『近野遺跡』青森市埋蔵文化財調査報告書第68集

第6章 06年度の試掘調査

第1節 調査概要

第1項 調査に至るまでの経過

県道里見丸山線は青森計画道路事業として平成3年から整備が進められたが、平成6年に三内丸山遺跡の発掘調査が進むにつれて遺跡区間の工事が中止となった。その後、県が遺跡の保存を決定したことから、平成8年3月に遺跡を迂回するルートに計画変更することになった。

平成18年2月に県土整備部都市計画課から、青森市安田地区に計画している県道里見丸山線道路改築事業の予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、県教育庁文化財保護課に照会があった。この予定地は国特別史跡三内丸山遺跡に隣接し一部近野遺跡も含まれているため、3月下旬に一部文化保護課が試掘調査し、18年度に残りの部分の試掘調査を実施する要望が出された。

これを受けて同年3月に、県土整備部都市計画課・文化財保護課・当センターで調査についての協議がなされ、センター杭40(B区)以南部分については平成18年5月から当センターで試掘調査を行ない、その結果を基に調査内容を協議するという事になった。

第2項 調査要項

1 調査目的

県道里見丸山線道路改築事業の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市近野遺跡及び近野隣接地の試掘調査を行い、文化財保護に関する協議の一助となる資料を作成する。

2 発掘調査期間

平成18年5月9日(火)から同年5月30日(火)まで

3 遺跡名及び所在地

近野遺跡(青森県遺跡番号01065)

青森市大字安田字近野256 外

4 調査対象面積

約9,500平方メートル(試掘調査面積316㎡)

5 調査委託者

青森県県土整備部都市計画課

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 白 鳥 隆 昭

次 長 三 浦 圭 介

総務 G L	櫻庭孝雄
文化財保護主幹	中嶋友文
文化財保護主査	神康夫

第3項 調査方法

調査区が住宅地のため、使用されている道路部分は試掘せず、宅地部分のみを調査範囲とした。

図97に示したとおり、道路により区切られた部分を便宜上A区からL区とし、それぞれの地区で建物基礎などがかからないように試掘用のトレンチを設定した。トレンチは4 x 4 mを基本とし、適時変更している。

標準原点は、近辺に設置された工事用原点(34.483m)からレベル移動を行い、調査区内に数カ所設置した。

遺構の確認作業は人力によって行う予定であったが、予想以上に厚い造成盛土によって調査が難航したため、重機を使用して遺物等の有無を確認しながら掘り進めることにした。掘削が地山直上まで達した時点で重機の使用を止め、人力で遺構確認の精査を行なうこととした。

実測は、簡易遣り方測量を用い、縮尺は20分の1を原則とした。土層の注記は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編2003年版)を使用した。

写真の撮影にあたっては、35mmのモノクローム・カラーリバーサルの各フィルムを併用し、カラーネガフィルムやデジタルカメラも必要に応じて使用した。

第4項 調査経過

4月27日 三内丸山市民館にて道路改築工事に伴う説明会が実施され、県土整備事務所の担当者とともに発掘調査の説明も行なった。

5月9日 発掘調査機材を運搬し周辺の整備を行い、午後から調査区の遺構確認を開始した。

また、試掘トレンチの設定、ベンチ・マークの移動も並行して行った。

5月10日 造成された盛り土は堅く厚いため、人力によって掘り下げる作業では調査期間内に終わることが困難な状況から、調査の効率を上げるため重機を用いて盛り土を除去することとした。

5月16日 設定した試掘トレンチの盛り土を0.25m³と0.45m³のバックホーで除去し、人力による確認後、再び重機による埋め戻しを行なった。

5月30日 発掘調査器材等をセンターに搬出し、予定地区の試掘調査を終了した。

(中嶋 友文)

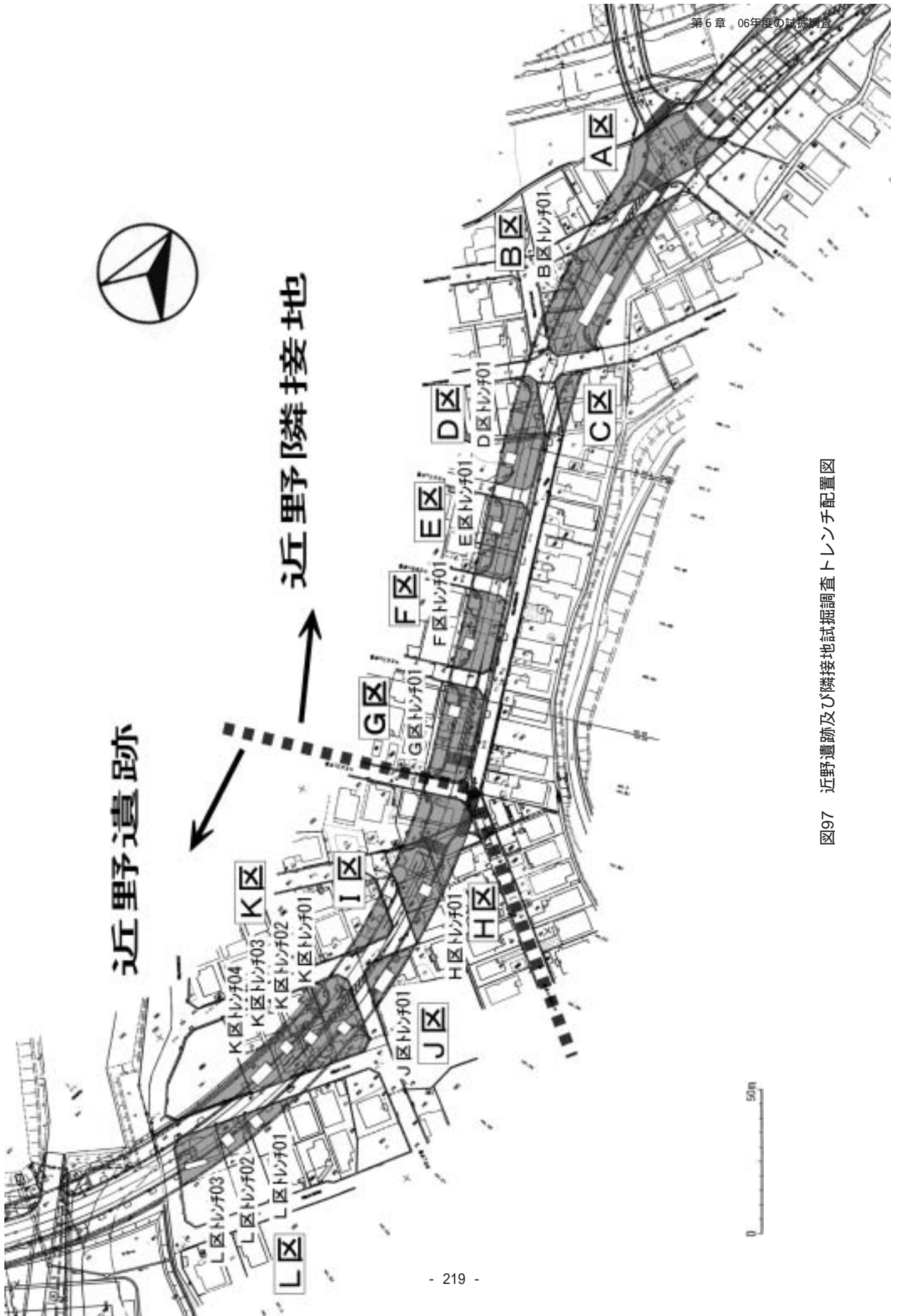


図97 近野遺跡及び隣接地試掘調査トレンチ配置図

第2節 遺跡の環境

第1項 位置と周辺の遺跡

青森市の地形は、北側に陸奥湾に面した平野部と、それを囲むように位置する東・西・南側の丘陵地帯からなっている。

近野遺跡は、市街地から南西におよそ4km離れた低位段丘上に位置している。遺跡周辺には多くの縄文時代や平安時代の遺跡が所在し、調査が行われている。(図1参照)

第2項 基本土層

図98のとおり、14カ所設定したトレンチすべてで基本土層の確認を行った。

近野遺跡部分(H～L区)は低位段丘上の北側へ傾斜する斜面地に位置しているが、近野隣接地部分(A～G区)は層厚数m以上の泥炭層からなる湿地上にあって、両地区は基盤層が全く異なっていることが判明した。したがって両地区の基本土層は、以下のとおり異なった土層として把握、記載することとした。

近野遺跡(H～L区)

- 第層 黒褐色土層(10YR2/2 厚さ10～20cm)
旧表土層耕作土。ローム粒を含む。
- 第層 暗褐色土層(10YR3/3 厚さ10～20cm)
耕作土。やや締まりがあり、ローム粒を含む。
- 第層 黄褐色土層(10YR5/8 厚さ10～20cm)
粘性・湿性があるシルト質ローム。ローム粒含む。
- 第層 褐色土層(10YR4/4 厚さ10～40cm)
粘性・湿性がある粘土質ローム。ローム粒含む。
- 第層 にぶい黄褐色土層(10YR6/4 厚さ20～60cm)
砂層、ローム粒・軽石粒含む。
- 第層 褐色土層(10YR4/4 厚さ50cm以上)
砂礫層、ローム粒・軽石粒含む。

近野隣接地(A～G区)

- 第層 黒色土層(10YR2/1 厚さ10～30cm)
旧表土層。ローム粒を含む。
- 第層 黒褐色土層(10YR3/3 厚さ500cm以上)
泥炭層。

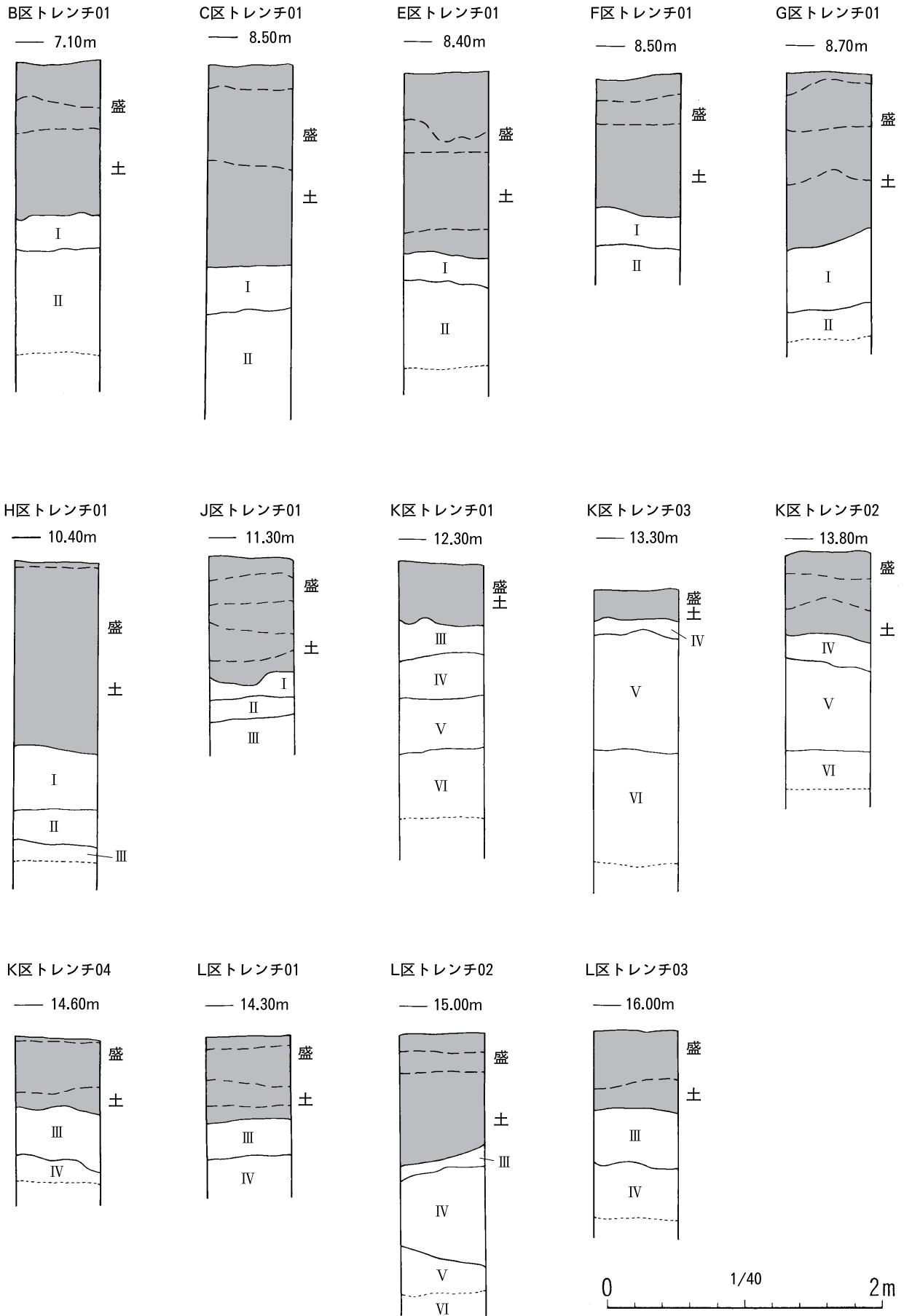


図98 近野遺跡及び隣接地土層図

第3節 検出遺構と出土遺物

第1項 検出遺構

今回の試掘調査において遺構は検出されなかった。

近野遺跡（H～L区）では住宅地に造成するために削平及び盛土がなされており、J区の一部以外は遺構確認面すら存在しない状況であった。

近野隣接地（A～G区）では、層厚数m以上の泥炭層からなる湿地を盛土によって造成していたことが判明した。ここでは遺構確認面に到達することができず、盛土層以外には遺物が出土しなかったことと湧水があってヨシ類の繁茂した痕跡を確認したことから、住居跡等の遺構が存在する可能性は極めて低いものと判断された。

第2項 出土遺物

1 縄文土器

今回の試掘調査で出土した縄文土器は段ボール箱で0.5箱、総破片点数は128点である。F区トレンチ01から3点、G区トレンチ01から43点、K区トレンチ04から1点、L区トレンチ01から81点の出土であった。層位的な出土は見られず、いずれも造成による盛土部分からの出土である。時期は縄文時代前期末から後期初頭までであるが、中期後半期のものが主体をなすようである。

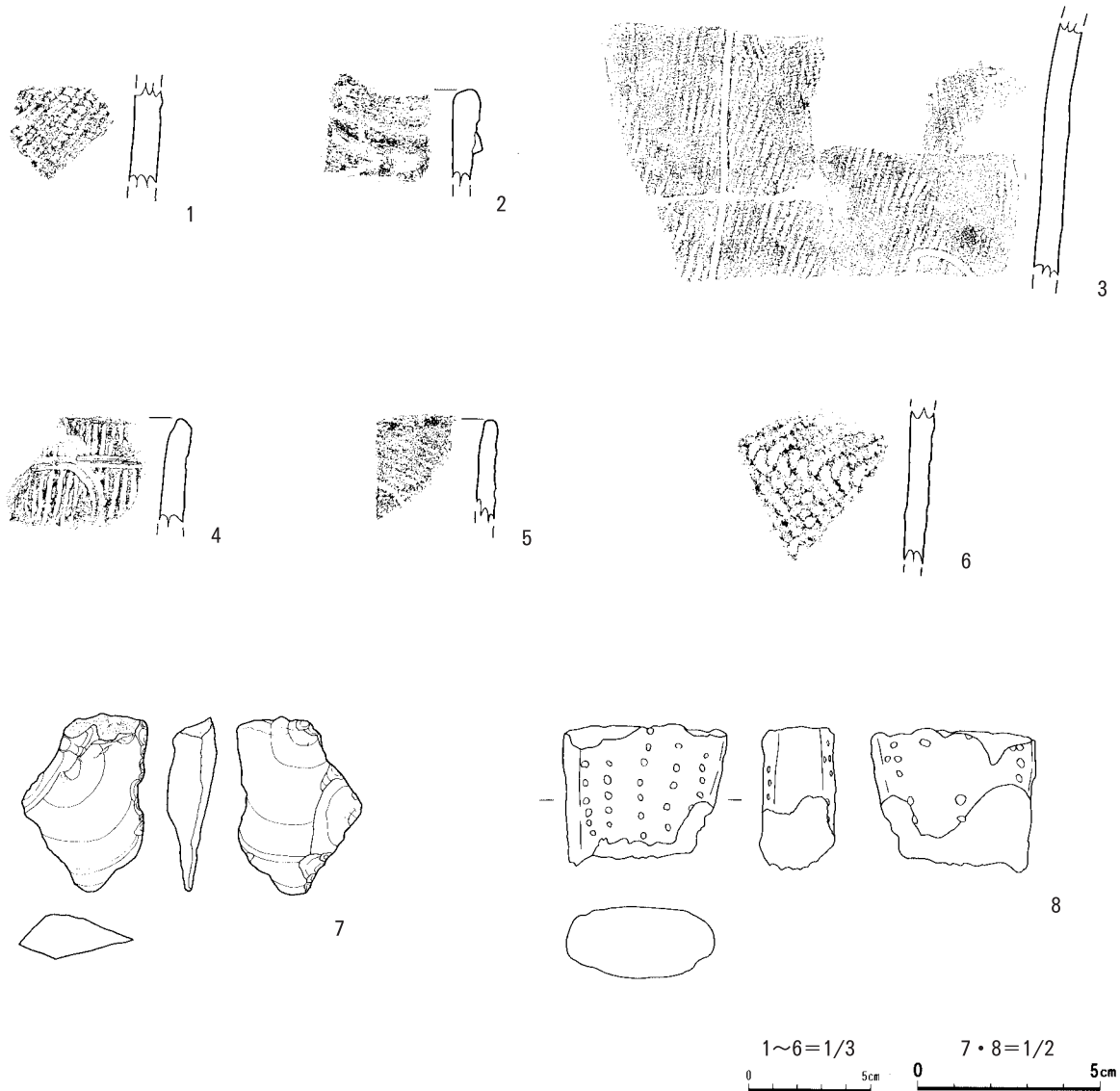
これらのうち6点を図示した。胎土に植物繊維を少量含む前期末のもの（図99 - 1）、円筒上層d式期のもの（図99 - 2）、曲線の沈線が施される最花式期のもの（図99 - 3～5）などがある。

2 石器

今回の試掘調査で出土した石器・フレーク類は5点で、K区トレンチ01から1点（黒曜石）、K区トレンチ04から2点、L区トレンチ01から1点、同トレンチ02から1点が出土した。いずれも造成による盛土部分からの出土で、そのうちL区トレンチ01から出土した剥片石器1点（図99 - 7）を図示した。不定形石器であり、珪質頁岩の片面に剥離調整が施された部分が認められる。

3 土製品

縄文時代の土製品は、L区トレンチ01の盛り土から土偶の破片1点（図99 - 8）が出土しただけである。胴部分と思われ、刺突が施されている。



縄文土器観察表

図	番号	出土地点	層位	器種	部位	文様 (計測値)	時期	備考	整番
99	1	G区 トレンチ01	盛土層	深鉢	胴部	RL	前期末	植物繊維少量混入	6
99	2	G区 トレンチ01	盛土層	深鉢	口縁部	粘土紐貼付	円筒上層d式	摩滅	4
99	3	L区 トレンチ01	盛土層	深鉢	胴部	RL、沈線文	最花式		1
99	4	L区 トレンチ01	盛土層	深鉢	口縁部	L単軸絡条体1類、沈線文	最花式?		2
99	5	L区 トレンチ01	盛土層	深鉢	口縁部	LR、沈線文	最花式		3
99	6	G区 トレンチ01	盛土層	深鉢	胴部	結束第1種	円筒上層式?		5

石器観察表

図	番号	出土地点	層位	器種	計測値 (現存値)				備考	整番
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
99	7	L区 トレンチ01	盛土層	不定形石器	37	48	12	15.7		7

土製品観察表

図	番号	出土地点	層位	器種	部位	計測値 (現存値)				文様	時期	備考	整番
						長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)				
99	8	L区 トレンチ01	盛土層	土偶	胴部	40	47	24	35.8	刺突	大木10式期		8

図99 近野遺跡及び隣接地 出土遺物

第4節 まとめ

1 遺跡の立地

本遺跡は、青森市南西部の低位段丘上に位置し、調査区は北東から南西に約620m(幅約20m)と細長く、部分的に道路によって区切られている。現況はおもに宅地として利用されており、大部分が削平や盛り土によって造成されている。

2 検出遺構

近野遺跡及び近野隣接地で、遺構は確認されなかった。

3 出土遺物

近野遺跡及び近野隣接地で出土した遺物は、段ボール箱で0.5箱分である。縄文時代中期後半期のものが主体を占める。

4 まとめ

近野遺跡の大部分は、斜面地を削平し、その上部に盛土をして宅地造成されている。一部(J区)のトレンチで旧表土面を確認して、地山の層まで掘り下げたが、遺構・遺物などは確認されなかった。しかし、盛土部分からは縄文時代中期後半期の土器が混じった状態で出土しており、宅地造成以前は密度は薄いものの周辺に遺構などがあった可能性が考えられる。

また、近野遺跡隣接地部分は、旧地形図(大正2年)では、沖館川につながる低湿地であり、その後大規模な盛土を行い宅地として造成されている。盛土を除去したトレンチの泥炭層確認面を掘り下げたが、遺構・遺物などは確認できなかった。ちなみに、0.45m³のバックホーで5mほど掘り下げてみたが、泥炭層はさらに下層へ続いていた。

(調査担当者)

《引用・参考文献》

- 青森県教育委員会 2005 『近野遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第394集
青森県教育委員会 2006 『近野遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第418集

写真図版



空中写真 遺跡全景
(平成13・14・15年度撮影を合成)



第C6号竪穴住居跡完掘 W



第C6号竪穴住居跡土層断面 W



第C6号竪穴住居跡炉土層断面 N



第C5号土坑完掘 E



第C6号土坑完掘 E



第C16号土坑完掘 N



第C33号土坑完掘 E



第C1号土器埋設遺構確認 W



第C1号土器埋設遺構土層断面 S



第C1号竪穴住居跡 W



第C2号竪穴住居土層(東西) N



第C2号竪穴住居跡ビット群 S



第C2号竪穴住居跡完掘 SW

写真1 C区検出遺構 縄文時代、平安時代(1)



第C2号竪穴住居外周溝土層 W



第C3号竪穴住居跡完掘 E



第C3号竪穴住居跡土層(東西) S



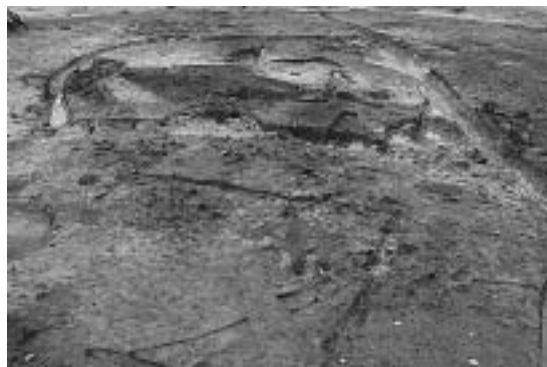
第C3号竪穴住居跡外周溝土層 E



第C3号竪穴住居跡外周溝遺物 S



第C3号竪穴住居跡掘方完掘 W



第C5号竪穴住居跡完掘 E



第C5号竪穴住居跡カマド土層 E



第C5号竪穴住居跡外周溝土層 E



第C5号竪穴住居跡掘方土層 E



第C7号竪穴住居跡完掘 NW



第C7号竪穴住居跡カマド完掘 NW

写真2 C区検出遺構 平安時代(2)



第C7号竪穴住居跡土層 NW



第C7号竪穴住居跡カマド土層 SW



第C7号竪穴住居跡カマド土層 W



第C8号竪穴住居跡完掘 W



第C8号竪穴住居跡外周溝(南側)完掘 W



第C8号竪穴住居跡外周溝(北側)完掘 W



第C8号竪穴住居跡外周溝B-Tm確認 E



第C8号竪穴住居跡外周溝土層 E



第C10号竪穴住居跡完掘 W



第C11号竪穴住居跡外周溝完掘 E



第C1・2号掘立柱建物跡完掘 N



第C26号土坑完掘 S



第C37号土坑完掘 S



第C38号土坑完掘 S



第C 1号溝跡完掘 S



第C 1号溝跡完掘 E



第C 9号溝跡完掘 S



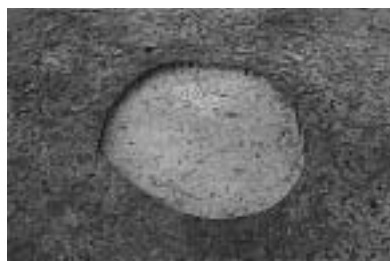
第C 1号土坑完掘 N



第C 2号土坑完掘 N



第C 3号土坑完掘 W



第C 8号土坑完掘 E



第C 9号土坑完掘 S



第C10(右)・13(左)号土坑完掘 W



第C 15号土坑完掘 N



第C 18号土坑完掘 N



第C21(左)・22(右)号土坑完掘 W



第C 27号土坑完掘 E



第C 29号土坑完掘 E



第C 30号土坑完掘 E

写真4 C区検出遺構 平安時代(4)、時期不明(1)



第C34号土坑完掘 S



第C35号土坑完掘 S



第C36号土坑完掘 S



第C39号土坑完掘 W



第C41号土坑完掘 S



第C42号土坑完掘 S



第C44号土坑完掘 N



第C11号溝跡完掘 E



第C2号溝跡完掘 W



第C1号性格不明遺構完掘 E



第C1号性格不明遺構白色粘土層の欠落



第C1号性格不明遺構土層 W



第C1号性格不明遺構土層

写真5 C区検出遺構 時期不明(2)



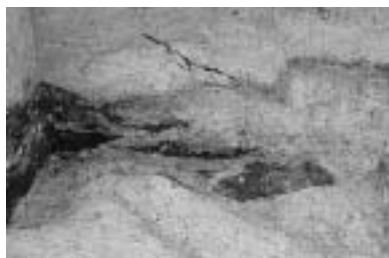
第C 1号性格不明遺構土層 SE



第C 1号性格不明遺構土層 S



第C 1号性格不明遺構土層 W



同上 白色粘土層の欠落 S



同上 白色粘土層の欠落 SW



同上 白色粘土層の欠落 W



第C 3号性格不明遺構完掘 N



第C 3号性格不明遺構土層断面 E



第C 4号性格不明遺構土層 W



第C 4号性格不明遺構完掘 N



第C 5号性格不明遺構完掘 SE



第C 5号性格不明遺構土層断面 SE



第C 7号性格不明遺構完掘 E



第C 7号性格不明遺構土層断面 E



第C 11号性格不明遺構完掘 S

写真6 C区検出遺構 時期不明(3)



風倒木捨て場遺物出土状況 NE



風倒木捨て場遺物出土状況 NE



風倒木捨て場遺物出土状況 SW



風倒木捨て場土層 SW



風倒木捨て場遺物出土状況 S



風倒木捨て場遺物出土状況 S



風倒木捨て場土層 W



第C 2号ピット完掘 E



第C 8号ピット完掘 E



第C 8号ピット遺物出土状況 E

写真7 C区検出遺構 風倒木捨て場、ピット



第C36号ピット土層 S E



第C39号ピット土層 S



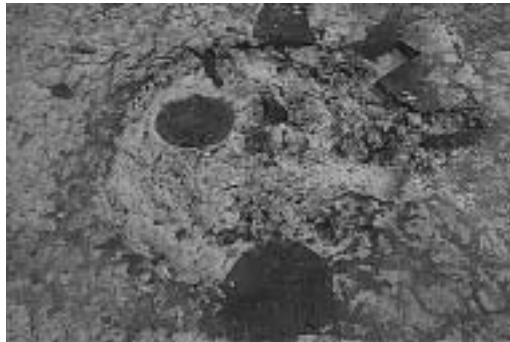
C区作業風景



C区作業風景 N



C区作業風景



第D2号竪穴住居跡完掘 S W



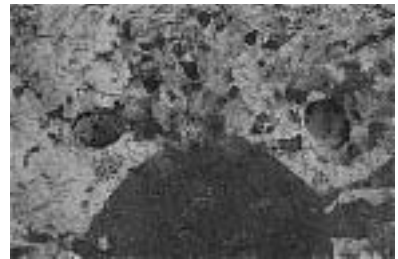
第D2号竪穴住居跡遺物出土状況 S



第D2号竪穴住居跡炉焼土範囲 S W



第D2号竪穴住居跡土層 N W



第D2号竪穴住居跡 S W



第D3号竪穴住居跡確認 W



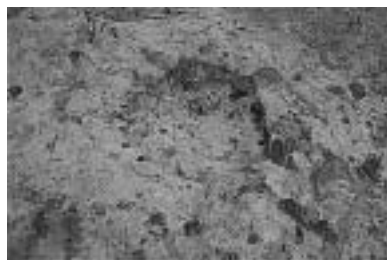
第D3号竪穴住居跡土層 W



第D2号土坑完掘 N



第D9号土坑完掘 S E



第D10号土坑完掘 S E



第D11号土坑完掘 S E

写真8 C区検出遺構 ピット、作業風景 D区検出遺構 縄文時代(1)



第D12号土坑完掘 S E



第D16号土坑完掘 N E



第D17号土坑完掘 S E



第D19号土坑完掘 E



第D20号土坑完掘 S E



第D21号土坑完掘 S



第D1号溝状土坑完掘 S



第D1号土器埋設遺構確認 S



第D1号土器埋設遺構土層 S



第D1号烧土遺構完掘 N



第D1号烧土遺構遺物出土状況 S E



第D1号烧土遺構土層 S E



第D1号烧土遺構焼土範囲 N



第D1号性格不明遺構完掘 S



第D2号性格不明遺構完掘 W



第D2号性格不明遺構完掘拡大 SW



第D2号性格不明遺構完掘拡大 SW



第D2号性格不明遺構土層 E



第D2号性格不明遺構土層 N



第D2号性格不明遺構土層 N



第D2号性格不明遺構壁面状況 W



第D2号性格不明遺構壁面状況 SE



第D1号竪穴住居跡掘方残存範囲 N



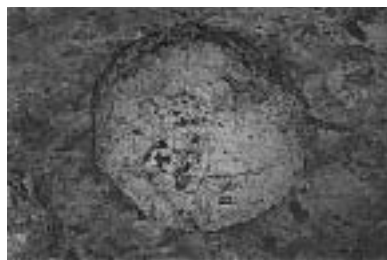
第D1号竪穴住居跡掘方完掘 N



第D5号土坑完掘 S



第D1号掘立柱建物跡確認 S



第D1号土坑完掘 S



第D3号土坑完掘 SE

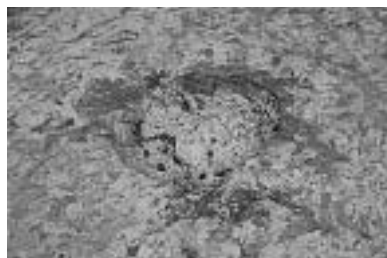
写真10 D区検出遺構 縄文時代(3)、平安時代、時期不明(1)



第D4号土坑完掘 S E



第D6・11号土坑完掘 S E



第D7号土坑完掘 S E



第D8号土坑完掘 S



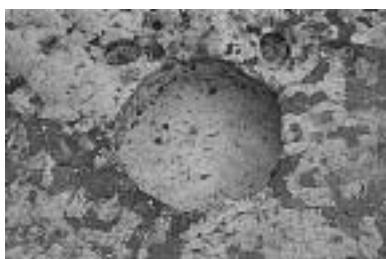
第D13号土坑完掘 E



第D13・14・15号土坑完掘 S



第D18号土坑完掘 S



第D23号土坑完掘 S W



第D29号土坑白色粘土確認 E



第D29号土坑完掘 S E

D区作業風景



第D2号溝跡完掘 S



試掘範囲遺構検出状況 S



D区作業風景

写真11 D区検出遺構 時期不明(2)、作業風景、試掘状況



谷とE区 SE



谷とD区 SW



完掘 S



北壁 中央部拡大 S



完掘 N



南壁 NW



作業風景 N



白頭山火山灰検出状況 NW

写真12 D区谷(1)



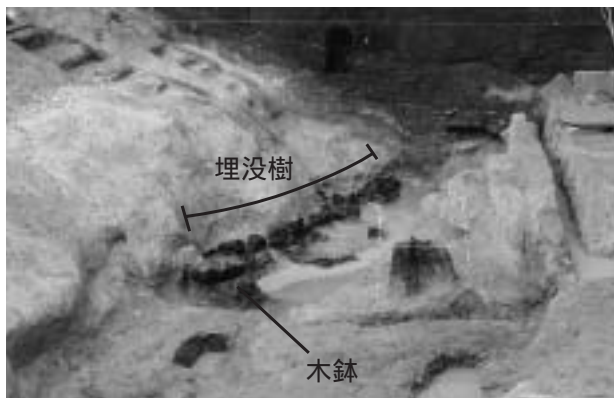
ベルト5 S



ベルト6 S



トチノキ種皮片集中部土層 S



木鉢と埋没樹出土状況 S



平安時代の自然木集積状況 N



杭W-19・20 W



縄文時代のトチノキ種皮破片集中部 NE



木鉢 E

写真13 D区谷(2)

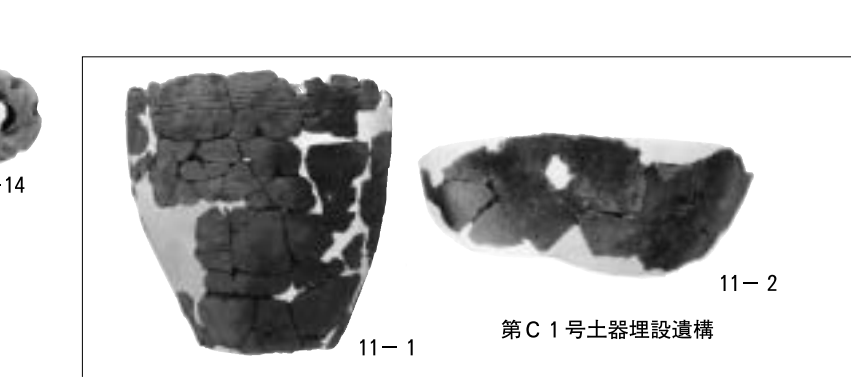
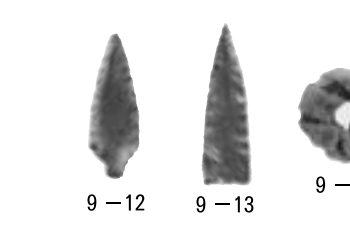
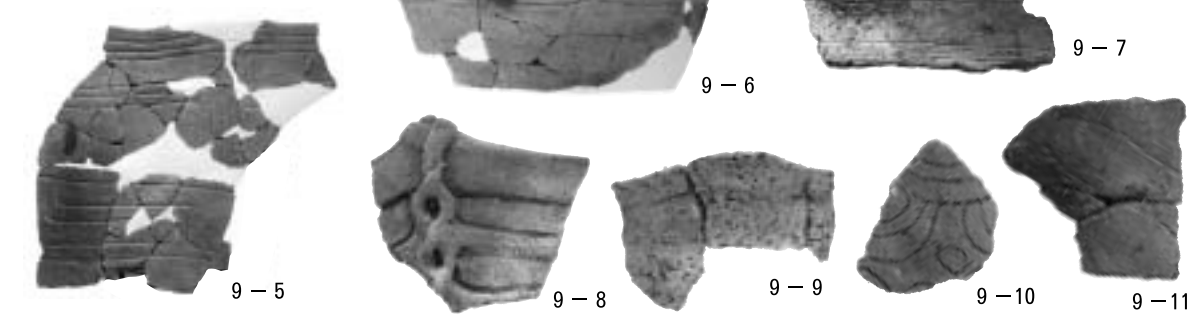
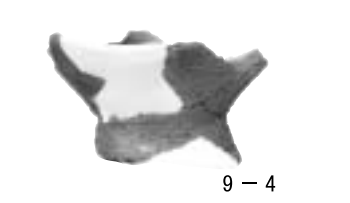
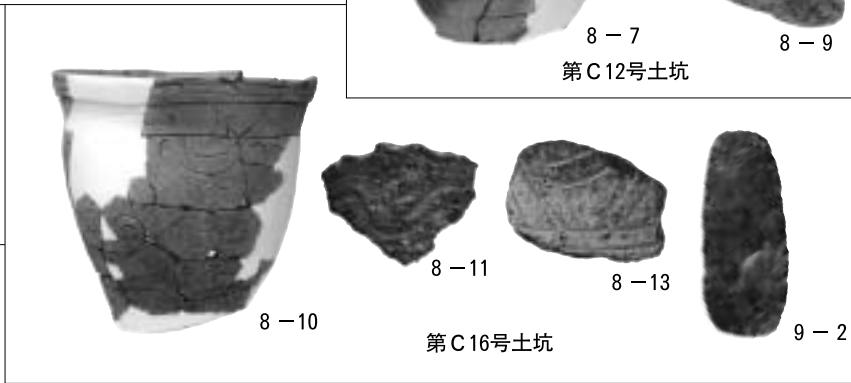
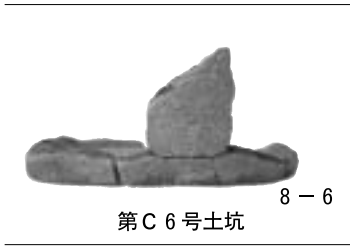
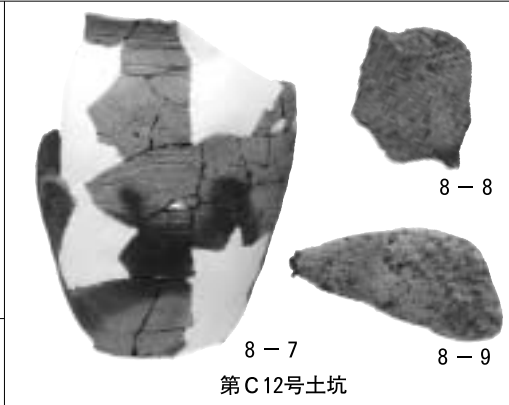
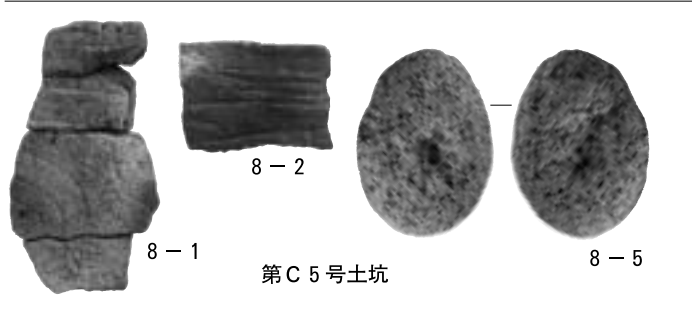
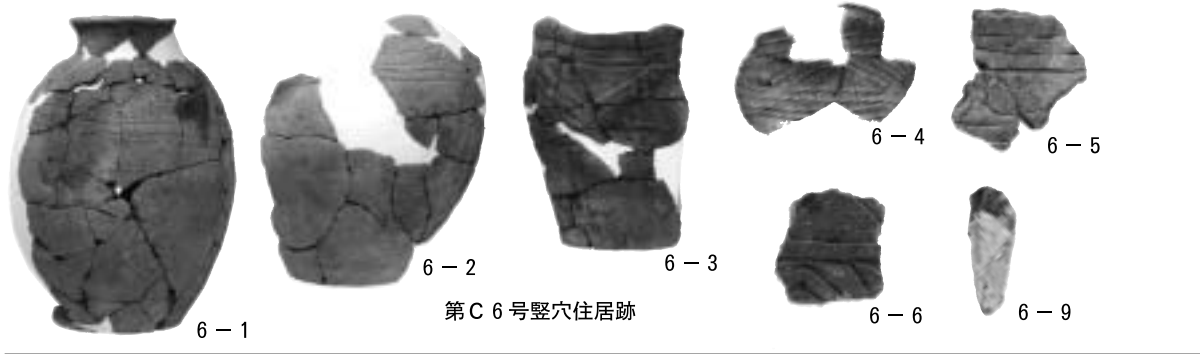


写真14 C区出土遺物(1)

縄文時代 - 竪穴住居跡・土坑・土器埋設遺構

近野遺跡

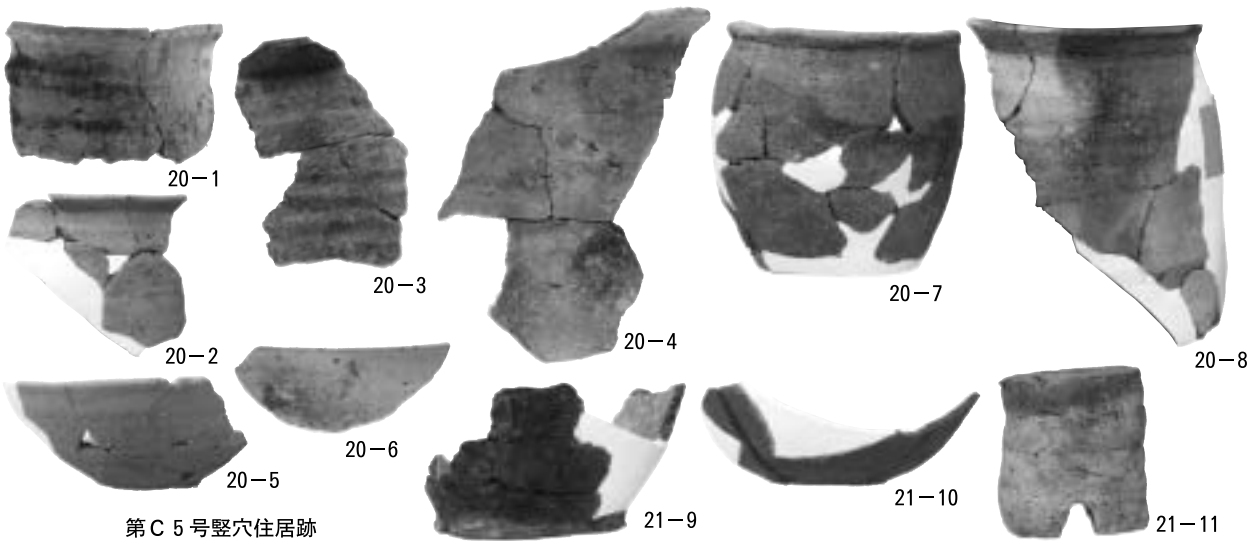
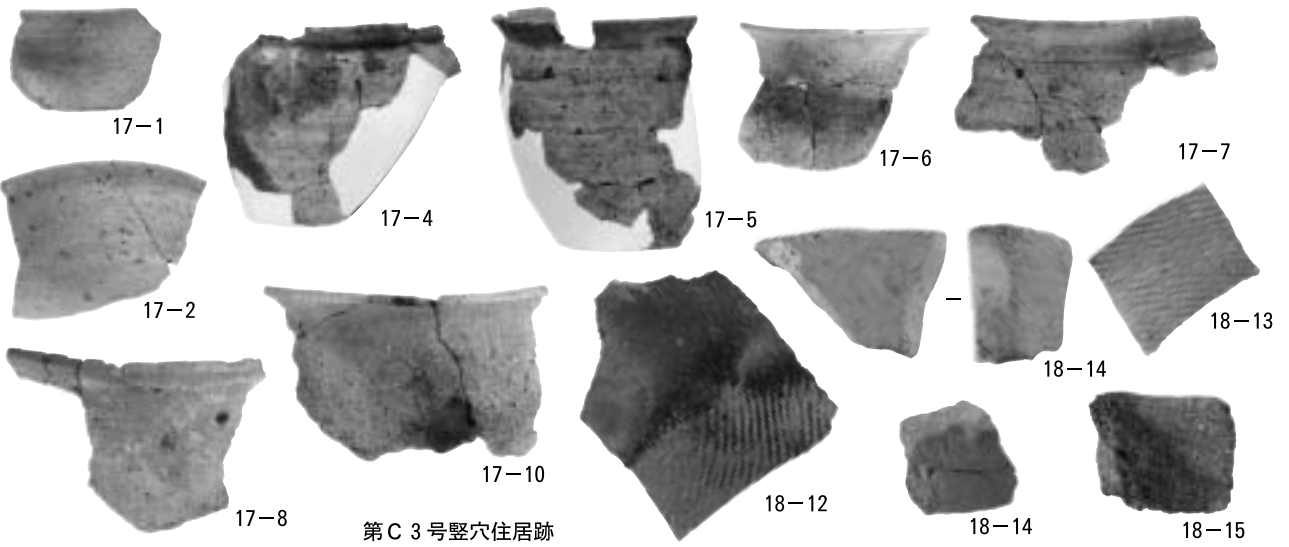
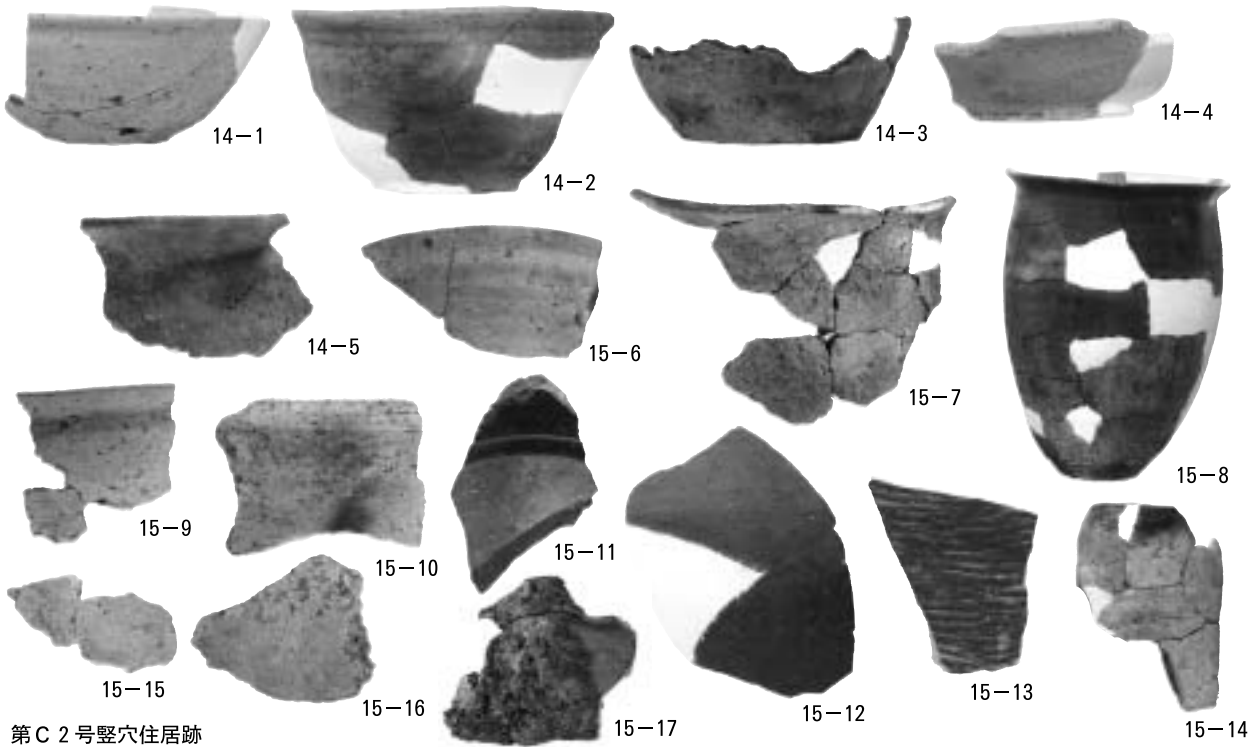
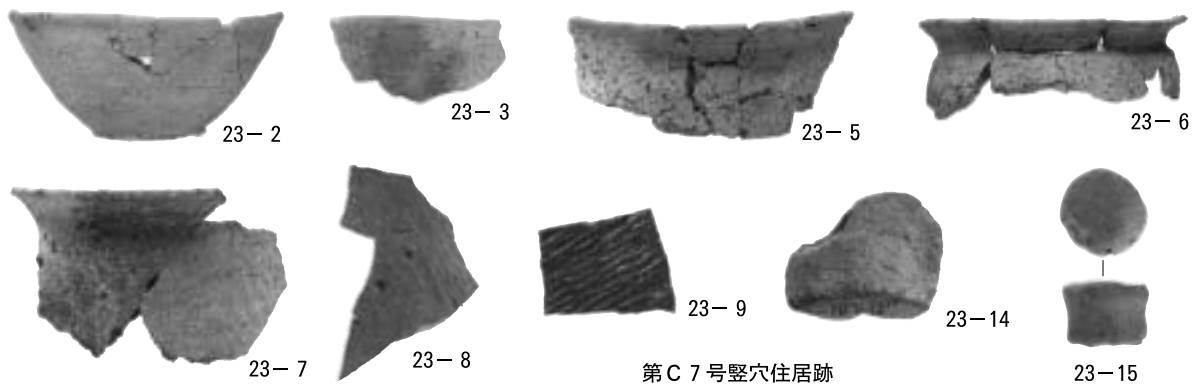
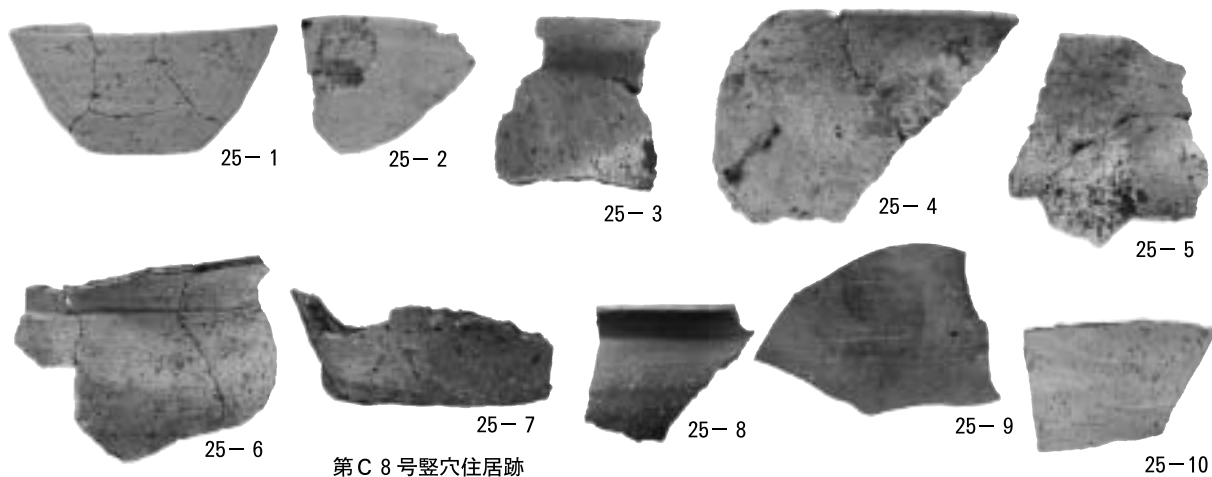


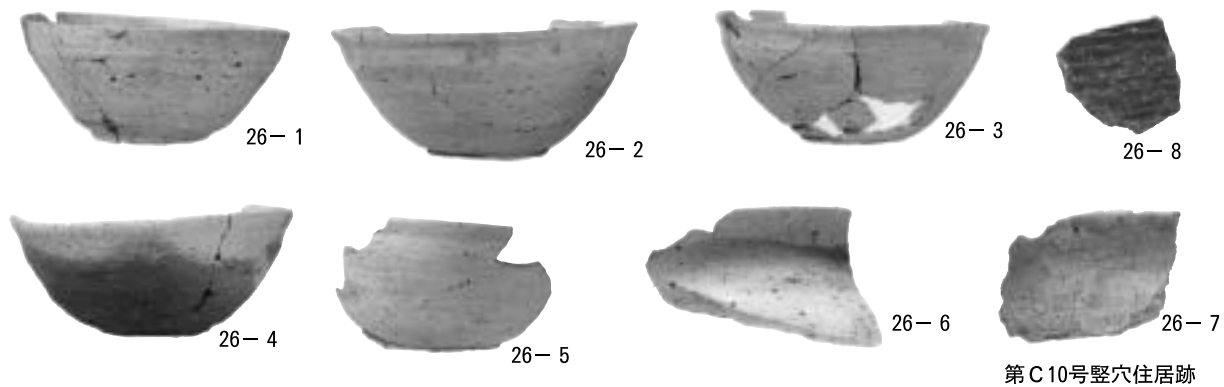
写真15 C区出土遺物(2)
平安時代 - 竖穴住居跡



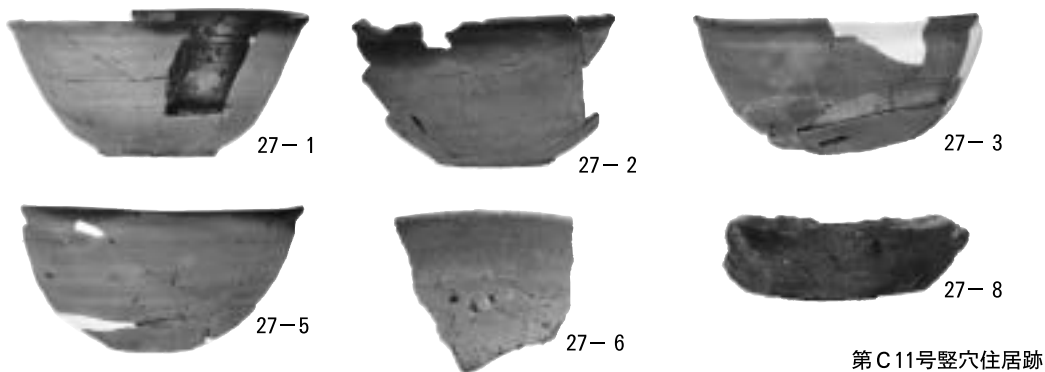
第C 7号竖穴住居跡



第C 8号竖穴住居跡



第C 10号竖穴住居跡



第C 11号竖穴住居跡

写真16 C区出土遺物(3)
平安時代 - 竖穴住居跡

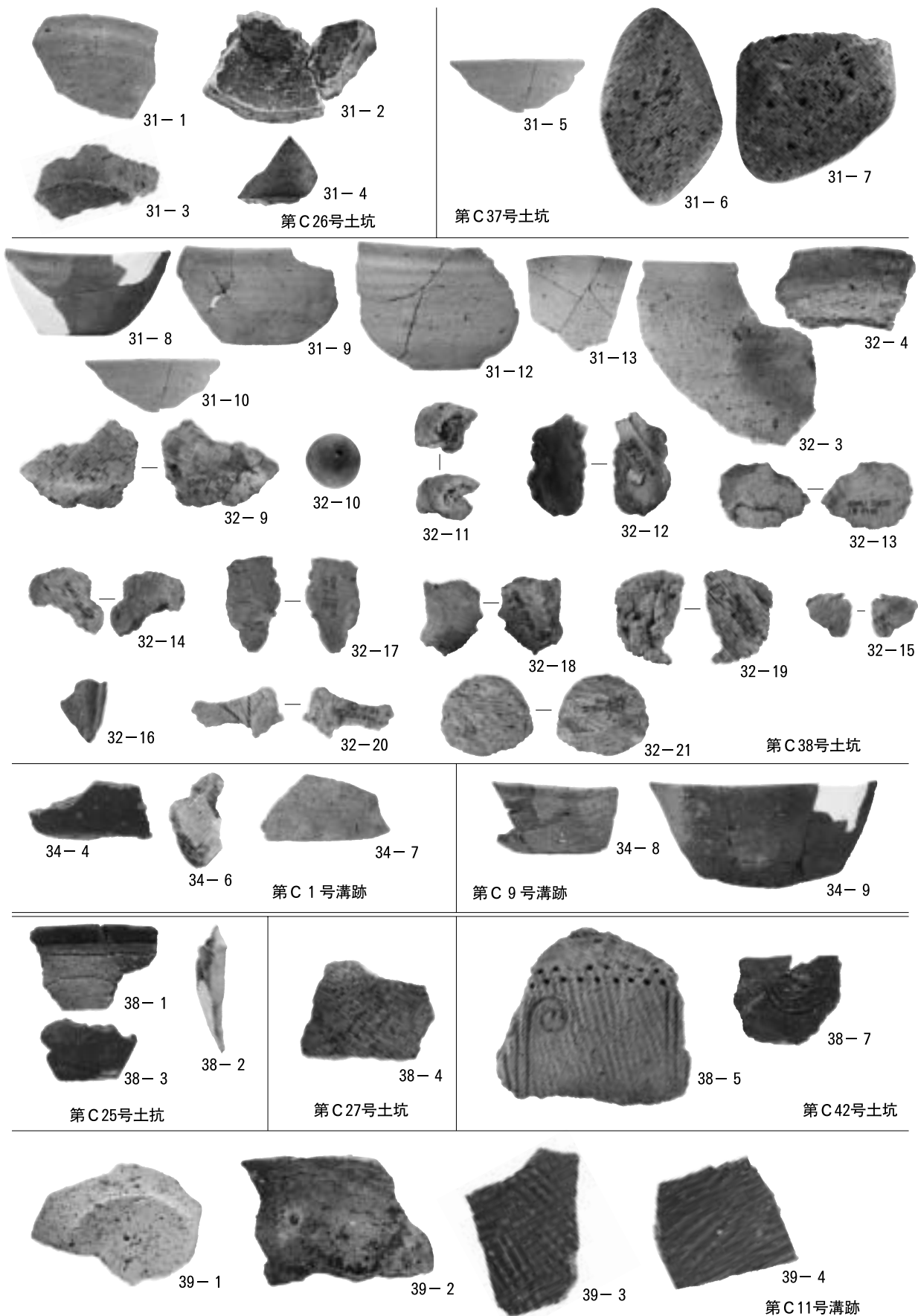


写真17 C区出土遺物(4)

平安時代 - 土坑・溝跡、時期不明 - 土坑・溝跡



43-1

第C1号性格不明遺構



43-3

第C4号性格不明遺構



43-4



43-5

第C1号ピット



43-6

第C8号ピット



45-1



45-2



45-3



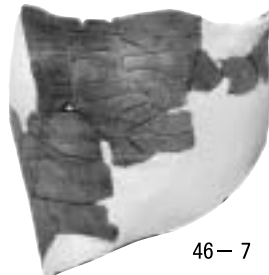
45-4



45-5



45-6



46-7



46-9



46-10



46-11



46-12



46-13



47-14

風倒木捨て場



47-15



47-16



47-17

写真18 C区出土遺物(5)

時期不明 - 性格不明遺構・ピット、風倒木捨て場(縄文土器1)

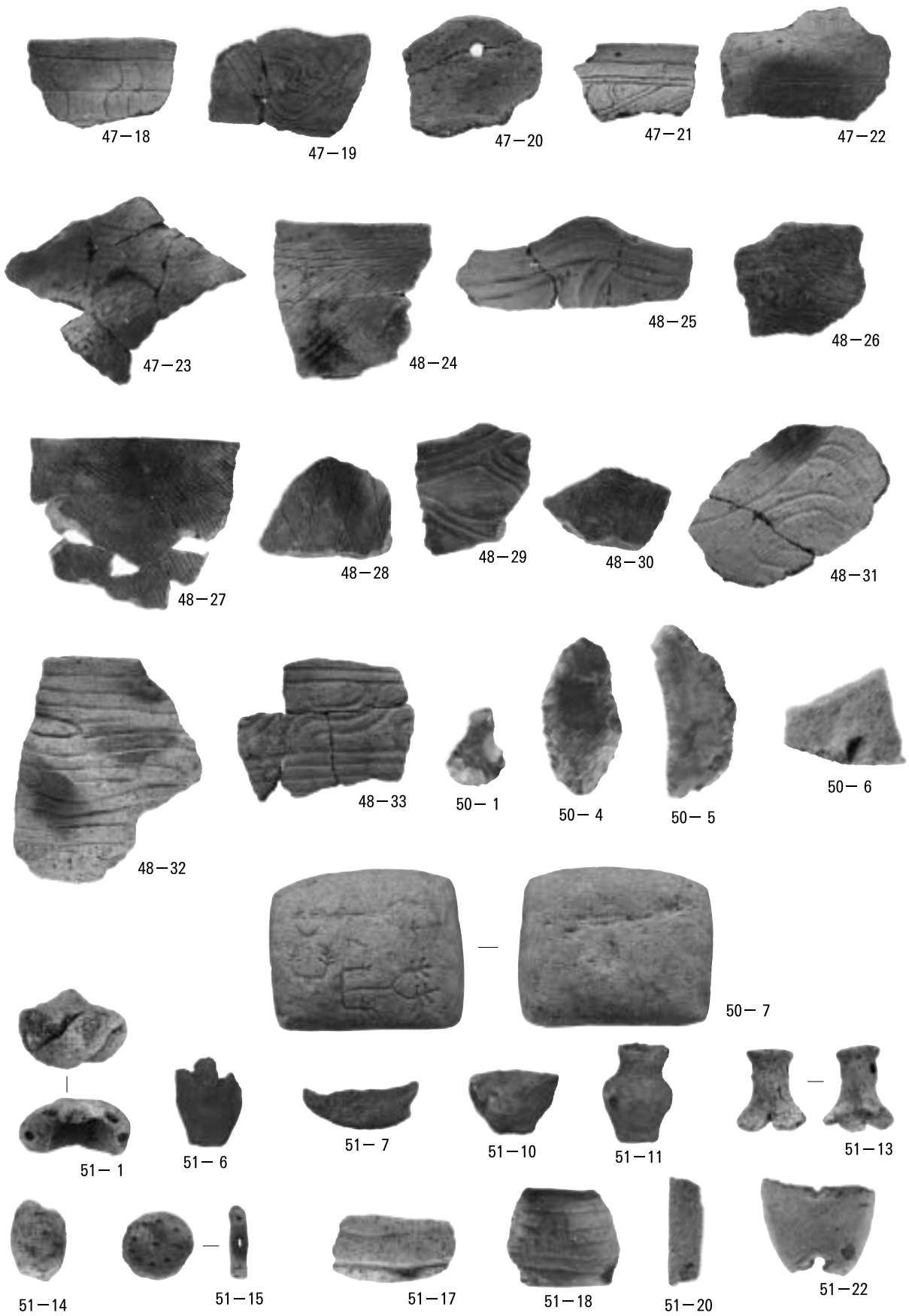


写真19 C区出土遺物(6)

風倒木捨て場(縄文土器2・剥片石器・土製品・石製品)

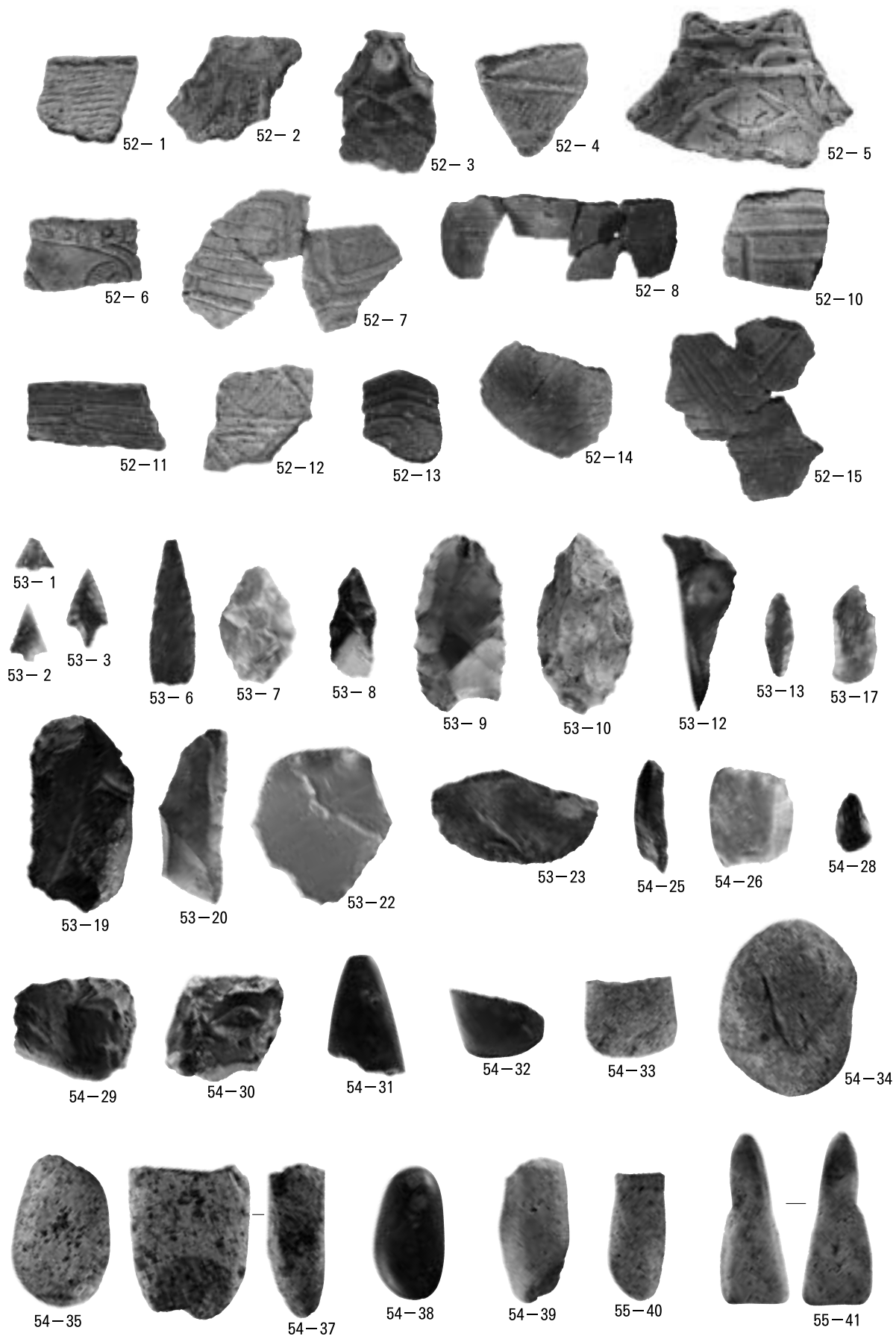


写真20 C区出土遺物(7)
遺構外 - 縄文時代(土器・剥片石器・礫石器1)

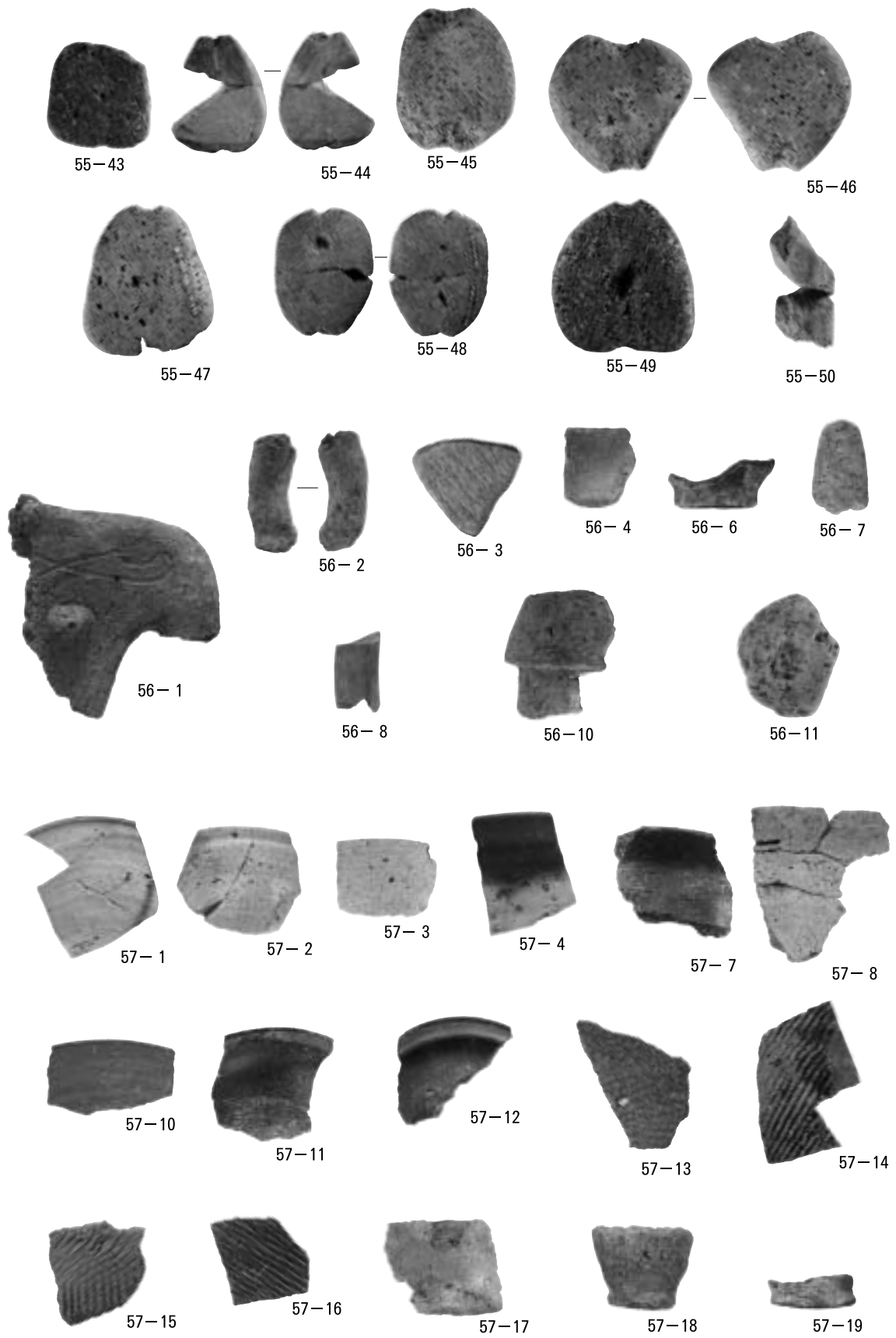


写真21 C区出土遺物(8)

遺構外 - 縄文時代(礫石器2・土製品・石製品)、平安時代



写真22 D区出土遺物(1)

縄文時代 - 竪穴住居跡・土坑・埋設土器遺構・焼土遺構

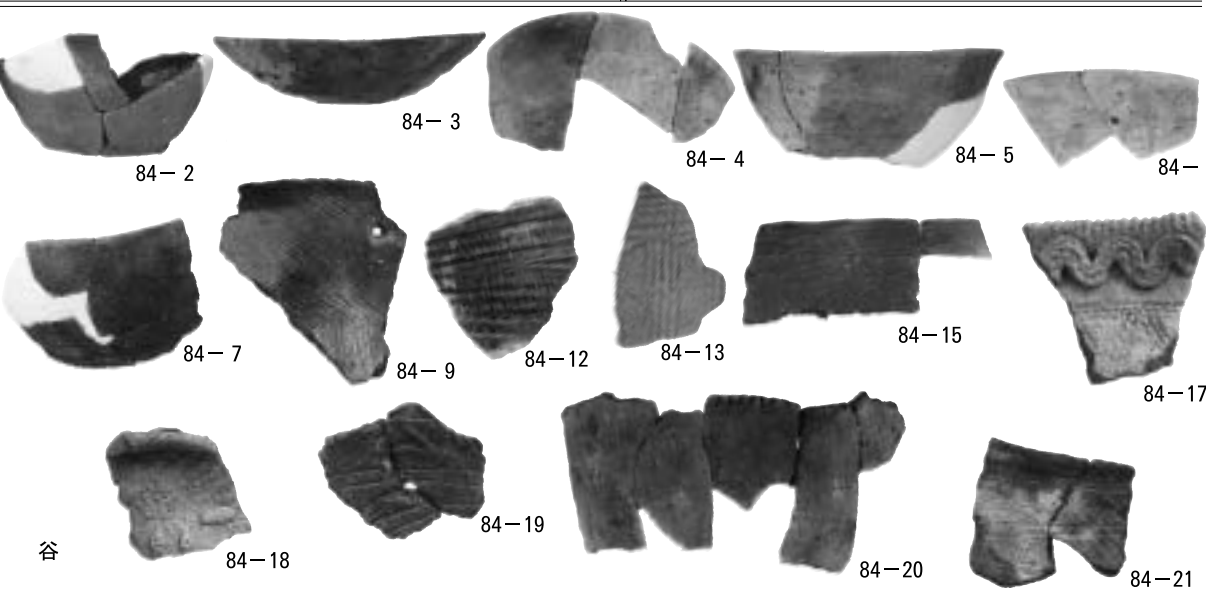
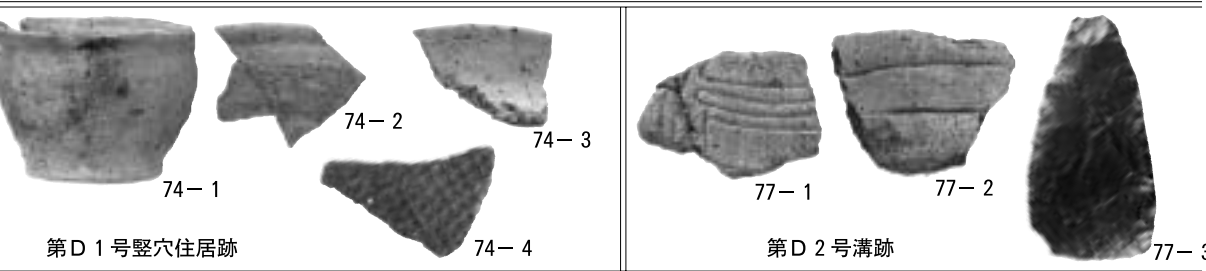
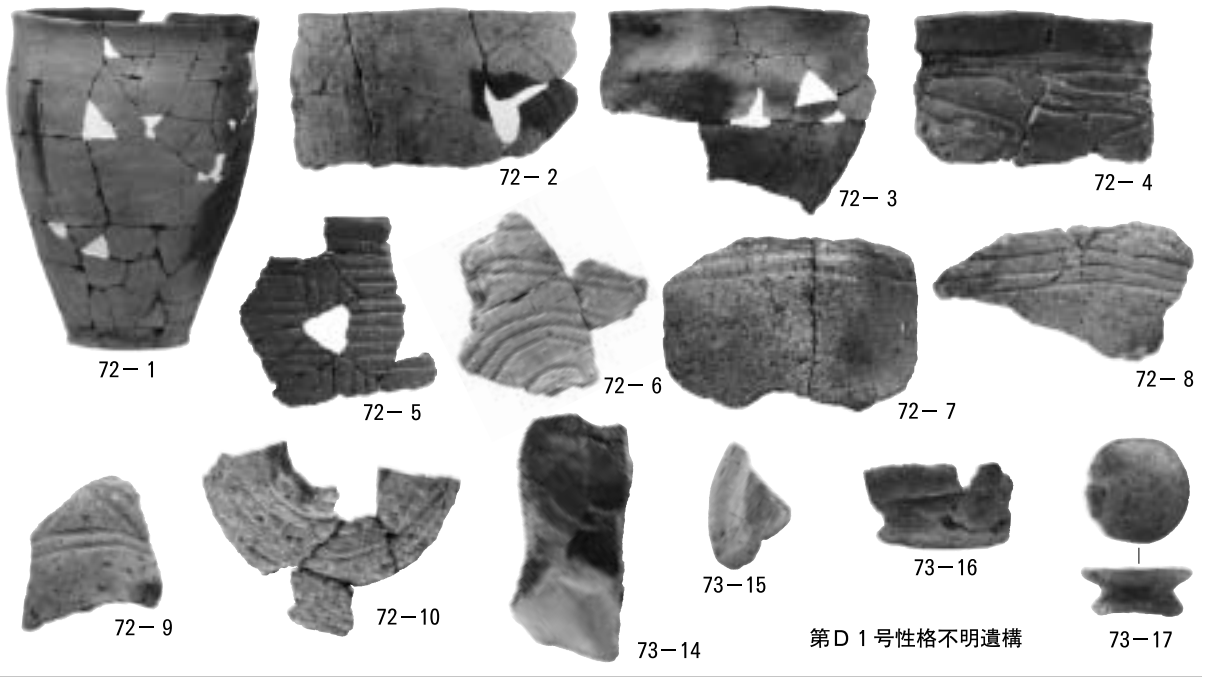


写真23 D区出土遺物(2)

縄文時代 - 性格不明遺構、平安時代 - 竖穴住居跡、時期不明 - 溝跡、谷 - 土器1 (平安・弥生・縄文)

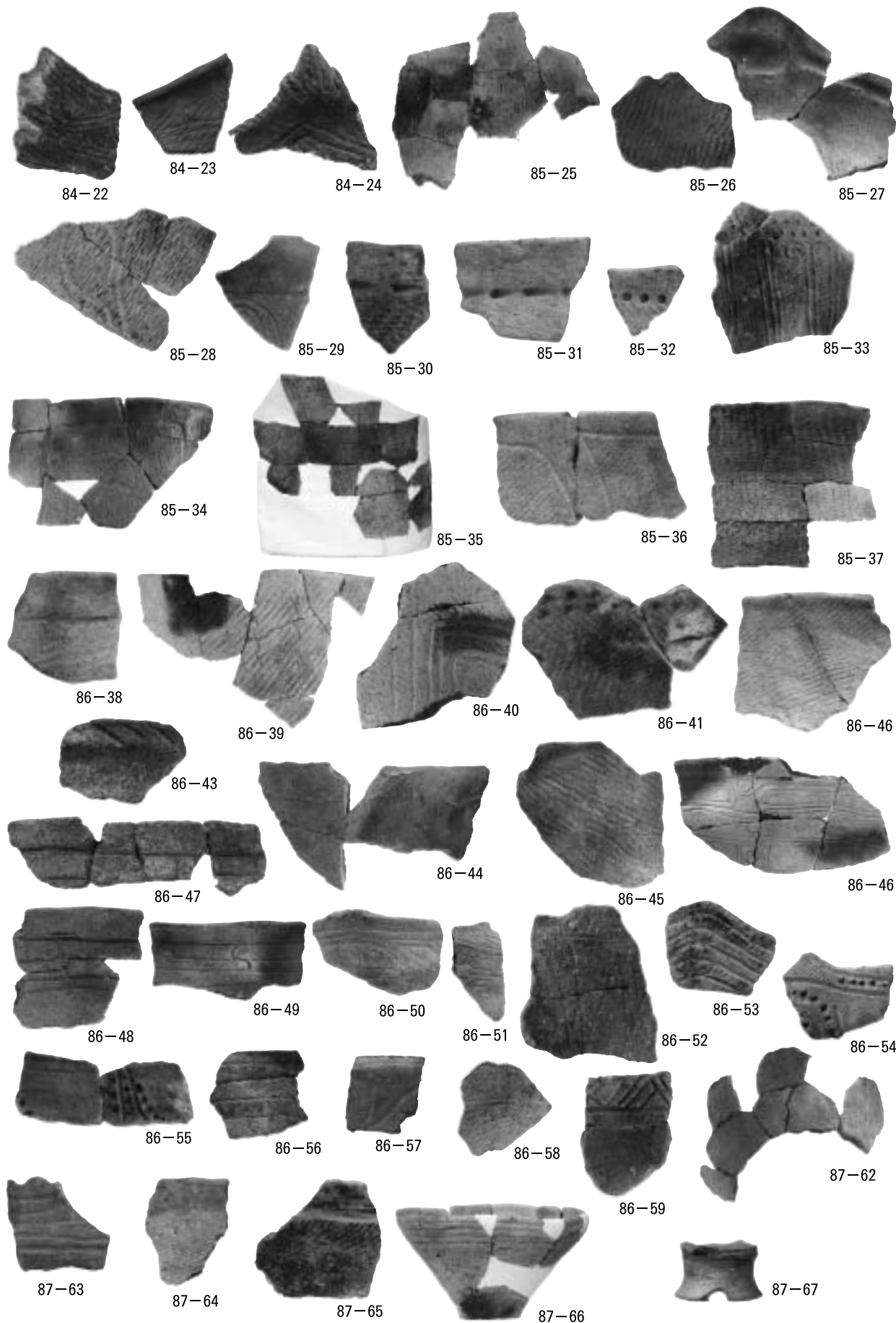


写真24 D区出土遺物 (3)

谷 - 土器 2 (縄文)

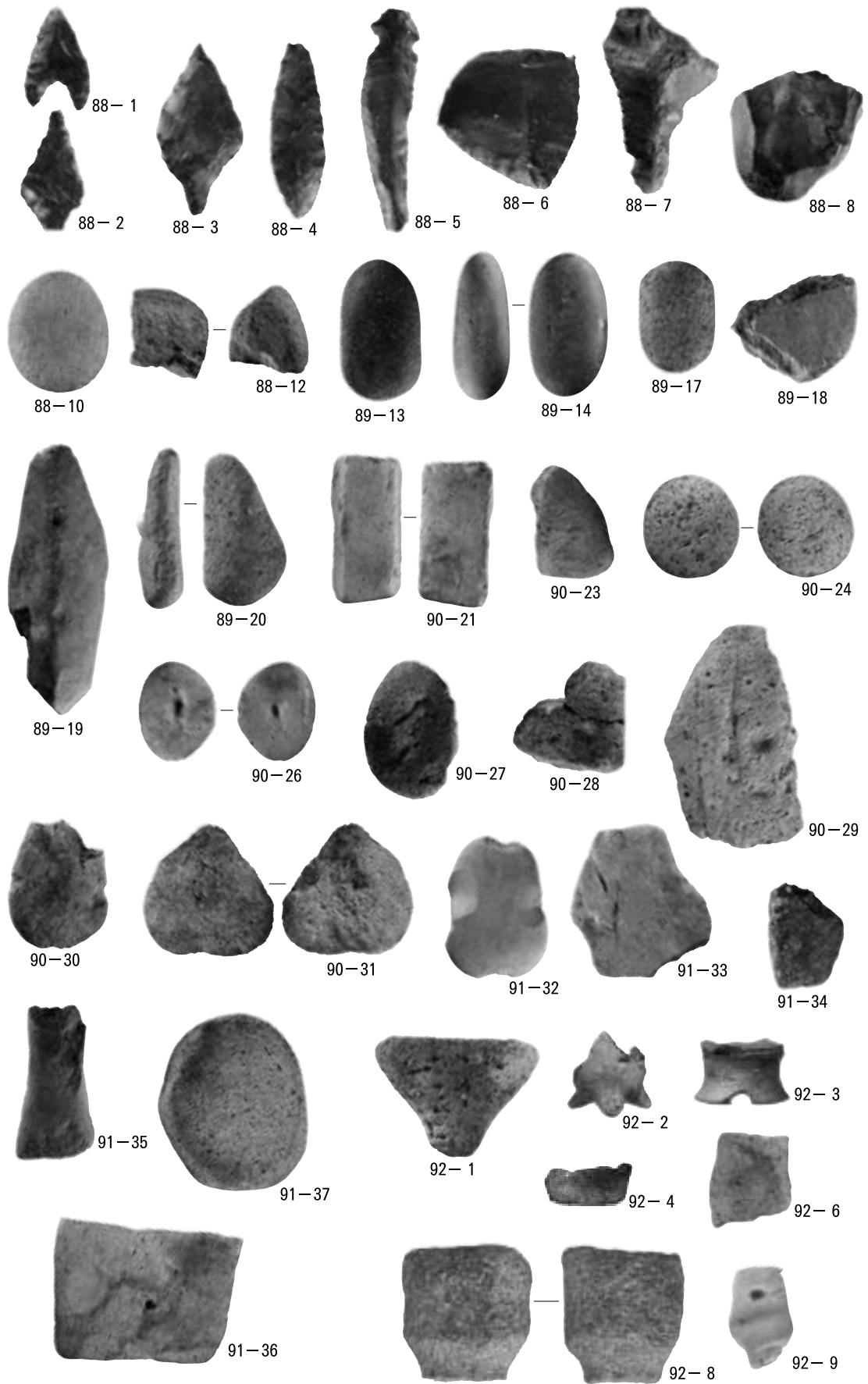


写真25 D区出土遺物(4)

谷・石器・土製品・石製品



93-1



93-2



93-3

縄文時代



94-1



94-2



94-3



94-4



94-5

平安時代



94-6

写真26 D区出土遺物(5)

谷 - 木製品(縄文・平安)

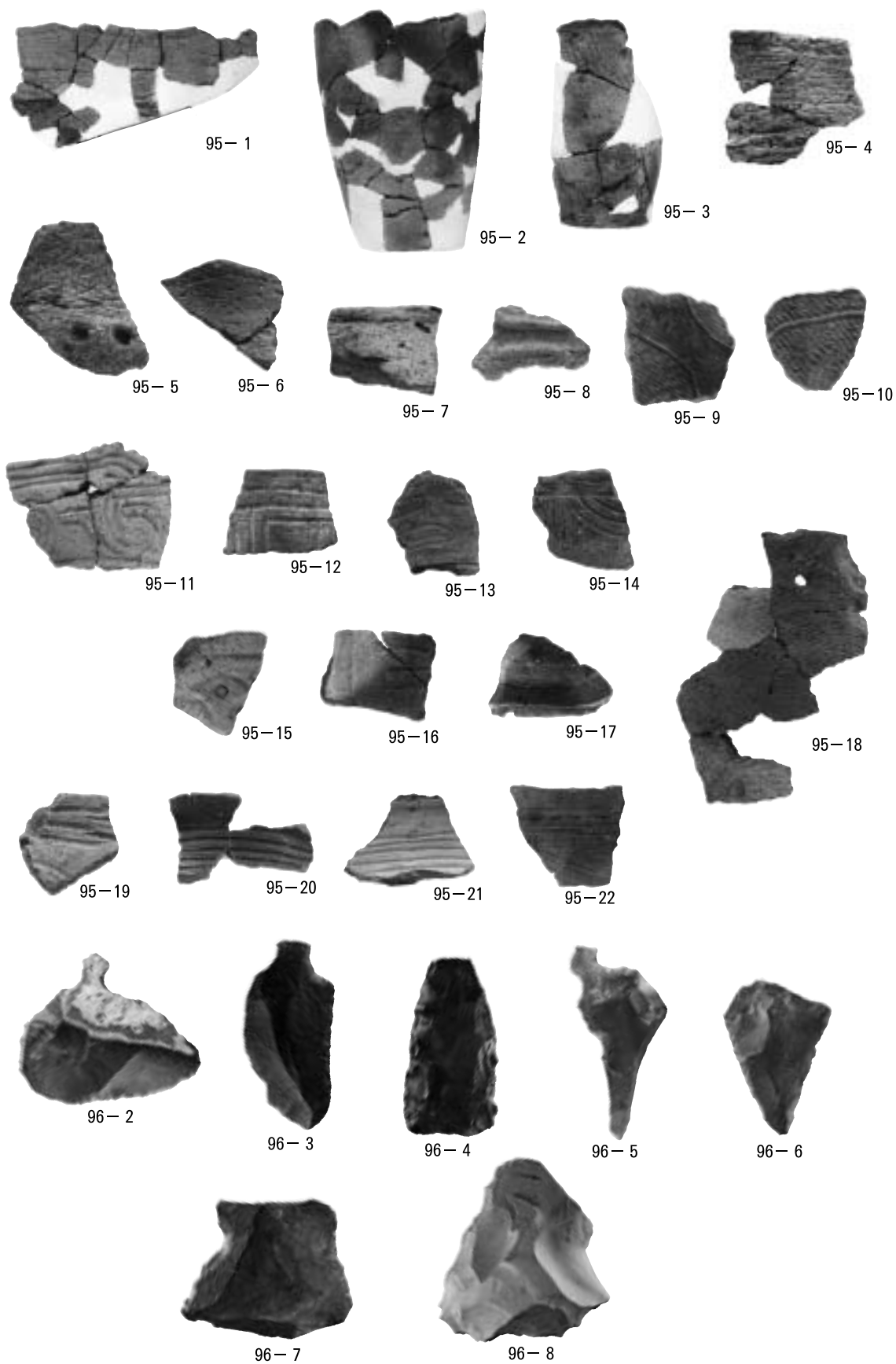


写真27 D区出土遺物(6)

遺構外・土器・石器



D区トレンチ01 E



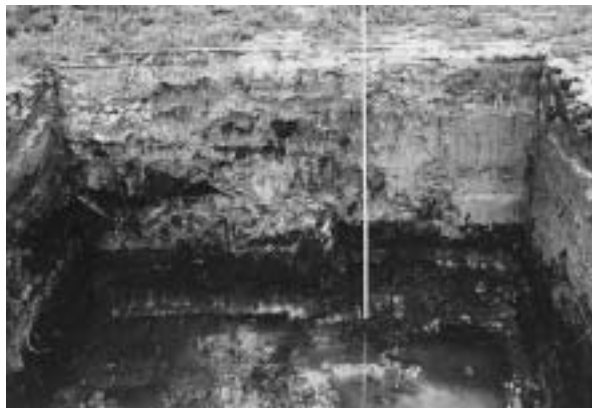
E区トレンチ01 E



G区トレンチ01 E



G区トレンチ01作業風景 N



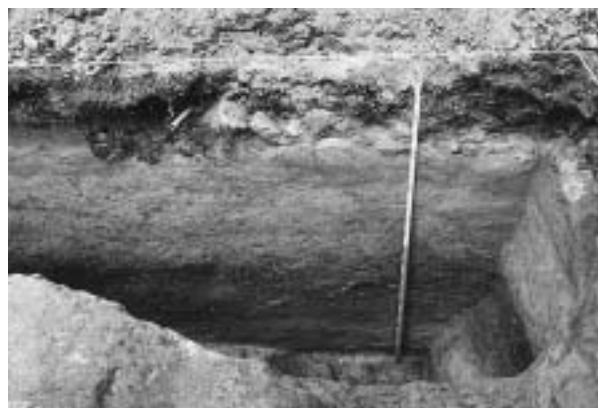
H区トレンチ01 S



J区トレンチ01 W



K区トレンチ01作業風景 E



K区トレンチ03 S

写真28 近野遺跡及び隣接地 試掘調査状況(1)



K区トレンチ04 S



L区トレンチ01作業風景 S



L区トレンチ01 S



L区トレンチ02 N

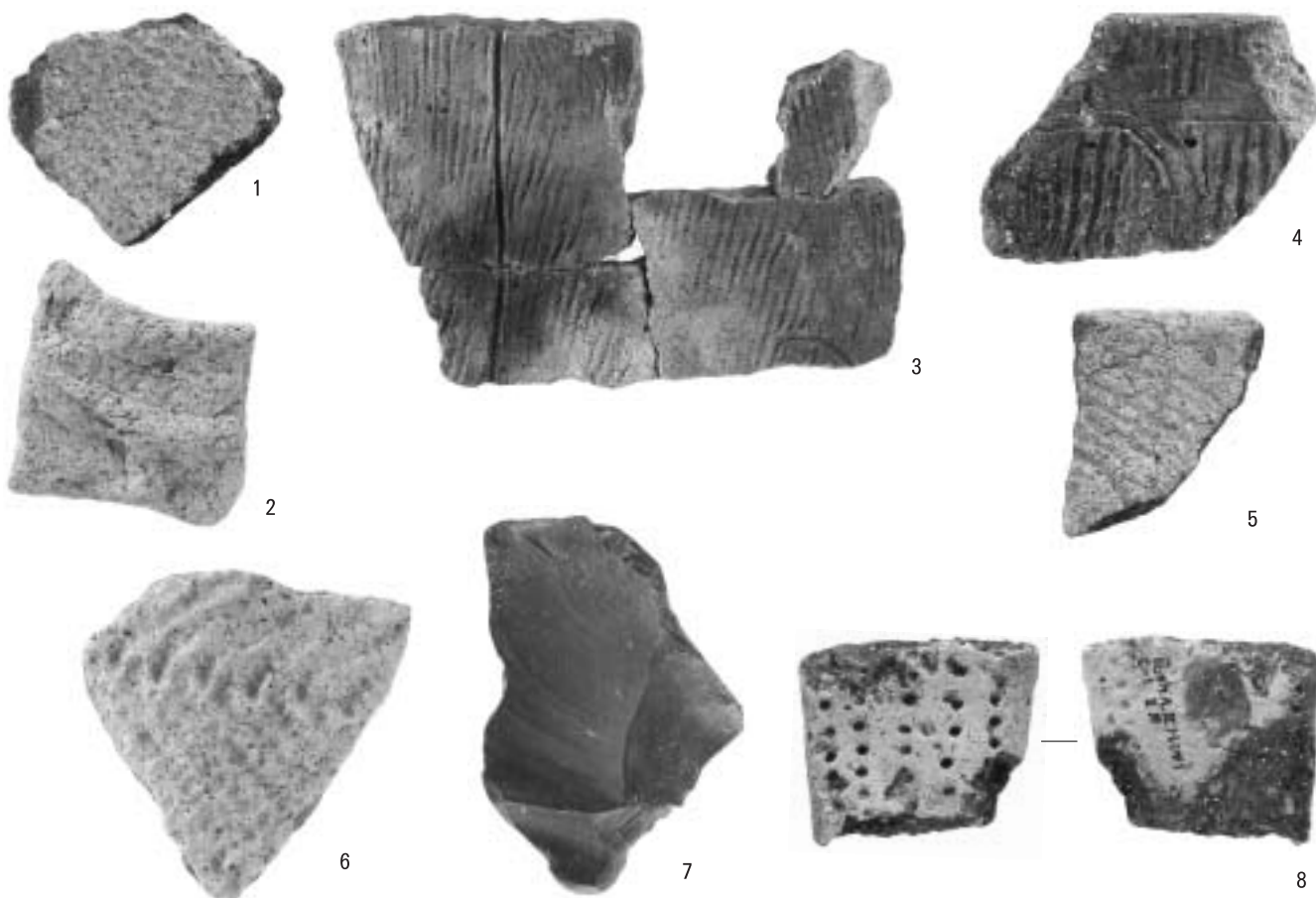


写真29 近野遺跡及び隣接地 試掘調査状況(2)と出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちかのいせき							
書名	近野遺跡							
副書名	県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第432集							
編集者名	小笠原雅行・杉野森淳子・伊藤由美子・坂本真弓・斉藤慶史・中嶋友文・神康夫							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15 TEL017-788-5701 FAX017-788-5702							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	西暦 2007年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系 (TokyoDatum)		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ちかの 近野遺跡 C区 D区	あおもりけん 青森県 あおもりし 青森市 おおあざやすだ 大字安田 あざちかの 字近野 219外	02201	01065	40°	140°	20010418 ～20011122	C区 15,320m ²	県立美術館 及び県道里 見丸山線建 設に伴う事 前調査
				48	42			
				18	17	20020415 ～20021220	D区 8,580m ²	
				世界測地系 (JGD2000)		20030417 ～20031022		
				40°	140°			
				48	42			
				27	04			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
ちかの 近野遺跡 C区	集落跡	縄文時代後期		竪穴住居跡	1軒	中期後葉から後期前 葉を主体(土器・石器・ 土製品・石製品)		捨て場から 人物線刻が ある石冠が 出土した。
		前期～後期		土器埋設遺構	1基			
		平安時代		捨て場	1ヶ所	土坑	6基	
		時代不明		土坑	7軒			
				掘立柱建物跡	2棟			
				土坑	3基			
				溝跡	3条			
				土坑	28基			
				溝跡	7条			
				性格不明遺構	6基			
				ピット	25個			
ちかの 近野遺跡 D区	集落跡	縄文時代前期		焼土遺構	1基	中期後葉から後期前 葉を主体(土器・石器・ 土製品・石製品・木製 品)		
		中期		竪穴住居跡	2軒			
		後期		土器埋設遺構	1基			
		中期・後期		性格不明遺構	2基			
		時期不明		谷部				
		平安時代		溝状土坑	1基			
				土坑	10基			
				竪穴住居跡	1軒	土師器・須恵器・木 製品		
				土坑	1基			

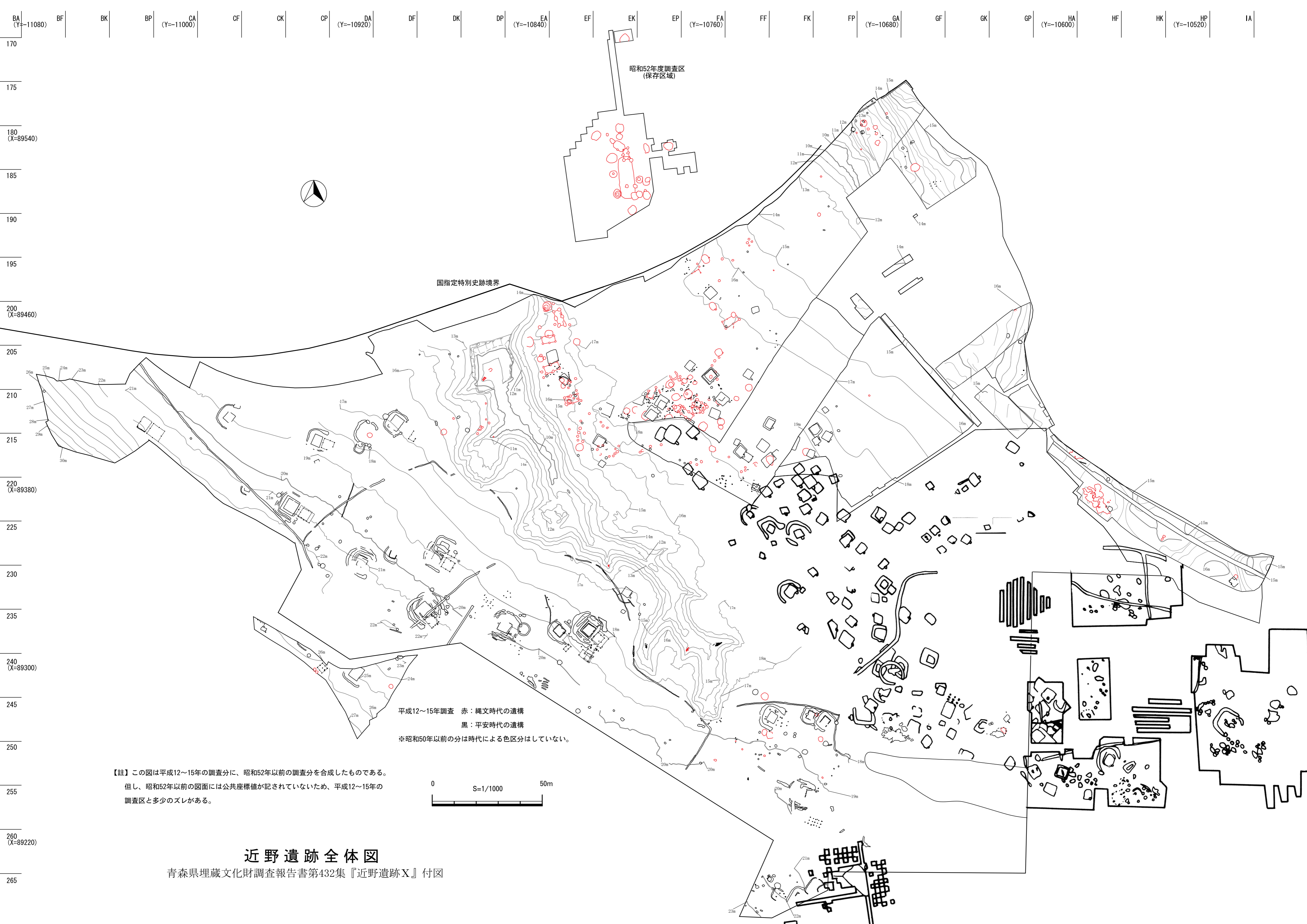
D区		時代不明	掘立柱建物跡 1棟 土坑 13基 溝跡 1条 ピット 8個					
要約	<p>近野遺跡の南東側は、縄文時代後期の遺構・遺物を主体とする。多数の土坑や土器埋設遺構等は検出しているが、この時期の住居跡は過去の調査においても確認されていない。後期の遺物は南東側のほか、中央の谷（F区）上流側でも出土している。これらから、後期段階に入っても、中期同様の人々の営みが継続していたことが伺える。また、居住の場所は、生業・生産の場から離れたことが考えられ、その場所は低地や緩斜面と予想される。</p> <p>平安時代の遺構・遺物は、本遺跡全域から多数確認されている。これまで検出された住居跡の形態と出土遺物の傾向から、遺跡内における集落の変遷を捉えることができた。</p>							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系 (TokyoDatum)		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ちかの 近野遺跡	あおもりけん 青森県 あおもりし 青森市 おおあぎやすだ 大字安田 あぎちかの 字近野 256外	02201	01065	40° 48 24	140° 42 22	20060509 ~ 20060530	316m ²	県道里見丸山線道路改築事業に伴う試掘調査
				世界測地系 (JGD2000)				
				40° 48 34	140° 42 10			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
ちかの 近野遺跡	散布地	縄文時代			縄文土器 石器 土製品		土偶	
要約	<p>調査区の大部分が、斜面を削平した上部に盛り土して住宅造成されているため遺構は確認されなかった。しかし、盛り土部分から縄文時代中期末の土器が混じった状態で出土しており、宅地の造成が行われる前は、密度は薄いものの周辺に遺構などがあった可能性が考えられる。</p>							

青森県埋蔵文化財調査報告書 第432集

近野遺跡

- 県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 -

発行年月日 2007年3月23日
 発行 青森県教育委員会
 編集 青森県埋蔵文化財調査センター
 〒038-0042 青森市新城天田内152-15
 TEL017-788-5701・FAX017-788-5702
 印刷 東奥印刷株式会社
 〒030-0113 青森市第二問屋町三丁目1-77
 TEL017-739-8951・FAX017-739-8953

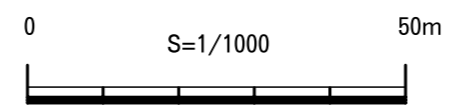


昭和52年度調査区
(保存区域)

国指定特別史跡境界

平成12～15年調査 赤：縄文時代の遺構
 黒：平安時代の遺構
 ※昭和50年以前の分は時代による色区分はしていない。

【註】この図は平成12～15年の調査分に、昭和52年以前の調査分を合成したものである。
 但し、昭和52年以前の図面には公共座標値が記されていないため、平成12～15年の調査区と多少のズレがある。



近野遺跡全体図

青森県埋蔵文化財調査報告書第432集『近野遺跡X』付図